

二つの庭

宮本百合子

青空文庫

一

隣の家の篠竹が根をはって、こちらの通路へほそい筍たけのこを生やしている。その竹垣について曲ると、いつになく正面の車庫の戸があけはなされていた。自動車の掃除最中らしいのに、人の姿はなくて、トタン張りの壁に裸電燈が一つ、陰気にぼんやり灯っている。

伸子はげんそうな顔で内玄関へ通じるその石敷道を歩いて行った。すると、ゆずり葉の枝のさし出た内庭の垣の角から、ひよっこり江田が姿をあらわした。おさがりの細かい格子のハンティ

ングをかぶって、ゴム長をはき、シャツの腕をまくり上げた手に大きなめし革の艶出し雑巾をにぎっている。江田は、伸子を見ると、

「や、いらつしやいまし」

ハンティングをぬいで頭を下げた。

「こんにちは。——手入れ？」

伸子はきいた。

「はあ。お留守のうちにすこし念入りにやって置こうと思ひまして……」

「きようは、事務所じゃないの？」

「ゆうべの急行で山形へお立ちになりました」

「あら！ そうなの——」

伸子は、がっかりした声を出した。

「きようは、お父様のお誕生日だったのよ、だからと思って来たのに——」

江田は、

「それや知りませんでしたな」

律気者らしく伸子の失望した顔を見た。

「奥様はおいでですよ——お客様のようですが……」

「どなた？」

「さア……越智さんだと思いますが——」

駒沢の奥からここまで来たことが一層つまらなく思われた。ハ

トロロンに包んだ花を下げたまま、伸子はしばらくそこに立って江田が小型ビーンの手入れをするのを見ていた。しばらくすると、江田が、

「伸子さま、ともかくお上りになったらいかがです、そのうちにはお客さまもすむでしょうから」

といった。

「和一郎さんたちはいるのかしら」

「保さんがおいでです」

伸子は、まわり道までして買って来たバラの花を飾る場所を失った心持で内玄関から上った。左手のドアがきっちりしまっている。そこは客室であつた。いつもは華やかなよく響く調子で客と

応待する母の声が、きようはひとつも外へ洩れて来ない。不自然な気分、伸子は廊下一つへだてた食堂の一方だけあいているドアから入った。

寂びた赤うるしで秋の柿の実を、鉄やいぶした錫で面白く朽ち葉をあらわした火鉢に鉄瓶がかかっていた。炭がきれいにいかつたまま白くたっている。部屋の気配は、ここにもう長い間坐っているひとがなかったことを感じさせた。

女中が出て来て、

「いらつしやいまし」

よそのお客へするとおりのお辞儀をして、お茶をいれた。

「お父様山形なんだって？」

「さあ……」

伸子が名もはつきり知らないその女中は、主人のゆくさきを知らないのは自分の責任ではないという風に、からだをよじった。

「ゆうべ、お立ちになったことはなつたんでしよう」

「はあ……」

「まあ、いいわ、ありがとう」

畳の上に絨毯じゅうたんをしき、坐つて使う大テーブルを中央に据え

てあるその部屋は、半分が洋風で片隅に深紅色のタイルをはった
暖炉がきつてあつた。その暖炉の左右は、佐々ごのみで、イギリス流の長椅子になっている。その上に、どてらが袖だたみのまま
おいてあつた。それは父のどてらであつた。

伸子は、ハترون包みの花をもって風呂場へ行つた。洗面器へ水をはつて、ハترون紙につつまれているままのバラの花をそこへつけた。それから壁にとりつけてある鏡に向つて、髪をかきつけた。

単純なその動作を終ると、伸子はたちまち次には何をしていいのかわからないような、とりつき場のない当惑にとらわれた。越智が来ている客間へは、どうにも入っていけないものがある。保のための家庭教師、高等学校へ入る試験準備の間、指導してもらった若い教育者である越智圭一は、はじめのうちは佐々の家庭にとつて、みんなに一樣の越智さんであつた。勉強するときのほか、越智は食堂で雑談したし、客間で画集を見たりしている越智のま

わりに、保も稚いつや子も出入りしていた。

保が東京高校へ入学したのは前年の春であつた。その夏、若い越智夫婦が田舎にある佐々の家に暮し、伸子はあとからそのときの写真をみせられたことがあつた。大柄の浴衣をきて、なめらかな髪を真中からわけて結び、やせがたで憂鬱な情熱っぽい純子という夫人が、白服できちんと立っている越智と並んでうつつていた。夫人のからだにあらわれている、しめつぽくて、はげしそうな表情も、越智の白い夏服の立襟をきちんとして、とりすましたような工合も伸子の氣質の肌に合わなかつた。普通にいえばよく似合っている縁無し眼鏡も、寸法どおりにきまつて、ゆとりと味わいのない越智の顔の上にかかっていると、伸子は本能的に自

分が感じている彼の人がらの、しんの冷たさや流動性の乏しさを照りかえしているように思うのだった。

そのスナップ写真を伸子と顔をよせあうようにしてしげしげ眺めながら、多計代が、

「伸ちゃん、お前、純子さんてひとを、どう思うかい？」

ときいた。伸子は、そのとき、母の唐突な質問に困った。

「だって、わたし、このかたにまだ一遍も会ってもしないのに……」

「そりやそうだけれども、この写真をみてさ。伸ちゃんは、どう感じるかって、いうのさ」

伸子は、そういう多計代の詮索を、苦しく感じた。伸子は、恋

愛の思いを知っていた。結婚した夫婦生活の明暗もある程度はわかつている。いまは女友達とひとり暮しをしているけれども、伸子は母のききかたに、女としての感情の底流れを感じ、それは成長した娘としての伸子の心に苦しいのであった。

「旦那さまが好きらしいし、ある意味で美人だし……問題は無いじゃないの」

「問題になんかしているんじゃないけれど……」

多計代は、ふっさりとして大きい、独特に古風な美しさのあるひさし髪を傾けて、なお写真をみていたが、

「純子さんて人は、おかしな人だねえ。時々ひどいヒステリーをおこすんだってさ。越智さんが出かけようとすると、出すまいと

して玄関にはだしでとび下りて、格子に鍵をかけてしまったりするんだそうだよ。まるで氣違ひみたいになるときがあるんだって」誰から、どんな風に多計代はそういう話をきかされるのだろう。それを思うと、伸子は夫婦の間のそんな話や、越智と多計代とが純子についてそういう話をする情景そのものにいとわしさを感じた。

「自分の細君のことをそんな話しかたで話すなんて——お母様の趣味？ そんなこと——」

伸子は、肩でぶつかってゆくようにいった。多計代は黙った。そして、とりあげて見ていた写真を、テーブルの下にある手箱の中へしまいはじめた。

一月ばかり前に伸子が来たとき、多計代は黒い瞳を機嫌よい亢奮でかがやかせながら、

「——越智さんは純粹な人だねえ」

といったことがあつた。

「そうお？——どうして？」

うたがわしそうな伸子のききかえしにこだわらず、多計代は、

「僕が、もし純子と結婚していなかったら、きっと奥さんに求婚したでしょう、だって——」

そういう多計代のこだわりのない満足らしさが、伸子をおどろかした。

「だって——」

じゃ、お父様はどうなるの？ 伸子の心に声高くその反問が響いた。

「ありえないじゃないの……そんなこと！」

まばたきがとまったような表情になった娘をちらりと見て多計代は、

「だからさ」

といい添えた。

「ただ、そうだったろう、というだけの話なのさ」

けれども、越智のある厚かましさが伸子の胸に鋭く深くきり込まれた。多計代はそう感じていないらしいけれども、そんな越智の言葉は、母をほめているようで、ほんととは母も父も侮辱してい

るところがある。そういう、越智に対する伸子の否定的な感情は、越智にも反映していた。母娘の間で意見が合わないようなことがあるとき、多計代は、自分の感情に重ね合わせた憎々しきで云った。

「越智さんだつてこの間云っていたよ。伸子さんという人は、破壊のために破壊をする人だつて——」

そんなとき、伸子は唇のふちが白くなってゆくのが自分でわかったほど激しい嫌悪にとらわれた。

客間のドアは、ぴったりしめられている。越智に対する伸子の批評に向つてしめられている。伸子は、そのハンドルにかける手をもつていない自分を感じるのであった。

心のおき場がなくて、伸子は保の勉強部屋へあがって行つた。

二階の日あたりのよい畳廊下で赤いメリンスしぼりの蒲団をかけ、小さいつや子が、お志保さんに本をよんで貰っていた。背中をかがめて膝の上に支えた手の本をよんでいるお志保さんのうしろに伸子が現れると、

「ああ、お姉ちやまが来たア」

つや子が、いかにも、その変化をよろこぶように声をあげた。

伸子は、つや子が病気だとは知らなかった。

「どうしたの？ 又ゼーゼー？」

末子のつや子には、喘息の持病があつた。

「二三日前雨がふりましたでしょう？ あのと学校から、ぬれ

ておかえりになったもんですから」

「なに読んでるの？」

「アラビアン・ナイトでございます」

つや子は、左右にたらした短い編下げの頭をふるようにして、

「お姉ちやまア」

と伸子を見あげた。

「ここへ坐つて！ あつたかよ」

伸子は、ふとんと同じメリンスしぼりのねまきを着ているつや子を半分自分の膝によりかからせた。

「つや子ちゃん、唐辛子、ぬいだんでしよう？ だからゼーゼーになったんでしよう？」

よわいつや子は冬から春にかけて、いつも赤い毛糸でこしらえた下着をきせられていた。つや子ちゃんの唐辛子は佐々の名物で、小学三年になったつや子はそれをきまりわるがった。

「僕、もう唐辛子きないでいいのよ、ずっと前ぬいだんですもの」
兄たちばかりのなかに育って、つや子は僕、僕、といった。蒲団のまわりに、南京玉の箱や色紙がちらばっている。賑やかな日向の色どりの中につや子の稚い顔は蒼ぐろく小さかった。

「大きいお兄さまは？ お留守？」

「うん」

「おかえりになりますでしょう。飯倉へ御電話かけましたから」
お志保さんは、飯倉という響を何となし特別にいった。その伯

父の家には冬子と小枝という従妹たちがいて、和一郎はよく泊りがけで行っているのであつた。

「保ちゃんは？ 御勉強？」

つや子は、

「うん」

自分が学校をやすんでいるつや子は声よりもよけいつよく合点して、首をすくめるようにした。

「ちよいと保ちゃん見て来るわ、そしたらまた遊びましょう、ね」
同じ二階の北側に長四畳があり、そこが保の勉強部屋になつていた。襖をあげようとして、伸子は鴨居にはられている細長い紙に目をひかれた。鴨居の幅きつちに切つた白い紙にフランス風

の線の細い書体をのばして Meditation と書かれている。伸子は、はつきりしないおどろきに心の全面をうたれて、その一つ一つの綴りを辿った。メデイテーション。——瞑想——。こういう字が、保の部屋の入口にはられている。保が自分で書いてはって、その内にこもって勉強している。どういう意味なのだろう。不自然なこだわるもののある感じがした。高校の学生たちの生活、ものと考えかた、そして仲間同士の暮しかた。それは、保の貼紙の気分とはちがったものに想像されていた。活気と若々しい野望と意欲とがむら立って想像されていた。京大で社会科学研究会の学生が三十余名検挙されたりしている頃であった。伸子はそういう事件の意味はわからなかった、伸子の生活からも文学からはなれた

ところにおこつていて、その意味のわからなさで、伸子をいくらかおじさせていることなのであつた。保の生活がそういう学生の動きとはちがつている。伸子はそれにたいして批評をもたなかつた。けれども貼紙の文字は伸子の本性に抵抗を感じさせ気にかかるのであつた。

「保さん、いる？ あけてもいい？」

伸子は、唐紙のひきてに手をかけてきいた。

「ああ、姉さん？ いらっしやい」

保は、勉強机に向つてかけ、ひろげた帳面にフランス語の何かを書きうつしていた。北側の腰高窓があげはなされていて、樹木の茂った隣の奥ふかい庭が見おろせた。梢をひいらせている銀^{いちよ}

杏^うの若葉が、楓の芽立ちの柔らかさとまじりあつて美しく眺められる。

「いつ来たの、僕ちつとも知らなかった」

保のまぶたはぼつてりとしていて、もみ上げや鼻の下に初々しい和毛^{にげ}のかけがある。

「さつき来たばかり」

伸子は、ちよつと黙つていて、

「お客なの知っているの?」

ときいた。

「ああ」

「おりて行けばいいのに……」

「――僕はこの間家へ行つて会つたばかりだから別に話もない」

保は、おだやかにいつてかすりあわせ緋の袷を着た大きい膝を椅子の上でゆ

すりながら隣の庭を眺めおろしていたが、

「姉さん、きよう泊つて行くんでしよう」

ときいた。

「そう思つて来たんだけど……」

伸子のころもちほ、やがてどうきまるにしろ、今はとりつくはしを失っているのであつた。

「じゃあ僕、これだけしてしまつてもいい？」

保の勉強机の上には、学校での時間割のほかに、細かく一週間を区分した自分の勉強表が置いてあつた。

「どうぞ……じゃあとでね」

自分のうしろに保の部屋の襖をしめてその部屋を出ながら、伸子は、広い佐々の家のなかに、自分が落ちつく場所というものは一つもなくなっていることを痛感した。

二

心と体の居場所がなくて、あちこちをふらついていた伸子は、漂いよったように古風な客間に入って来た。櫃かやや楓、車輪梅などの植えこまれた庭は古びていて、あたりは市内と思われる閑寂さだった。竹垣のそとで、江田がホースを使っている水の音がき

こえた。

くつぬぎ石、苔のついた飛石。その石と石との間に羊齒しだの若葉がひろがっている。煤すすたけ竹の濡縁の前に、朴ぼく訥とつな丸石の手洗鉢があり、美男かつらがからんで、そこにも艶々した新しい葉がふいている。茶室づくりの土庇を斜にかすめて黄櫨はじの樹が屋根の方へ高くのびている。

庭下駄の上へ、白足袋の爪先を並べてのせて、伸子はやや荒れている客間の庭を眺めていた。

庭に一人向ってじつとしてしていると、伸子には、佐々の家も、この数年に、随分變つて来たことがしみじみ感じられた。

変りかたは、眺めている客間の庭の様子にも反映していた。伸

子が幼なかつた頃の佐々の家は、家全体が茶室づくりに按配されていた。門からの入口も、台所へまわる細い道も、風雅につつましかった。それが、近頃自動車をおくようになってから、門からの細道は石だたみとなり、車庫の位置によつて、台所への道がひろげられた。そのために、客間の庭の奥ゆきが何尺か削られた。

もとは石燈籠と楓、松などの植えごみの裏に、人一人とおれるほどの砂利じきのゆとりがあつて、ゆきとどいた庭のつくりであつた。それは自動車の道のためにこわされた。植木屋がそれにつれて石燈籠を前の方へもち出してすえ直した。松の枝かげを失い、楓の下枝からむき出された燈籠に、納りをつけようと、無造作に青木が植えこまれていた。燈籠は、我からその位置を悲しむよう

に、庭の真中へとび出て立っている。

伸子の父は、建築設計家であつた。それなのに、どうして、こんな有様にしてしまつて、みんながそれに無頓着で平気なのだろう。それは、この地味な八畳の土庇のついた室やその庭が、佐々夫婦のこの頃の生活気分から重要さと愛着とを失われていることを意味していると伸子は思つた。

伸子が二十歳ごろ、まだこの家に娘として暮していた時分から、客室は次第に腰かける方がつかわれるようになった。水色と白の縞の壁紙がはられ、イギリス好みの出窓、その下につくりつけられた木の腰かけ。いかにも明治四十年代の初期に、その年代と olmayan 年の日本の建築家であつた父が、使える金のささやかな範囲

で、自分の空想を実現したという工合の洋風客間は、柱も節のある質素なものであつた。若葉の季節になると、出窓のビードロ玉のようなガラスが海の底にでもいるように新緑の色を映すので、伸子の少女の心はその美しさに奪われた。

パンヤ入りのクッションがところどころに置かれていたその室の調度は年とともに、いつしか変つた。この節は佐々の陶器の蒐集棚が立ち、メデイチの紋が象ぞうがん嵌してあるエックス・レッグスの椅子などが置かれている。第一次欧州大戦の後、日本の経済は膨脹して、全国に種々様々の大建築が行われた。丸の内の広場に面する左右の角に、東京で最初の鉄筋コンクリート高層建築が出来た。佐々と今津博士との協同で経営されていた設計事務所です。

これらの設計はつくられ、完成した。

伸子が二十歳だったとき、父につれられてニューヨークへ行つた。そのことには大きい背景として、そういう当時の日本の経済のふくらがりと、建築家として父の活動場面の拡大とがあつたのであつた。二十の伸子は、それらの複雑な関係について何も理解していなかった。自分としては、親の指図や干渉からはなれた暮らしの中で、人間として育ちたい気持が一杯なだけであつた。ニューヨークで、佃という東洋語を専攻していた人と結婚した。唐突だったその結婚も、伸子とすれば一人立ちになりたいという一貫したその希望からであつた。伸子は、主としては母親が計画している「よいお似合い」の社交的結婚を心から恐怖した。伸子が真

面目に思っている文学の仕事は、そういう結婚生活からは生れない。そのことは、女である伸子には本能的にわかった。同時に結婚しなければいつまでつづくかわからない「大きいお嬢様」の生活の苦痛ときまりわるさは、十八歳からの二年間で、伸子は知りつくした。

伸子は一昨年から女友達の吉見素子と暮しはじめた。佃との結婚はこわれた。いますんでいるのは駒沢だけでも、結婚していた五年間、おそろしいものがきのつづいていた間、伸子が佃とすんでいた家から逃げ出して何日か、或は何カ月かを過したところは、育った佐々の家の中ばかりではなかった。佃とわかれ、作品をかき出してから、伸子が第一に自分の机をおいたのは、老松町の路

地の奥にある、あるお裁縫やさんの二階であつた。白い実のついた南天の根もとには、いつも小さい紙屑が散つてゐるような小庭のかなたに、寺の松の枝が見えていた。毎朝早くから共同水道の水の音が響く界限であつた。そして、夜更けて帰る人の下駄の音が、どぶ板に響いた。伸子は、その茶の間で、よく、細君がやいてくれる土佐の目ざしをたべた。奥の八畳にお裁縫に通つて來ている娘たちが五六人並んで針を運び、小声でおしやべりしている。その二階で、伸子はほんとの生涯がこれから始まるころもちで小説を書きつづけた。くたびれると、小夜着をかけて、火鉢のそばに横になった。そんなとき伸子のからだの下にしかれるメリンスのきれいな大座蒲団は、素子がくれたものであつた。その

二階へ、佃のところから伸子のもっていた本が送りこまれた。伸子は小説を書く収入で、素子はある団体の雑誌編輯をしてとる月給で、二人は共同の暮しをはじめたのであった。

この二三年の伸子の生活のうつりかわりは、外からもわかりやすい変化であつた。ひとこま、ひとこま、生活の情景ははつきり推移した。その間佐々の家も、思えばずいぶん変つたものだ。しかし、その変化は、大きい屋台の中で、いつとなし、あれやこれやの細目が変わつて行つて、気がついてみれば、全体が元とちがつてしまつてゐることにおどろかれる、そういう変りかたなのであった。

佐々は健康で生活力の旺盛な、働きずきの男らしい恬てんたん淡さを

もっていた。メデイチの紋章のついた椅子も、珍重していながら、大切になでさすつて、眺めるような味わいかたはしていなかった。伸子も来あわせてみんながその室でしゃべっているようなとき、泰造はちよつとその十五六世紀頃の椅子にかけてみたりした。

「昔の人間はよくこんな工合のわるい椅子で辛抱していたもんだね。これをみても進歩ということは大切ですよ」

そういいながら、どういう細工によつてか、ひじかけの先の円くなっている手前にくるとまわるようにはめられている繊細な輪細工を、乾いた軽い音をたててまわして遊んだ。ときによると、

「お父様のハムレットを見せて上げよう、アーヴィングの直伝だ

よ」

どてらをぬいで片方の肩からななめにつけ、そのエックス・レツグスにかけて沈痛に片腕をつき額を抑えた。そして誰でも知っている “To be or not to be” というせりふをいった。丸まっちいからだの、禿げている頭の丸いハムレットが、紺の毛足袋の短い足を組みあわせ、血色のよい、髭のそりあとの見える東北人らしい顔を傾けて、To be or not to be と煩悶するのは、なんと滑稽なみものだったろう。伸子は手をうつて笑った。

「オフェリアはいつ出て来るの？ お父様、オフェリアを出してよ、わたし出るわよ」
と、ふざけた。

「あいにくだが、ここまでおそわったらアーヴィングのところへお客様が来ましたよ。オフエリアは出ずじまいさ」

「お父様ったら！　でたらめばかり！」

多計代が長椅子にかけて、おかしように更にそれよりもいら立たしように白い足袋の爪先を細かく動かしながら非難した。

「お父様ったら、なんでもかんでも茶化しておしまいになる」

悲壮な重々しい情熱を好む多計代には、ハムレットをそうやって遊ぶ泰造の気分や、それをよろこぶ娘の伸子の気分が、人生へのまじめな感情にそむいたものと感じられるのであった。

関東の大震災の後、復興のために自動車の輸入税が一時廃止された。

「買うならこういう機会だね」

遊びに行っていた伸子も、両親や弟たちに交って、いろいろの自動車会社から出されたカタログを見た。

「多計代のハイヤー代だけでも相当だし、俺はどんなに能率があるかわからない……しかし、贅沢な車は駄目だよ。第一、門が入りやしない」

伸子の知らない幾晩かの相談の末、イギリスのビインが買われた。小型の黒い地味なビインにふさわしく、小柄で律気な機械工出の運転手の江田が通いで雇われた。江田は一風ある男で、はじめて来たとき、お仕着せは絶対にことわった。佐々のお古を頂きたい、と約束した。そして、お下りのハンティングをかぶって、

毎朝八時というと、小柄の体をひどく悠然と運んで通つて来るのであつた。

いま、竹垣のそとにホースをつかつている江田の姿を目にうかべ、伸子は、思わず一人笑いをした。父をなつかしむ笑いをもらった。泰造は米沢に生れて、イトエの発音がさかさになることがあつた。字でかけばちゃんと書いたが、発音では逆になつた。江田が運転手になつたとき、佐々は伸子に、

「運転手が、いい男でよかった。イダっていうんだよ」

と教えた。伸子は井田というのだと思つて、そうよんでいた。

そしたら、あるとき、

「これを井田におやり」

と伸子にわたした祝儀袋の上に江田殿と書いてあるのを発見した。

「あら！ お父様、エダじゃないの」

「そうですよ、イダだよ」

「——……」

伸子は笑いくずれるように父の肩ごしに祝儀袋を見せた。

「これ、何ておよみになるの、お父様は……」

「イダさ」

これはしばらく佐々の家の一つ話になった。とんちんかんなことがおおけると、

「ホラ、イダだ」

と笑った。

一つの家庭の歴史にとって、自動車が出来るということは、生活全体に深い影響があることだった。日本のように、どの家庭でも便利のためにフォード一台もっているのが普通というのでない国では、一台の自動車は、それがどんなに見栄えのしない小型のビーンであろうとも、自家用車をもっていることであり、そのことは便利以上の何ごとかを、この社会で表現することなのであった。

江田をイダ君と呼び、どつきり車の集っている場所で、江田がききわけやすいようにと特別のサイレン風の小さい呼子をふきながら、佐々は朝から夜までの活動の環をますますひろげて行った。毎朝佐々を事務所へ送りとどけてから、その車をうちまでかえ

してよこして、それから多計代が外出した。外出さきから多計代を家まで送りとどけて、又その車は事務所へ戻った。自動車は珍しがられて、その一台が毎日多計代によつても使われていた。きようは、今ごろの時間に、江田がのんびり車体の手入れをしている。江田にとつても、たまにはほしいのどかな午後の気分である。

ひとりぼっち、客間の庭に不様ぶざまにされて忘れかけている石燈籠を眺めていると、この家の生活感情の推移が伸子の心にしみた。江田は律気な運転手の、古風な見栄のようなものをもっていた。あるとき長男の和一郎のことを、江田が若様といつて伸子に話した。伸子は、自分の耳を信じかねた。この家に若様と呼ばれるよ

うなものがいたのだろうか。伸子は、悲しそうに、江田さん、どうか和一郎さんと呼んでやって頂戴、あんまりみつともないからね、といった。そして、多計代にそのことを注意した。

「おや……そうだったかしら……」

多計代はいくらかばつのわるい顔つきになって、まつ毛の美しい眼をしばたいた。しかしそれぎりであつた。江田のその呼びかたは続けられている。伸子はそれを知っている。

その半面、生活の営みには、自動的なような刻薄なようなものが流れはじめていた。

そういう家庭の推移のなかで、多計代の感情は越智に向つて異常に傾きかかっているのである。

沈んだ眼差しで、伸子が、杉苔の上にある西日の色を見ていると、もう戸のしまった車庫の角をまわって御用ききの自転車が通って行つた。女中部屋の格子窓のところで下りて、小声で何かいつている若い男の声がした。すると、いきなり湧くようにイヤーともキャーともきこえる女たちの嬌声がおこつた。若衆は大人っぽいのど声で笑い、更に何かいつて女たちを笑わした。笑い声は、自分たちだけの大っぴらな声であり、主婦なんぞは念頭のない声であり、呼ばれない限り無関心でいることがあたり前になっている生活の声であつた。伸子は一層執拗に、杉苔の上へ目をすえた。

やがて豆腐屋のラツパが聞えはじめ、台所の出入りがしげな
った。父の祝いのためと思つて買つて来た黄色と白のバラの花を、
伸子のはりあいの失われた気持でカット・グラスの花瓶にさし、
それを父のどてらが置いてある煖炉前の小卓の上に飾つた。

保が二階から降りて来た。そして、立つたまま、伸子が一人だ
けいるその辺を見まわした。

「なあに？ おなかがすいた？」

「そうでもないけど……」

電燈の灯かけがそのガラスにきらめいてはいるが、午後じゅう
ぴたりとしまつたままである客室のドアを、こっちの室の中から

保が見ている。伸子は保の気持がわかるようでせつない思いがした。

「——もうすむでしょう」

保は黙つて視線をそらせ、煖炉前のバラの花を見た。いつもの保であつたら、すぐよつて行つて、その花の品種だの咲きかたのよしあしを話すのに、今夜は遠くから立つたまま眺め、ただ、

「姉さんがもつて来たの？」
ときいた。

「きよう、ほんとはお父様のお誕生日だったのよ。知っている？」
「うん」

保はしばらく立つたままでしたが、また二階へあがって行つた。

食卓の準備がはじまった。それを見ている伸子の唇から思わずほとばしるような質問があつた。

「二人だけ別？ どうして？ お母さまは？」

「奥様はお客様とあちらであがりますそうです」

「……………」

やっと自分を抑えた声で伸子は女中に命じた。

「きょうは、お父様のお誕生日で駒沢から来たんだから、御一緒にたべられるまでお待ちしています、って。そう申上げて来て」

狭い中廊下をこして、ドアをノックし、女中がはいって行つた。そして、お辞儀をして出て来た。

「お待ちにならずに、とおっしゃいました」

伸子は、涙がつき上げて来そうになった。

「すまないけれど、もう一ぺん行つて頂戴。待っていますからつて——」

元氣に階段を降りて来た保が、敷居ぎわで立ち止まった。大食卓の上に、向い合いに淋しく二人だけおかれている食器を見下しながら、歩調をかえて、のろい足どりで入つて来て席についた。

「お母様と一緒にたべましょうよ、保さん」

伸子はつよく訴えるように弟にいった。

「その方がいいわ」

「僕、どっちでもいい」

保はこういう生れつきなのであった。

女中が母の分を盆にのせて運んで来た。

「いらつしやるって？」

「はい」

おつゆが段々冷えていった。そのときになってやっと客室のドアがあいた。同時に、

「おや、こっちは冷えること……」

ひとりごとのようにいう多計代の声がした。

小紋の羽織の袖口を、胸の前でうち合わせるような様子で入って来た多計代を見て、伸子は圧倒される自分を感じた。皮膚の滑らかな多計代の顔は、ふつさりした庇髪の下に上気して匂うような艶をたたえている。いつもより、しばたたかれるまつ毛はひと

しおこまやかで、多計代の大柄な全身から、においのいい熱気がかげろい立っているようにさえも見える。溢れるつややかさと乱れのまま多計代は娘と息子とが待っている食卓に来て坐った。

「お待ちどおさまだったね」

そういったきりで、たべはじめた。さつさと、味わおうとせず
にたべはじめた。自分がどんなに咲きいでているか、それを知ら
ず、また、かくすことも知らず大輪の花のように咲き乱れている
母。多計代の右手の指に泰造からおくられて愛用しているダイヤ
モンドがきらめいていた。それは多計代の全体によく似合った。
食卓は煌々^{こうこう}と灯に照らされていて、多計代の手がこまかく動く
ごとに蒼く紫っぽく焰のような宝石のひらめきが走った。

ほとんどくちをきかずに三人の食事が終った。越智のところから下げられた膳が廊下を台所へ運ばれて行つた。

多計代は、そこに保も伸子もいないような遠い目つきで、正面のドアの方を見ながら茶をのみかけていたが、急にそのまま湯呑みを食卓の上へおいて、洗面所の方へ立つて行つた。そのあとの空気の中になお熱っぽさと微かない匂いとがのこつた。その匂いをかぎしめるようにしていた保が、和毛のかげのある青年の顔を、伸子の方へゆるやかに向けて、

「お母様、なぜだろうね」

といつた。

「越智さんが来るときつと洗面所へ行つて白^{おしろい}粉をつけるの」

本当にいぶかしそうに、全く子供のようにそういった。伸子は瞬間何とやっていいのかわからなくなった。母は知っているだろうか。彼女の秘蔵の保の、こんなことを知っているのだろうか。「保さんの部屋へゆきましよう、ね、いいでしょう」

伸子は、母と保と二人へのいじらしさ、せつなさ、越智への嫌悪で、熱でも出る前のような悪寒を感じた。

保が机に向ってかけ、伸子は、小さな折畳椅子をのぼして机の横にかけた。保らしく、注意ぶかく電燈の位置が按配されていて、小さい紙が眼への直射をさえぎるように下げられている。見ると、机の上に自分だけの日課表があるだけでなく、うしろの本箱の上の鴨居に細長く紙がはってあって、それが、日課の進行表になっ

ていた。青と赤との鉛筆で、それぞれ違った長さの横線がひかれて
いる。

「保さん、どうしてこんなにキューキューやるの？」

伸子は、少しあつけにとられてその表を見た。

「みんなこんなことしてやしないでしょう？ この前来たときは
無かったわね」

丁寧は鉛筆のしんを削りながら保が、

「僕、この頃時間を無駄にするのは下らないことだと思
ったんだもの」

といった。

「それはそうだけれど……」

伸子には保がこの家の生活の中にあつて日々夜々感じているにちがいない複雑な心持、それに対する青年らしい批評のきびしさがわかるように思えた。保は、自分の暮しで、この家の中に、いと思える暮しかたを作り出そうとしているらしかった。保の室の入口に書きつけられている *Meditation* という文句が、新しい意味で伸子のところにせまつた。教科書と園芸の本ばかりが詰つていた本箱に、今みれば「出家とその弟子」という戯曲がまじつて背を見せている。 *Meditation* —— 伸子は、一層そのモットウに警戒を覚えた。

「あの本、どこにあつた？　古い本だわ、わたしが昔よんだんだもの」

その時分も評判ではあったが、感傷的な戯曲としてもまた有名であつた。

「面白いと思う？」

「さあ——でも、僕わかるような気がするな。あの戯曲のいつているように、何ごともし心持って尊いと思う」

「ね、保さん」

伸子は、つき動かされたように保の紺の筒袖に手を置いた。

「あなた、もつとお友達とどしどしおつき合いなさいよ。あなたのようなひとは問題をどっさりもっているにきまつているんだし、ここの家は問題をもっている家なんだもの——それでいいのよ。だからどんどん話して、議論して解決していらつしやいよ。それ

でなくちやいけないわ」

「うん……でも僕、あんまり何でもしやべる奴きらいなんだ」

伸子は、身をとがめられるような内省的な眼差しになった。伸子が佃と結婚したのは、保が麴町の方にあるフランス人経営の学校へ入学する前後のことであつた。それから、離婚するまでの数年間、佐々の家は「伸子の問題」を中心に議論の絶え間がなかった。少年の保のいるのを忘れて、母と娘は互いに涙をこぼしながらいい争つたことがあつた。おとなしい灰水色の制服のカラーに金糸でオリ―ヴの葉飾りをぬいとりした服をつけた保が、

「姉ちゃん、どうして結婚なんて、したの？」

結婚という言葉を、旅行とか病気とかいう事柄と同じような感

じでいって、歎息したことがあった。もしかしたら、保は、多計代と伸子との一致点の見出せないいい合いに食傷して、何につけ議論したりすることの嫌いな若ものになったのではないだろうか。伸子は、保が、姉の生活態度のすべてに同意しているのではないことも改めて考えた。伸子が家を出てから佃が入院していたことがあった。そのとき、保が、一人で自分が咲かせた花をもつて幾度か佃の見舞に行っていた。ずっとあとから、多計代からそのことをきかされた。

「わたしは保さんのような生れつきでないし、一緒にすんでいるのでもないから、心配したって保さんの役には立たないのかもしれないわ。でもね、……保さん、あなた本当に何でも話し合える

友達、あるんでしょう？」

「沖本なんか、今でも時々会っているし、いろいろ話す」

「ああいう人じゃなくさ！」

伸子は、もどかしげに力をこめて、大柄だがなで肩で、筋肉のやわらかい保の温和な顔を見た。沖本は中学時代の友人で、地方に病院長をしている父親は上京するごとに、保を招いて息子と帝国ホテルのグリルで御馳走をした。佐々夫婦と自分たち夫婦とが二人の息子を挟んで会食したりした。そういう雰囲気の交際であった。

「高等学校って、わたしがよけいそう思うのかもしれないけれど、一生つき合うようなしつかりした親友が出来る時代なんじゃない

の」

「……………」

保は、こまかいふきでものが少しある生え際を、まともに電燈に照らされながら、大きい紺の膝をゆすつていたが、やがて、

「僕のまわりにいる連中って、どうしてあんなに議論のための議論みたいなことばかりやっているのか、僕全く不思議だ」

述懐するようにいった。

「だって——それやそうなるわよ。一つの問題が片づかないうちにまた次々と問題はおこるんですもの……」

「そうじゃあないよ」

独特のあどけない口調で否定した。

「ただ自分がものしりだつていうことや、沢山本をよんでいることを自慢するためにだけ議論するんだもの、皆をびつくりさせてやれ、というように、むずかしいことをいうだけなんだもの……」

「そうかしら……そういう人もあるだろうけれど……」

伸子は椅子の背にもたれ、少しやぶにらみになったような視線で保をじつと見守っていた。そして、思い出した。それは、保が赤い毛糸の房のついた帽子をかぶって小学校へ通いはじめた、二年生ぐらいのことであつた。多計代が、おどろいたように、崇拜するように、

「保ちゃんて、大した子だ」

そういつて伸子に話した。保が通っていた小学校は師範の附属

で、春日町から大塚へ上る長い坂を通った。その坂は、本郷台から下つて来て、またすぐ登りかかる箇所であつたから、電車はひどくのろく坂をのぼった。ある朝、保がそういうギーギーのぼるのろくさ電車に乗っていると、それを見つけた同級生たちが、面白がつて電車とかけっこをはじめた。ほとんど同じくらいに学校についた。ハア、ハア息をはずませながら男の子たちは先生！

先生！ 僕たち電車とかけっこして来たんですよ、と叫んだ。したら先生が偉い、偉い、とほめた。「でもお母様、僕、ほめるなんて変だと思うな。そうでしょう？ 人間より早いにきまっているから電車を発明したんでしょう。心臓わるくしちゃうだけだと思ふ、ね、そうじゃない？」子供の保はそう考えたのであつ

た。

伸子は、今保と話していて、幼かったころの電車の一つ話をまざまざと思いだした。電車と男の子たちとのかけっこについて保の示した判断は、子供として珍しい考えかたに相違なかった。けれども、今、机の前にゆったりと掛けている青年の保が、同級生たちを批評している、その批評と同じように、本当のところもあるにはあるが、どこかでもっと大切なピントがはずれているように思えるのであった。

伸子には、自然と越智という人物と保との関係が思われた。保は越智をげんがく術学的と思っていないのだろうか。議論のための議論をしない人と感じているのだろうか。師弟関係がなくてむしろ若

い女で感覚で越智をうけとっている伸子は、彼を銜学的な上にきざな男と思っていた。多計代が伸子に、

「伸ちゃん、お前シユタイン夫人で知っているかい」

そうたずねたことがあった。伸子は、

「シユタイン夫人て——」

見当のつきかねる表情をした。

「調馬師の夫人というシユタイン夫人のこと？」

ゲーテとエツケルマンの対話が訳されて間もない頃で、一部にゲーテ熱がはやっていた。多計代がゲーテと情人関係のあった宮廷調馬師の細君に、なんのかかわりをもっているであろう。多計代は、素朴に、

「大変きれいな人だったんだってね」

といった。伸子は笑い出した。

「ゲートをアポロっていうような人たちは、ゲートのまわりの女のひとを、みんな女神みたいに思うのかもしれないわ」

「そういう皮肉をいう」

「——でも、どうして？ シュタイン夫人がどうかしたの？」

「いいえねえ、越智さんが、ゲートとシュタイン夫人のようなつき合いが理想的だっていったからさ」

伸子は、多計代の素朴さを悲しくきいた。父と母とは、宮廷附の調馬師夫婦で、越智はゲートの立場というのだろうか。

多計代にとって意味のはつきりつかめない越智の銜学や議論は、

情熱的な亢奮や文学趣味を好む多計代に対して肉感的な魅力とす
りかえられている。だが、青年の保に対して、越智はどう作用し
ているのだろうか。伸子は、その疑いをつきつめてゆくと、せっぱ
つめられる苦しい気がした。越智という人物が保の家庭教師に選
ばれたことは、一つの間違いであつたように思えた。越智のアカ
デミックによそおわれた深刻ぶりは、保の生れつきを青年期の憂
悶から解放し、引き出さないで、かえつて青年同士のてらいと覇
気と成長力とがまじりあつた旺盛な議論を、議論のための議論と
して保にきらわせるような妙な逆の形で観念の道へ引きこんでし
まつたのではないだろうか。

伸子は保に対する心痛と自分の非力さを思つて、涙ぐんだ。伸

子も伸子なりに、力の限り生き、育たなければならなかった。保のために選ばれる家庭教師について考えてやるゆとりはなかった。佃との生活がもってゆけない苦闘で、あぶられるような日々を送っていたとき、中学四年生の保の家庭教師について考えてやれなかった。越智圭一は、大学の助手で、佐々と同郷のある博士の研究室から、佐々の家庭に推薦されたのであった。

伸子は、保のからだを自分のこのころの力でおすような思いでいった。

「保さん、和一郎さんとあなたとは、まるで性格がちがうんだし、私だつてずいぶんちがうわ。うちの中だけでは私たち育ちきれないのよ。フレームから出なければ、駄目なのよ。土の新しいのが

いるのよ。だから、本当に友達を見つけないさい、ね。越智さんが、こんなに永年つき合いながら、そういうことをあなたのような人にいつて上げないなんて、あんまりだわ」

「越智さんは、越智さんとして、いろいろな話をしてくれる」
「だって」

なお、はげしくいいかけたところへ、

「ごめん下さい」

襖の外から女中が声をかけた。

「奥様がおよびでございます」

「……………」

「だれに？」

保がききかえした。

「伸子さまに……」

「——すぐ行きます、からって……」

そろそろ伸子が立ちかけると、保もそれにつれて立上った。

「僕も一緒に行つていい？」

「もちろんよ」

前後してその長四畳を出るとき、うしろから、保が彼よりも背のひくい伸子の頸すじに、

「お母様はね、僕が姉さんと話していると、あとできつと、なにを話していたのかつてきくの」

と低い声でいった。

四

翌日の朝のうち、伸子は、沈んだ気持で郊外の家へかえって来た。門をはいると、台所ぐちの方で、

「それやあ、あんまりですよ奥さん！　みて下さい、このピンピンですぜ。河岸だつて、この位のものを仕入れる者ア、さらにやいねえんだからね」

といっている魚屋の若いものの声がした。

素子がひやかしながら魚を買っている様子だった。素子は自分であれこれと選んで、気に入った魚を買うのが好きだった。

伸子は、玄関からあがつて茶の間をぬけ、台所の板の間へ顔を出した。

「ただいま」

「ああおかえり」

素子のもっている吸いかけの煙草から、ひとすじの煙がゆるく立ちのぼって、それがかすかな風で日向に流れている。

伸子は玄関わきの六畳へ行つて着がえをはじめた。そこへ素子が入つて来た。

「動坂、どうでした？」

佐々の家を、伸子たちはその家のある町の名でよんでいるのであつた。衣衾いこうにほどいた帯をかけながら、伸子はいまいに、

「そうねえ」

といった。

「相変わらず、か……」

いくらか皮肉に素子がそういつて軽く笑った。多計代と素子とは、互にまるで派があわない性格の二人の女であつたし、動坂の家の氣風も、伸子たちの生活気分と根本からちがつた。動坂の家に一泊して来ると、伸子の心にはいつもずっしりと重い幾つもの感銘と、とけない不安とがのこされた。しかし、それは素子に一つ一つは話されなかつた。特に、多計代の感情の状態と、それについて、自分の感じることごとには口をつぐんだ。素子の専攻は外国文学であつたけれども、現実の周囲で錯綜する男女の間のい

きさつにたいして、素子はいつも一種辛辣な幻想のない態度をもっていた。素子のその皮肉や辛辣さが、伸子にとっては、佃との生活の沼からぬけ出る手がかりとなつたのであつた。しかし、娘として伸子は、多計代のころもちには、素子のその調子で立ち入って欲しくない気持があつた。伸子は、多計代の激情的な傾きに同感していないし、それを苦痛に感じているが、それかといつて素子が聞いたらひとくちに冷笑するであろう、そういう風なものとしてだけ母の感情の波を見ているのでもないのであつた。

「ぶこちゃん」

素子はれんじ窓のところへ腰かけて伸子をもじつた愛称で呼びながら、注意ぶかく伸子を見た。

「動坂へゆくと、いつも暗い顔で帰るね」

「そうお」

「——まあ、どこでも親のうちなんてそんなもんだがね」

関西の古い都会の女学校を出ると、素子は女子大学に入学して、それ以来ずっと自分だけ東京暮らしをつづけていた。魚問屋であり、資産家である吉見の主人は、素子とその兄妹とを生んで亡くなつた妻の妹を、現在妻として暮らしていた。そのひとを、素子はおさわさんという名で呼んだ。ときによると、おさわと呼びもした。そのひとと父との間に生れた弟や妹たちに対して、素子はちつとも偏見を抱かなかつたし、父のことを話すとき、眼に涙をさしぐますこともあつた。しかし、素子は、父の家に対する生きた抗議

としての自分の存在を、決してかえようとしていないのであった。
「お父さん、花をおよろこびになつたろう？」

「それが、がっかりよ、出張なの」

「へーえ」

素子は、すぐ、ひらめく何かがあるという眼つきをした。けれども、伸子が真面目に沈んでいるのを見て、そのまま黙った。素子のいいたいことは、伸子に同じはやさでわかった。「出張」は市内でも出来る、というわけである。もう三年ほど一緒に暮したこの頃、伸子はそういう頭の働きたをむしろ素子のマンネリズムと思つていたのであつた。

「おとよさん、おとよさん」

庭に面した座敷へ行つた素子が呼んだ。

「きのう貰つた五家宝切つておいで、お茶も願いますよ」

やっとわが家でくつろげるといふ風に、伸子は子供らしい顔つきになつて好物の五家宝をたべた。

「妙なものが好物なんだなあ」

素子は、新しくたばこに火をつけ煙に目を細めるようにしていたが、

「ああ、おつまはんから手紙が来ているよ」

その室の角に置いてある洋風の大テーブルから、しやれた手すきの封筒をもつて来た。

「みてごらんよ」

伸子は、それを手にとらず、

「何だつて？」

ときいた。

「近いうちに東京へ来るんだつてさ。少しゆつくり滞在するから、是非遊びによらせて頂くとさ」

「ここへ泊るのかしら」

伸子は、困つたようにきいた。おつまはん、というのは祇園のある家の女将であつた。ずっと前から素子とはかなり立ち入った友達つき合いで、前の年の早春二人がゆつくり関西旅行をしたとき、素子はこのおつまはんの幹旋で高台寺の粋な家を宿にした。

その宿へは素子の従弟に当る縮ちりめん緬問屋の若主人だの、里栄、桃

龍だのという賑やかな人たちが毎日出入りした。伸子は、相変らずの学生っぽい白襟のなりで、自分一人だけの東京弁を居心地わるく感じながら、はにかんで、色彩の入り乱れたその仲間に坐っていた。素子は、小説を書こうという人間が、何さ！ と、屋台の寿司を食べたことのなかった伸子を、そういうなかに引き入れるのであった。伸子は、それを口ぐせに自分が育てられた道徳論を肯定していなかった。女にあてはめられる生活の常識にも本能的に抵抗していた。そうではあるが、素子が格別疑問もなく習慣としているおつまさん仲間との饒舌な、馬鹿笑いの多い遊びづき合いにも、とけこめなかった。すぐ飽きて倦怠した。

「おつまさん、ここへ泊めなければいけないのかしら」

気がかりそうに伸子は、くりかえし質問した。

「泊るのはどうせよそだろう、あのひとのことだもの。一人で来るんでもあるまいし、……だけれど、来たら放っちゃおけないよ」

この家へ、おつまさんが京都からもって来るある空気が吹きとおるのだろうか。高台寺で、素子が酔った晩、桃龍たちがよつてたかつて素子に、里栄の派手な青竹色の縞お召の着物をきせ、紅塩瀬に金泥で竹を描いた帯をしめさせた。浅黒いなつめがた棗形の素子の白粉気のない顔は、酔ってあか黒く脂が浮いて見え、藍地に白でぽってり乱菊を刺繍した桃龍の半襟の濃艶な美しさは、素子の表情のにぶくなつた顔を、ひととき醜くした。素子は、なんえ、これ！　かわいそうなめにあわさんといってくれ、頼むぜ、といい

ながら、その青竹色の着物の裾をとってはしごをよろめき下り、
せまいその家じゅうをぞよめきまわった。「黒んぼの花嫁！ 黒
んぼの花嫁！」そう叫んでさわいでいる桃龍たちの声を二階でき
きながら、伸子は、とりちらされた広間の床の間のかまちにぽつ
ねんと一人腰かけていた。まともな誰のめにも醜く見える素子を、
ああやつて囃し、その様子に笑いこけている人たち。それを不愉
快に感じるのは、野暮だというこういう世界のしきたり。伸子は、
暗いところで痛烈にその雰囲気を嫌悪した。

「おつまさんが来たら聰太郎さんにたのんで、どつかよそでもて
なしましょうよ」

従弟の聰太郎は、東京の支店づめで日本橋のそばの店に来てい

た。

「うちでなく……」

「遊びに来たいっていうのに、ことわれないよ」

「ただ遊びに来るだけはいいけれども」

素子は、しばらく伸子の顔を見ていたが、

「そうか」

といった。

「——東京じゃ、自然聴さんがとりもち役になるさ」

おつまさんからの手紙をもつて、素子は自分の机の方へ立って行った。

五

素子の大きい勉強机の上に、厚ぼったい洋書が、終りから三分の一ぐらいの頁をひらいてのせられていた。頁の上には、鉛筆でところどころにアンダ・ラインがひかれてい、書きこみがつけられ、本の角は少しめくれかかっている。松屋の半ペラ原稿用紙の書きかけが並べておいてある。

となりの六畳の、洋風机の根っこの畳に坐つて、伸子は新聞をひろげていた。芝生の庭の真中に、先住の人の子供たちがこしらえた土俵の跡があり、そこだけまるく芝がはげている。門と庭との境には、いかにも郊外分譲地の家らしく垣根がなくて、櫛だの

ざくろ
柘榴の樹だのが、門から玄関へ来る道の仕切りとなっている。伸子が新聞をひろげているところからは、丁度その柘榴のあたりから、庭の端の萩のしげみが見えるのであった。動坂の家のように、すぐ荒らびや生活の推移が見えるつくられた庭より、あつさりとしていて、雑草も季節の賑わいになるような借家の庭が、伸子に氣やすい感じだった。去年、夜行で京都から帰つて来た朝、伸子は二階のはしごの上から下まで滑りおちて、階段下の板をへし折るほどからだをうった。その時住んでいたのは、老松町でも、お裁縫やの二階ではなくて、アメリカの宣教師たちが住む古くから有名な洋館の近くであつた。その家のせまいはしご段を、伸子はスリッパをはいたまま降りかけて、スリッパの踵が滑つたとたん、

はつと思う間もなく下までおつこちた。その時から伸子の左の耳に耳鳴りがはじまった。小さいモーターが鳴るような音がしはじめた。素子が、二階のない、もつと閑静なところへ住むことを提案して、門のわきに栗の木の生えているここへ引越して来たのであった。

その朝の「朝日」には、一頁をそつくりとつて「福助足袋の生い立ち」という岡本一平の漫画広告が出ていた。様々の工程を経て、足袋の頭をした福助が買い手の前にまかり出るまでの道ゆきが、のんびり漫画でかかれている。南縁からの陽のぬくもりで新聞のインクの匂いがいくらかつよくにおう。ひろげた新聞の上に、伸子がかがんでいると、歩いて来たままの調子でたたきへ下駄を

ぬぎすてるようにして、素子が外から帰って来た。そして、

「――ばかにしてら！」

手にもつていたがまぐちを伸子の机の上に放り出した。

「かからなかったの？」

この辺に電話をかりるところがなかった。素子は電車の停留場のそばまで行つて、聰太郎のところへ電話して来たのであった。

「かかりましたがね、おつまは来ないんだってさ」

「――……」

伸子には、それを残念という風なあいづちはうてなかった。

「都合がわるくなつたのかしら……」

「さあ、どうしたんだか。痴話喧嘩でもして気がかわったんだろ

う」

ふところををして、縁柱にもたれ、素子はまた、

「ひとをばかにしてる！」

といった。そして、むつとした口もとをした。

「いいじゃないの、私は書くものがあるんだし、あなたの翻訳だつて、もう一息のところなんだもの……」

「ぶこちゃんは、ああいう連中に偏見をもってるから、そう思うだろうさ。だけれど、ばかにしてるじゃないか。ああやって手紙よこせば、私がそれに対して放っておける人間かどうか、おつまは百も知りぬいているくせに……聰さんのところへ電報よこすなら、当然、こつちへだつてよこすべきさ」

「聰太郎さんのところへは電報が来たの？」

「そうだとさ。きのう来たそうだ。——おつまみみたいな女でさえ、そういうやりかたする、だからいやさ」

永年のつき合いのおつまが、素子の実意を軽くあしらひ、そんなことでもおのずから男の聰太郎と女の素子との間の取扱いに差別をつける。その点を素子は立腹しているのであった。素子には、対人関係で、傷つきやすい性格があり、

「動坂のお母さんみたいに、情熱なんて、私は真^ま平^びごめんだ。

こまやかさがなくて、人間、どこにいいところがあるんだ」

毎日の生活の中にも、伸子がこれまでの暮しでは知らなかった、細かい素子の感情があるのであった。

しばらく柱によりかかっていた素子は、やがて隣の部屋へゆき、きれいな、えんじ色にすきとおったパイプにたばこをつけ、それをくゆらしながら自分の机に向った。原稿の綴じたのをよみ直す気配がした。

「ぶこちゃん——いるかい？」

「いてよ」

「この、手紙の終りにいつもついてる、誰それにお辞儀して下さい、って文句ね、直訳だとそうしかいいようがないんだが、何だかしっくりしない」

チエホフは病気で、晩年はヤルタにばかり暮していた。芸術座の主演女優であった若い妻のオリガは演劇のシーズンの間はモス

コウに暮した。チエホフはその妻に、実に親切に俳優勉強のための忠言を与え、良人としての励ましを与える手紙をかいだ。チエホフらしく、感情に誇張のないユーモアと、父親のような愛と、芸術家の気骨の湛えられているそれらの書簡は、素子の氣に入つて、すでに一年近く翻訳にかかっているのであつた。

「日本流に言えば、よろしくつてわけだろうが……」

「でもただ、よろしくじゃ口のさきだけのようね。お辞儀するつていうロシアの人らしい動作の面白さがうつらないわね」

伸子は、一月頃築地小劇場ではじめて見たゴーゴリの「検察官」の舞台のおもしろさを思いおこした。あの舞台はなんと明暗がこくて、新鮮で、印象深かつたろう。

「――よわったな……」

こちらの部屋で伸子も机につき、最近書き終った長篇小説の綴じ合わせをよみはじめた。佃の家を出て、二階借りの生活から、駒沢のこの家へ来た二年目の冬まで、伸子はその小説を書きつづけた。それは、少女の心をぬけきらなかった伸子がニューヨークで生活しはじめ、佃と結婚しそれが破壊されたいきさつを追った作品であつた。五年の間苦しみながら自分として生き甲斐のある生存を求めて来た道を、そうやってたどり直して見るしか伸子には新しい一步の踏み出しようがなかった。動坂のうちにとって、伸子が、はつきり外にいる娘の立場に立つようになったのも、その小説とつながりがあつた。多計代は娘の書く小説を一行一行よ

んだ。そして女主人公の母親として登場する人物を、現実の自分とてらし合わせ、感情を害するたびに、伸子を動坂へよびよせた。呼ばれるごとに、伸子はせつない表情をして多計代の腹立ちをきいた。お前は冷酷だ。そういわれた。エゴイストは、自分だけ満足ならそれでいいのだろう。そう罵られた。越智との交渉が深まっただけから、多計代の心持は、伸子にたいする越智の批評を柱として、なお複雑となり固定した。調和的な天性の佐々は母娘の争いにくたびれて、

「伸子、もっと空想の、美しい小説を書きなさい、え？　お前は書ける人だ、あの素晴らしい色彩で、さ」

といった。伸子は、そういわれると、目に涙をため、父親の分厚

い、節に毛の生えている温いなつかしい手を自分のほてる掌でおしつけた。佐々が、無邪気にほめて美しい色彩という作文は、伸子が十五六の頃、小学校の同窓会雑誌に書いた、幻想的な作文のことなのであった。伸子は二十九歳になっていた。どうして、十五の少女のこころにかえることが出来たろう。伸子は、煙にむせて窒息しかけながら、そのトンネルはぬけきることを決心した者のように、小説を書きとおした。小説は、ある先輩の婦人作家のところで、偶然素子と知り合うところで終り、佃との破局的な情景が最後に描かれていた。

片手を机の上へ頬杖につき、右手で雑誌から切りとったその小説の綴じあわせをめくりながら、伸子の面には、徐々に、しかし

まぎらすことの出来ない力で迫って来る沈思の色が濃くなった。

その小説をかき終つて、伸子は一つのまじめな事実を学んだ。

それは、佃も、女主人公の母も、女主人公そのものも、一人として悪人というような者はその関係の中にいなかった、ということである。佃にしろ、時と場所とをへだてて一人物として見ればむしろ正直な人であつたことがわかつた。多計代が、こういう男を好む性質かというような効果を捉えて行動したり、伸子への感情の表現を、多計代の気にもかなうように粉飾したりすることを、佃は知らなかつた。越智の存在とその多計代への影響のありかたを見くくらべると、今伸子には佃のぎごちない、光のとぼしい正直さが理解された。佃が正直であつたということについて、伸子は、

女としてもつとも機微にふれた発見をしていた。二十を越したばかりであつた伸子は、ほとんど倍ほど年長の佃と結婚しようと決心したとき、母になることを恐怖した。子供をもつということが、本能的に警戒された。佃は伸子のその不安について約束したことを、一緒に暮した最後の場合まで守つた。離れようとしてまたひきもどされる夫婦の、暗い激情の瞬間に、佃がそのときを利用しようとするれば利用出来たいくつかの機会があつたことが思われた。しかし、佃は苦しい蛾のように伸子のまわりに羽ばたきながら、約束は破らなかつた。伸子を自分の子の女親とすることで、自分にしぼりつけようとはしなかつた。

伸子が佃の家を出て半年ばかりたつたとき、伸子にたいして憤

慨した佃の友人たちが、佃を最も幸福にしてやれると思われた一人の婦人を紹介して、佃はその人と結婚した。今度は、どうしても子供をもつことだ、と決めたということを、伸子は、どこからともなく吹きまわして来た話として聞いた。

「それもよからうさ」

素子はその話が出たとき佃の凡庸さにふさわしい、という風に短く笑った。伸子は、黙って、庭の竹の葉が風にそよぐのを眺めていた。

佃が伸子をその中を守ろうとしていた家庭の幸福というものは、若い伸子が求めてやまない、生きているらしい生活というものは、決して一致しないものだった。さらに多計代が熱望している

佐々家と伸子との繁栄、名声というようなものと、佃の生活目標はちがつていたし、伸子の願望ともかけはなれていた。三様の人生への願いが巴^{ともえ}となつて渦巻き、わき立つた。

佃とわかれ、長い小説としてまたその生活を生きかえした伸子は、二度目の結婚とか、家庭生活とかいうことについて、素子との暮しのうちに出没する男の誰彼を連想することは全然不可能であつた。伸子のこころとからだとの中であつて、伸子をひとつとここに止まらせて置かない力、それを伸子は何と名づけたらよかつたろう。どう処置していいのかさえ、わかつていなかった。世間で、結婚や家庭生活を、人間生活の一つの安定ときめてそのように形づけ内容づけるとき、きめられた安定におさまれない一人

の女が、ただのくりかえしとして次の対手を求め、家庭生活をくりかえして見たいと思う、どんな必然があるというのだろう。

伸子は、生れつきのうちにある人なつこさや子供らしい信頼や大まかさを、日常生活の細目はみんな素子にまかせきつた今の形にあらわして生活していた。男のように口をききながら、實際のこまごましたことはみんな自分でとりまかななければ気のすまないきわめて女性的な素子にたよって、伸子は小説をかきつづけて来た。

「伸ちゃんという人は、一体どういう性格なんだか、私には理解出来ない」

老松町へ家をもったとき、訪ねて来た多計代が、あとから苦々

しげにいった。

「まるで、吉見さんという人が、旦那様みたいじゃないか、一から十までお前に命令してさ。経済だって、あの様子ではどうせ吉見さんが支配しているんだろう。一旦信じたとなると、伸ちゃん
は盲目だ」

伸子は、苦笑いした。伸子は二人の家計の一切を素子にやって貰っていたし、自分の収入も自分でもってはいなかったから。

「いいのよ、私より上手で、すきな人がすればいいのよ」

小説の綴じあわせを読んでいるうちに、伸子の表情に濃くなりまसरかげは、この平穩な郊外の女ぐらしの家に流れる生活について、伸子の心にいつしか芽ぐみはじめた疑いがあるからであつ

た。

あまり永くしんとしていたのに心づいて、急に不安になったように、

「ぶこちゃん」

となりの部屋から素子が声をかけた。

「いる？」

「——いる」

「斎藤へ筈ほりによこせていつてやらないと、またあとで細君がうるさいね」

その家は斎藤という軍人のもち家なのであった。

「……そうね」

「あしたでも、とよに持たせてやろうか」

「それがいいかもしれない」

素子にその感情をかくすというのではなく、伸子はおだやかに、言葉すくなく襖越しの応答をした。地平線のかなたにひとかたまりの雲が湧き出した。青く晴れた空のひろさにくらべて、その雲のかたまりはごく小さくて、それを吹き動かす風も立っていないとき、その雲のかげについて、伸子はなんと話すことが出来るだろう。柘榴の幹をすべって、細かいその葉を梳きながら、郊外のごみのない日光が芝生にひろく射している。陽の明るさに向って瞳をほそめながら、伸子は頬杖をついたなり、じつと心の地平線に見えはじめている小さい雲のかたまりを見つめた。

六

土曜日の午後のことであつた。

伸子たちのすんでいる駒沢の奥の家の、裏に向つた四畳半で、ロシア語の稽古がはじまつていた。

伸子が、老松町の足袋屋のよこを入つた路地のお裁縫屋に二階がりをしていたとき、その部屋は東も西も、二間のガラス窓であつた。寒いのと光線が多すぎて落ちつかないので、伸子は暖い色どりで釣鐘草の花模様を染め出した厚い更紗を買つて来てカーテンにした。その更紗が、この家では小蒲団の上おおいになつて、

ニス塗りの長椅子の上に可愛い長クッションのように置かれている。伸子と浅原露子が、行儀よい女学生のように並んでそこにかけていた。素子は、一人はなれて横の籐椅子にかけ、小テーブルをひかえている。三人のまえに、ベルリッツの緑色表紙の教科書と帳面とがあつた。外国人のためのロシア語と、題がついている。その本のはじめのところが開かれて、素子が、すこしかすれるような特徴のある声で、それは何ですか？ それは鉛筆です。どんな鉛筆ですか？ という、簡単な問答をロシア語で、ゆっくり読んだ。

「浅原さん、よんでごらんなさい」

先生らしく素子がそういった。露子は、膝の上にひろげていた

本をとりあげ、ふつくらとした色白の鷹揚おうような口元を、馴れない発音のために緊張させながら、丁寧に、熱心に、一つ一つの音を正しく読んだ。落子の、少女めいたちんまりした唇は、改まって外国の言葉を発音するとき微かにふるえた。

「さ、こんどは、あなた」

伸子も、真面目に短い単純な文章をよんだ。けれども、伸子にはアルのきつく舌を捲き上げる発音がうまく出来ず、首をふるように力を入れていっても、それはエルに近い柔かい音にしかならなかった。

「変だね、こうしてさ」

素子は、重いほど、どっさりある髪を束ねた顔を、北向きの窓

の明るみに向けて、自分の口の中を伸子に見せるようにして、

「アル、ル、ル」

と発音してみせた。

「わたしの舌はすこし短いのよ」

何度やっても成功しない伸子が弁解するようにいった。

「英語のアルも、ちゃんと出ないんですもの。耳がわるいんじゃない、舌の出来がわるいのよ」

「——それだけよくまわるのに、アルだけ出来ない舌なんてあるかい」

露子が、故郷の母がこしらえて送ってくれる色の淡い、おっとりした柄の着物に素直につつまれている大柄の若いからだを動か

して笑った。

三人は、それから一時間あまり、鉛筆を主役にして、いろいろに組合わされた文法の変化を稽古した。

「きょうは、この位にしておきましょうか」

すると、袖口を少しずらして、露子が時間をみた。

「さっきお話ししました、私の友達。もう伺うと思うんですけれど——もう少しお邪魔してようございましょうか」

「そうそう。——かまいませんよ」

伸子は、お茶をいれに立った。このロシア語の稽古では、浅原露子が本体で、伸子はおしよばんの形であった。素子の友達が、同じ専門学校の後輩である浅原を紹介して、ロシア語を教えてほ

しいといつて来たとき、素子も伸子も、大柄でおとなしくて口数のすくないその若いひとが、どうしてその勉強をしたいのか、よくのみこめなかった。落子は、その専門学校では国文科の上級にいた。はじめて落子が来たとき、素子がいくらか皮肉にからかうように、

「理由がないわけではないんでしょう。私なんぞにはいえませんか」

笑いながら問いつめても、落子は、すこし顔をあからめて居心地わるそうにほほえんでいるだけで、何ともいわなかった。そんなとりなしも、落子の場合には、いこじには感じられず、ふくらのみのある人柄が印象された。落子は土曜日ごとに、午後の一時間

半、通つて来ることにきまつた。落子が教科書を揃えるとき伸子も自分の分を買つて来てもらつた。

翻訳をはじめから、素子はちよいちよいした相談相手としてフイリツポフというロシアの人と知りあいになつていた。老松町に間借り暮らしをはじめた頃のある夜、伸子も素子につれられてフイリツポフというその男の住居を訪ねたことがあつた。一九一七年の革命のとき極東のどこかの小さい町に両親と生活していて、騒動の間に親たちは死に、自分は日本へ逃げて来たというフイリツポフは二十八九歳で、鴨居に頭のつかえる背たけをしていた。亜麻色の髪をすこし長めに後へなでつけ、水のような瞳をしたフイリツポフは神田に二階借りして、ロシア風の襷の多いスカート

をつけた若いからだの大きい妻と、生れて間のない赤ん坊とで暮
していた。階下にはいかにも下町風の頭痛膏をはった婆さんが住
んでいた。二階へあがるとき内部が見える位置にある部屋の障子
のそとに、寄席の引き幕の古びたようなじじむさい大きい布がぐ
るりとはりめぐらしてあった。フィリツポフはその二階の二つの
小さい座敷の唐紙をはずして、椅子、テーブル、大きい本箱、赤
ん坊の揺籃、ミシン、赤ん坊に湯をつかわせるブリキの大盥、食
器棚など、生活に必要なあらゆるものを、その室内に持ちこんで
暮していた。燭光の小さい電燈の光が、日本人の習慣では想像も
されないほどこみ入って、しかも整頓されているその室の光景を
照し出していた。壁に美しく赤と黒との糸をつかったロシア刺繍

の飾り手拭いが飾っており、その部屋においてあるすべてのものに脂の匂いがしみこんでいた。

伸子はフィリップフに会って、はじめてロシア人の口から話されるロシア語の魅力を感じた。同時に、クープリンの小説などでよんだように、当てどのない、しかも濃厚な生活雰囲気が東京のその一隅に生きていると感じた。

フィリップフは、しかし、素子が必要としただけの教育をうけていないらしかった。話す母国語は勿論わかっているが、文学として、こまかい語義の詮索になると、図ぬけて背の高いやせたからだに黒い服をつけたフィリップフは、水のような瞳に半ば絶望の表情をうかべた。そして、顔ほどの長さのある手で亜麻色の髪

をなであげた。

丁度そのころ、ある日本の理学者の妻になっている音楽家のロシア婦人があつた。その婦人の母と姉とが、その人について来て東京で暮っていた。素子は、やがてワルワラ・ドミトリエーヴナというその姉のところへ、出入りするようになった。フィリツポフの万端が庶民風なのにくらべると、ワーリヤと呼ばれているその人の生活は、伸子に、ロシアの首府がペテルブルグと呼ばれていた時代の知識人の空気を思いやらせた。小石川の閑静な高台のその家の客間は、やはりせまい日本座敷を洋風につかっているのであつたが、電燈には絹のシェードがかけられて、ふすまぎわにどっしりした新しくない安楽椅子が置いてあつた。そこは、黒

ずくめの服装の堂々とした母夫人の場所で、ワーリヤを訪ねて来る素子や伸子なども母夫人は家の客としてもてなし、伸子とは英語で話した。

ワーリヤ自身は画家であつた。栗色の厚いやわらかい髪をおかつぱにして、眉まで前髪が切り下げられている。見事な二つの茶色の瞳だつた。小柄だが、肉づきのしっかりしたワーリヤの顔だちには、あたたかい深みがあつた。話していて、ちつとも外国の婦人という気がしなかつた。ドイツのひとを良人にして、幸福に生活していたのに死に別れたという話もきいた。ワーリヤと素子とが、二階の書斎へ行つて調べものをして来る間、伸子は客間に母夫人と残っていた。ロシアの音楽やオペラの話をするとき、年

とつた母夫人のいかめしい顔に生氣がよみがえつて、まるで昨夜、その華やかな^{やさしき}棧敷席にいたかのようだった。日本にも数年前にア
ンナ・パヴロバが来て、伸子は「瀕死の白鳥」の美しさに感銘さ
れていた。私はもう二度とロシアへは帰らないでしょう。でも、
ロシアの冬と音楽と舞踊は一生恋しく思うでしょうよ。母夫人は、
ロシア風に煮たジャムをすすめながら、伸子にそう述懐した。

フィリツポフ夫婦の生活やワリーヤの家の人たちは、伸子に、
昔から今へ生きているロシアの社会のひとこまを見せるようだった。
亡命して来ていて、いわゆる白系露人といわれるそれらの人
たちは、いいあわせて一九一七年前後のことは話題にしなかった。
それからのちのロシアの社会や芸術の変化についても、独特な態

度をもっていて、その頃日本にも伝えられて来ているルナチャルスキーとかメイエルホリドとかいう名は母夫人の話の中には決して出てこなかった。チェホフの芝居がそのまま生きているようなそれらの人々の生活気分と風習は、伸子に、これまでの文学で親しんだロシアを身近く感じさせると同時に、新しくなっている今のロシアはどう違うのだろうかと好奇心をもたせた。露子が、ロシア語を習いに来ることになったとき、素子は、どうせ教えるのだから、と伸子にも勉強をすすめたのであったが、伸子が教科書と一緒に買ってもらった気持には、ロシアにひかれるものがあったのだった。

稽古がすんだ部屋へ伸子がお茶をもって行くと、素子がいつも

の赤く透きとおるパイプをくわえながら、

「なるほどね、そういうえば本当にそうだ」

面白そうに笑った。

「なんなの？」

「浅原さんがね、ワーリヤさんの眼は、ほかの外国人の眼とちがつて、じつと見えていても変になって来ない、っていうのさ」

「変になって来るって……」

伸子はよく意味がのみこめなくて、

「どういう風に？」

ときいた。露子は、ふつくりした小さい口元でなかば笑いながら、
「あんまり碧い眼を見ているうちに、段々その人が何を考えてい

るのか分らないようになるでしょう？ 溶けるみたいになって。

でも、この間はじめてお目にかかったワリーヤさんの眼は私たちの目とあまりちがわないみたいで、わけがわかったから」

「本当に！ そういえば、ミス・ドリスだって、眼だけ見つめていたら、何がなんだかわからなくなつて来るわ」

ミス・ドリスは落子のいる専門学校の英語の女教師で、人望があつた。その人は、黄色っぽい髪に水色がかった堇色すみれの瞳をしていた。

「フィリツポフさんの眼だつて、そうだわ」

「あれや、色のせいじゃない」

断定的に素子がいったので、落子も伸子も笑い出した。

「あの人は、人生そのものが、あんな風なのさ」

そのとき、玄関で、

「ごめんなさい」

という男の声がした。

伸子が出て行ってみると、たたきのところに立っているのは男と女と、二人の客であつた。

「やあ……」

テニス帽をぬぐ竹村英三に、伸子は、

「……御一緒？」

ときいた。女の客はその問いにあわてたように、

「いいえ。あの薮子さんがあがつておりましようか」

自分が竹村英三のつれでないことを明瞭にした。その声をききつけて、

「おそかったのね」

落子が出て来た。

「おお、おや。じゃあダブったんですね。門のところでおちあつただけれど……」

そう云つて改めて若い女客を見た竹村に、素子が座敷から、

「竹村さん、一寸八畳の方にあがっていてくれませんか」

と声をかけた。

落子の友達は、就職の相談に来たのであつた。吉川という、その瘠せぎすの娘は、落子と同じ学校の英文科を去年卒業していた。

「それや心がけておかないもんでもないけれど……」

素子は、上まぶたをひきそばめるような視線になって、じつと吉川の、きちんと白衿を合わせているあたりを見た。

「あんたも、やっぱり家はいいでしょう？」

「……生活にこまることはございませんけれど……」

「なにしろ女房子のある大の男が、これだけ失業している時代なんですからね。お金に困らないお嬢さんが、わざわざ一人分の仕事を横どりしなくなつて、いいんじゃないのかな」

伸子と入れかわつて、長椅子に並んでいる露子と吉川とが、やつぱりね、という風に互に一寸顔を見合わせた。露子が、ひかえめに、

「私、なんだかそんな気もしたもんですから……」
といった。

昭和と年号が改つて間もないその頃、就職の見とおしをもつて専門学校にしろ卒業出来る青年というのは幸運な例外であつた。一方では、アルスだの第一書房だのという出版社が、我がちに大規模な予約出版募集をはじめていて、大型の新聞紙一頁べつたり
の広告が出たりしていた。出版社同士の商売喧嘩から、菊池寛、
山本有三という作家が連名で、いかめしく抗議書のようなものを
新聞に公表しているのなどを、伸子は小説をかくとは云いながら
自分の生活に遠い感情で眺めた。

くちかずの少い、ふつくりした落子の心が、若い自分たち仲間

の就職ということについても、いろいろ心を働かして考えている。はたちを越したばかりのそういう落子に、伸子はなつかしきみをもつて歩みよつてゆく自分を感じた。素子が結論づけるように云うのだった。

「まあ、今のうちせいぜい勉強して、新しいロシアの小説でも読んでおく方がいいでしょう。どうせ、あすこのことだから、古くさいものばかり読まされて来たんだろうから」

「じゃあね」

とうなずきあうようにして、落子とその友達とは帰って行った。

八畳の縁側の柱の下へ座蒲団をもち出して、竹村が、ひとりでたばこをふかしていた。

「や、どうも……」

素子が、そういいながら、紫檀の角机へ縞銘仙の袷のひじをついた。

「……この頃の若い女は、変つて来たねえ」

素子が、ロシア文科にいたとき、その大学で上級生だった竹村は素子と男の友人同士の口をきいた。

「とにかく、経済的に独立して働かなけりやならない、と思うようになって来ているんだから、大した進歩だ」

婦人の経済的独立の必要ということは、どの婦人雑誌でも扱う問題になっていた。実際に失業がそんなにひどい現実とのつながりでとりあげられず、厨川白村がしきりに書いている恋愛論の口

マンティツクな色彩の裏づけとなる条件のように、婦人の経済上の独立ということが扱われている傾きがあつた。

素子と竹村とが、一人は縁側に、一人は卓の前に、はなれたところからしずかに二条のたばこの煙をただよわせながら、話している。それをきいている伸子のところから、庭の片隅にある竹藪が見えた。どこから鶏が雌鶏をつれてそこへ入つて来て、遊んでいる。雄鶏はココココと真赤に重く垂れた肉髯とさかをふるわしてのどをならしながら、つもっている落葉の間を掻きたてた。五月末の青竹の色とその間に動いている白い鶏の姿とは、閑散な午後の日のうちにある。

竹村と話している素子の話しかたには、一種の調子があつた。

どんな男友達とでも素子が話すいつもの調子なのだが、その調子は素子がほかの女友達やワーリヤを相手に話しているときの、まともで真実のこもったやりとりと、どこがちがった。素子は真率な人柄で、それだから男友達も多いのに、その男友達とのつきあいの間で、素子は、自分が女っぽく扱われその興味で見られるのをさけて来たあまり、不自然なほど自分を男っぽく表現した。言葉づかいばかりでなく、つき合う男友達の表おもてげい芸の範囲でつき合わず、その人のくだけた面というか、普通女の友達には男の側から公表しない習慣にある生活面の方へ、自分からたち入った。

素子の友人の一人に加茂という信州の禅寺の若い住持があつた。その人は、仲子たちの住居から遠くないところにある宗教大学の

大学院にいた。伸子は、雑誌にあつた道元の伝記などに興味を持つていて、加茂とそんな話になる。素子は、しばらく話させておいて、いつか信州の雪の炬燵こたつから、そこにからむ色どりで、芸者との遊びへ話題をうつした。それもごく現実的に一晩いくらということにまでふれて話した。いかにも禅家の人らしく小倉の袴を低くはいた加茂は、道元のことを話していたままの口調で、芸者のことも話した。

いま、竹村は、しきりに若い女性の近頃の積極性をほめ、素子はそれも程がしれているという風に応待している。だが伸子には、よくわからない点があつた。さつき、露子と吉川が就職の相談をもつて来たとき、素子は、家族もちの男の失業の多いとき、食う

に困らない娘が職業をもたずとも、といった。落子も同感して、そうきめて帰って行つた。伸子も、あのときはやはりそう思つたのだつたが、考えてみると、その結論には少し妙なところがあつた。食うに困らないということが、その娘たちにとって親がかりの生活を意味している以上、その娘たちの心にも、何かの形で伸子が苦しんだとおりの「大きいお嬢様」としての苦痛があるのだろう。伸子の母は、伸子が佃と結婚したとき、勝手な結婚をするなら経済上のことも万事自分の力でやって見せろ、といった。新しい蒲団一枚こしらえずに、伸子は育つた家を出て、西日が座敷の奥の壁までさし込む路地の横町の家へ佃と移つた。あの白衿をきちんと合わせた吉川という娘が、いろいろな意味で親の掣せいちゆ

肘^{うで}の少い生活に入りたいと思つて、職業のことも考えているなら、男の失業がこんなにも多いからといつて、人間として伸びようとする女に就職しない方がよいといふことは、残酷なことと思えた。しかし、吉川が一人就職すれば、どこかで一人失業する人のいるのは明白だし、その人は男であるにしろ女にしろ吉川よりもっと切実な生きるてだてとして職業がいる人かもしれない。――伸子には、そういう現実の複雑なくいちがいが、どこで解決されるべきものなのかもわからなかつた。

竹村は、婦人の経済的な独立といふことから移つて、女性文化といふことをいった。これまでの日本は男の社会すぎた。もつと女性の力が発揮されるべきだ、という意味で。

「——でも、私には、それだけじゃよくわからないわ。女のひとが、自分の力で金をとって、それで自分が暮したいように暮す……それつきりでおしまいじゃ、なんだか足りないものがあるわ。なんのために、そうして暮したいように暮すんだか、そこがはつきりしなくちゃ」

これは、当然素子と伸子自身の生活ぶりにかかわっている感想である。素子は、火のついていない赤いパイプをかねていたが、
「初耳だね」

伸子にだけわかる、いくらか変った声の表情でいった。

「そんなこと、ちつとも話さなかったじゃないか」

みんながしばらく沈黙している間をおいて、また、伸子がいつ

た。

「たとえば、雑誌一つ出すにしろね、なんのためにそれが出されるのか、はつきりわからないのに、ただ女がそれを出すからっていうだけで、本当のねうちがあるって云えやしないでしょう?…」

雑誌によせていったが、それをいい出す伸子の心のうちでは、自分の書く小説のことであり、小説を書いてゆく、というそのことでもあった。

しばらくして竹村が、

「むずかしいもんさね」

緊張した空気をほごすように、座蒲団の上で胸をひろげて、の

びをするようにしながらいった。

「考えてもきりがいいようなもんだし、うちの奴みたいになんてんから考えない女も、つきあえたものじゃなし……」

立ち上って、竹村は、

「ところで、きょうは、ひっぱり出しに来たんだ。——ひとつ出かけませんか」

と、伸子を見た。

「どこへ？」

「温室を見せようっていうんです」

去年、細君を離別した竹村は、駒沢の、伸子たちの住んでいる分譲地よりずっと奥に、一人暮しで園芸をはじめていた。

「いま、カーネーションが素晴らしいところなんだ、ね、——行こう」

「いまっからじゃあ……」

素子が、決断のつかないおもちになって、竹村の住んでいるところとの往復の距離をはかるように庭を見た。

「かえりは送つて来るよ、宵の口はひまがあるんだ。この頃の気候だと夜中にボイラーをただけでいいんだから」

「——ぶこちゃん、どうする？」

「私は行ってもいいけれど……」

「じゃ、行こう、おいしい干物があるから、あれをもつてつて御飯たべよう」

「来て見なさいとも。びっくりするから……きれいで——」

七

家の門を出て、右手にゆるい坂をのぼりきると、桜並木の通りへ出た。玉川電車の停留場を降りたところから、真直にもう一本桜並木があつて、伸子たちの家へ来るには、そつちを通つた。その道は、とつつきから、小さい魚屋、荒物屋、八百屋、大工の棟と梁うりようの格子戸の家などが、いかにも分譲地がひらけるにつれてそこへ出来たという風に並んでいる。その間を通つて来ると、段々生垣いけがきや、大谷石をすかしておいた垣の奥の洋館などが見えて

来る。同じ桜の並木通りといっても、その通りは分譲地でのサラリーマン階級の雰囲気で、ちよいちよいした日用品の買いものに、住宅地の人が日に何べんもおる通りであつた。

坂の上の方をとおっている桜並木は、左右に植えつけられている桜が古木で梢をひろげ、枝を重くさし交しているばかりでなく、並木通りからまた深い門内の植えこみをへだてて建てられている住宅が、洋風にしろ、和風にしろ、こつたものばかりであつた。

外壁に面白い鉄唐草の窓をつけたスペイン風の建物などがあり、桜並木には人氣がなかった。雨の降る日にそこをとおると、桜の梢からしたたるこまかい雨の音がやわらかく並木通りのはしからはしまでみちていて、人っこ一人とおらない青葉のトンネルのよ

うな道のどこからか、ピアノがきこえたりした。

竹村、素子、伸子という順に並んで、そこをとおりぬけ、分譲地の外がわにひろがっている田舎道へ出た。茂った草道や新緑の濃い灌木のかげにまばらな農家があるきりで、畑はゆるやかに傾斜しながら、三人の通る道から遠くまで見えた。鷺鳥が十羽ばかり、白い小さい花をつけた灌木のしげみと腐った棚の間に群れていて、三人の足音をききつけると、首をのばしてやかましくさわいだ。

「これやいいや、番犬がわりにうちでも飼おうか」

素子が笑った。

やがて三人のゆく道の景色は変って、いかにも駒沢の奥らしく

続いた竹藪と、農家の古い茅屋根の間に入った。大きい竹藪の茂みの間を縫って、湿っぽく薄暗く足音の消える細道の角に、赤い布を結びつけられたきたない顔の小さい石地蔵が立っていた。うす暗い藪かげにそれを見ると、伸子は、

「——気味がわるい……」

小声でそういつて素子の手につかまった。

いくらか足早にそこをぬけると、風景は再び前方に明るく展開して、小高く連なる耕地の裾をとる一本道は、水勢のはやい流れに沿うた。柳が生えている川岸に、ここでも鶯鳥が黄色いくちばし嘴をふりながら餌をあさっている。丘になった耕地の彼方に、いかにも風車でもありそうな木造の洋風の高い小舎が眺められた。

「あれなにかしら……」

「なんだろうな」

竹村は伸子にそうきかれてはじめて眺め直すように、そつちを見た。

「あなたのところ、あの近所？」

「すこし方角がちがう、もうすこしこつちになる」

荷車が一台耕地の間の草道に置いてある、その方を指さした。

「もうそろそろついてもいい頃だな」

「栗の樹があるだろう？ あ角を入ればすぐさ」

ぐるりが畑の真中に、突然畑でない地面が四角く開いて、その垣根も何もないところにかなり大きい一棟の温室と、すこし離れ

て住居が建っていた。竹村は道を歩いて来たその足どりで住居のガラス窓へよつて行き、白いカーテンのしまつたところを一寸のぞいてみてから、おくれて来た素子と伸子を温室の入口で待った。「さきに温室を見て貰おう、ね」

ズボンのポケットから鍵を出して、竹村は温室の戸をあけた。素子が入り、伸子も内部へ踏みこんで、思わず、

「まあ！」

声をあげた。一日じゅう日光の最後のぬくもりまで利用するようになてられている温室は、その時刻に丁度真向うから西日をうけていた。ガラスのまぶしい反射のために外からは見えなかつたカーネーションの花の赤、白、ピンク、淡いクリームの色々が、

入ってみれば温室いっぱいに咲き乱れている。しめりけのある温かい空気は、粉っぽいカーネーションの薫りで満ち、近よって眺めると、見事な花冠をつけた茎のほそくつよく節だった緑の美しさ、やわらかな弾力にあふれてはね巻いている細葉の白っぽいような青さ。外気の荒さに痛められず、伸びて、繁って繚乱と咲いているカーネーションの花弁は美しくて、伸子はそこをかきわけるように入って行った人間たちの衣服の繊維のあらいこわさを、花々にふさわしくないものにさえ感じた。

「ひとりの花ばかりでいっぱい温室って……はじめてだわ。気が遠くなるみたい」

温室はそう大きくないのに、同じ花ばかり見てひとまわりする

と、そこは限りなく奥深い広いところに思えた。伸子は、薫りに酔つてうるんだ眼になった。

反対側を竹村とつれ立つて見てまわりながら、素子がいつている。

「ほかの花はやらなかつたんですか」

「何しろ第一年目だもの……功はいそぐべからず、さ」

「こんなに腕がいいとは思わなかつた」竹村は、伸子がたたずんでいる側へ出て来て、それを育て、花さかせた者の注意ぶかい視線で花床とこを見まわりながら、

「案外で、見直したろう」

素子は、素子らしくきいている。

「この中で、すぐ切れるのは何本ぐらいあるんだろう」

「さあ」

目算するように、竹村はひとわたり眺めた。

「かれこれ、四五十本というところかな」

カーネーションは朝早いうちにぞつくらきられて、渋谷の市場へ運ばれるのであった。

伸子は温室を出ながら竹村にきいた。

「この花がなくならないうちに、わたし、弟を来させてもいいかしら」

花ずきの保に見せたら、どんなによろこぶだろうと伸子は思った。フレームでやれることはきまっていて、もうつまらなくなっ

たといつて、この間行つたとき保は水栽培で紫の立派なヒヤシンスを咲かせていた。

「いいとも。歓迎する」

「じゃ、なるだけ早く来るようにいうわ」

「それがいい。きりどきがあるから」

別の鍵を出して、竹村は住居の入口をあけた。土間に、テーブルと椅子と園芸用のごたごたがあつて、右手が畳じきの六畳、四畳半になつていた。本箱、机、食卓。六畳にそういうものがおいてあつて、次の室は寝室としてつかわれているらしかった。鉄金具の古い箆笥が見えた。土間のつづきに炊事場と風呂桶をおくところがあつて、炭や薪が田舎らしく積みあげられている。小松菜

と細根大根が、ぬいたままで、へつついわきに放り出してある。その明るく簡素な生活の仕組みを見て伸子はおどろく心持があつた。素子と暮しはじめて間のないころ、はじめて竹村の家を訪ねたことがあつた。よそからまわつて、夕方近く竹村のところへ行つた。竹村夫婦は、どこかの離室はなれめいたところに暮していて、柴し折戸おりどのような門口から、飛石づたいにいきなり座敷の前に出た。軒近くまで庭木が茂りすぎて、土庇の長いその座敷は一層陰氣に見えるなかに、氣むずかしい顔で、眉の濃い竹村があぐらをかいていた。本がひろげたままおいてある卓が、二月堂だった。長方形の、朱漆で細い線のめぐらされているその卓さえ、氣がきいていだけ、よけい座敷の空氣を氣づまりにしているような感じだ

った。素子と挨拶したままつい話しこみかけている細君に、

「おい、お茶をいれろ」

竹村がそう命じた。その声は乾いていて、濃い眉の下で眼がけわしくひらめいた。体裁でつくろいきれないそそけだった夫婦の気分で、伸子は、なぜ素子が自分をつれてここを訪ねたのか、いづらかった。そのとき、竹村は和服を着ていた。伸子の目には、二月堂の卓と趣味の上で一つのつながりがあるように見える変った織の和服をきて、陶器のパイプを本のわきにおいて眉をひきしめていた。

アトリエのような気分のある、からりとして未完成なこの建物の土間であっち向きにしゃがみ、七輪に火をおこしている竹村は、

ひじのぬけかかった鼠色のジャケットを着て、テニス靴をはいている。眉の間に深く刻まれている二本の縦皺はもとのとおりだが、あの暗い座敷にじっと坐っていた竹村を思い出すと、生活の変化がおどろかれた。あの細君を離婚しなくては、竹村のこういう生活の変化もおこりようがなかったのだろうか。庭木の奥の洞穴のような離れで営まれていた生活も、細君が、そうしつらえたというより、はじめは確かに竹村が自分の趣味で、あの座敷も選び、渋いという風なあの雰囲気をつくって行ったのだろうかのに、と思えた。

温室の経営をして、花をあきなって、ロシア文学の翻訳をする男の一人暮らしというのも、やっぱり一つの竹村の好みというもの

ではなかろうか。

建物の外に、ポンプがあつて、そこからは畑の起伏と遠い森とが見晴らせた。温室のガラスを焰のようにもえたたせている西日は、溶けたような空の前に遠い森を黒く浮き立たせている。

「なに、ぼんやりしているのさ」

素子が出て来た。

「すこし歩かせすぎたかな。——じき茶が出るから、こつちで休んで下さい」

伸子は、六畳のあがりがまちへ腰かけて、土間で働いている竹村を見ていた。

「いずれにしても、一人じゃ、あんまり風雅すぎるでしょう」

素子が笑いながら竹村にいった。

「なかなかいいところがあるもんだよ、こういう生活も……」

「——もつとも、あんたのその手じゃ、ちよいと細君になりてもないだろうけど」

土いじりをし、万端の荒仕事をする竹村は火箸をもっている自分の手をちらりと見おろして、

「ふん」

といった。

「手がどうのこうのつていうような女と、誰が結婚なんかしてやるもんか」

そして、彼のななめうしろに足をぶらぶらさせていた伸子をふ

りかえった。

「ねえ」

伸子は、黙っていたが、ふっていた足を一瞬止めた。それはそうだけれど——ねえ、と自分をふりかえった竹村をそのままにはうけつけない感情が、伸子のどこかに動いた。

竹村がへつついをもやし、素子が土間の七輪で鰯あじのひとしおを焼き、伸子が筴ざるに入っている茶碗を並べて、むき出しの電燈の下で夕飯がはじまった。

たべ終つて、竹村がレコードを聴こうといい、伸子が、何となし気もすすまないでいるとき、急に、土間の隅で、何か生きものがさわぐような物音がした。

「何だろう、^{いたち}鼬かい？」

「鳩だよ」

土間をすかし見ながら竹村がいった。

「つがいでいたのに雌が逃げちゃって、一羽のこってるんだ。夜ときどき出して飛ばしてやると、面白いね、そこの鏡に自分が映るだろう。それを仲間だと思うんだね、きつと。何べんも何べんも鏡へくちばしをぶつつけるよ」

古風な大きな飾鏡が、浅い床の間の柱にかかっていて、今はぼんやりとその面に電燈の光をうつしている。男が一人いる夜の部屋の中を白い鳩が翼をはためかして鏡のなかにうつる自分の姿を雌かと思つて一心に近ようとする光景を想像して、伸子は感情

を動かされた。

伸子はカーネーションの花の美しさよりも、夜の鏡にうつる自分の白い影にくちばしをぶつける白い雄鳩の話により深く心を動かされた。けれども、伸子はそのころもちを素子にも竹村にも話さなかった。二人は懐中電燈をもった竹村におくられて、くらい竹やぶを通りぬけ、宵の口にうちへ帰った。

八

翌日、伸子は自動電話で保をよび出した。そして、竹村の温室のことを話した。翌々日が日曜日だった。保は十時ごろ伸子のと

ころへ一旦よつてそれから見にゆくときまつた。

「ここへよつて行くつて——誰が案内するんだい」

電話をかけて帰つて来た伸子の顔を椅子の上から素子が見あげて、氣むずかしげにいった。

「わたしや、そんなお供はごめんだよ」

伸子は当惑して、素子の椅子のよこに立つたままでいる足をふみ代えた。

「……あなたに行かせようと思つていたわけじゃないけれど」

「ぶこちゃん、またわざわざついて行こうつてのかい」

そうときめていたわけでもなかった。伸子は保に、あんなにきれいにカーネーションの咲いているところを見せてやりたいとだ

け考えた。保をつれて行つてやることなどはひとりで解決され
ると思つた、というより、とりたてて考えていなかった。素子は、
「なんだ！ あんな温室ぐらい」

そういつてわきを向いた。素子は、伸子が大袈裟にさわぎ立て
ているという風に不快を示している。それは素子の感情的なうけ
とりかたに思えた。

「わたしがどうというのじゃないのよ。保の部屋の鴨居の貼紙の
こと、話したでしょう？」

伸子は、真面目にいった。

「わたしは、保が心配なのよ。あのひとには、何かしてやること
があるにちがいないのよ。だから、花も見せたいの」

「——ともかく、私はごめんだ……」

日曜日の約束してあった時間、ほとんできっかりに、東京高校の黒い制服をきた保が訪ねて来た。多計代のおみやげの、虎屋の羊羹を出した。

「保さん、ここはじめてでしょう」

「ああ」

保は、目新しそうに庭や竹藪を見まわした。

「きようは夜までゆつくりしてゆくんでしょう？」

「僕、夕飯までに帰る。——お母様にそういつて来たから。……」

間に合うでしょう？」

「それや、間には合うけれど……ともかく行きましょう」

伸子が帯をしめ直しに玄関わきの六畳へ入ったあとから、素子がついて来た。ふとこゝろで 懐手をして、

「結局、行くんじゃないか」

おはしよりを直している伸子にいった。

「行きましょうよ、一緒に。保にかわいそうだから——ごたついたりしちや」

そういう伸子の心には、きつい激しい思いがあつた。もと佃と赤坂に暮していたとき、丁度夕飯時分ふらりと和一郎が来たことがあつた。大震災のあと間もないときで、佃が崩れた小壁に紙をはって働いていた。そこへ和一郎が、姉さん、いる？ とのんび

り入って来た。佃は、家の修繕などに熱中しないころもちになつてゐる伸子に対して不愉快でゐる感情を和一郎に向け、役にも立たず御飯をたべにばかり来る、という意味を、和一郎がきかずにいられないような調子でいった。しばらくして、和一郎が、姉さん、僕、帰る、といつて、伸子が玄関に出てゆくのも待たず出て行つてしまった。それきり、和一郎は佃の家へ来るこゝろがなかつた。

保に、温室を見せてやりたい伸子の、そのころもちは、温室をやつてゐる竹村への興味などとは全く別のものであつた。口にそういわないでも、素子が拘泥してゐる不機嫌は、その点の勘ちがいである。伸子は、そんなことを弁明するさえ必要ないと思つ

た。保をいじらしく思っている心で行動するのに。——素子にかまわず伸子は仕度を終り、もう一度、

「来て頂戴ね」

そういつて、保のいる座敷へ戻った。

素子は、決心のつかない表情で伸子が出かける玄関口まで来たが、とうとう来なかった。

伸子は、保に驚鳥も見せたいと思い、おととい通った道順そつくり、白い小花の咲いている灌木の茂みのところを行つた。

「いる！ いる！」

伸子はよろこんで、

「ほら、いるでしょう」

ときようもなきたてる鷺鳥の群を見せた。

「七面鳥は桜山でも飼っているけれど、鷺鳥って珍しい」

夏休みに行く田舎の家のある村の名をいって、保は伸子と道ばたに並んで鷺鳥を見た。保が、柵の外の道からポンポンと手をうって歩くと、鷺鳥はしばらくそれに平行に歩いて来た。

「お留守でなくて、よかった」

温室の外で働いている竹村の姿が目に入ったとき、伸子はわざわざ来た保のために在宅をよろこんだ。保は、研究的に、土の混ぜあわせ方の比率だの、温度だのについて竹村にききながら、カーネーションの間をゆっくり歩いている。竹村の、年の割に枯れた皮膚の、眉間に大きい縦皺をもつ顔は、温室に花を育てる人と

して自然に見られた。けれども、上まぶたが重くぼつてりと、色つやのさえない、しかもどこか鋭い保の容貌は、カーネーションの美しい体温のない充満の中で人間の肉体や心の分厚い存在を伸子に感じさせた。おとといは、薫りの雲がみちみちているように感じられた温室の内部が、きようは花のつくられている温室、という現実的な手堅い感じで支配された。

保は、

「シクラメンはおやりになりませんか」
ときいた。

「今年はやりません。鉢ものですしね」
「ああ、そうね」

そういう問答の内容は伸子にわからなかった。

わからないことだらけの竹村と保の話を、伸子はむしろ満足してききながら、長いこと温室にいた。保が辞退するので、住居の方へはよらないで、帰途についた。

平静な保の表情から、伸子は、温室を見たことがうれしかったのか、それほどでもなかったのか、よくわからなかった。

「保さん」川ぶちの道を歩きながら、伸子がきいた。「どうだった？ あんなの平凡？」

「僕、よく出来ていると思う。——でも、あれだけつくるのは、割合やさしいよ」

保は、先頃、父につれられて大磯のある富豪の温室を見て来た

話をした。そこでは主としてメロンと蘭などがつくられていた。

「姉さん、メロンておもしろいよ、むずかしいけれど。僕だったらメロンやる」

円天井の大温室の中で、網に吊られた大小のメロンが、熟す順に番号をつけられて青く美しくみのつていた光景を、保は活潑に話してきかせた。

「みんなとてもいい出来だった。カンタローブの網目なんか、とてもこまかくて」

保は子供らしく、

「メロンやりたいなあ」

そういつて、和毛のかげの濃い口元をほころばした。

どっちみち、保は愉快そうになっている。伸子はそのことで満足した。けれど、別の思いもあった。伸子としては、自分に分相応の環境の中から、せめて保がよろこぶかと思つて竹村の温室見物を思いついて誘つた。保は、誘いをうけとり、見に来たけれども、それより前伸子の知らないうちに父とドライブをかねて大磯へ行き、日本にいくつと数えるような贅ぜいたく沢な温室を見て来ていた。

このことは伸子に、盆暮れや誕生日に、母におくりものをするときの心持と似かよつた心もちをおこさせた。かさばつて、ぎょうぎょうしいものばかり貰いつけた生活で、伸子がおくるささやかな品は、多計代に品物としての刺戟を与えないようだった。両

親の銀婚式の時、伸子としては奮発して、小さい銀の花瓶をもつて行つた。そのときはよろこんで、箱の上に出して眺めたが、十日ほどたつて行つたときには、もうその辺に見えなかつた。

「花瓶どこへ行つたの？」

伸子がきくと、多計代は、

「その辺にないかい？」

菓子箱や罐がごたごたと置いてある座敷の隅を、坐つたままひとわたり目でさがした。

「ないねえ、どうしたんだらう。せつかくお前がくれたのに……」

それは、せつかく娘がくれたものなのに、という心持よりも、あんなものでも、ともかくお前がくれたものなのに、というニュ

アンスで響いた。手袋をもつて行つたときも、財布をもつて行つたときも、多計代の札をいう調子から伸子が感じたのは同じことだった。そして、寂しかった。

保は、伸子が育つた時分の質素だった佐々の家庭とはまるで違つて来ている経済事情や社交の空氣のなかに大きくなつて、多計代が、数年このかた身につけはじめた変な無感覺さを、自覺しようもない少年から青年への毎日の生活でわけもつてゐる。伸子は、何かの拍子に、冗談のようにいったことがあつた。

「わたしの力では、とてもお母様がよろこぶようなものは買つてあげられないからね、親孝行のしようがないのよ。仕方がないから、せいぜい理窟をこねてね、お母様が買えない議論というもの

で親孝行でもするしかない」

保の生活は無垢ななりに、離れて暮している姉の、単純でひとり立ちの生きかたとは、ずっとかけはなれた環境におかれている。そういう具体的な点を一つ一つたしかめて来て、保の部屋の入口の鴨居にはられているメデイテーションという字を思い出すと、伸子は辛かった。自動車でドライブして、そんな大温室を見られる条件はある。けれども、メデイテーションと貼紙している保の若いおさない心に、どんな葛藤がかくされているか、それをその生活の中にあつて、見守ってくれるような大人の精神、本当の思ひやりというものは、保の生活のまわりにはない。

この間動坂へ泊った朝、おそい朝飯に多計代と二人きりだった

とき、伸子は保の貼紙のことを話した。多計代は、保がそんなに純真で、真面目なのだから、間違いないということばかりを強調して、伸子の不安にとり合わなかった。私に保のころもちは、本当によくわかつているんだから、といった。

「そうかしら……」

伸子は、暗い眼をした。保は前の晩に、なんと云ったろう。

「お母様、なぜだろうね、越智さんが来るときつと洗面所へ行つて白粉をつける」小さい子のように姉にそういいながらも、母には「お母様、なぜ」と、そのことについてじかにはきかない二十歳の保の青春には、母にわかっていない複雑さがある。多計代は、どうしてこんなに簡単に、保のことは隅から隅まで自分にわかつ

ていると思ひこんでいられるのだろう。

しかし、保のなかには伸子の生れつきとはちがったものがあつて、姉と弟という以上に、保は伸子から自分をへだてているところもある。

思つたより早くかえつて来た姉弟を見て、

「どうした」

素子が意外そうに出て来た。

「留守だった？」

「いいえ。温室は見たのよ、ね保さん。でもうちの方へはよらないで来たから」

出がけにこだわつた気分をかえて、素子は二人のために食卓の

世話をやいた。

食後、素子がその頃流行していたダイヤモンド・ゲームを出して三人で遊ぼうといった。保は、

「僕、やったことがないから……」

とことわった。

「やったことがないって」

眼を見はるような表情で、素子は、

「こんなもの！」

そこへ、赤、黄、青と小さくコロコロしたコマをあけた。

「子供のやる遊びですよ。出来ないなんてことあるものか」

「——でも、僕やったことがないから……」

とうとう、保はその遊びをしないで、間もなく帰って行った。

「あのひと、どういうんだい、おそろしく変つてるね」

送り出したかえりの廊下で、素子があきれたようにいった。

「あんな高等学校の学生つてあるもんか。——あんなじゃ一人前になれやしないや」

素子の観察は、伸子に同感された。しかし素子が自分では感じていないもう一つの原因も、保の気分を支配したように思えた。パイプをくわえたままの顔を横に向けて、御飯をよそってくれ、袂の袖で腕ぐみをする素子のものごしや口調は、女を少女らしい特徴で意識しはじめている保の感覚にきつと居心地わるかったのだろう、と。

九

なか三日ばかりおいた午後、不意に竹村が訪ねて来た。しとしと雨が降っている日だった。机について翻訳の仕事をしていた素子が、

「不意に——どうしたのさ、用ですか」

面倒そうに縁側に目をやった。竹村は玄関にまわらず、柘榴の樹かげから庭へ入って来ていた。

「渋谷まで出かけたもんだから……いそいでかえつても、この天氣じゃ仕事がないしね」

こっちの部屋の机のところには伸子がいた。やはり机に向つたまま、

「この間はどうもありがとう」

保に温室を見せてもらった礼をいった。

「どうしまして……」

素子があがるようにいわないので伸子も黙っていた。

「——一服させて貰うよ」

玄関から竹村はひとりであがって来て、素子のいる座敷の敷居ぎわへ自分で座蒲団をもち出した。素子はそのまま仕事をしている。伸子とはよにお茶をたのんだ。竹村はその辺にあつた雑誌をよんでいる。

そのまましばらくの間三人は黙ってばらばらにいたが、伸子にはそれが気づまりだった。そんなに放り出しておくほど竹村にたいして日ごろ内輪のつきあいをしているわけでもない。素子の声にもそぶりにも竹村が予期しないとき来たのをよろこばない調子が見えている。竹村の方ではまた、その感じをどこかでおしきろうとしているところがある。どうせ落ちつかなくなってしまった伸子は机をはなれて、隣座敷へ出て行つた。

「どうして？　もうあのカーネーションはみんなきってしまったの」

「いやまだ三分の一ぐらいのこしてある。——何君といったつけない、君の弟さん」

「保」

「ああ、保君か、案外くわしいんだね。玄人だよ。土の配合なんかすぐ当てたよ」

「小学校の時分からすきでやってるから」

素子が、腰かけている机のところから、

「うるさいじゃないか、なにも出来やしない」といった。

「そうよ、だから仲間入りした方がいいのよ」

茶の間も、伸子の部屋の裏の長椅子の部屋もあいていたけれども、伸子は竹村をそっちへは案内しなかった。うるさがりながら一つ室にいる方が素子の気持にとって自然なのだった。

「仕様が有りやしない」

やがて、素子も卓のところへ来て坐つた。共通の先輩であるロシア語の教授が、最近のソヴェト文学について本を出した。竹村と素子は、その本の噂をした。話題はいくつか移つたが、氣のりがせず、伸子はしばしば中座した。

とよに縫いもののつぎきれを出して座敷へ戻つて来てみると、竹村があぐらをかいた膝の前に二つ折りにした盤をおいて、

「何だつて——ピヨン、ピヨン？」

ヨをピと同じ大きさで発音している前に、重そうな髪を無造作に束ねた素子が腕組みして、むつかしい顔で坐つていた。

伸子は、その光景がなんだか滑稽で、

「出しかけたの？」

と笑った。

「ピヨン、ピヨンて——なんのことだろう」

「ヨをちぢめて飛ぶのよ」

「ピヨンと？」

「そうだわ」

盤をあけてみて、竹村は、

「なんだ、これやダイヤモンド・ゲームじゃないか」

素子の顔をみた。

「そうさ」

「そうさ、もないもんだ。まあいいや、どうするんだって？」

ルールを素子が説明し、伸子が赤、素子が黄、竹村が青のコマをもって、一めずつとびながら遊びはじめた。竹村のコマは一列だけとびはなれて前進し、素子の黄色陣地に迫った。

「どうだい、優勢だろう、この次は失敬して入城だよ」

「入城なもんか。あんたの陣に、そんなにぞつくりのこつてるくせに。自分の陣からすつかり出きってからでなくちや、敵陣へは入れないんですよ」

「なあんだ！ そんなことがあるんなら初めっからいつとくもんだよ、本当かな」

「あたりまえさ」

「そうですか？」

竹村は伸子にきいた。

「そうやってるわ、いつも」

「じゃあまア、これでも進軍させようか」

初めての竹村は、青いコマを盤の格子の上にくつかのこして負けた。二度目に、竹村が、第一列のコマは、相手の陣の境界線の上まで行っている筈だと主張した。

「そうじゃない、一本手前の線までさ」

「——これはダイヤモンド・ゲームなんだろう」

「ああ」

「ダイヤモンド・ゲームならそれがルールだよ」

「ダイヤモンドだって、これはちがうですよ、一本手前までし

か行けないんだよ」

竹村と素子とは変に熱中して、互の手許を見はりながら競争した。

「そら、ぶこちゃん、もう一つ行けるじゃないか」

「何だ、小癪な。じゃ、こうだ、ほら、ぴよん、ぴよん、ぴよんと！」

段々普通のやりかたをかえて二コマずつとんでいい約束をこしらえたり、逆行していい契約をきめたりした。そしてますます混乱した。

「二コマとんでいいっていうならこうなるじゃないか」

「違うさ、それじゃ斜の線だもの、同じ線の上でなくちゃ」

「だって、こうだぜ、君は強情っぱりだなア」

竹村もそんなことをいう気分になった。

「今更じやないよ、自分だって相当偏窟のくせに」

「なに」

そして竹村は小さなコマを、盤にめりこまずように力を入れてすすめた。

「君は、五黄ごおうだろう」

「それがどうしたのさ」

「道理で。——うちの奴も五黄だった。五黄はいかんよ。頑迷だよ」

「——出したのか、出られちゃったのか、わかりもしないくせに」

……」

番がくると、黙ってコマをすすめている伸子の、どこか保に似て円い顔には、倦怠と憂鬱があらわれた。大体伸子は、遊戯に熱中できないたちだった。はじめのうちは気のりがしても、素子のように続かなかつた。単純に遊ばず、お互のむしゃくしゃをぶつけあいながら争っているような竹村と素子との遊びかたは、よけいに伸子を疲らせた。

「もうやめだ、やめだ」

勝てない竹村がそういつて盤をたたんだとき、伸子は、

「それがいいわ」

空虚にたえがたいという眼色になっていった。

「絵でも見た方がいい」

すると、素子が、

「なんだい、えらそうに！」

つよくマッチをすって、巻たばこに火をつけた。

「体裁屋！」

竹村が帰って、卓の上をあと片づけしている伸子に視線をすえ
て、素子は、

「君は体裁屋だよ！」

嘲りいどむようにいった。

「竹村なんかどう思ったっていいじゃないか」

「それはかまわないわ」

「じゃ、なぜあんなに、とりなそう、とりなそうとするんだ。私
が不愉快がつているなら、勝手に不愉快がらしておいたらいいじ
やないか」

「竹村さんが私たちの不愉快になるようなことをした？ なにか」
「君に感じなくたって、わたしが不愉快を感じているんなら、そ
れをたててくれていいじゃあないか。——自分ばかりいい子にな
ろうとなんかしなくたっていいんだ、水臭い」

とよが台所で大根を刻んでいる、こまかくせわしいその庖丁の
音をききながら、伸子は卓の上に頬杖をつき、こまかい雨の中に
くれかかる夕暮の広い庭を見ていた。雨にぬれる雑草の中の萩の
枝や遠くの生垣が、伸子の眼に浮ぶ薄い涙をとおしてよけい水っ

ぽく見えている。

これまでも、素子は二三度、なんだ、体裁屋！ と罵って伸子を非難した。伸子は自分の性質に素子よりもよけいそういう俗っぽさがあるらしいということは理解出来た。ひとがどう思ってたかまわらない。素子はほんとにそういう生活態度であつた。伸子も、ひとの思惑を気づかつて生きられないたちであつた。けれども、伸子としては、ひとがどう思う、こう思う、ということのほかに、自分としてそれはいやなこと、ということがあつた。そしてそれは、ひとがどう思う思わないにかかわらず、自分としていやなことなのであつた。

二人が一緒に生活しはじめて間もないころのことであつた。素

子のふるい友人で記者あがりの男が遊びに来た。そして、その時分から目立ったある婦人作家の女同士の生活の話などが出た。

「我々男性には大いに興味があるんですがね、一体、どういう風にやっているんだろうかと思って……」

伸子は、

「どういう風につて？——」

その男の、髭をはやしている瓜実うりざね顔がおを見た。

「この頃、そういう組合わせで女のひとが生活しはじめたの、やつぱりこれまでの女の生活がいろいろ疑問だからじゃないの。経済的にやれるようになって来たというところもあるでしょう」

「それや、わかるんですがね」

「じゃ、なにがわからないの」

「困るなあ」

その男は秋田の訛なまりのある東京弁で、

「そうまともにきかれちゃあ、いいにくいが……どうもわからない」

あとを独りごとめかして濁した。伸子は、もう若くないその男の半分真面目のような半分真面目でないような口元の表情や目くばりから、透明でない感じをうけた。女二人が仲がよくて、どうやっているのか。好奇心が、性的な意味に集中されていると伸子は感じた。それをいい出した男の有為転変的な生活のいく分を伸子は知っていた。いうひとのもっている空気とのつながりで、な

にかえたいのしれないグロテスクなことが、その質問のかげに思惑されているように思えて、伸子は、そういう興味が向けられることを憎悪した。伸子とすれば、習俗に拘束されない、自由な女の生活を求めて、その可能をさがして、素子との暮しに入った。

伸子が、もって生れた人なつこさや、孤独でいられない愛情の幅のなかで、素子にたより、甘え、生活の細目をリードされ、素子の風変りな感情にもある程度順応している。それが傍目に不自然に見られなければならないことだと、伸子には信じられなかった。二人が女であるという自然の条件と、女としての自然な自尊心からおのずと限界のある自分たちの感情の表現を、伸子は樹が風でそよぐようなものだと思った。鳥と鳥とが嘴をふれあうような

ものだった。こういう男たちが誇張して想像しているようなあくどい生活は、自分にも素子にもなかった。伸子は、

「あなたがた男って妙ね。そして、いやだわ」

おこった、上気した顔でいった。

「なぜ、きたならしいほうが氣にいるの？　妙なほうがうれしいの？」

「いや決して、僕は、そういう意味でいったんじゃないんだが――」

「女の友達で、私たちにこんなことをいったひとはいなくてよ」

伸子は、激しくそういった。すると素子が、かすれの伴ったもち前の声で皮肉に落ちついて、

「まあ心配してくれなくてもようござんすよ。わたしは、ともかく、男が女に惚れるように、女に惚れるんだから……」

「いや、どうも……何だか失敬なようなことになっちまって……」
その話はそれぎりになった。

素子が、伸子をはじめて体裁屋といったのは、そのときだった。
「なんだい、ぶこちゃん、どうして、夫婦のように暮しているの
によけいな世話をやくなっていつてやらないんだ、体裁屋！」

しかし、伸子は、

「だって……」

あの男のほめかしたのは、どんなことだったのだろう。疑いをまだその目の底に湛えて、むしろ訴えるように素子を見あげな

がら、

「——ちがう……」

といった。

「だからさ。ああいう奴には、ぎつぷり冷水をあびせてやるに限るんだよ。二人が暮している以上、いいたいことはいわしとく位の実意がなくてどうするのさ」

三年前、文学上の先輩である檜崎佐保子のところで、伸子は偶然来あわせた吉見素子に紹介された。素子の小麦色のきめのこまかい棗形の顔や、上まぶたの弓なりに張った眼。縞の着物と羽織とを着て、帯や帯どめに小味な趣味を示していた素子は、日頃友人のすくない伸子に魅力を感じさせた。佃との生活が、破壊の一

歩手前まで来ていた伸子には、佐保子から話された素子の一人ぐらしの生活ぶりも、女が主人となつて暮している生活として印象ぶかく、羨しく思えた。伸子は、うちに落ちついていられなくなっている心を、單純に、せつかに素子に繋いだ。散歩だとか小旅行だとかの習慣をもたない伸子は、素子に誘われて日比谷公園で鶴の噴水を見ながら実朝の和歌の話をしたりした。その歌の話から鎌倉へ遊びに行つた。そういう時の素子は、女にこんなひとがあるかとおどろくほど主動的で、つれへのいたわりがゆきとどいて、伸子は楽しかった。実朝のうたの話をしていたとき、伸子はどうした拍子か為朝といいまちがえ、二三度そういつてから自分で気がついた。

「あら、わたし為朝っていつてやしなかったこと？」

そういつて伸子は顔をあかくした。

「どっちだっていいじゃないですか、わかつているんだから……ちよつとごたつただけですよ」

そういつて素子は、伸子のばつの悪さを救った。

伸子が、二度と佃の家へはかえらない決心をして、祖母が暮していた東北の田舎の家へ行つた。そのとき、おっかけて櫛崎佐保子からハガキが来た。吉見さんはそちらではありませんか。もしまだなら、見ていらつしやい。今にきつと行くでしょう。そういう意味の文句がかかれていた。素子にひかれてゆく自分の感情の性質をしらべようとしていなかった伸子には、その文句のわけが

よくわからなかった。なぜ吉見は、この田舎へ来るだろうと、わざわざ佐保子が予言するのか、そして、その予言にどういう意味がふくまれているのか。伸子は、佐保子にしては珍しいハガキと思つて見ただけだった。櫛崎佐保子は、素子が専門学校の生徒だった頃から知つていたのであった。

吉見素子は、佐保子の予言どおり、やがてその田舎の家へ来た。四五日一緒に伸子と暮した。五月で、夜どおしよしきりが鳴いた。桐の花の咲いている田舎の家の日々は、佃との苦しい葛藤のうちに閉塞されていた二十六歳の伸子の、生活をよろこびたのしみたい慾望を開放した。单调な田舎の一日なのに、素子はおやつをたべるにしてもいろいろ変化をつけ、伸子はそんな場合、お客のよ

うになった。そしてこういう暮しかたもあるかと珍しがった。

素子が東京へかえり、やがて伸子も動坂へかえって、二人の間には一緒に生活する相談がもち上った。

「ぶこちゃんは、要するに、わたしを方便につかうのさ」

その頃牛込に住んでいた素子は、下町風の家の二階で、そういつた。

「そうかしら……わたしはそう思わないけれども——」

「思わなくなつたつてそうなるさ。佃氏とはなれるのに、今のところわたしがいるのさ。よくわかつてる。だから、一時の方便は、ごめんだつていうのさ」

「——わたしが、また誰かと結婚したいと思つてなんかなくて

も？」

「——ぶこちゃんには、わたしの心もちなんかわからないんだ。わかりっこありやしない」

素子が、わからない、わからない、ということとは、かえって伸子にそれがわからなければならぬような感情をもたせた。

素子と暮す話をきめてから、伸子は、二三日佃のところへ戻った。逃げたようなままで離別することは、伸子に心苦しかった。

佃に会って、別れる結末をつけて、そして新しく素子と生活はじめようと思った。けれども佃のところへ行ったら、伸子は又ほだされた。涙を流して生活のやり直しをしようとすすめる佃を拒絶しかねた。佃は、気をかえるためにと、それまで住んでいた家

の、前のせまい通りをへだてた向い側の新しい二階家に引越しかけていた。伸子は、自分がそこにこれから住もうとは思わなかったが、佃にたいする最後の思いやりとして、その引越しを手伝った。引越しが終った日の夕方素子の家をたずねた伸子は、

「ああ、さわぎだった！ 引越したの」

といいながら、坐った。

「引越し？ だれが」

「わたしたちの家」

素子は、坐り直し、その二つの視線で伸子の顔をハッシとうつようにけわしく、

「だから、この間、いったでしょう。君に私の気持なんてわかり

っこないんだ。馬鹿馬鹿しい！」

眼に涙を浮べた素子は、

「だから女なんていやだ！」

侮蔑と痛苦とをこめた声でいった。

素子の苦痛は伸子を畏縮させた。けれども、伸子のころもち
は、ぼうつと広く開いたままで、素子の切迫した激情の焦点に一
致するようにしぼりが縮まなかった。そのことに気づいて伸子は
一層素子にたいして気がひけた。

「君はよかれあしかれごく自然なひとさ。自然なだけ、ひどいめ
に会うのは私にきまつてるんだ」

素子は伸子の方を見ないまま、

「いつだったか、いったらう？ 私は、男が女を愛すように女を愛すたちだつて。——あるとき、ぶこちゃんは、わかつたようにあいづちうつてたけれど、実際には、いまだつてわかつてなんかいやしないのさ。わからないのが、佐々伸子さ」

涙の粒が、素子の小麦色の頬をあとからあとからころがり落ちた。

「私に、ぶこちゃんの自然さがわかるのが、百年目だ」

伸子も泣いた。素子の苦しさがせつなく、自分が素子をそんなにせつない思いにさせた、それが苦しくて。——素子の手を自分の頬にもち添えて泣きながら、伸子は、それでもやっぱり自分の心が素子と同じ皿の上の同じ焰とはなっていないのを感じた。素

子に誠実であろうとしている自分の心の偽りなさは伸子にわかった。素子にもそれは通じている。それもわかった。しかし素子は、女はだからいやだ、とそんなに苦しむ。そのいやさを、伸子は自分の感情として自分に実感することが出来なかった。どつさりの黒い髪を頸の上につかね、小麦肌色の顔を苦しさに蒼ずまして伸子に向っておくる。その素子にわるい、と思う気もちばかりつよく感じられるのであった。

素子と伸子との感情生活は、独特な一つのかたちであった。素子にたいして、誠実であろうとする伸子の一般的なところもちと、素子に、つよく意識されている伸子への傾注。それを理解し、自分たちの愛として素子のその心を傷つけまいとする伸子の従順さ

などが、それであつた。伸子には、二人の女の生活にある矛盾やこんこう混淆が、客観的にどういうものとして見られるかということはわかつていなかった。わからないままに、自分たちの生活から何かを覗き出そうとするような外部のいやしい興味に抵抗した。

伸子は竹村に対して、特殊の感情はなかつた。よしんば竹村が、伸子にわかるような感情表現をしたとしても、伸子はそれで動けただろうか？ この間、温室を見に行つたとき、夕飯の仕度をしながら、竹村と素子が手のことを話したときの微妙な感情の流れ、そこにも伸子は、自分の居場所から動けない自分の心を直感した。夕飯のあと、竹村は伸子に編物をするか、ときいた。

「なぜ？」

素子がきいた。

「いや、うちの奴は実にそういうことはしなかったからさ……女のひとなら、だれだって、編物ぐらいするのが普通だろう？」

竹村は、身辺に求めているうるおいのある情景の一つというようにそれをいった。伸子は、

「わたしも駄目なくちよ」

ぶつきら棒に答えた。伸子はそのとき、ああ、竹村も編物について佃と同じことをいうと瞳をこらすようにして思った。佃との生活の不調和がつのつて、何事も手につかないような気持になって来た時分、佃の父親が上京した。伸子は二人の間のもつれを、
白^{はくぜん}髯のたれた七十近い老人に知らせるのを気の毒に思った。一

つ燈の下に、老父と佃と三人で、話という話もなく、毎晩をすすす氣づまりから、伸子は編物を思いついた。伸子は、少女の頃、桃色の毛糸で円いきんちやくを編んだきり、編物をしたことがなくて、二本の竹針ではうら編みしか出来なかった。それにかまわず、いろいろな色の毛糸を買って来て、伸子は老父の滞在中、毎晩編物をした。編目がじきのびて、みつともなくなってしまうにちがいない裏あみばかりで、義理の姪に当る小さい娘のために、九つほどの息子のために、赤と茶の頸巻きをあみ、霜ふりの太い糸で老父の腹まきを編んだ。竹のすべっこい針の先と先とが電燈に光りながら、弾力のあるかたさでぶつかりながら糸目をすくいだして来る軽い微かな響、こまかく早く単調な手さきの運動。伸

子は、編むひとめひとめに、まぎらしようのない心の憂さと屈託とを編みこんでいたのであった。だけれども、佃は、激しい言葉をいわなくなつて、手もつけない本棚の下で、赤い毛糸の玉をころがしながら編んでいる伸子の姿をよろこんだ。家庭生ホーム・ライフ活らしい。そして家ホーム・ライフ庭的なときの伸子は美しい、とほめた。ほめるとばは、編みものの上に伸子の涙をおとさせた。

伸子は、素子に、その話をした。

「だからね。わたしの場合一人一人の道具立てのちがいだけが問題じゃないのに……いくら違つたように見えても、男のひとたちの考えかたのなかには、どつか同じようなところがあるわ。そこがわたしには問題だのに」

「それやわかつてる。——ぶこちゃんとしては、ほんとにそうなのさ。それに關係なく私は不愉快だよ。私が女だもんだから、こんなにして暮している心持の眞實を無視する権利が、男の自分にあるようにうぬぼれてやがる、そこがいやなんだ」

「對等に考える必要なんかないのに」

「私は、ぶこちゃんに都合のいい範圍で仕事をたすけてやって、都合のいい範圍で利用されて、おまけに虚栄心まで満足させるよ
うな、そんな便利な愛情なんか持てないんだ」

竹村は、そんなことがあつてから伸子たちの家へ遊びに来なくなつた。伸子は、竹村が来ることに特別な心持をもっていたわけではなかったが、素子の感情から彼が来なくなつたとなると、来

なくなつたという面から竹村への意識がしばらくの間めざまされ
た。

伸子が素子と暮して小説をかき出したように、素子は、自分にもいい生活のはじまつた記念のためにと、大部な翻訳に着手していた。傷つけられることに対して余り鋭敏な素子の感情が、そういうきっかけから、のびのびと確信をもつように、と伸子はねがった。二人の生活のうちに二人の女がそれぞれの発展を示して、豊富に充実して生きてゆけたら、素子が自分の感情傾向が特殊だという自意識から、わざとその面を固執したり、誇張している、そんないつも抵抗しているような神経のくばりがどこに必要なだろう。伸子の感じからあからさまに言えば、それらはケチくささで

あつた。伸子にはそのけちくささを自分たちの生活に含むことをきらう、つよい感覚があつた。それは虚栄心というものだろうか。伸子を体裁屋と、いいきれることなのだろうか。――

伸子を折にふれて真剣に考えこませる問題があつた。それは自分たちの今の生活が、はたして、本当に新しい意味をもった暮しぶりであるのだろうか、という疑いであつた。小説を書くということについても。たしかに伸子はいくらか小説を書きなれた。そのために発表の場面は不足せず、経済的にも小規模の安定がたもてた。書き終った長篇小説は、それとして伸子の人生を一步前進させた。けれども、その長篇をかき終ったことで到達した境地からは、伸子は、また歩みぬけてゆくために必要な活力は、二人の

日々に動いていないことを、伸子はぼんやりと、感じはじめた。そして、その不安は段々ごまかしくなっている。素子の発案で、日々に何かの変化があっても、それは同じ平面上での、あれ、これの変化にすぎない。素子が何か気のかわることを計画するとき、同じ平面で動いているにすぎないという感じは、かえって伸子ののどもとに苦しくこみあげた。

要するに夏になれば鎌倉に粗末な家でもかりて、そっちへ仕事をしにゆくとか、ナジモワの「椿姫」を見のがさず、日本橋でうまい鰯^{さわら}の白味噌づけを買い、はしらとわさびの小皿と並べて食卓を賑わすとか。素子はそういうことによく気がつき、それをやかましくいい、又たのしみ、生活の価値の幾分を見出しているよう

であつた。素子が細々とそういう細目で毎日をみたしてゆくとき、伸子は受け身にそれに応じながら、素子は、こんなことで生活が充実するように思っているのではないか、と不安になつて来るのであつた。

一つ一つの日に変化があるようでも、実はその変化そのものが単調なくりかえしだと感じられる時があつた。その単調さの感じと、伸子が、自分の小説は一つ地盤の上の、あれこれに過ぎないと不安をもつて自覚しはじめた時期は一致していて、平らな池の底におこつた渦のようなその感覚は、笑っている伸子の笑いの底に、素子の関西風な献立で御飯をたべている伸子の心の奥に、音をたてずにひろがり、つよくなりまさつた。

いま二人で営まれているこの生活は、佃が妻である伸子との生活に求めた平凡な日々と、どれほどちがっているだろうか。伸子にとって、それは辛辣な自分への質問であつた。佃は男で、そして良人であるということから、彼との生活にはいつも澆刺として、生きるよろこびの溢れた感動を要求し、この生活は、自分でもっているものだから、同じ凡庸さでも意味ありげに自分に感じようとしているのではないだろうか。露子がこの間来て、友達の就職の相談があつたあと、伸子がいい出した、婦人の一応の経済的独立の、そのさきにある目的についての疑問も、伸子の実感には、きのうきようでない根をもっていることなのであつた。

それに、素子は、女のひとにたいする自分の感情のかたよりを

枢軸に自分の人生が動いているように思っている。しかし、そのことについても疑問があつた。日常生活での素子は、伸子より遙かに常識にたけていた。世間なみの日々のさしくりを忘れず、二人の収入から集金貯金をかけているのも素子であつた。義理がたく、律気であり、人のつきあいに真情を大事にした。それらは、どれ一つをとつても最も普通であつた。女のひとに対しても感情のうちの、分量としては小さい特殊さを、素子は男への反撥のつよさで誇大して、自分からそこにはまりこんでいるのではないだろうか。

伸子とは二つ三つしか年上でない素子の二十前後の時代は「青鞥」の末期であつた。女子大学の生徒だの、文学愛好の若い女の

ひとたちの間に、マントを着てセルの袴をはく風俗がはやった。とともに煙草をのんだり酒をのんだりすることに女性の解放を示そうとした気風があつた。二つ三つのちがいはあつたが、そのころまだ少女期にいた伸子は、おどろきに目を大きくして、男のように吉という字のつくペンネームで有名であつた「青鞥」の仲間の中の一人の、セルの袴にマントを羽織つた背の高い姿を眺めた。その女のひとは、小石川のある電車の終点にたつていた。

互の誠意の問題としていい出されることであっても、伸子の女の感情にとって、それはありふれた小心な男のことと同じだと映るような場合、伸子は悲しく、そして容赦なく、自分たちのまねごとじみた生活の矛盾を感じた。素子が、男性への反撥で、

皮相的に女らしくなくなっていながら、一方で、平凡な男が女に向ける古い感覚に追隨しているのだったら、女が一組となつて暮す新しい意味は、どこにあるだろう。

こういういろいろの心持を、伸子は素子と率直に話せなかった。伸子には、そのいろいろな心持の内容がまだ十分自分にも見わけられていなかった。それに伸子は日頃の生活のならわしから、素子が激怒するのがこわかった。女はだからいやだ、という伸子にとって実感しにくい、素子の噴火口が、そこに火焰をふき出すことをおそれるのであった。

婦人欄を早くから設けていることが特色とされているある新聞社が、中国から来た女学生の日本見学団を招待して茶話会を催した。日本側の婦人が幾人か招かれたなかに伸子も加えられた。

あまり会へ出るようなことのない伸子は、中国からの女子学生団というところに心をひかれた。アメリカの大学附属の寄宿舎暮らしをしていた間、伸子は中国女学生の集団的な行動と、中国の実情を外国に知らそうとする熱心さにうたれた。同じ寄宿舎に生活していた数人の中国女学生が、余興つきの「中国の夕べ」を催したりするとき、彼女たちの活動ぶりは、中国女性のつよさと、政治的な力量のようなものを伸子に印象づけた。そういう中国の若

い女性たちが、観察のために眼と心とを鋭くひらいて東京へ来て、どんな発見をしているだろう。伸子が女学校を卒業してから、一学期だけ通った女子大学の英文科の予科のクラスにも、崔さんとかいう名だった中国の女学生がいた。その崔さんは、むくんだような顔色の上に古風なひさし髪を結び、めいせんの日本服にエビ茶の袴をはいていた。纏てんそく足した小さな足で不自由そうに歩いた。教室の一番うしろの席にいて、伸子は崔さんを見るたびに、彼女をなになくさめてやりたい気持ちになった。伸子がそんな気分にくぐさされるように、崔さんの沈んだ顔色や言葉も足も不自由な姿には漠然とした満たされない感じがただよっていた。日本の生活が中国の留学生にとって愉快なものでないことは、そのころの

伸子にもわかっていた。彼らを愉快でなく暮させている日本へ来て、中国の女学生はどんな感想をもっただろう。伸子はそれが知りたい気持だった。

午後一時という定刻に、伸子はその新聞社へ行った。茶話会は、会議室でもたれることになっていた。麻のカヴァーをかけた長椅子だのソファーだのが壁ぎわにおいてある。室の中央に長い会議用テーブルがあり、伸子が入って行ったときは、もうそのまわりに十六七人の女学生と背広をつけた三人の男の引率者とがかけっていた。伸子の知らない教育家らしい風采の中年の日本婦人が二人来ていた。伸子は、そのとなりの席へ案内された。

茶話会というからには主催者が一座のものを紹介して、通訳を

とおしてながらもくつろいだ話が出来るのだろうといくらか楽しみをもつて期待して来た伸子は、何を標準にしているのかとにかくきまりすぎた席次やその室の気分を意外に感じた。お客になつて椅子に並んでいる女学生たちは、みんな黒い髪を肩までのおかつぱにしてきり下げ、支那服を着て、きわめて行儀よく並んでいる。どの顔も素顔で、浅黒く、いかにも師範の女学生らしい簡素さである。動かない彼女たちの姿勢と表情のうちで、きつい黒い瞳ばかりがいちように好奇心をあらわして、伸子たち少数の日本婦人の上に注がれている。その席には、日本流の窮屈さがあり、またその上に古い中国の長幼の序とでもいう風な礼儀の窮屈さも加っているようであつた。長テーブルの中央にはひとはちの盛花

があつて桃色のヒヤシンスが匂つていた。

なんとなし手もちぶさたな時がすぎて、やがて日本側の主賓であるある評論家が入つて来た。縞のズボンに黒い上衣をつけ、背の高いからだに、伸子が写真で見なれた顎のはった顔と、ぴったり真中からわけられた灰色っぽい髪がある。

「やあ、どうもおそくなりまして……よそからまわつて来たもんですから……」

「いえ、どうぞこちらへ」

その評論家は、長テーブルの上座にあけておかれた席にかけた。司会者であるその新聞の婦人欄の記者が立つて、挨拶をした。

新しい中国の教育のために活動しようとしている女性たちの希望

ある前途を祝福する意味での小さい集りとして、話した。それを、黒背広をきた小柄な引率者の一人が中国の言葉にうつして女学生につたえた。女学生たちは、うなずくように濃い黒いおかつぱを動かし、幾分椅子の上でのり出した。

「では、これから早川先生の御話を願いたいと思います」

記者は、上座に向ってちよつとお辞儀をした。早川閑次郎が起立した。そして、服のポケットに右手のさきを浅く入れ、講演になれた態度で、微笑をふくみながら話し出した。伸子も、おとなしく耳かくしとよばれる髪に結っている頭をそちらに向けた。猫好きで有名な独身生活者で、総合雑誌へ皮肉と進歩性のまじった論文、雑文をかくこの評論家は、どういう思想のおくりものを、

これらの中国女学生たちに与えようとしているのだろう。そのころ中国の社会は、日本よりも急激に変化していて、女性の政治的なめざめも注目されていた。そういう空気の中から来ている中国の若い女性へのおくりものは、同じ時代に生きる女であるということから伸子たち居合わせる日本の婦人たちにとってもおくりものとなるわけだった。

「あなたがたのお国には、孔子という哲学者がいました。そして、儒教という非常に優秀な道徳を鼓吹して、日本も何百年という間、そのおかげをこうむって来ています」

通訳をしなければならぬ黒背広の小柄な人は、せつせと筆記している。伸子は、早川閑次郎らしい逆説的な冒頭だと思った。

「この優秀な孔子の道德は、女子の生活方向というものをきわめて明瞭に示して来ています。非常に具体的に親切に教えている。男女七歳にして席を同じゅうすべからず、とか、女子と小人は養いがたしとか、そのほかまあ、いろいろ有益なことを教えています」

筆記している小柄の人は、少しげんそうな表情でちらつと目をあげて、早川閑次郎の方を見た。腕ぐみをして、うなだれていた司会者も、顔をもたげて、話し手に注目しはじめた。

「ところが、近頃、中国の若い人々、とくに若い婦人は、この結構な孔子の道德に対して反抗しておられるようです。盛んに男女同権を主張しておられます。ですが、どうも私の考えるところで

は、反対する方が間違っているし、結局のところ女の不幸になると思うんです。女子と小人——つまり、女や、まあ一般に余りもののよくわからない人間は、皆すっかりした男にたよって安全に生かして貰ってゆくべし、それでいいというのは、女にとって実に幸福なことじゃありませんか。日本へ来てみられておわかりでしょうが、日本は今失業が多くて男は皆へこたれています。しかし、男に養って貰う女は、何とかして男がやなくなってくれるから、そんな男のような苦労をする必要がない。男尊女卑ということは、女の樂園、パラダイスだと思うんです。皆さんも、折角教育をうけ、教育者として活動しようとしておられるんですから、このところをよく考えて、下らない新しがりはおやめになるのが賢明で

あると思います」

ほとんどあつけなく早川閑次郎の話は終った。日本語のわかるものの顔には、彼の話の真意をなんと解しているのかわからない、ばかりにされたような期待はずれの感情がみなぎった。

伸子はあきたりない思いをもつてきいているうちに、だんだん不愉快になった。猫が、犬のように飼主にこびず、ある意味での親愛感や共感なしに、冷然と飼われているそのエゴイズムが面白い、と書いているこの評論家は、この話で、皮肉な逆説として、男を食う女になって、男尊女卑を現実で裏がえしにしてやれ、といおうとしているらしく思えた。けれども、彼のひとひねりしたそういう話しぶりは、一般のききてに通用しないものだし、まし

て彼の論法はひたむきな向上心と觀察欲にもえてここへも出席して来ている中国の女学生たちのところにふれるものではない。伸子は、この評論家が、何につけても、これまで在るものをただそのまま裏がえしにしてしやべるしか能のないことをおどろいて、氣持わるく発見した。女が、自分の人生の道をもちたいと願っている心、中国の女学生が国の独立のために役だとうと決心している心は、こんな風なよそよそしい、有名人の持芸で、何ものを加えられるというのだろう。伸子は、年長者としての親切のない態度へのおどろきと自分の機智に満足している有名さへの輕蔑で、本来は素朴で好意的であるべき会に主賓となつてゐる評論家を見つめた。

黒服の小柄の人が立つて、ノートを見ながら早川閑次郎の話を丁寧に通訳した。伸子がきいていると、通訳者の丁寧な通訳ぶりそのものに、ひそめられているある感情がうけとれた。通訳の半ばから、女学生たちの群の上にはつきり動揺があらわれた。一人の茶つぽい服を着た女学生が自分の席から、

「シエンション」

と呼んで手をあげた。通訳の人は、ノートを見ながら抑揚のつよい中国語で話しつつ、左手の掌てのひらでその女学生の発言を柔らかくおさえるようにしながら、しまいまで通訳した。

「シエンション！」

「シエンション！」

「シエンション！」

その声々は、伸子の動悸をたかめる響きを持っていた。中国の女学生たちのせきこんだ感情が実感された。おっしやい！ どんどんおっしやい！ 伸子は、眼をきらめかせて、手をあげている中国女学生たちを見た。

「はい」

茶色っぽい服をきた、ほっそりした体つきの女学生が指された。通訳の終るのをまちきれずに「シエンション」と鋭く呼んだ女学生であった。席から立つと、その女学生は、おかっぱを頬からふりさばこうとするようにきつく頭をひとふりして、

「早川先生！」

と、ハヤカワという姓だけ日本語で呼びかけた。そしてびったり自分のからだを、講師の方へ向けた。そして、激怒した口調の中国語で、たたみかけ、たたみかけして話した。二度ほど間に「早川シェンション」とよびかけながら。

黒服の小柄の人が、その内容を日本語にしてつたえた。が、その通訳は、じかに耳でいき、その若い声の抑揚から激情が感じられた話の調子にしては、ひどく内容が簡単につたえられたようだった。私たち中国の若い教育者は、真に故国を文明国とし、人民を幸福にしたいと希望している。早川先生の孔子に対する見解は、私たち中国の若いものが孔子を見ている見かたと正反対であります。孔子と儒教は、中国の女を不幸にし、若いものを老人の圧迫

の下にしている。恐らく日本でもそうでしょう。先生の御意見には反対です。そういう意味がつたえられた。そういう言葉は伸子に同感されるものだった。

「シェンション！」

という呼び声が、いろいろの若い女の声でほとばしるようにおこったときから、早川閑次郎は顎骨の張った面長な顔に、優越的な微笑をただよわせながらみんなを眺めていた。女学生の反駁をつたえられると、その表情は一層濃くなって、その顔つきはほとんど面白がっているようになった。早川閑次郎は、ふたたびゆっくり立ち上って話しはじめた。

「あなたがたが、お国の人の幸福のために熱心に努力なさるのは

何よりです。私は十分皆さんの誠意に敬意を払います。しかし、文明といい、人智の啓発ということは、ものごとを複雑に理解する能力です。私は、あなたがたが、誠意の上に加えて、諷刺を理解する力をもたれることを希望します」

それは、また小柄な黒服の人によつて通訳された。論争の中心点をそらした返答をうけて、女学生たちはしばらく沈黙した。やがて灰色っぽい綾織の服をきた、すこし年からしい一人の女学生が立つて、努力して感情をおさえながら、自分たちが、中国を独立した文明国にしたいと願う心、民族を向上させたいと思つてゐるころは、諷刺の問題ではないと思う、といった。しかし、彼女はそれから先へ話を展開してゆくことが出来なくて、着席し

た。

一座には重苦しさと、とらえどころのない不服・不満がみなぎった。

中国女学生たちは、はじめはひそひそと自分のとなりの仲間と話しはじめ、やがて次第にその声がかまって、しまいには一人おいた先の仲間の言葉にまで、日本語だったら、いま、なんていったの？ とでもいうらしく、互におかっぱの頭をのり出さして討論をはじめた。

司会者側は、こんな結果になろうとは予想もしていなかったらしく、とりいそいだ様子で小声にうちあわせ、またそれを黒服の小柄の人につたえ、すぐつつづけて日本側からの婦人に挨拶して貰

うことになった。

伸子の初対面だったある女学校長が、日本と中国の友誼と文化の協力について、もともと印刷されているような言葉をのべた。もう一人、婦人運動にしたがっている婦人の話があり、その人は、それぞれの国の貴重な伝統を新しい生活の中へ新しい形で生かしてゆくべきである、という意味のことをいった。

伸子の気持には、早川閑次郎の話しかたにたいして、激しい反駁がうずまいていて、もし万一、指名されたら、この気持をどう話したらいいのだろうか、不安だった。

三年ばかり前、大戦後のヨーロッパで有名であつたアンリ・バルビュスの小説「クラルテ」が翻訳されたとき、その出版記念会

があつて、伸子も招かれた。その夜、フランス文学者である松江喬吉がテーブル・スピーチをした。翻訳という仕事は女性にふさわしい仕事だから、日本にもこれから優秀な婦人の翻訳家が出ることを希望する、という趣旨であつた。そこに伸子の名もふれられた。司会者が、伸子に、それに答えるテーブル・スピーチをもとめた。なに心なく帶どめから白いナプキンをひろげたまま松江喬吉の話をきいていた伸子は狼狽した。話をききながら伸子は、自分は翻訳は出来ないし、したくない、そうはつきり思つていたのでつた。生れてはじめてテーブル・スピーチに立たされた伸子は、上気して、人々の顔の見わけもつかなくなり、会場一面が明るくきらつき、花の色が赤や桃色に流れて目に映るばかりであつ

た。伸子はやつと、小さい声でいった。翻訳はたしかに女性むきの仕事だともいえるけれども、女として、ひとのした仕事を、別の国の言葉に移すだけが、一番ふさわしい能力だときめられることは悲しいと思う。翻訳を立派にする人も出なければならぬが、自分の仕事をする婦人も、もつともつと出なければならぬと思う、と。もつと大きな声で願います、といわれながらやつとそれだけいったときの、のぼせたせつなさを思つて、今も、伸子は腋わきの下がしつとりするのであった。

いいあんばいに司会者は、伸子を指名しなかった。日本側の婦人客が話し出してから、中国女学生たちは、礼儀上しずかになつて、その話をきいた。が、一座には、親睦の雰囲気は最後までか

もし出されなかった。伸子が不服をもったところを胸にたたんで
いるとおり、中国女学生たちの顔々には、なんのための会だった
のかといぶかしがり、不満がつている表情がありありと浮んでい
た。挨拶が終ると、またすぐ中国女学生たちは仲間で話し出し、
それは批判的な内容であることが、言葉のニュアンスや顔つきで、
伸子にも感じられた。一九二七年というその年の二月末には上海
の大ストライキがあった。その結果臨時革命委員会というものが
できて上海市の政治が中国労働者によって行われはじめた。その
新聞記事を、伸子は目をみはってよんだ。北伐軍が南京で日本の
陸戦隊と衝突し、漢口でも同じようなことがおこった。間もなく
蒋介石の弾圧がはじまって、上海、広東その他で革命的な指導者

や大衆が多量的に虐殺された。虐殺された民衆のなかには革命的な女学生もあることを、伸子はやはり新聞でよんで知っていた。

官費で勉強している師範学校の女学生たちであるきような中国女学生たちは、そういう激しい中国の動きにどういう関心をもっているかはわからない。けれども激動する中国の空気はこれらの若い女学生の精神を敏感にしていることだけはたしかだった。彼女たちが、孔子の話に腹立つ感情は伸子にも実感されるのだった。

散会となったとき、中国女学生たちのほとんど一人も早川閑次郎の方はかえりみず、互にしゃべりながら椅子から立ちあがり、街路を見下すその室の窓際へそのまま自分たちでかたまつた。

十一

なぐさまない心持で、伸子はその新聞社の正面石段を一人で下りて来た。プラタナスの並木路をすこし歩いて、上野ゆきの電車にのった。市中へ出たついでに、動坂へよって泊ろうと思うのであつた。

伸子のかけた座席はあいにく西日に向つた側だつた。ぎらついた光線は、電車の走つてゆく大通りの高いビルディングの前にさしかかった時だけはさえぎられ、またたちまち町並のすき間から、低い瓦の屋根屋根の上から、伸子の顔の真正面にきつくてりつけた。落ちつかない気持で顔をそむけながらのつてゆくうちに、伸

子は何年もの昔、まだ十六七だった自分が、やっぱりこういう焦立たしい西日を顔にうけながら、牛込のある町を女中と一緒に歩いていたときのことを思い出した。

それはまだあかるい夏の夕方であつた。酒屋の店さきなどに打ち水がされている牛込のせまい通りを、白地に秋草の染めだされた真岡の単衣ひとえを着て、板じめちりめんの赤い帯をしめ、白足袋をはいた伸子が歩いていた。伸子の父の年下の友人で、稲田信一という建築家があつた。その人は、江戸ツ子ということを誇りにしていた。角ばつて苦みばしり、眼のきつい顔に、いくらかそつ歯で、せまい額の上に髪を粋な角刈めいた形にしている人であつた。牛込に住んでいた。そこへ使いにやらされた。

母が大きく結んでくれた赤い帯に、こわばった真岡木綿の単衣、うしろにすこしはねのあがつた白足袋という自分の身なりに、伸子は本能的な気に入らなさ、野暮くささを感じながら、その感じで神経質になりながら、行儀よく、若い娘のぎごちなさで、稲田の客室に通された。切下げの老母が出ての、そつのない応待に、伸子は、いいえとか、そうでございます、とか短く答えた。

泰造への返事の手紙を書き終ると、稲田は伸子に珍しい写真画集を見せた。世界名画の中から、婦人画家の作品ばかりを集めたものであった。伸子はよろこんで、

「あら、ロザ・ボンヌール！」

「馬市」を見出して顔をかがやかした。父のもっている色刷りの

名画集で、伸子は「馬市」を見て覚えていたのであった。その本には、ボンヌールのほかにマリ・バシキルツエフとかイギリスの婦人肖像画家とか伸子の知らないたくさんの方人画家の傑作が集められていた。

「面白いですか」

「面白いわ、こんなに大勢女のひとの絵かきかいたのね」

稲田はぴたつとした坐りかたで、煙草をふかしながら、一枚一枚と頁をくつっている伸子を眺めていた。やがて、

「伸子さん、その本あげましょうか」

といった。

「ほんと？」

「あげますよ。僕にはどうせいらないもんだから……。たかが女の絵かきなんて、どうせたいしたことはないんだからハハハハ」

伸子は、涙ぐむほど、傷つけられた。熱心に見ていたよろこびが嘲弄されたように感じられ、ぎごちない娘である自分がそれによるこんでいることが恥しめられたように感じた。そんなに思っている本なんか、ちつとも貰いたくない。むきにそう思った。けれども、そのままを言葉に出してことわることも出来なくて、その分厚い本を女中にもってもらって帰って来た。そして、もう二度と稲田のそこへなんか行かないと心にきめた。この建築家は後に、有名な赤坂の芸者であつたひとを細君にした。

今になって大人の女となつた伸子として思えば、それは、稲田

の毒舌と知人の間になりひびいていたその人のいいそうなことであつたし、稲田の都会人らしいてらいや弱気のあらわれとも考えられた。しかし、一人前の男が、十六七の小娘にどうしてそんな態度をとらなければならなかつただろう。自由主義の評論家として大家の扱いをうけている早川閑次郎が、きょうの茶話会で中国女学生たちに話した話しぶりも思いあわされた。

稲田信一や早川閑次郎の女に対しての毒舌と辛辣さは、結局裏がえされたフェミニズムの一種だということは、ちかごろは伸子にも理解される。けれども、男のそういう態度はやつぱり伸子にポーズ若い女としての反撥をおこさせた。その人々のフェミニズムが裏がえしになっていることには、社会的に個人的にいろいろいく

んだわけがあるはずだった。丁度素子が男みたいになったことには親たちの結婚生活のかくれた悲劇が裏づけになっているように。そういう点につつこんでゆけば、機智や毒舌で片づかないものがあり、そしてそれこそ人間らしいあれこれであるのに、それを掘りかえす勇氣はなくて、相対的に——女に向つて、優越めいた逆説をたのしんでいる種類の男を、伸子はいやだった。彼らの毒舌や逆説で、くやしがる若い女の声や態度は、彼らをたのしませるのだ。そうわかつていても、やっぱりくやしいことはくやしいし腹が立つことは腹がたつ。——

上野の五重の塔のいただきが森の上に見はらせる坂をゆつくりのぼつて、伸子は同じ歩調でしずかな道をいそがず歩き、動坂の

家の門をはいつた。伸子は何となし視線をおとして門から玄関までの細くて奥のふかい石じき道を歩いていて、おや、と意外なものを見つけたように足をとめた。門を入って数歩のその足もとに大きい花の形にきられた石が、はめこまれていたのにはじめて目がとまった。五つの花卉の先はまるくコスモスの花に似た模様に石がはめこまれている。伸子は、その発見を非常にびっくりした。というのは、この石じき道ができたのは、もう数年前のことであり、伸子はそれから幾百度ここを通ったかしれないのに。――足もともそぞろに、せわしくこの家を出入りしていた自分の生活の姿が、まざまざと映しだされて、伸子は悲しく、すまなかつたと思った。伸子はしばらくそこにたたずんで足もとの花をながめて

いた。石ではめこまれた花は石らしく素朴で、同時に、石をそういう花の形にはめているというところに人の心のおもしろさがある。伸子は、しばらく眺めていてから、いままで目にも入れずに暮して来たことをあやまる心持で、特別にそつとその花の形の石じきの上を草履でふんで奥へ歩いて行つた。

車庫の扉があいて車がはいっている。玄関にはもう灯がついている。伸子は、小走りになって重いガラス戸をあけた。これらは、みんないい前兆である。父の泰造がもう帰つて来ているというしるしである。玄関の靴ぬぎ石の上に一足靴が揃えられてあつた。お客様かしら、そう思いながら、どんどん入つて食堂の入口へ行つた。ドアはあいていて、出窓の白いレースが涼しく見えている。

案の定、泰造が、セルのふだん着の腰にゆるく兵児帯をまきつけた形で煖炉を背にしたテーブルのきまりのところに坐り、巻紙を片手にもって、手紙をかいていた。伸子は、

「お父様！」

からだじゅうでよろこびをあらわしながら、廊下のところで、わざとトンと白足袋の足を鳴らした。泰造は六分どおり白い髭のある丸顔を、びっくりしたようにふり向けた。

「おや、よく来ましたね。さあこっちへおいで」

伸子は、父の坐っている座蒲団のはしに膝をつけるようにして坐った。

「どうなすった？　お父様。この間、お誕生日にわざわざ花をも

つて来たのに――。黙って出張なんかなさるんだもの」

この間といつても、あのと時からきようまでには、もう二十日ばかり経っていた。

「うむ、あのとときはね、急だったんでね」

「お帰りになったとき、まだバラがあつた？」

泰造は、水牛の角でこしらえたトカゲの形の紙切りで巻紙をきりながら、

「あつたようだよ」

そういうものの、はつきりとは思ひ出せないで、多忙な人らしいうっかりした調子で答えた。花から、伸子は、今ふんで来た石の花形を思い出した。

「門の石じきの模様ね、あれ、お父様がデザインなすったの」

「そうだよ」

「花の形を、あすこへ入れることも？」

「——いいだろう？ 気に入りましたか？」

柿模様の火鉢のよこに、ついひきだしの小抽斗がついている。手をのばしてそこから封筒を出しながら、泰造がいった。

「門を入ると、花がある——わるくないだろう？」

門を入って来る幾人のひとが、花をそこに散らしたところをくむだろう。伸子は、自分までが今になってそれに気がついたとは、いいかねた。

「きょう、どうかなすったの？ 珍しくお早いのね」

「ああ、腹をこわしてね、よるはことわって帰って来てしまったのさ」

「よかったわ」

心から伸子はそういった。泰造が晩飯にいあわすことは月に数えるしかなく、そのときに伸子が来合わすことはさらに稀なことであつた。

「お母様は？——お出かけ？」

「客だ」

ぶつきら棒にいつて、泰造は手紙を出させるためにベルをおした。

六月の夕暮のうす明りが、出窓のレース越しに、植込みの青葉

に残っている。落着いた深紅色の地に唐草模様のついた壁紙がはられた室内には灯がついていて、食器棚の深彫りを浮き立たせ、同時にこの食堂の意味のわからない独特な特徴である雑多な罐や箱のつみかさねを、隅の方で目立たせている。

急に廊下ごしの客室のドアがあいて多計代が出て来た。

「こんにちは」

という伸子に、

「おや」

目を向けたきりで多計代は、

「あなた」

坐っている泰造のむかい側にまわった。

「ちよつとお会いになつて下さい。さつきから申上げているのに」
泰造は返辞をしないで、新しい来信の封を鋏で切っている。その泰造の鼻の穴はふくらんでみえる。伸子は父が癩癰をおこしたことを知った。

「何でもないことじゃありませんか、ちよつと顔を出して下さいるぐらい——保だつて世話になつてゐるのに……」

伸子は、眼をそらした。白いレースの夜の窓がそこにある。苦しく心がひきしぼられた。また越智が来ているのだ。——

挽^{ひきちや}茶のような淡い緑の紹^ろちりめんの単衣羽織をきた多計代は立ったまま、いらだつように、

「いつもあなたは御自分のつきあいはあんなに大事になさるくせ

に——ジエントルマン紳士——というのは、そういうもんじゃないでしょう」

泰造の顔に、さつと血のけがのぼった。鋏を乱暴にテーブルの上へおきながら、

「俺はジエントルマンでなくていいんだ」

めったにない激しい調子でいった。

「俺は会わない。会うもんか。あんな家庭の侵入者に、俺が会う必要なんか絶対はない」

多計代の顔の上に困惑が現われた。

「そんな乱暴なことおっしやって、私が困るばかりじゃありませんか。せつかくお目にかかって御挨拶したいっていいなさるのに」

「何の挨拶だ！ この間のざまは何だ。人を愚弄して。ああいうつきあい法というものはありませんよ。会わなくて気に入らないなら幸だ。さつさと、今、すぐ、帰って貰おう」

威圧されたように多計代は黙った。やがて、ゆっくり歩いて客室のところに行つてハンドルに手をかけ、うす緑の羽織姿を半ば消しかけたとき、泰造が大きな声を出してこちらの食堂からどなった。

「今後を決して会わん。すぐ帰つて貰おう！」

泰造はそばに動かずにいる伸子の方をみず、血の色ののぼった髭の白い顔をがんこに書類にむけている。その横顔が伸子の目の前にあつた。その父の耳のなかの小さくどがつたところに黒い毛

がもしやもしや生えている。伸子は、涙が浮んだ。日頃つづいていたにちがいない父の不快さや、こういう腹立ちの爆発のしかたに同情がもてた。みつともないと思えなかった。理づめな物言いの出来ない父、そして、面と向った対人関係では気のよい父には、せつぱつまるとこういう爆発をするしかない気質がある。伸子にそれがよくわかった。

伸子は、そつと立って、洗面所へ行つた。ハンカチーフで涙を拭いたあとの顔を、その壁につけてある鏡にうつした。人の心のなごまるようにと、この家の門の石じきには花の形がちりばめであるのに。――

流しの前に、木の椅子が置いてある。ひっくりかえすと踏台に

なる椅子だった。伸子が小さかった時から、その椅子はそこにある。伸子は二スのはげかかっているその上にかけた。こういう風にして、母がかけていて、そのわきに娘の伸子が立っていたことがよくあった。夜中に母が何か父と衝突して、涙をこぼしながら下りて来てここに掛けていたとき。また、もっと小さかった伸子だが、錦輝館の泰西大名画という映画につれて行つて貰おうとして、ともかく身じまいをはじめて母の気がきまるのを、辛抱しながらこの椅子にかけている母の横に立って待っていたとき。いま伸子は、ふと一つのことを想い出した。

何年か前、知人の細君で日野さよ子というアメリカ帰りの女が、佐々の家へ出入りしたことがあった。どういふわけだったか良人

は日本にのこつていて、細君だけがアメリカへ行き料理の勉強をして帰つて来た。小柄な、いくらか蓮葉で愛嬌のいいそのひとが、動坂のうちへも来て料理を教えてくれるということになった。もうその時伸子は佃と結婚していて、赤坂の方に住んでいた。あるとき、来てみると、母がしきりに父をからかつて、

「ほんとに、どうなすつたのかと思つたよ。お父様つたら、今出たばかりのお風呂に、また飛びこみなさるんだもの」

伸子にそういった。

「そんなことはないっていつてるじゃないか」

「いいえ、おかしくなつたつて駄目ですよ」

日野さよ子が来たと聞いたら、泰造が、そうか、というなり、

さつき帰ったときにもう入浴をすました風呂へまたとび込んだ、
というのであった。伸子は、半信半疑で、変な話だと思つてきい
た。母が、はしやぐようにしてくりかえするというほどおかしくも
なかった。

伸子はそのときのことを、母の不自然なほど陽気だった笑い声
までつれて思い出した。そして、父はいま越智に対して、どなり
つけた。――夫婦の生活というものの、男と女との生活というもの
が、父母という関係から引きはなれて伸子にかえりみられた。し
っかりつかまえてそれを解決してしまうにしては、頭も尻尾もな
い奇妙なもやもや。生活の中から湧き出る感情の明暗は、伸子が
佃と生活した数年間にも充満して、ついにその生活をふきとばし

てしまった。それが、もう三十年も生活して来ている親たち夫婦の間にもある。夫婦のなかにあるばかりでなく、伸子と素子との生活感情にも、形をかえてしのび入って来ている。十六歳の伸子は真剣に、こんなに喧嘩をする父と母とが、次々に赤坊を生んで、その赤坊は自分が守りしなければならないという事実について、どうしても納得できなかつた。大人たちの生活に輕蔑を感じた。

十六歳の心は失われている。けれども、伸子は、午後出席した茶話会での早川閑次郎の話しぶりにしろ、ふれる生活のあらゆる面に、さっぱりとした人間の結合や接触の自然さがないことを息づまるように感じた。再び伸子は門の細道のしき石にちりばめられている花びらの形を思い出した。それから、東、イースト・ウエスト・西、我家ほどよ

ホームス・ベスト

ステインド・グラス

きところなしと焼きつけられている真珠色の焼つけ硝子の窓を
思った。その硝子は、食堂で父がどなった背後の煖炉わきの高い
小窓にはめこまれているのであった。

スリッパで廊下を来る足音がした。きぬずれの音がした。伸子
は、椅子から立ち、水道の栓をひねって、手を洗いだした。そこ
へ多計代が入って来た。

「おや、いたの」

多計代は伸子の肩の一端が映っている鏡に向って一寸自分を眺
め、やがてセルロイドの盆から櫛をとりあげて、格別みだれてい
ないいつもの大きくふっさりした底髪をかきつけた。

「お父様はあれだから困ってしまう、すぐ真っ暗になって……」

越智は帰ったことが、多計代の話す調子でそれと察しられた。

「あの有様じゃ、何ごとかと思うじゃないか」

「……………」

伸子は黙っていた。多計代も、伸子がさつき涙をふきにここへ来たように、きもちをしずめるために洗面所に入って来たにちがひなかった。

鏡に向つて上目で前髪の毛すじをととのえながら、多計代はいくらか弁解のように、

「お父様ったら、愚弄したとか何とかつて——おつしやることがどうしていつもああ極端なんだろう。——こないだ越智さんが一緒に夕飯をたべて、あとでいろんな話が出たんだけど、何しろ

お父様は、本をよまない方だしね、越智さんはああいう真面目な人だし、すっかり話がちぐはぐになつちまつて、お父様はさんざんだったのさ、それだけのことだのに……」

「またシユタイン夫人のことでもいったんじやないの？」

「……………」

ほんのにくまれぐちと自分で知っていったことに、多計代は答えない。伸子は愕然とした気持で、母の顔を見た。多計代は白くふつくりとしたきれいな顎をひきつけて、衿もとにかかった白粉を軽く指さきではらっている。越智に対してつかみかかるような激しい言葉がほとばしりかけたのを、伸子はやっと自制した。伸子はそこに、はつきりと、父と母とそして自分にも加えられた屈

辱を感じたのであった。父親似の丸い伸子の顔に悲しみが現われた。黙って立っている伸子に、多計代は、

「食堂へ行くんだらう？」

ときいた。

「ええ」

多計代は、どうやら伸子と一緒にの方が工合よい風で、つれ立って食堂へ行つた。

珍しく保が、友人と回覧雑誌を出す計画のうちあわせで夕飯にかえらなかつた。父の好物な豆腐のあんかけが出来ていた。それは伸子の好物でもあり、多計代はおくれてかえる保のために、
「保様がお帰りになったら、よくあつくしてあげてね」

とお給仕に念をおした。

幼いつや子が食堂から去ると、泰造、多計代、伸子の間に、さつきからつづいた気分がかえって来た。伸子は大テーブルの上のすこし離れた場所で夕刊をひろげていた。泰造は、煖炉わきのつくりつけの長椅子に、クッションを枕にして横になっている。多計代はいつもの、入口から正面の席で、薄い藤紫の地にすがぬいのある半襟のよくうつる顔をまっすぐに、いづらか胸をはるように坐っている。坐っている爪先が白い生きもののように落着きなく動いていることは、多計代の繁いまばたきの工合でしれた。しばらくそうしていて、やがて多計代がその沈黙にたえられなくなつたように、

「お父様」

さ、ま、というところに力を入れて泰造を呼んだ。

「なんだ」

「寺島の地所のこと、してくださいましたか？」

「まだだ」

「——困るじやありませんか」

伸子は、自分に向けられた母の視線を感じた。が夕刊から目を動かさなかった。両親の心持のもつれが、こういうところに話題をとらえて、しかも母の方から挑むようにもち出されたことは、伸子に思いがけなかった。

「あしたですよ、期限が」

寺島に、母の実家があつた。祖母の死後、すっかり没落した多計代の実家は、銀行から宅地を差押えられかけていた。多計代は、明治初期の学者として著名だった父親の記念のために、その土地は人手にわたさず、佐々で買いたいと計画しているのであつた。

「あなただったら、建築家のくせに、ちつとも事務的にてきぱきして下さらない——よく、それで事務所の用がすんでいらつしやる」
「そんなにいそぐなら自分でやったらいいじゃないか」

多計代は、

「あなたは、寺島のこととなると、実に冷淡だ」

涙をうかべて、ふつくりと白粉のついている顎のところに泣く

まえの梅ぼしをこしらえた。

「わたしに出来ることなら、はじめっからお願ひなんか、しやしないじゃありませんか」

長椅子にあおむけに横になっている泰造は、あおむけのまま脚を高くくみあわせた。そして、

「俺は、寺島のことについては、お前のころもちのすむように、なんでもいうとおりにして来てやっている筈だ」

伸子のところから父の顔は見えなかった。けれども泰造が煖炉前の天井についている灯を見つめながら、複雑な心もちでしんみりとそれをいつている様子はまざまざとわかった。

「世間の亭主はどんなもんか、少しはくらべて見るがいいんだ」

「恩にきせるなんて——卑怯ですよ」

「俺が卑怯かどうか、伸子にきいてみろ」

「ほら、とうとうあなたの、伸子にきいてみろ、が出た！」

多計代は涙をうかべながら、かちほこった、刺すような笑いかたをした。

「ひとがいるといつだつてそうなんだ、あなたつてかたは。——虚勢をはつて——」

「いいかげんにしろ！」

ねていた泰造が長椅子の上でおき上った。

「自分の娘をひとつていう奴がどこにあるものか。——いったいなにが不平でそう悪態をつきたいんだ。何不自由なく食わせてや

っているくせに。——したいだけの我ままだってしているじゃないか」

多計代の頬を涙が光ってころがり落ちた。

「何不自由なく食べているのが、そんなにお気にいらないんなら、私はどうでもしましよう。……さぞあなた一人で、ここまでになすった家なんでしょうから」

袂からふところ紙を出して、多計代は涙をおさえた。少しふるえるその手の中指に見事なダイヤモンドの指環がきらめき、煖炉棚の上におかれた振子時計が、ガラス・ケースの中で一本の金線につられた金色の振子を音なくまわし、部屋にひろがった静寂の深さと時のうつりを計っている。伸子はその座にいたたまれない

思いになった。激情的な多計代は、いつも対手が一番ひどいことをいわずにいられなくなるまで、感情を刺激し、駆りたてた。伸子も始終それにまきこまれて来た。しかし、今夜、伸子はその渦に巻きこまれず、不思議に悲しい鮮やかさで、この家庭の全情景を心に映しとつた。

十二

翌朝、身じまいをおわって伸子が畳廊下へ出てゆくと、襖があらいていて、泰造が一人洋服筆笥の前で、身仕度をしていた。

「お早うございます、もうお仕度？」

「ああ。よくねましたか」

泰造は、きちんと剃った顔をあおむけ、洋服箆笥の戸の裏についている鏡を見ながらネクタイを結んでいた。ホワイト・シャツの背中が鼠色フェルトのズボンつりの交叉の間に清潔にふくらんで、あおむきにのぼしたのどの皮膚が、カラーのあわせめから顎へかけて年配らしくたるんでいる。伸子が一緒に暮さないようになってから、もう何年か、泰造は毎朝一人で、箆笥の前で身仕度をととのえて事務所へ行くのがならわしになった。多計代は、良人や学校へゆく息子の朝食の時間におきて来ないことが多かったし、出勤の身じたくも、帰宅して来たときの着がえも、伸子が覚えてから減多に手つだわらないひとであった。泰造は年来、朝はこ

うして一人で仕度して出かけ、帰って来て冬ならばストーヴの前においてある和服に、今ごろなら衣紋竹につるしてある和服に一人でさっさときかえた。お嫁に来たとき、あんまりおばあさまの焼餅がひどくて、お躰しづけがよすぎたもんだからね。多計代は自分たち夫妻の習慣を、そういつて笑った。

けれども、年とつた夫婦である父と母とがあらそいをした今朝、父がやっぱり一人簞笥の前で身仕度をしているのは、いつもの通りでありすぎて伸子には気の毒に感じられた。伸子は簞笥の中についている小抽斗からハンカチーフを出して、上着のポケットに入れたりした。

「お父様、よくおやすみになった？」

「ねたとも、例によつてたちまちですよ」

父の顔色は、ほんとに、昨夜もいつもどおり枕へ頭を置くやいなや、すぐいびきになったと告げている。顔色ばかりか、手帳と紙入れとを内ポケットへ入れる手つき、筆筒をしめてまた食堂へ戻つてゆく足どり、それらのどこにも、昨夜のもつれた気分の跡はなかった。もう今日一日の活動の一步がふみ出されていて、その流れのうちにある泰造の身のこなし、もののいいかたすべてに、伸子が気の毒に思う心をうけつけるような隙がなかった。後頭部にだけ髪が厚くのこつている円い頭から、カラーの雪白さ、節に毛の生えている厚い手の指にまで、事務的に明るくて、ひんやりしたもののがみなぎっている。父そのものが、ニスのかすかに匂う、

清潔な事務所そのものになったようでもある。

「今晚は、何時ごろ？　御飯におかえりになれるの？」

「今晚は日本倶楽部だよ」

そういいながら、ハンテイングをかぶった江田がドアをあけて待っている自動車に片足をかけ、伸子が、

「いつてらっしゃいまし」

というのに、一寸右手の人さし指を一本あげる外国風の挨拶をした。小さい黒いビインは、後部に朝の光をてりかえしながら、しずかに門内の狭い道を出て行った。

伸子にとって、父が出がけに、ひとこと、いつまでいるかい、ときいてくれなかったことが、物足りなかった。今更そんなこと

をきかないのは、出ても入っても親子であり、いたいだけいいいな楽な親子の關係を示していることではあつた。しかし、そこには、いつも伸子がこの家の自由さとともに感じている、何か一つのものゝ欠けた気分があつた。

送りにでた女中たちはとづくに引つこんでしまつていた。伸子は、茶室風の玄関の間からゆつくり歩いて、腰かけの方の客間へ入つて行つた。掃除したまま、すべての窓が開け放されている客間の壁より、古風な銀の枝燭台のついたピアノがおかれている。伸子は久しぶりでその蓋をあけ、黄ばんだ鍵盤の上でいくつかの音階を鳴らした。このドイツ製のピアノは中古で、少女だった伸子のために買われたものだった。伸子に教則本を教えた婦人ピアノ

ニストはウィーンで自殺した。佃と結婚してこの家を出たときから、伸子は自分の楽器というものを一つももたずに暮らしていた。

小さなウクレレを持っていたが、それは佃がニューヨークで伸子のために買ったものだというわけから、伸子が離婚したとき、佃の所有品とした。伸子がそれを薬指からぬきとって、用筆筒の抽斗に入れて出て来た結婚指環とともに。

あてのない音階からだんだん伸子が思い出して、前奏曲の断片を弾いていると、食堂側のドアが、がちやつとあいた。

「やっぱりそうだ」

それは多計代の機嫌のよくない、すこしのどのつかえたような声であつた。伸子は、椅子の上でくるりとまわって母を見た。

「やかましかって？」

「——どうせおきていたんだからかまいやしなけれどね」

伸子はピアノのふたをしめ、お召の短い丹前を羽織った母の肩を押すようにして洗面所の方へ廊下を歩いた。

「顔、まだ？」

「ああ——。お父様ったら、どうしてああなんだろう」

「ああって？」

「ひとがどんな気持でいようが一向おかまいなしだからさ。——
どうしてああ寝られるんだろう」

多計代は、泰造はじめ家族のものがみんなでつかっている瀬戸の白い洗面台をつかわず、自分だけ、わきの流しで別に白エナメ

ルの洗面器をつかった。多計代は、踏台になる木の腰かけにかけ、ガスの湯わかしから洗面器へ湯のたまるのを待ちながら、

「伸ちゃんは、物質主義だからあたりまえのことだろうが、わたしにはお父様の何ぞというと、食わしてやっている、がじつにたまらない」

満足に眠らなかつた一夜があけて、母の心持には、父とちがつて、きのうからの続きがはつきりつながっているのであった。いつの間にか自分が、物質主義ときめられているのを伸子はおどろいた。複雑ないろいろの感情や思想をこまかく表現する習慣をもっていないで、いいあらそって苦しまぎれになると、泰造は、食わしているをもち出す。そういう父と母とを、伸子はゆうべどん

なこころもちで眺めていたろう。煖炉棚の上にギリシャの壺が飾られて居り、母の指にはダイヤモンドがきらめいている。それらの光景の中ではかれる、食わしてやっているという言葉は、伸子を刺した。趣味とか品位とかいうものの不確かさ、女の生活というもののむきだされた根の無力さをおそろしく感じさせられたのであつた。

保もつや子も学校へゆき、和一郎は相変らず留守のひつそりとしたおそい朝食をすました。伸子は、何となし母の機嫌をつくろう気になれず、そろそろ、かえり仕度をはじめた。

「おや、もうかえるのかい？」

ひどく不意うちのような表情になつて多計代がきいた。伸子は

そのとき立って、煖炉前のテーブルにおいた手まわりのものを集めようとしていた。

「そんなにいそぐのかい？」

下から見上げる多計代の視線に、伸子は、袂のさきをつかまえられたような感じがした。

「何か用？」

「――用ってわけでもないけれど……」

多計代は、いまのうちにきめることがあるという風な、いくらか心の内でまごついた調子で、

「ともかく、もうすこしおいで」といった。

「お寿司でもたべておかえりよ」

伸子は見えない手で肩をおさえられたようにまた元の座蒲団の上に乗った。

不自然に話題をとばして、多計代は、親戚のある夫人が沢田正二郎に熱中していることを批評的に話しだした。

「ああいう心持なんか、話にはわからない……」

母がいろいろのことはこのことではない。そう伸子は直感した。多計代は、まつ毛をしばたいて、左手で半ば無意識に指環をうごかしていたが、全然前おきぬきで、

「ねえ伸ちゃん、私、越智さんと結婚しようかと思っているんだけれど、お前どう考えるかい」

といった。伸子は、真暗闇の中でいやというほどなにかにからだをぶつけながら、なににぶつかったのか瞬間には判断出来ない、あの心持になった。

「——けっこん？——結婚て……」

言葉の響とその意味とが目前のお召の短い丹前をきた母とどうしても結びつかなくて、伸子は苦しい顔になった。結婚という言葉は、それは伸子にしろ知っているし、どういうことかもわかつていゝるわけだが、しかし——。母と、越智とのけっこん——。伸子は、

「わからない」

せつなそうに多計代を見つめて頭をふった。母は五十二であつ

た。越智圭一は、はつきりは知らなかったが三十二三の男である。自然なものとしてその二人の結婚などということを、伸子には想像出来なかった。伸子は、おびえたような眼色になった。

「——結婚て——ここの家を出て？」

「それや、どうしてもそういうことになるね」

上気して、まばたきこそ繁いけれども多計代は落着いて答えた。

「伸ちゃんは、どう思うかい？」

「あんまり不意で……それや私たちは大きくなったんだし、お母様がどうしてもそうときめるんなら、とめられないことかもしれないけれど……でも、変だ！」

伸子は俄かに正気づいたように坐り直した。

「本気なの？」

「――結局そうしかたがないと思うのさ」

だんだん伸子は平静をとりもどした。そして、母のこの唐突でしかも重大な話が、抑えかねる情熱的な焰のもえたちとして出されているというよりも、むしろ何かもうすこし別な動機から出ているらしいことを感じはじめた。おぼろげに直覚されたその別の動機までさぐりつこうとするように、伸子はなおじつと多計代を見つめた。

「そうなったとき、お母様は、自分の経済力をもっていraftしやるの？」

「どうせ、たいしたものはありやしないけれど、わたし一人ぐら

いはどうにかなる」

「だって——」

大学の助手をしている三十三の若い男に、母のもっているこのごたごたした生活の全部の幅がどうして支えきれよう。多計代は、花卉に細い花脈の網目が浮いて見えながら最後の美しさと芳しさを放っている花のような若さをもっていた。けれども、その最後のあでやかさや匂いは、多計代にとってどんな不満があるにしろ、佐々の家の安易な日々を条件として保たれているものである。かりに越智が本心から母にたいして何かの魅力を感じているにしろ、それは全く、この家の夫人としての多計代の身にこそついていゝるものであった。大学助手の越智の格子戸のはまったさ

さやかな家、その上金銭に関して鷹揚とも思えない風^{ふう}丰^{ほう}の越智。それらと結び合わされた母の姿を思い描くと、そこに女としての生活の発展などということとは、みじんも考えられなかった。伸子の目の前には急に激しい疲労と老いに襲われた哀れな母の姿しか浮ばなかった。——結婚——伸子はいよいよおどろきを眼にたたえて、テーブルの上に組合わされている多計代の、ほそくて白くすべすべした手を見た。

「……それ、どっちからの話？ あっちから？」

「はつきりそうともいえないんだけどね……」

「じゃ、お母様から？ もうおっしやったの？」

「だから、伸ちゃんはどう思ってた、きいているんじゃないか」

「——こつちから、なんて……」

伸子は、

「変だわ、変だわ」

不安が募つて、そういいながら白くて柔らかい多計代の手をつかんだ。

「まるで変じゃないの？ どうして？ ね、なぜなの？ 問題にもならないみたいなことなのに……」

「この間研究室へ行つた時にね、あのひとも若いもんだから——」
ついそいいいかけて多計代は周しゅう章しょうした。大学にある越智の

研究室へ行くことを、多計代はこれまで保からもかくしていたのだった。伸子からはもとより。——そういういきさつに拘泥せず、

「そしたら？」

手を握ったまま多計代を促した。

どう表現していいかわからない、けれども、この話全体の核心になる事情がそのときのことに潜んでいるらしかった。

「……ともかく私としちゃ、もう結婚をするしかないのかと思うようになったのさ」

多計代の眼に涙が浮んだ。涙の浮んでいるその母の眼に、まばたきもしない自分の視線をびったりと合わせ、想像されるあらゆる場合を考えめぐらしているうちに、混沌としていた伸子の想像のうちにいくらか現実性のある一つの点が照らし出されて来た。多計代は、ちらりと、あのひとも若いもんだから、ともらした。

それは暗示の多い一言であつた。越智は母に、男が女に求める肉体的な求めを、何かの形で出したのではなからうか。いつか、越智が、もし現在の細君をもっていなかったら、多計代に求婚しただろうといったことを、多計代は伸子に告げたことがあつた。いくらかずつ伸子にもわかりかけて来た。

「ね、お母様、越智さんは、お母様になにか特別なことを求めたの？」

「……………」

多計代は肯定も否定もしなかつた。ただ、まぶたいっぱいになつてきた涙が、頬にこぼれかかった。若くない、けれども繊細ななめし革のような不思議な艶のある滑らかな頬に涙の粒を光らせ

ながら、指環のはまった手をとられたまま、娘の目のなかをじつと見つめている多計代の顔じゆうに、のつぴきならない苦悩があった。その苦悩は伸子の若い顔にもてりかえした。越智が何かを多計代に求めたことは事実であり、それに対して多計代がすぐには応じられなかった心持があることを、女としての伸子は理解したのであった。

伸子の心に涙がにじんだ。越智にひきつけられている母を、伸子はつよい反感をもって見て来た。その伸子の反感を、越智はうがったように娘が母にたいしてもつ嫉妬だという風に分析したりして話しているだろう。娘の感情は、嫉妬というよりもすこしちがった動きかたもあるのに。——多計代がゆとりのあるその身辺

におこす波瀾の筋立てが余り月並で、伸子は主としてそこに反感をそそられて来た。いま、多計代のせつぱつまった顔を見ると、伸子はその反感をうしなつた。少くとも多計代の感情には、嘘をつくことの習慣がない。この発見は伸子の心を同情ふかくした。

「おかあさま……」

伸子はやさしく、母の匂いのいい手の甲に自分の頬を近づけた。
「いってくださつてよかった」

頬をすりよせている伸子の心に、思い出されることがあつた。

昔、伸子が少女だったとき、多計代が教えたことがあつた。男と、唇と唇との接吻をすると、それはもう結婚すると約束をしたも同然のことである、と。漠然と結婚は一生の一大事とだけ知ってい

る少女の伸子の感情に、結婚の約束をしたことになるのだという多計代の真面目な重々しい言葉は決定的に威嚇的に刻みつけられた。もしかして、多計代は、今の自分の場合についてそのとおりに感じているのではないだろうか。妻である多計代の場合、少女だった伸子に警告したよりももっと責任は現実的であるし、そういう事情だとすれば、嘘のつけない多計代が、それについて悩むのは自然だと思われる。大柄で、多産で、衣類やもちものなどにやや俗っぽい豪華の趣味をもっている多計代のうちに、古風に、矛盾しながら保たれている純潔さ。

伸子は、ある手紙を思い出した。年月が経って古びた白いありふれた四角い大型の西洋封筒の表には、鶯堂流で英語を書いた見

本のようなのんびりした曲線的な字で、ミスタ・タイゾウ・サツサと、ロンドンでの泰造の下宿先が宛名にかかっている。封のはじめには、赤い蠟で封印する代りに、赤い小さい楕円形の紙を細かいレースあみめにうちぬいた封緘紙が貼りつけてある。封筒は行儀よく鋏で截られていて、なかに日本の雁皮紙がんびしにしんかきでびつしり書き埋めた厚い手紙が入っていた。細かく書きつめられている字は伸子によみ下せないほどの草書で、幾枚もつづいた終りの宛名に、英京ロンドンにて、なつかしき兄上様まいると、色紙にかくように優美に三行に書かれていた。多計代という名をかく前、本文の終りの一行たつぷりが、上から下までバツテンバツテンのつづきでうめられてあった。

自分に貰うことになった古い用筆筒を片づけているとき、伸子は、偶然明治四十年という日づけのあるその母の手紙を見たのであった。改良服を着てバラの花をもった三十をこしたばかりの多計代のその頃の写真が、そっくりそのまま字になったような手紙であった。伸子は珍しくなつかしくて、遠慮しながら丹念に眺めた。そのとき、手紙のおしまいの行がどうしてバツテンつづきで終っているのか、不審だった。あとになって伸子は思い当ることがあった。バツテンは、K I S Sを意味するバツテンであつたらしい、と。あんなにどっさりの、おしまいは墨さえかすれたがむしやらなバツテンバツテン——。伸子は足かけ五年留守居していた母が兄上様と宛名にかいていたころもちを思いやり、同時に、

そのどつさりのバツテンに親愛を感じた。その頃の写真にうつっているふつくらした母の手つきの愛らしさ、子供らしさをそこに感じた。

そういう手紙をロンドンでうけとったとき、泰造が、いつも、まずそれをポケットにしまつて、しばらく落ちつかないやうにしていたあげく、きつと何とか彼とか口実をみつけて友人たちのいるその部屋から出て行つたものだ。そういうことを、冗談まじりに、泰造の古い友人から伸子もきいていた。

父と母とは、その後、しだいに變化し膨脹した經濟条件につれて、いろいろな變りをその生活につけて來た。けれども、伸子が娘として父母のために、それを護りたく思う夫婦の醇朴さは失わ

れきったといえないと思えるのであった。

「このことはね、お母様。お母様にとって、思っっていらっしゃるよりも大変な危機なのかもしれないわ」

伸子は、信頼のこもった、つつこんだいいかたをした。

「わたしには、賛成していいという根拠がわからないのよ、わかるでしょう？　わたしは、越智という人を信用してないんだもの。——だから、どうぞお母様もよく考えてよ、ね。本当にお願いだわ」

とられたままにいる多計代の手を、伸子ははげますようになでた。

「ね、お母様が、そう考えるようになつたわけは、いく

らかわかるわ。でもね……それやお母様は、いざとなれば貧乏は平気だと思っていらっしゃるし、世間的な名誉なんか放り出せると思っていらっしゃるでしょう。それが、より価値のある生活だつていう自信さえあれば——そうでしょう」

「そう思わなくちゃ、こんなことは問題にならない」

「でもね、それは非常に複雑だと思うわ。だって、お母様は一ぺんだって、貧乏人の娘だったことはないんだし、妻として社会的な自尊心をきずつけられるような目にあつたことはないんですもの。金もちでないというのと、貧乏人として扱われて来たというのはちがうでしょう？」

伸子は話をすすめてゆくうちに、多計代がどんなに自尊心の烈

しい性質であるかという実際の例を次々に思い出した。

「お母様の自尊心は佐々泰造夫人という土台で、それでもつていのよ。その土台がなくなつてそして、本当に女としてのむきだしな自尊心が傷つけられるようなことになったら、どうなるのかしら……」

伸子はおそろしくなつた。子供るときからみなれている母の大きい無邪気な肉体と、縁なし眼鏡をつめたくその顔の上に光らせている越智とを思い合わせると、結婚という言葉から伸子がそこに感じるのは、意味もわからないほどの不自然さ、凌辱めいた不自然感ばかりであつた。

「いそいできめちや駄目だわ、そうでしょう？」

「私もそれはそう思っている」

「お母様の気もちだけで行動しないで、ね。わたしは、佃と結婚するとき、本当に佃だつてわたしと同じように人生にたいしていろいろの希望をもっているんだと思いこんだんだわ。ただそれがわたしに向つていえないだけだと思つたのよ。それがかわいそうと思つたのよ。でも、それは間違つていたんですもの。……」

多計代は、深い吐息をついた。そして思い沈んだ表情ながら落ちついて、

「ほんとに私もよく考えよう……ありがとうよ」

そういいながら、とられていた伸子の手の中から自分の手をしずかにひっこめた。

十三

何という奇妙なところもちだろう。

朝から素子は牛込の本屋へ出かけて、森閑としている駒沢家の庭には、きらめく初夏の日光が溢れた。柘榴のこまかい葉の繁みは真新しい油絵具の濃い緑のように濃く、生垣越しのポプラの若木の梢は軽いやわらかな灰緑色に、三角形の葉をそよがせている。目のとどくいたるところに伸子の愛好する爽やかな新緑の濃淡がかがやいていた。それは、花の季節よりゆたかに自然の美しさを感じさせる。伸子は机の前から、そういう庭の景色を眺めて

いた。そこには日一日と緑の諧調を変化させているまばゆい初夏の庭がある。伸子の眼はそのまばゆい緑をじつと眺め、まばゆさのために瞳孔を細くちぢめているほどだ。だのに、伸子が外景からうける感じは変に黒かった。樹々の緑色が黒とまじり合つて濁つて感じられるのではなく、まばゆい純粋な新緑の美しさはそのままくつきり目に映つており、それが伸子の心に来る途中に、しまったシャツタアのように強情な黒さがあるのであった。

喪にいる、という言葉をも、伸子は思い出した。喪の黒さとは、こういうものかと思つた。しかし、伸子は悲しんでいるのではない。一つも悲傷はなかった。ただ奇妙な、不自然な、信じることの出来ない混乱が充満している。誰からも話しかけられず、

考えの内側に好奇心をもたれず、きょう一人でいられることが伸子にうれしかった。

きのう、動坂の家で多計代が越智と結婚しようと思うといい出したとき、伸子は全力をつくしてその不可解なことを、わかろうと努力した。自分としては必死にわかろうと努力しながら、多計代に対しては、最大の慎重さをもとめた。本能的にそうせずにいられなかったほど、越智と母との結婚という観念は伸子にうけとりがたかった。

思えば、不思議でもある。ああやって長い間、非常に集中してそのことについて母と話していたのに、その間に一ぺんも、良人たる父の立場というものが伸子の感情に訴えて来なかった。なぜ

だったのだろう。結婚という考えがあんまり突飛で、あり得ることと思えなかったから、現実の生活でそういう破局に面している夫婦としての父の立場が訴えて来なかったのだろうか。十年ばかり昔、父と母とが珍しく一緒に関西から九州へ旅行したことがあった。泰造の出張をかねてであつたが、髪ひとつ結うにも手間のかかる多計代が同行したことは珍しかった。二十日ばかりの旅行を終って、父と母とは九州のおいしいポンカンや日向みかんの籠をもって帰京した。その小さい島にだけ南洋の植物がしげっている日向の青島の話、父も母も興味をもって話したりしたが、日がたつて、伸子ばかりのとき、多計代が、

「旅行もいいけれども、私は名古屋から、よつぽど一人で帰って

来てしまおうかと思った」

といった。

「どうして？」

「あんまり腹がたったからさ」

「——だから、どうしてなのよ」

「お父様ったらひとが見ていないと思って宿屋の女中と、ふざけたりなさるんだもの……」

十八になったかならない年ごろだった伸子は、きまりのわるい顔をした。

「ふざけるって……」

名古屋で、ある人の招待を受けたとき、母の仕度がおくれて父

が一人さきに宿の玄関を出た。そして靴をはきかけているところへ、母がうしろの階段から下りて来た。そして階段の中途から、多計代の来ていることに気づかなかつた泰造が靴をはきながら、女中の肩に手をおいているのを見た。多計代は、そのまま部屋へ戻ってしまった。急に気分がわるくなつたといつて動かない多計代を、主人側に気の毒がつた泰造がやつとなだめて出席させ、以後は、決してそういうことはしない、と誓約したというのである。「とても私はそんな侮辱をうけてだまっちゃいられないよ。男つてどうしてああなんだろう。あんまり日本の女に見識がないから、男はこわいものなしでいい気になっているんだもの」

多計代は、女性の威厳として、痛烈にそういった。そのとき伸

子は、宿屋の女中とふざけて、と父についていう母の平気さを変に思った。酔っぱらいの大きらいな伸子は、そういう場合につかわれるふざけるといふ言葉を、酔っぱらいについたものとして感じ、それは父に似合わしくなく思えた。一方では宿屋の女中を、そんなに自分と対立する女として感じる母の見識というものに疑問も感じた。そういう気分で宿々に泊る母の旅心は窮屈であつたろうし、同行する父にとつてもかさだかであつたろう。

いろいろ思いあわせているうちに、伸子は一種の滑稽を感じて口元をゆるめた。佐々の家庭では、芸者とか妾とかいう言葉はタブーで、子供のいるところでは決して出なかった。何かの場合には芸者はシンガーといわれ、妾はコンキューといわれた。そうい

われても、いつかわかることはわかつて来ているのであった。

男にもとめる純潔さに対して、多計代は妥協がなかった。泰造はじめ、和一郎も保も、母の純潔と考える標準で見守られ、その気分で導かれて来ている。伸子は、年とともにそういう母の趣味や見識を、男の子たちのためにむしろ氣の毒に感じ、危険にも感じはじめていた。少年から青年にうつる弟たちの肉体と精神とにある種々様々な動揺について、このこまかいニュアンスについて、母が何を知っているだろう。伸子が保について、いつも氣がかりになるのはその点でもあった。伸子から見ると母は、そういう方面について全然無邪氣であるか、さもなければ伸子にわからないほど粗野な何かを知っていて、極端にそれに反撥しているようであ

った。佐々の家庭の雰囲気で、純潔は絶対の価値として刻印されているのだが、それをつきつめると、純潔の実体はごくあいまいである。

爽やかな新緑の濃やかな庭の面を眺めながら、伸子が開かないシャツタアのような黒さを心の前に感じているのも、そのことであつた。

妻が、良人のいないとき、自分の別な結婚のことについて娘と話す。そういう話をしなくてはならないような感情生活を、結婚生活の中にない合わせてもってゆく。それは、多計代のいわゆる純潔なことなのだろうか。男性一般に対して、良人や息子に、あれほど純潔を要求する母が、自分にたいして、他の女の良人であ

る男が興味をもち、進んで結婚という一つのけじめの必要を考えさせるほど切迫した関係をもつということは、多計代の純潔感に抵触しないことなのだろうか。

きのう、とり乱した母の顔を目の前に見て、伸子は我ともなく母を防御し、母の少女っぽい純潔さを強調して自分に感じとった。けれども、いま自分の住居の机の前で、いくらか落着き筋だつて考えると、それらのことのうちにはどつきり矛盾がある。うぬぼれや思いあがりがある。多計代が、女としての自分を買いかぶつて、自分に対する場合だけはいつも例外で、その男にいたずら心や浮気のない深刻なことのようと思うとすれば、それはうぬぼれでなくて何だろう。ある婦人の良人である男と妻である自分の間

に、感情の逸脱があつても、それは自分が自分である限り高貴な悩みなのだと思つてゐるとすれば、思いあがりでなくて何だろう。

理づめに糺弾に傾いて行つた伸子のころもちは、やがて、一つの矛盾の裂けめを覗きこんだ。それは、男女の間の純潔ということが、多計代のころの中では、肉体の交渉の有無にばかり重点を置かれている、ということであつた。だから、あんなに純潔好きの多計代に、おどろくような矛盾として、越智との感情交渉がなりたつた。その感情に肉体的な表現がもとめられて、はじめで、多計代には、純潔感がめざめ、女の警戒が覚醒している。伸子の、庭を眺めて眩しそうに細めているまぶたの上に悲しみとおどろきの色がさした。きのう多計代が結婚という言葉をいったと

き、その言葉から射すひとすじの光もなかったわけがわかった。多計代の人生にとって、肉体的な意味での男女の性的交渉は、必ず結婚という手続を通ったものでなくては認められず、そのもの堅さは、逆に、若かった多計代が恋愛の道をとおらずに経験した結婚の門出が、若い娘にとってどんなに溢れる情感から溶け入ったおのずからのものでなかったかを語っているのではなからうか。その意味で、多計代がやかましくいう純潔の裏がえされた面には、暗闇で息をのみ眼を大きく見開いているような女の経験があるのではなからうか。

いつだったか、父と母との結婚記念写真が出て来たことがあった。三十歳を越したばかりで髭を立ててフロック・コートを着て

立っている白面のおとなしい泰造の横前に、房つきビロードの丸椅子にかけて島田に結った多計代がいる。写真には白っぽく写っている立派な衣裳の二枚重ねに、黒ちりめんの羽織を着て、膝にあげた片方の袂のなかに片手をかくしてうつされている。その花嫁の眉つき、レンズに向けられているまなざし、紅をさした口もとの締り工合、どこにも羞らいやうれしさがなかった。陰気で、けわしくさえ見えた。伸子は、しげしげと眺めながら、

「このお母様は、あとの写真ほど美人じゃないわ、なぜかしら」といった。全く、それから小一年たったあと、浴衣で、夜会巻でとっている多計代の七分身の写真には、におやかさ、ゆたかさが映っているのであった。

「これねえ」

しみりとして多計代も、昔の倂おもかげを眺めかえしていたが、

「私としちや、記念写真をとるところの気持ちじゃなかったんだもの、かわいそうに」

といった。

「何にもしらずにお嫁に来てみれば、親類書のどこにもものつていなかった四つばかりの男の児がチヨロチヨロしていてさ、その子
を、俊一、俊一っておばあさまが可愛がっていらっしやるんだもの。
私は本当に、これや大変なところへ来た、と思った。誰の子
だか分らないうちは、決して、奥さんになるまいと決心してね、
つきそいに来たばあやを次の間にねかして……だって、それやそ

うだろうじゃないか」

「それが、あの俊ちゃんだったの？」

泰造の伯父の息子で、その頃はもう三菱につとめている青年があつた。

「そうだったのさ、だからやつと私も安心したようなものの……」
多計代は、

「お父様もお気の毒に」
と笑つた。

「私が月を眺めて泣いてばかりいるもんだから、ほかに好きな人もあつたのかつておっしゃつた……そうじゃなかったんだけれど。——でも、私はお父様に感謝しているよ」

素直な声で多計代はいった。

「よく私のいうことをきいて、ひと月もふた月も、いうままにしておいてくださつたと思つて。——多計代もかわいそうに、いきなりこんなごたついた家へ来させられてそういう心持になるのも無理はない、といつていらした」

伸子は少女としての感情が育つてから、いつも自分の母というひとは、よそのうちのおかあさんといわれている母親たちと、どつかひどくちがつた感情で娘である自分にたいしているように感じるが多かつた。伸子は、母にたいするというよりも、年かさで命令権をもっている女に向つて、一人の若い女が正面から向いあつて立ち上つた時の感情を経験した。

いま、母の結婚生活がはじまつたころの話を思い出すにつれて、伸子には、これまではつきりつかめていなかった母の女としての情熱の矛盾が、しみじみわかった。大柄な美しい多計代のからだにはもって生れた様々な情熱の可能が、可能のままかくされていて、子供が次々に生れて母になってゆくという現実と、心のどこかにはいつもほかの生活への空想とあこがれがうずいていることとは、くいちがったままで多計代の生活を貫いて来ている。

十六ぐらいの娘であつた伸子に、どうしてそんな女の心のあやがわかう。多計代の感情のうちに、恋愛のころから結婚をとおつて、母となるおどろきとよろこびに目ざまされた母性のふつくりした展開はもたらされていない。それを、多計代として気づ

いたことがあるだろうか。それは、多計代が彼女なりに子供を愛していることはまた別のことであった。息子たちに激しく求めている純潔も、思えば、多計代のうちにある、理想化された男性へのあこがれのてりかえしであると思える。

保の部屋の入口の鴨居にあるメデイーションという貼紙は思いつくたびに伸子の心を暗くし、同時に、保と対蹠たいしよする存在として一家の中にある姉の自分を思わずにはいらなかった。多計代の女の心のかげをこうたどって来てみれば、母にとっても対比されるものとして存在する娘である自分を思わないではいらなかった。つよい生命力をもちながら、時代の境遇によつて夫人、母という立場から動けない四十代の多計代のかたわらで、一人前

の女となった若々しい伸子は、どういう風に生きて来たろう。少くとも伸子は、一人の人間としての女の熱中を傾けて、それをあからさまに主張し、佃とも恋愛し、結婚し、離婚して来た。

伸子は、思わずかけている籐椅子の上で力のこもった身じろぎをした。一時に多くのことが諒解された。多計代のうちには、決して母という名で消しつくされようとしていない若さが自覚されているにちがいがなかった。でも、その若さは、年齢と境遇とのずれで、現実新しい内容づけの不可能な若さの夕ばえである。何ぞというと、伸子をエゴイストと非難する多計代の感情の奥底が急に会得された。多計代が上気しておこった眼付で伸子に向ってエゴイストと罵るとき、それは伸子にだけいわれている言葉では

なかった。自由に、自分の希望と意志と責任とで行動しようとし、また、事実そうしてゆくすべての若い世代の同性にたいして、多計代はいうにいけない自身の不同意を、若い女のエゴイズムという言葉にまとめて、伸子にそれをうちかけた。

伸子は、四年ばかり前に赤坂の古びた佃の家の縁側で泣いていた自分を思い出した。伸子は、毎日毎日がただ瑣事の反覆で過ぎてゆく生活の無意味に苦しんで、佃といいあらそった。佃には伸子の身心をさいなんでいる生活の空虚感が全く通じなかった。顔を泣きはらしている伸子の肩を抱いて、佃はやさしくくりかえした。

「そんなに泣くことはないですよ、ね。もう十年たてば、そんな

苦しみはなくなります。僕にはよくわかっている——」

慰めるように囁かれる佃のその言葉を、伸子はどんなに恐怖したろう。もう十年たてば——十年！一年だつてこのままたつのがこわいからこそ、こんなにせつながつているのに……。絶望はいつそう深まり、伸子は新しく声をあげて泣いた。

古びて木目のたった縁側で泣いていた自分のその声のなかから、伸子はいま、たくさんの女の泣く声がきこえて来るように感じた。

十四

電話口に出た女の声は遠くたよりなくて、伸子が、

「もしもし、佐々ですか？」

と力を入れてきくと、

「はア」

と答えた。

「わたし、よ。伸子ですが、いらつしやる？」

とききかえすと、また、

「はア」

と返辞した。

「ね、お母様いらつしやるの？　いらつしやるなら、ちよつと電

話口まで……」

「はア」

というから、伸子はきき耳を立てて待った。佐々の家では、多計代たちだけ卓上電話を使っていて、そちらに連接をきりかえるとプツツとスイッチのはいる音がする。伸子はきき耳を立ててその音がするのを待った。が、受話器の中では変化なく電流が響き、どこかの通話の聲がしているばかりである。念のため、

「もし、もし」

といってみたらば、同じ声が、

「はア」

といったので、伸子はびっくりした。

「もしもし、あなた、だれ？」

「……………」

「ききにくいなら、誰かほかの人に出ておもらいなさいよ」

引つこんだらしく、ややしばらくして、こんどは、

「あ、もしもし」

思いがけなく和一郎が出た。

「まあ、しばらく——」

「ああ、姉さん、どう？」

「お母様は？」

「前崎へ行っている」

小田原の手前に、佐々の家は小ぢんまりした別荘をもっていた。

別荘らしい家はちつともないその海岸の漁村一帯は、大変体によくて長寿の者が多いということだった。泰造は、祖母に「西洋に

あるとおりの家に住まわしてあげる」と、洋風のその家を建てはじめた。八十二歳になった祖母は、その家の出来上らないうちに亡くなったのであつた。

「いつ、いらしたの？」

伸子が動坂へ行つて、越智と結婚しようかという話をきいたのは一昨日のことであつた。

「けさ……」

「けさ？——きょう何曜日？……木曜でしょう？」

多計代が、急に前崎の家へ行つてしまったことは、伸子を何か不安にした。

「だれか一緒に行つたの？」

「ああ、みんな行つた——僕と保が留守番だから、いらつしやいよ」

「——つや子も？」

「ええ。お父様が神経痛で事務所を休むことになったもんだから、急に大さわぎしてドタバタ行っちゃつた」

「そうなの」

それならよかつた。多計代は一人でまめに汽車の往復は出来ない人だし。——

「いつもなにか文句をいうお母様が、案外簡単に出かけたんで、おとうさま、おどろいてたよ」

思いきつて、良人や小さい娘と東京をはなれる氣になつた多計

代の心持も伸子には推測された。

「なんで行つたの？」

「僕が東京駅まで送つて行つて、あとは汽車」

「——さぞ大変な荷もつだつたんだろう」

伸子は笑い出した。大小のトランクや風呂敷包みのほか、多計代のゆくところへはいつも水筒だのバスケットだのが欠かされなかった。そういうとき、母の大きい手提袋をもたされるのは、つや子であつた。頭の上に大きいリボンをつけて、おしやれをさせられながら、しまりのないおかしな恰好をした大きい袋をもたせられるとき、つや子はきまりわるそうにいやそうに眼を伏せて唇をかんだ。その一行が、そろそろ東京駅に入つてゆく姿が目に見

えた。

「いつ頃まであっちの予定？」

「さあ、はつきりしないでしょう。当分お父様だけはあっちから事務所へ通うらしいけれど……」

「つや子の学校は？」

「一緒に月曜に出て来るんでしよう」

からだのよわいつや子は、家から近いというばかりでカソリック系統の女学校附属の小学校に通わされていた。同じカソリックの尼学校でも、貴族出の尼さんの学院、中流の尼さん女学校、又いく分その下に当るらしいつや子の学校の尼さんたちは、女生徒にたいしても人間ばい好ききらいを露骨に示すらしかった。つや

子はおとなしくて可愛い娘というよりは、神経質でその癖おしきつたところのある生れつきのために、同じ成績でもマ・メール（お母様）とよばれている尼校長から御褒美をもらったりすることの少い女の子の部類に属した。つや子は、その学校に通わされることをだんだんいやがるようになって来ているのであった。伸子は、日曜にでもゆくということにして電話をきった。

桜並木の道を戻って来ると、むこうから素子がぶらぶら来た。

「――出かけるの？」

「いやに手間がかかるから来てみたのさ……どうだった？」

多計代のからだ工合をきき合わせるといふわけで、伸子は酒屋まで電話をかけに来ていたのであった。

「けさ、前崎へみんなで行つちまつたんだって……」

「結構じゃありませんか、そのくらいなら」

そして、素子は皮肉に、

「たまには、われわれも、御招待にあずかりたいもんだね」といった。

「……………」

「ぶこちゃんはたまさかいったことがあるんだろう？」

「二三遍は行つたかしら……」

伸子が前崎へ行つたのはまだ家が出来たばかりで、門も垣根もない時分のことであった。昔の東海道に沿つた松並木の名残りが生えている崖にふみつけられた細道をのぼると草がぼうぼうしげ

つた平地に出た。そこに、ぽつりと一軒、瀟洒しょうしゃなスレート屋根の佐々の家が建っていた。両親と伸子と手つだいのは、一列になって草ぼうぼうの間をかきわけて進み、地境のしるしにめぐらされている竹垣の木戸もない間から入った。泰造が、ポケットの鍵束の中から、親鍵を出して、入口の堅牢なドアをあけた。そのときは、水をくみあげるポンプの電力モーターの馬力が足りないで、逗留している三日間、伸子と手つだい女とが草っ原を通って下りて行つて街道の漁師の家から井戸水をもらった。

箱根の連山が見晴らせるその家のヴェランダの椅子で、多計代は、そんな役に立たないモーターをすえつけさせたことをおこりつづけた。癩癩をおこしながら、泰造は自分でモーター室へ下り

て行つて、調べたりした。モーター室の上は、天井のコンクリートを利用して、快適な屋根のない亭になっていた。入口のドアの外に靴の泥おとしが鋳ものの鉄製で、面白いスコッチ・テリアの形をしていた。半地下の外壁に噴水のしかけがあつたりした。あつちこつちに泰造のそういう趣味がちらばっている。それは伸子を興がらした。けれども、モーターのことで居る間じゅう母がおりつづけていることは馬鹿らしく思えた。風景の晴れやかさや別荘のいかにも快適らしい外見と、多計代の不機嫌とを見くらべると、チエホフかゴーゴリの小説に諷刺的に描かれている細君のようで、ばつがわるかった。水をもらいにバケツを下げて街道の漁師の裏へ入って行くと、そこには半分裸のような男女の子供ら

がはだしでついて来た。どの児の髪の毛も潮やけで赤く、ばさついている。黙つてとりかこんで、水をくんでいる「東京の邸」の女を眺め、なお街道をよぎつて崖の下、細道の入口までついて来た。そこから奥へは入つて来なかつた。ものをいいかけても黙つており、笑いかけてもこたえない漁師の子たちの群といその崖上の西洋にあるような家、そこを出たり入ったりする自分の対照は、伸子に何となしあたりまえでない感じだった。しかし泰造も多計代も、その崖の下に駅から走つて来たハイヤを停めて、髪の毛の赤い子供らに囲まれながら、ひと騒動して出入することについて、ちつともばつの悪さは感じないらしかった。伸子はそういう場合はにかみからむつとしたような表情になった。多計代は、

伸子のそういう感じかたをいらざることに思つて、

「何が気の毒らしいことなんかあるもんですか。自分で力で建てたい家を建ててどこが悪いのさ、ばかばかしい」

そして、つけ加えた。

「大変妙な話さ。この頃は、何でも無産ばやりだけれど雇つてくれるものがなかったら、どうしても貧乏なものは働いて行くのさ。雇つてくれるものがあるからこそ食つて行けるんじゃないか。それを有難いとも思わないで……」

こういう話になると、泰造は、決して仲間に入らなかつた。ヴエランダでいねむりをしている風をした。

佃と別れて一人暮しをはじめようと決心した頃、伸子は前崎の

家に住めないかと思つて多計代にきいてみたことがあつた。

「おや、こんどは、あの家でも御迷惑じゃないと見えるね、御方便なこと！」

そういつてからすこしの間考えていたが、多計代は、

「おことわりだね」

と、はつきりいった。

「あすこは、私たちのために建てたところだからね。ベッドだつてほかにないんだし」

そういえば、前崎の家では洗面器にしる家族は一つところを使うようにだけ作られている。多計代にすれば、そういうこともいやなのであろう。伸子はいそいで、

「いいのよ、いいのよ、決して無理にお願いしているんじゃないんだから……」

と、自分の希望を撤回した。それは、伸子がまだ素子に会わない前のことであつた。素子とくらすようになってから、数年たつ間に多計代は一度も前崎の家へ娘たちを招ばなかつた。泰造が何かの折に、伸子もたまには素子さんと来てみればいいのに、といったことがあつた。すると多計代が、

「ごめんですよ。何をされるかしれたもんじやない、気味がわるい」

即座に本気な眼つきでそういつた。月日はそのまま過ぎて来ているのであつた。

伸子は、素子とつれ立って桜並木の通りから住居の方へと小道を曲りながら、

「招待されないのがかえっていいのよ」といった。

「わたしが、御秘蔵娘だったら、あなたなんか一日だつてつきあつていられないくせに……」

「それやそうだ」

前崎の家が、もしこんど多計代にとって激情からの難破をふせぐための一つの港となるならば、あの家にもいくらかの意味があった。多計代が反対の使い途を考えて、前崎へ行つたとは伸子に想像されなかった。

伸子は親たちと家屋や土地との関係を段々考えて行つて一種のおもしろい心持になった。泰造は、小規模に自分の趣味を示す前崎の家を建てたり、実務的に税のないうちにガソリンのいらぬヨーロッパ製の小型ビーンを買つたりした。けれども、佐々の家には一軒の貸家も、収入となる一カ所の地所もなかつた。それがあれば、ひとりでに儲かつてゆくというような家とか地面とかをためていなかつた。そういう点で泰造の生活態度は仕事に自信のある技術家らしい淡泊さだつた。多計代がむしろそういう点に用心ぶかさと積極性をもっていた。それにしろ十何年も昔、多計代がひどく意気込んで雪の日に見に行つて買った北多摩の地面は、四季を通じてそこから富士が素晴らしくよく見えるというのがと

りえなばかりで、地価さえろくにあがらず、今だに麦畑のままであつた。

その日は、素子の母の命日というので、素子が甘いもの好きであつたひとのためにおはぎをこしらえはじめた。御飯がすこし柔らかかに炊けすぎて丸めにくい。家じゅう三人の女が台所の板の間でさわいでいるとき玄関へ誰か来た気配がした。とよが、手を洗つて出て行つたが、眼のすわつたような妙な顔つきで戻つて来た。「——こういう方が見えましてけれど……」

水を拭かないままのうす赤い指さきで、方眼紙の小型ノートのしをむしつた紙きれを出した。太い鉛筆で乱暴に「黒色連盟

山田」と書いてある。

「……………」

素子も伸子も知った名前でなかった。

「なんだろう」

とよが、気味わるそうなひそひそ声で告げた。

「三人づれの方でございます——ぼうぼう髪をのばして……何だか人相のよくない方なんですけれど……」

素子が、少しおびえた心持を、おこったような顔の上にあらわして、

「なんだい！」

といった。伸子には、いくらか思い当るところがあつた。その時分、アナ・ボルということがいわれていて、黒といえばボルの赤

に對してアナーキストのシムボルであることは知っていた。そういうグループの人々が、丸の内辺の会社や有名な人々のところへ、寄附金を要求してゆくことが流行していることも知っていた。近年新しく小説をかき出している若い婦人作家がアナーキスト仲間の生活を描いている作品で、そういうことをよんだ覚えがあつた。

「わたし出してみる」

伸子が玄關へ出て行つてみると、たたきのところにとよのいつたとおり三人の若い男たちが突立っていた。どのひとの髪もぼうぼうとのびっぱなしで、じじむさいのをてらいの一つにしている高校生のようきたなかつた。どのひともどのところで丸くエリの立つた茶色だの黒だののルバーシ力を着て、よこれ古びたズ

ボンに下駄や靴やまちまちの足もとである。一人は太いステッキをついていて、それが先頭に立っていた。

伸子は、

「わたし、佐々伸子ですが——御用？」

そうきいた。

いく日も風呂に入らないでよごれたままの顔、おそらく、朝まともに顔も洗わないで出て来たらしい三つの青年の顔が、六つの眼を紫メリンスの前かけ姿でそこに現われた伸子の上にすえた。

誰一人挨拶の頭を下げず、荒っぽそうに、いかつそうに粗暴であるが、その眼のなかや口のはたにおさえきれない若者らしさや好奇心が浮んでいる。こういう若いよごれ、手荒さは伸子の知らな

いものではなかった。二十三歳の美術学校生徒である弟の和一郎のあるときの表情に共通な、はにかみの裏がえされた傲慢がある。伸子は、自分の側からも好奇心をうごかされながら、

「どういう御用なのかしら」

ときいた。

「——紙をわたしたんだが……」

「紙は見たけれど——あなたたちにお会いするの、はじめてでしょう」

「……………」

「あなたがた、アナーキスト？」

ステツキについている黒ルバーシカの青年が、

「そうだ」

と短く力を入れて答えた。

「そういう人たちで、うちへ来た方はあなたがたがはじめてです

……」

伸子は、どこかで読んだいいかたを思い出し、

「りやくということに來たの？」

ときいた。金を寄附させることを、アナーキスト仲間では掠奪という意味からか、リヤクということを思いおこしたのだつた。

よごれていることを自分たちの青春の示威と飾りにしているような三人の青年たちは、何となし、伸子のその言葉で動揺した。

「用は、わかってるじゃないですか」

ステツキをついた一人が、挑戦的に顎をもたげた。

「それや、読んでもるもの……」

伸子は、

「でも、わたしには何だかよくわからないわ」

紫メリンスの前かけをかけた膝を揃えて、式台から畳じきへ上る敷居に腰かけた。

「どうして、あなたたち、いきなりよそへ来てそういう要求をするの？……」

「そんなこと、はつきりしていると思うんだ。いまの社会は、俺たちが生きられるように出来てやしないじゃないか」

それはそうであるけれども、それなら伸子自身どういう世の中に生きて来ているのだろう。伸子は作家として暮している。女一人を生かす義務や責任をちつとも感じていない世の中を貫いて、伸子はその働きで、自分を生かして来ているのではないだろうか。「今の日本の社会がそうだから、青年は、こうしか生きる道がない」という主張をもっていらつしやるわけなの？」

「そうなんだ」

「——わたしには、やっぱりわかるようでわからない」

伸子は、真面目に考えこんで、じつと三人の垢だらけの若い顔々を見守った。

「私たちの一生って長いでしょう。社会の不公平だって長くつづ

くんだと思うわ、どうせ。そうだとすれば、その日その日、そうやって人のところからお金をとって来て暮していたって……結局、どっちの問題も解決しないじゃないのかしら。――」

ステツキについている青年は黙って伸子をにらんだ。すると、ズボンとはちぐはぐな上衣をシャツの上から着ている一人が、

「面倒くせえなア」

と、乱暴に髪なのびた頭を搔いてからだをゆすぶった。

「わかつているんなら、つべこべいわずに出したらいいじゃないか」

伸子は、さつと顔に血の色をのぼせた。

「あなたがた、自分たちをゆすり同然に扱っていいの？　乞食が

来たと思えば、黙ってお金だけやるわよ。あなたがたは、それとは、違うでしょう。少くとも主義というものがある以上、それについて、まともに話すということは、敬意なのよ。ゆするなら帰って下さい、ゆすられたりおどかされたりして出さなければならぬ。ないような金は、一銭だつてわたしのところにはないんだから……」

ステツキを持っているのが、

「まアそう怒り給うな」

と、すこし笑うような口元になった。しばらくどつちからも口をきかず、互いを眺めあつた。しみじみと眺めているうちに、このぼうぼう頭をしながらルバーシ力を着るような趣味をもっている

若い人々が、本当に何か一貫した主義をもつてこうして生きているのだと伸子にはだんだん思えないようになって来た。少くとも今伸子の前に並んでいる三つの若い顔のどれにも、苦悩の刻みめは大して刻みこまれていないように見えた。その顔々の上には、そういう風に毎日を生きている生活の習慣があらわれており、その習慣で身についたかまえがあるけれども、世間は紙くずが街頭をころがってゆくのを見るようにこの人々の生活を見ていて、うるさいときには少しの金をやって、追っばらつて来ているように思えた。そして、そういう関係もこの人々にとっては習慣のようになっているように思えるのであった。伸子はそこに社会の真の酷薄さを感じた。亢奮がしずまって、伸子は少しユーモラスに、

「どうも、あなたがたは、見当ちがいのところへいらしたようね」といった。

「自分で書いて暮しているんだから、お金なんてないのよ。それに、わたしは、面倒くさいからくれてやれ、という風に、あなたがたを見る心持にならないんです」

するとさつき、ゆするようにものをいった青年が、

「ふん」

と嘲弄した。

「詭弁でやがらあ」

伸子は再び沈黙した。自分が詭弁を弄しているとは思えなかった。伸子の内心にはおどろきと疑問がひろがりはじめていたので

あつた。こういう形で屈辱の立場に自分をおくに耐えるなら、どうして、生活のために何か一つの職業が見つけれないということがあるのだろうか。伸子は、黙ってまじまじと三つの顔を見た。ピーター・クロポトキンの「革命家の思い出」をよんだときの感銘が思い出された。クロポトキンは一ナーキストではなかったろうか。クロポトキンの「ロシア文学の理想と現実」を、伸子は、二度三度とくりかえして読んだ。そこにはよりよい人生にたいして燃えるような意慾がたたえられていた。人生と文学とを、人間のそのような精神の華として語る真実と美しさがみちていた。クロポトキンはアナーキストであつた。そして、今、目の前に並んでいる三つの顔。その三つの若い男の顔は、一つ一つ生れた故

郷はそれぞれにちがう田舎の相貌をもっているとともに、互いに共通な習慣的な虚勢でこちらをにらんでいる。だが、それは伸子に、これらの人々が、ただ自分たちをアナーキストと名づけているにすぎないような心持をおこさせるのであつた。

伸子は、三人に向つて丁寧にいった。

「どうか、お仲間の方たちによくいつておいて下さい、佐々伸子のところへ行つても金にはならないつて。——」

一寸ひっこんで伸子は、いくらかの小銭をもつてまた出て来た。「失礼ですが電車賃をさしあげます。きつちりよ」

郊外電車往復三人分、市電往復三人分。それだけの金をわたし。ステツキの青年は、黙つてそれをうけとつた。そして、

「おい、帰ろう」

仲間を促して二人をさきに玄関から出し、最後に自分が出て、入口の格子をうしろ手にしめた。

その青年が、仲間をさきに出したことや、荒っぽくなく、尋常に格子をしめて行ったことなどが、伸子の心につよい印象をのこした。自分と大して年もちがわない三人の彼ら。彼らの雰囲気はあらがねのように、いいもわるいもごたごただ。はつきりわからないところだらけなのは彼らばかりのことだろうか。わからないといえば伸子もよくわからなかった。三人の青年のいわゆるアナ―キストぶりはどうも納得出来ない。それなら彼らはどうしたらよいのだろう。真面目に働きなさい、というだけが今日の社会か

ら生み出された彼らのような心理にたいする人間らしい解答の全部だとは、伸子に直感されないのであつた。

伸子は、けさ佐々へかけた電話のことや、前崎の家をはさんで多計代と自分との間にある感情のへだたりなどについて思いあわせた。社会にある貧富の差についても、伸子は多計代のようにそれを当然なことと思えなかつた。それかといって、今歸つて行つたアナーキストといわれる人たちのように、ただ一つのものでも、あるところから無いところへ移し、掠奪したところで、すぐそのあとから無限に貧富の差を生み出してゆく今の社会の仕組みそのものがよくなるうとは思えない。伸子は、どっちにも荷担出来ない自分の心を感じた。どっちにも荷担できない心は、これらの二

つの態度よりも何かもうすこし、しゃんとして、見とおしのある方法があるのではなからうかと思う心持に通じた。こういう心もちの自分のようなものところへまでリヤクが来たということは、伸子に、つじつまのあわない、漠然とした苦しさで馬鹿らしさを感じさせるのであった。

伸子は、これまで自分について常にいわれて来ている一つの悪口を思い出した。それは伸子が食うに困ったことがなく、貧乏の味を知らないということであつた。あの三人の青年たちも、よりよりそんな噂をして、一つ行つてやれ、という風にして来たのだつたかもしれない。

日ごろ伸子は、自分につきもののようなそういう悪口に余り拘

泥しなかった。食うに困らずに育った、という偶然の事実、あ
る人々がいうように、人生がわからないことだと直訳されきれる
ものでない。そのことを伸子は確信していた。食うに困った覚え
がないということが、ただ人間を低めるだけの意味しかないもの
だとも信じなかった。さもないなら、大昔から人間の善意がどう
してあんなに熱心に、貧困による不幸や暗さとたたかいつづけて
来ただろう。ユートピアを考えたひとは、誰だって、まず第一に
貧困というものがない社会を想像した。

無産階級、プロレタリアという言葉は、文学の分野にも生れて
来ていて、伸子はその字を賑やかに新聞や雑誌の上で見っていた。
何年前か、吉野作造が帝大主催の講演会で、サン・シモンとフー

リエの話をしたことがあった。その頃まだ袴をはいていた伸子は、非常な興味をもつて講演をききノートをとった。それから月日がとんで、無産階級、プロレタリアという声がきこえはじめた。伸子には、今の社会で貧しい人たち、労働者を無産階級、プロレタリアということとはわかったが、たとえばいま帰って行つた人たちのように、金もちでもない自分のようなもの、自分で働いて生活している自分を、無産階級と対立する存在のように見なされるといふことは納得出来なかつた。労働者の娘でなく、食うに困らないからといって、伸子は自分が人間としてよく生きようとしている意志をその人々の前に憚^{はば}つたり、はじたりしなければならぬとは思えないのであつた。

紫メリンスの前かけをしめて、考えこんでいた伸子は、上りが
まちに腰かけたまま、うしろの襖が細目にあけられたのに気づか
なかった。急にそこがひろくあいて、

「ぶこちゃん！」

不安にされたような素子の声で、伸子はかえってぎよつとした。

「どうした？」

伸子は首だけあおむけ、

「どうもしない」

といった。

「帰ったんだらう？」

「帰った」

「ぶこちゃん、なかなかいいたんかきったじやないか」

その言葉は伸子にたいへん意外な感じを与えた。

「——たんかなんかにきこえた？」

「そういうわけじゃないけどさ。——生意気じゃないか、ひとのうちへ来て脅かすような声なんか出しやがって——」

「あのひとたちにすれば、はじめっから、たのみに来たんじゃないんだろうから……」

二人は縁側に出してある籐椅子のところへ戻った。

「あれでいいのさ。よすぎるぐらいだ。くせになってしようがないやしない」

素子と伸子との生活で、伸子は子供らしいことをこわがった。

夜道だとか、妙なきのこ、いも虫、けがや死人の話、怪談。そういうものをこわがった。だが、夜中に妙な物音がしたり、きょうのような人が来たりすると、素子は亢奮して上氣した顔のままその場を動かず、別なとき臆病な伸子が出て見にゆくのだった。

素子は、あの三人を追っぱらった、という風にいうが、じかに目の前に並んだ三つのきたない若い顔々をみ、ルバーシカの下に三つの胃袋を感じ、三人の若い男の体臭さえかいだ伸子にとって、あの人々は、おっぱらわれなかった。伸子に、のこして行つたものがある。のこされたものは、従来伸子たちの生活になかった一つの刺戟であつた。

「——とんだ飛び入りが入っちゃつた。おはぎ、出来てるよ、ど

こで食べる？」

素子は、伸子をいたわるようにいった。

「ここにしない？」

運ばれた皿の上でおはぎをゆっくり箸でちぎりながら、伸子は、
「なんだか妙な心持がする」

といった。

「みんなこんな気持がするのかしら」

「――何が？――ああいう連中に来られるとかい？」

「うん」

「――税みたいなものだと思ってるだろう」

「そうかしら……」

関東に大震災があつた年の初夏、軽井沢で愛人と共に縊死した武島裕吉という有名な文学者があつた。人道主義の作家で、無産者の運動がおこつてから北海道に持っていた農場を小作人にただで分譲したりした。

伸子はその人の作品はほとんど全部よんでいた。豊富だが、感傷的なものの感じかたには肌があわなかつた。特に死後に発表された女の友へ送つた書簡は、その甘たるさで伸子をおどろかせた。ちようど佃との生活が破綻しはじめているときにおこつたその作家の死は、伸子をつよく衝撃した。その時分伸子はただ武島裕吉の性格や恋愛、貴族的なその環境との矛盾というところにだけ、死の原因を理解していた。伸子は、いまその武島裕吉が書いたも

ののどこかに、しかも一度ならず、金銭の要求に來られる者の立場から感想がもらされていたのを思い出した。文句を思い出すことは出来なかつた。けれども、たしかにそれはあつた。

素子があやしんで注目するほど、伸子は念入りに皿のおはぎをいくつにもちぎりながら、それを食べるのを忘れていた。武島裕吉の生きかた、つまりはその死にかたにも賛成していない伸子は、いまの自分の心にその武島裕吉が連想されたことがいやであつた。

十五

「ぶこちやん……動坂へ行く約束してあるんだらう」

「約束ってほどでもないけれど……」

日曜日の朝、素子がいいだした。

「行つといでよ」

「ええ……でも、行つたつて……」

「ピアノでも弾いて来た方がいいんだ」

素子がそういうには理由もあつた。土曜日のロシア語の稽古に浅原露子が来たとき、素子は最近のニュースという工合にして、前日来た三人のぼうぼう頭の青年たちの話をした。すると露子が、いつも変わらないふつくりとして沈着な表情で、

「どちらがお会いになりましたの？」

と、二人を見くらべた。

「それや、もちろんぶこちゃんですよ。私なんぞは無名の士じやありませんか」

「お金おやりになりました？」

「やるいわれなんかあるもんか！ さすがのぶこちゃんも堂々とことわりましたよ」

落子は、口元をほころばして伸子を見た。伸子はその落子の顔をじつと見かえしていたが、

「お金をやったとか、やらなかったとかいうだけで結着してやしないでしょう？」

視線を落子の上にすえた。

「それやそうさ」

「まして、ぶこの武勇伝なんかじゃありやしない」

「……………」

伸子には全くどういい現わしていいかわからないやな後味があつた。

そういう伸子の状態を、素子は、神経にこたえた結果と解釈して、気まぎらしに動坂へでも行ってくればいいとすすめるのであつた。

月曜になってから、伸子は、八重洲町にある泰造の事務所へ電話して、昼すこし前に出かけて行つた。イギリス風の料理ずきな連中が援助してその頃開業した小じんまりした店があつた。そこでお昼をたべよう、ということであつた。

行ってみると、泰造はまだ机からはなれないで、伸子は事務所に通された。いろいろな大理石の見本だのちようつがい蝶番だのの見本がつみ重ねてあるわきに、高いファイル棚があり、泰造はテーブルの上に青写真をひろげて調べていた。その日はモーニングを着ていて、眼鏡のはしのところを左手の指でつまむような手つきをして青写真をのぞきこんでいる。わきに白っぽいブルーズを着た若いひとが両ひじをテーブルについて、何か説明していた。伸子が入ってゆくと、ブルーズのひとは、姿勢を改めて丁寧に礼をした。だが伸子の方はその人の名も知らなかった。入口の広いところで、昼食に立ってゆく何人かの人にすれちがったときも、その人たちはほとんどみんな伸子にあいさつして出て行った。伸子

の方でその人を見わけたのは、たった二人か三人きりだったのに。事務所が仲通からこちらに引越して拡大されてから、伸子はあんまり父の事務所へ出入りしなくなってしまった。名をしらず顔さえ見おぼえていない人々から、泰造のうちの者という意味で頭を下げられるのは伸子をいぐるしくさせた。

青写真の用事がすむと、

「さ、出かけましょうか」

顎のところに大きいほくろのある人に、来客のことをうちあわせると、泰造はさっさと事務所を出て、エレベーターのところへ行つた。そういう泰造の動作は、ずんぐりなからだににあわず敏捷で、伸子はいそいでついてゆきながら、

「お母様、いかが？」

ときいた。母の様子がききたくて、伸子は出て来たのであった。

「ああ、この頃は、夜もねむれるようになったらしくて大助かりだよ」

「お父様、まだずっとあつち？」

「落着いて暮してみるといいね。駅を下りると、空気が全くちがう。第一、朝の心持がすてきですよ。この頃はヴェランダで、はだか日光浴さ」

「お客様なし？」

「絶対おことわりだよ。さもなければ、行っている意味がないもの。あつちから、通っていると汽車の時間があるから、切り上げ

るのにもかえっていい工合ですよ。たいてい七時すぎにはつくからね」

食事のとき伸子は、半分ふざけて、

「そういえば、お父様、前崎のモーターどうして？」
ときいた。

「もういいの？ 騒動なさらない？」

「うん、大丈夫だ」

泰造は、よっぽどこりたと見えて真面目に答えた。

「ポンプやの計算ちがいで、結局二馬力のにして、やっとよくなつた。はじめっから俺はそれでなけれやあぶないといつていたのに——」

事務所へかえる前、泰造は丸ビルへよつて髭剃りあとへつける化粧水を買った。

「前崎でいるようなものないかしら。——わたし、これから動坂へ行くから、もしあつたら届けてよ」

「何にもいりませんよ」

泰造は例の、踵の音の高く響く足どりで横浜植木の店のなかをひとまわりした。あてにして見に入つたものがないらしかつた。

「ないの？」

「出ていないね、きょうは。前崎の玄関のところの花壇にバラを植えようと思つてゐるんだが……」

バラというと、伸子は父の誕生日にもつて行つたきれいな黄色

と白のバラの花を思い出した。つづいて越智が思い出された。

「お母様いつ頃おかえりになる予定なのかしら……」

「珍しくおちついているよ、ゆつくりいるがいいのさ」

「二人でいらっしやるからいいのよ、きつと。お母様だって落着けるだろうし、お父様ったらひまがなさすぎるから駄目よ、東京ばっかりだと」

事務所のあるビルディングの入口で泰造とわかれて伸子は動坂へまわった。

門を入れてゆくとピアノの音がしていた。内玄関の方へまわつて、女中部屋の窓の外を通る伸子を見つけて、

「あら！ 伸子さまがいりました」

という声がした。ガサガサと急になにか包むこわばった紙の音がして、一人が部屋の戸をぱたんとしめた。伸子はそのまま上つてピアノの音がしている客間のドアをあけた。和一郎が一人で弾いているとばかり思つてあけたら、出まどの下の長椅子に、従妹の小枝がかけて、ピアノのよこに、和一郎の友人の松浦が制服姿で立つて譜をめくつてゐる。小卓の上に紅茶茶碗や空になつた菓子鉢がとりちらされたままあつた。

「あら、伸ちゃん！」

小枝が来年女学校を卒業する、すらりとした姿で立ち上つた。

「しばらく！」

「やあ、来たの！」

和一郎も制服をきていた。松浦が、もちまえの几帳面な挨拶をした。

これは、月曜日の午後として、伸子の想像していない客間の光景であつた。あけ放された出窓から、飾られている大理石の彫刻のわきまで枝をさし入れそうにしげっている楓の若葉照りをうしろにして、小枝の血色と純白のブルーズとは生氣にみちて美しい。小枝が生氣にみちた少女であるだけ若い人々の間には自然の雰囲気がかもされていて、ふいと、その中に入ってしまった伸子は場ちがいな姉として自分を感じた。

「冬ちゃんどうしているかしら……」

泰造の妹に当る母が亡くなつてから、小枝の姉になる冬子が母

がわりとなつて家の主婦役をしていた。おなじ従妹でも伸子は年の近い冬子の方によけい親しくて、佃との紛糾に耐えがたくなつた頃、冬子が療養生活をしていた鎌倉の家のそばに、二間ばかりの家を見つけて貰つてしばらく暮したりしたこともあつた。小枝は行儀よく、

「あいかわらず」

と答え、思いがけず伸子に会つたのをきまりわるそうに、和一郎に視線を向けた。和一郎や松浦がいつ学校へ行くのか見当のつかないような通いかたをしているのは、学校が美術学校というところもあつて、普通のことのようになつていた。

和一郎は、ごく自然なとりなしで、やがてシューベルトの歌を^{リード}

弾き出した。松浦が口ずさみから段々本気になって、声量とはばしいが正確で地味なバリトーンで歌いだした。和一郎は中学を終って間もなく、そのころ一ツ橋にあった上野の音楽学校の分教場でピアノの稽古を始めた。和一郎はいい耳をもっていた。けれども、分教場の教師が必要と考えるだけ規則的な練習をしなかった。多計代がその教師に会いに行つたとき、その点が批評された。いい耳をもっているのだが、もつと規律的に練習しなければものにならないといわれたのであつた。帰つて来て、それをみんなに話すとき、多計代はむしろ教師を非難した。規律正しさだけで才能はのびやしない、どうせ分教場の先生をしているぐらいのピアノリストだから、いうことに見識がない。——そういう風に話した。

和一郎のピアノは、いつの間にかだらだら中止になって、自己流の素人芸に落着いてしまった。

佃との生活にもまれていた伸子は、間をとばしてところどころ、その話を多計代からきいた。そして多計代とは反対な考えかたをもった。多計代は、芸術的な才能とか天稟てんぴんとかいうものにたいしてひどく架空な考えをもっていた。自分が日本画の稽古をはじめたときも、しばらくすると師匠が平凡すぎるといって、中絶してしまった。現実には、やつと絹に牡丹の写生が一枚描けるようになったばかりのところだ。——多計代は自分や自分の生んだ子どもは一人のこらず、なにか特別な力をひそめて生れついているように思っているようだった。それをのばす方法は誰よりも自分

が直観している、と思いこんでいるようだった。けれども実際には伸子にしろそういう母の判断から生じるすべての細目に力いっぱい抵抗することで、やっと現実に分らしい生きる道も辿りつづけているのであった。

松浦はいくつものリードをうたった。それをしばらく聴いていてから伸子はのどがかわいて茶をいれに食堂へ行った。誰もいないその室の通路に面して北側の腰高窓がみんなあいていた。それは不用心だった。そればかりでなく、掃除しっぱなしでレース・カーテンが一方へ引きよせたままになっている。いかにも、男の子だけが留守をしている家のぞんざいさであった。内側が赤塗りの大きい鮎桶がその中に笹の葉だけをのこして、皿や茶碗と一緒に

にまだかたづけられず真中の大テーブルの上にひろがっていた。そのテーブルのはしに送り状を紐にまきつけた三越からの届け品の細長い箱が二つ、ひよいと抛^{ほう}りのせたように斜かいにのつてゐる。

伸子は立ったまま、この室内の光景に目をとられた。それは異様な感じだった。ただ主人たちが留守の家のがらんとした空気ばかりでない異様な感じがした。室の空虚さと、空虚にかかわらずそこに見えない力で運転している浪費の姿がまざまざと感じられて、伸子は異様な感じがした。

この生活は誰のもので誰が動かしているのだろう。さつき、丸の内で一時間あまり一緒に過して来た父が主人なのだから、これ

が父の生活だというには、父とこの生活との間に距離がありすぎた。父は父ではつきり自分としての生活の輪をもっている。伸子は、くりかえし異様な感じにうたれた。この生活の雰囲気には、人と人が互いに繋つながって何かのために生きて動いているというように、人々が何かによつて生かされ、動かされていて、それについて無意識でいるような奇妙な無人格性がある。その無人格性の感じは、瞬間のうちにも追つてゆくと底なしの深さに深まって感じられる空虚さであつた。

空虚感のはうずめられなければならないというように、ぼんやりした哀感が湧いて来るのを伸子は感じた。高校生の保がメデイト瞑イシヨ想と自分の部屋の入口に貼紙するところもち、そのころも

ちの動機は、何と微妙に、しかもどつきり、ここの家の生活の明暮れにあることだろう。伸子は、ベルを鳴らした。この間電話をかけたとき、はア、はアとばかりいつていた新しい女中が、ドアから首を出した。

「ここをかたづけてね、——それからお湯わいているかしら、お茶がほしいんだけど」

「はア」

「保さんに、お鮎とつてあるの?」

「——さあ」

「ここへ出したつきり?」

「はア」

「ともかくかたづけ——おときさんはいるんでしょう？」

「はア」

ときは、台所専門で、もう二年ばかり佐々の家にいた。

「じゃ、そういつておいて頂戴、今晚は、こちらで御飯たべてかえりますからって……」

「はア」

四時すぎて、保が帰って来た。

「ああ姉さんもいたの！」

保は、和毛（にこげ）のかげの濃い上唇をうれしそうにゆるめて、こまかく詰った白い歯なみを見せながら笑った。そして、からだを半分

廊下にのこしていたドアをひろくあけて、客間へ入って来た。

「この前来たとき、保さん珍しくおそかったのね、雑誌つて、どうした？」

「そろそろ相談している——別にいそがないのさ」

「それがいいわ、出来たら見せて」

「ええ。是非みて貰う」

保のために、おやつを探して来て、客間に戻った伸子は、何となしきつきまでとは違った空気がそこに出来ているのに心づいた。制服をカラーなしで着ている松浦と低い白カラーをつけている保とは、指人形の話をしていた。保は来年学校の記念祭のとき、人間の指人形で芝居を出そうと思っているらしかった。文丙に入学

した第一年の記念祭のとき、どういう題だったのか、保は坊主になつて、フランス語の動詞の変化をお経代りにして大好評だった。兄よりも松浦よりもよこたてに大きいからだのすこし窮屈になつたズボンの膝を行儀よく椅子にかけて、保はそんな話をしている。「ジユスイ ザーレ、テユエ ザーレってやったの？」

つや子が宿題で動詞の変化を諳誦するとき、小さい女の子らしく甲高い声をはりあげる、その口真似をして伸子はふざけた。

「小枝ちゃんの方は？ ジユスイ ザーレはやらないでいいの？」
「随意科なの」

きちんと学校へ出た保が帰つて来てからは、若い三人の話題もちがつて来た。

保は、ごくたまにしかピアノを弾かなかったし、歌は全然うたわなかった。

「外で、キャッチボールでもしたら？……もうまぶしくないわよ」
そういう遊戯ならば保も仲間になった。伸子は小枝の方を見て、
「お気に入った樹があつたら、のぼってもいいのよ」

と笑った。小枝は樹のぼりがすきで、うまいという評判なのだった。小枝は、時計をみたり、和一郎の方をそれとなく見たりしていたが、

「わたし、そろそろおいとまするわ」

と、立ちあがった。小声で和一郎に何かいつていて、和一郎も、一緒に出かける様子だった。

「僕も、そこまでゆきますから……」

松浦が追っかけるようにして、いそいで靴をはいている背中越しに、伸子は、

「和一郎さん、おそくならないうちに帰っていらっしやいよ」といった。

「わたし、夕飯すぎまでしかないから」

「ああ」

「お留守のうちだけは、ね」

「姉さん、大丈夫だよ。心配しなくても」

必ず帰るという意味なのか、うちの方は大丈夫だというのか、どっちを心配しないでもいいのかわからないようにいつて三人は出

て行つた。すらりと背の高い、黒い絹靴下を襪ひだの多い短いスカートの下から見せている小枝を真中にはさんで、制服の和一郎と松浦とが石じきを行く。その後姿が、伸子の駒沢の家の玄関へ来た三人の青年たちを思いおこさせた。和一郎も松浦も、頭をクリクリの一分刈りにして、古びてよごれが光る制服、制帽でいる。そして、ポケットにろくな小銭ももってはいない。けれども、この青年たちとあの三人と、なんと内容のちがう生活だろう。石じき道を垣根について見えなくなつて行く三人の生活は、伸子に空虚を感じさせた。駒沢の家へ来た三つのぼうぼう頭とよごれた若い顔々が、それならば、充実した新しい生活を感じさせたかといえ、そこにも張りこの虎めいた空っぽな響があつた。

保は、畳廊下においてある洋服ダンスのところでキチンと紺紺の筒袖に着換え、手と顔を洗って、まだ客間にいる伸子のところへ戻って来た。

「きょう、保さん、いそがしいの？」

「そうでもない」

「じゃ夕飯まで話さない？ わたしきょうは早くかえるのよ」

「ちようどいい。僕は夜は少しすることがあるから……」

伸子は、保の仲間がこしらえようとしている雑誌に強い関心があつた。

「和一郎さんも中学四年ぐらいのとき、雑誌をやったことがあるのよ、じきやめちやつたけれど。——あなたの、どういう仲間で

やるの？」

「ほんの三四人……気のあつただけでやろうっていうの」

「どんなひとたち？」

「——姉さんにいっても知らない人ばかりだな」

考えていて、保は、

「姉さん、東大路、知っているでしょう？ 外交官の方の子供が、やっぱり一緒に雑誌をやる」

といった。東大路篤治といえば、人道主義の作家として独特な存在であつた。そして、近頃、九州の奥に理想村をこしらえて、そこにある河中の岩を、ロダン岩と名づけ、そのロダン岩にもたれている東大路の羅漢に似た顔の写真が雑誌に出たりしていた。

「そのひと、やっぱり叔父さんの弟子なの？」

伸子は、東大路のあんまり空想的な理想村の考えや、自分のぐりへひとを集めているその気分、疑問を感じているのであった。

「特別そうというんでもないと思う——だいたいこんど雑誌やるのは、主義やなんかのためじゃないんだもの」

それは、保の日ごろの気持からも推察された。

「それやそうでしょう。——でも、……どういうの？　こういう風につくりたいという方針はあるにきまつてるわ」

「僕たち、人に見せるためや威張るために書いたものでなく、本来に自分の心を追究して良心のために書いたものを集めようと思

つてる」

「——題、きまつた？」

「ううん」

保は首をふった。

「まだ……」

「その三四人のひとだけ書くの？」

「そうしようと思つてる」

「ほかのひとに書かせないの？」

「もちろん書かせたつていいんだけど——」

癖で、紺緋の大きい膝をすこしゆすりながら、保は柔らかなぽつてりした上まぶたの下に眼を三白のようにした。

「みんな、すぐ猛烈に議論するんだもの、相手を一生懸命にまかそうとばかりするんだもの——」

「……………」

「こないだも、僕、佐々は馬鹿だ、つてみんなにいわれた」

保のそういう声のうちには、友だちにたいする反抗よりも、うにいえない悲しみがこもっていた。伸子は、思わずその顔をのぞきこむような心になった。

「どうして？」

熱心にきいた。

「僕は、調停派なんだって。……佐々は生れつきの調停派だつて

——」

「それは、佐々はバカということになるの」

「そうらしい」

ちつとも皮肉なところなしに保は肯定した。

「調停派って——」

社会運動の歴史も知らない伸子には、どういう意味で高校の学生たちがその言葉をつかうかわからなかった。しかし、字の上から判断して、調停の意味は、だいたいわかる——、

「保さん、そんなに調停するの」

すこし笑って伸子がきいた。保は、

「そうしようと思わなくなつて、そうなつちやう」

困惑したようにいった。

「どっちの議論だって、よくきいてみて、相手に勝とうとさえ思わなければ、みんなそれとしては理窟があるんだもの」

「それやそうかもしれないけれどさ……」

伸子は妙な顔をした。保のあの不思議に執拗な「公平」がまた出て来た。

「だって、——議論なんてものは、真中に一つ問題があつて、それをはつきりさせるために起るんでしよう？　だもの、てんでんばらばらに、一つずつの議論がそれとして理窟をもっているというのが眼目にはならないんじゃないの。中心の問題にとって、正しいとりあげかた、正しい解釈というものが当然ある筈じゃないの」

「うん」

「だからさ、正しい結論が出るまでの議論には、見当ちがいなのもあるわけでしょう？　そして、それはすててゆくのよ。みんなそれとして理窟がある、というようなのは、変だわよ。——そう思わない？」

「……………」

「保さんが、みんなの議論してるとき、あれもこれもそれとして正しいなんていえば、それは調停派だか何だか、ともかくおかしいことだし、間違っていると思うわ」

保は一層大きく膝をゆすりはじめた。そして、平らかな上まぶたの下からほとんどおこったように苦しく圧縮された視線を伸子

の上に射かけた。

「僕がばかだつていわれたときは、暴力論だったの」

「……………」

話がこういう風に展開したことは伸子にとって不意うちであった。伸子の心に革命、赤露、社会主義というような字が次々に浮びひらめきすぎた。

「人類のためよりいい社会をつくるというんなら、なぜそのために暴力なんて使わなければやらないのかなあ。——僕、どうしたって暴力ってわるいもんだと思う」

保は、訴えるようにつぶけた。

「いいことのために、わるいことをするって、まるで矛盾だと思

うんだ。よくないことは、どういうためにつかつたてよくないと思う」

やっぱりそうだった。伸子はそう思った。保でさえ、伸子の知っているより遙かにどっさりのことを、仲間と話し、考えあつていたのだ。盟休した二高の学生たちばかりでなく、みんながこういうことを話している。伸子はそれらの青年たちに対して羨望の感情を抱いた。現在まだ続いている問題だと見えて、保はくりかえし、

「僕にはわからない」
といった。

「いいことのためには、絶対にいい方法をとるべきだと思う」

いい方法。——いい方法——。佃との生活が破れかけたところから、離婚してしまうまでの数年間伸子はどんなに、その「いい方法」をさがしてもがきつづけただろう。伸子は善良さと気のよわさと両方から、佃と自分の生活の破綻を何とかして平和に解決したいと思った。出来るだけどちらも傷つけることなく、失敗したといつても、もとは愛情から出発した生活の終りらしく、その悲しみにもどこかに美しさのある調和で終らせたいと、どんなに心を砕いたろう。だが、現実にはそれは可能でなかった。最後に佃は伸子を憎んだし、伸子は佃を嫌悪した。そこまで行かなければ、解決しなかった。そこまで互いをむしりあわないで生活の破綻が救われるものであったのなら、初めから佃と伸子との生活に、そ

れだけの深い離反は生じなかったわけであつた。伸子はこわさにぎつしり両眼をつぶつて、がむしやらに、ひたぶるに、佃との生活から身をもぎはなした。万事が終つて何年かたつたいま、伸子は、しみじみと理解しているのであつた。夫婦の間の衝突でさえも、それが本質からの原因をもっているものなら、決してものわかりよく手ぎれいに解決することはあり得ない、と。互いにもものわかりよく、手ぎれいに解決されるくらいなら、はじめからそんなに衝突しないですむだけの互いの理解がある筈なのだから。伸子は、離婚などということだつて、いわば一つの暴力的なことだと思つた。そういう意味で自分が暴力的だつたのが、わるかつたと思つてゐるだろうか。伸子は、それは避けがたかつたこととし

て、その道を通じて生活の展開の可能がつけられたという意味で、自分のしたことを否定していなかった。やましく感じる気持はなかった。

伸子は、自分のその実感を、保の問題にあてはめた。

「わたしには、いろいろなことがわからないけれどね、いい方法って……保さんのいいっていうのはどういうのさ」

「絶対に正しい方法」

伸子は、また新しい不安を覚えた。保は、どうして、いつも、そして何についてでも、絶対ばかりをいうのだろう。

「絶対に正しい、いい方法なんて——」

困ったように、確信なさそうに、伸子は横目になりながらつぶ

やいた。

「いつでも、何にでも絶対にいいなんて、そんな方法ある？」

ユーモラスな気になって伸子は、

「薬の広告じゃあるまいし……」

といった。

「保さんの、さっきの、どの議論もそれとしては理窟をもっているっていうのと、いまの絶対にいい方法でなければいけないっていうのと、ちよつとみると反対みたいだけれど、同じなのね、保さんの考えかたって——わからない」

ものごとを考えるとというと、具体的にそこにある問題からではなくてなんでも抽象してしまう保の方法をそれが執拗であるだけに

伸子は不安に感じた。

「保さん、そういう話、越智さんとしたことがあるの？」

「すこしある」

「なんてつてた？」

「——僕の考えかたは、純粹だつていつていた」

「……………」

純粹！ 何ていいかげんのにげことだろう！ 伸子は越智に

対して、いつも湧く忿懣ふんまんを新たに感じた。越智は、青年たちが

自分たちの生の問題としてそういう議論にも熱中するその真情がつかめるような人物ではない。現代の青年はそういう議論をする、ということだけを問題にする能力しか持っていないやしない。伸子は

くやしそうに、

「越智さんなんかいいかげんに卒業してしまわなくちや駄目じやないの、保さん」

といった。伸子は自分の生活態度を、破壊のための破壊をこのむものだといって、多計代に一つの偏見を与えた越智をゆるすことが出来なかった。越智が多計代にたいしてとっている態度はなんだろう。ああいういきさつは、保の純粹をけがさず、周囲のすべての関係の純粹をみださないことだともいうのだろうか。伸子は、保の肩をつかむように、

「あんな人にかれこれいわれて、それがなにかだなんかと思つてたら、それこそんでもありやしない。——あんな……」

偽善的などいいかけたその先は言葉が出なくて、伸子はただく
い入るように保の眼をみつめた。伸子のそういう激しい言葉づか
いにたいしても、保はあらわな反撥も、好奇心も示さず、じつと
平静にきいている。伸子の性質にとって、それはもどかく苦し
かった。保は、いつも素直にきいている。でも決して自分という
ものをあい手に向って解放しない。伸子のいうことも一つ一つと、
不思議な粘りづよさで漉して、きいている。むしろ心を動かされ
ることを警戒してきいている。伸子は、そういう保に向って自分
の心が溢れるとき、まるでせまい壺の口から一滴ずつ油でも流し
こんでいるときのような息苦しさを感じるのであった。

「ね、保さん」

紺緋の太った膝に手をおくように伸子はいった。

「いいことっていったって、そんなに永劫不変な型に入った絶対のものがあり得る？　生活は絶えず動いているのに……あとからあとから新しい条件が出来て来るのに——。いいことっていったって、それは、わるいとわかっていることを否定したり、それをなくしようとして闘ってゆく、そこに生れるんじゃない？　いつだって、そうだわ、実際は。……」

自分がそういったことで、伸子自身にも一層現実がはつきりした。本当に！　いつだってそうだ。いいことは、わるいこととのたたかいの間につくられて来るのだ。

「まちがった力をどけなければいいことはあり得ないとしたら、

なんで正しさを防衛するの？ 右の頬つぺたをぶたれたら、左の頬つぺたまで出す？ わたしはいやよ。保さんは？」

「そういう場合なら、僕だつて出さないと思う」

「でしよう？ だもの……」

しかし、保は内心で、そうでない場合もある、とがんこに考えているのだ。それが伸子によくわかった。

こうして何かいっていればいるほど、保の不思議に抽象してものを考える癖につきあっているようで、伸子はますます落着けなくなつた。伸子はその考えかたを否定していうにしろ、つまりはそれも抽象的な話であることはおなじなのだから。——もつときついシュツ！ と泡の立つような話。保がどうしてもむき出しに

自分の感情の底をわらずにはいられなくなるような、そういう人生の話。伸子はそれを求めた。保の人間性の根っこをつかまえて、その上皮にはりめぐらされたあいまいなものをひといきに破ってしまう、そういうものこそ保に必要なのだ。

なにが、そういう種類のことがらだろう。伸子は、自分たちの生活のぐるりからそれを見出そうとするしかなかった。越智と母との普通でない交渉。それについて保と自分とでしゃべる勇氣は伸子になかった。それならば、きょうのように、美しい小枝を中心に兄が見せた一種の雰囲気、弟であり、女の子の友達のない保がどう思ってみたか。伸子にはいうまでもなく保の微妙な心もちが映っていた。和一郎が保と正反対の飄然さをつよくあらわし

はじめて、余りうちで暮さないようになったのは、弟である保から感じる圧迫感の反射だということを、保が知ったとして、保がどうなろう。――

客間のなかはずつかり薄暗くなった。青葉はずれの鈍い光が、四角い紫檀の卓の一角と、白い支那焼の灰皿のふちを細く光らせているばかりで、奥の椅子にふかくかけている保の顔は、伸子のところからほとんど見わけられなくなった。窓ぎわにいる伸子は、逆光でぼんやりシルエツトを浮き上らしたまま、二人の姉弟は灯をつけないその部屋にかけていた。保をむき出しにしてやるちらが自分にないということ伸子は自分に承認しかねる撞着を感じながら……。

十六

多計代は前崎の家に二十日ばかり逗留した。六月も二三日で終るというころ、伸子は多計代からのよみにくい草書の速達をうけとつた。例の好物がなくならないうちに、と書かれている。前崎へゆくと、いつも国府津でかまぼこを買つて来るのだつた。

伸子は、茶の間でそのハガキを見ながら、

「かまぼこもらつて来ようかな」といった。

「あすこのかまぼこ、うまいにはうまいが、義太夫でいえば呂昇

といったところだね」

そして、素子はその趣向を批評するように、

「いかにも動坂の人たちの氣に入りそうな味さ」

といった。全く動坂の家の空氣には、渋いところや、粹なところ、そういう味はなかった。多計代の着物や帯のこのみも大味で、縞でも多計代は大名縞を、娘の伸子の方がこまかい吹きよせの縞をきるといふ風なちがいがあつた。

動坂の家へ行つて、内玄関を上りながら、やっぱり母が歸つてゐる生活はちがうと、伸子はおどろいた。どこがどうともいえないうしまりが家の空氣についていて、留守中來たときの、あの吹きぬけの感じはなくなつてゐる。家じゆうに、近ごろずっと無かつ

た落着きがある。それは、多計代が前崎から帰って来て、割合うちに落ちついている気分を映している。伸子はうれしい気持で、食堂へ顔を出した。大テーブルの正面の多計代の場所はからで、紫しぼりの座蒲団だけがあった。

伸子は、

「こんにちはア」

と、大きい声で叫びながら廊下を奥の方へ行つてみた。

「おかあさま、どそこ？」

「来たのかい？——こつちだよ」

階段下の小座敷から多計代のへんじがきこえた。三尺の茶室風の襖の奥に四畳半がかくれ部屋のようについていて、そこに多計

代の箆笥や鏡台がおいてあつた。家じゅうでたった一つの炬燵の炉も切つてあつた。

「いいの？」

「ああ」

唐紙をあけると、鏡台の前に坐つて、髪を結び終つたばかりの多計代が背中に白いきれをかけたなり、櫛をふいていた。前髪のかくらしのしんに入れる毛たばを揃える新聞紙がわきにひろがつている。ひとりでゆつくり髪を結つた女の気分が小座敷にみちている。それは、伸子に非常に珍しかった。

「坐つていい？」

「ああ」

多計代は、ひろがっている新聞紙をたたんで鏡台のわきに伸子の坐るところをつくった。

「おはがきありがとう。かまぼこ、まだ大丈夫？」

「伸ちゃんの分は一本別にとってあるよ」

「そうお、ありがとう」

多計代は、いくらか目立ちはじめた白い髪を、黒いチツクで塗り、かくしていた。そういう髪を結ったばかりの多計代の指には、ところどころ黒チツクのよごれがついていた。耳にも掠ったような黒さが見える。伸子は、そこにあったちり紙で、母の耳の上についている黒いチツクのあとを拭いてやった。

「前崎、よかったでしょう？ この間、ちよつと事務所でお父様

にお会いしたとき、随分よさそうにいつていらした」

「こないだうち、毎晩、なにをとつていたのか沖にずりつと漁い火さりびが見えてね、ほんとにあの景色はきれいだった」

伸子は、複雑な意味をこめ、

「行つてよかった？」

ときいた。多計代は、それをごくあたりまえにうけて、

「例によつて三四日眠れなかったけれど……いまあつちはいいよ。ああそういえば、伸ちゃん製材所のあつたの知っているだろう？

カギ半の裏に……」

ふるい東海道に面し、海を見はらす小高いところにあるカギ半は前崎の雑貨店で、炭や味噌醤油もあきなつていた。

「覚えているわ——みかん畑のそばの」

「あすこに火事があったよ」

「まあ珍しい……海の水かけて消した？」

「村の手押しポンプが出たりしてね、びっくりした」

多計代は、櫛のしまつをして抽斗をしめると、束髪のまんなか
にいつもさしているべっこう 鰐 甲にガーネットのついた飾りピンをとり、
もんだ紙でそれをこまかに拭いた。ひるすぎの明るい小座敷の光
線で、ピンにちりばめられたガーネットは深いしぐい紅にかがや
いて見事だった。伸子は、そうやって静かに髪を結ったり、ピン
の手入れをしたりしている多計代の様子から、多計代の感情が一
つの峠を越して、前崎から帰って来ていることを直感した。伸子

へのもものいいも、温和になつてゐる。そういえば、陽炎かげろうと一緒に野火がチロチロ燃え走つてゐるように感情の揺らぎのあらわだつた多計代の亢奮した表情は、沈静され、滑らかな頬のあたりはいくらか蒼ざめて見える。伸子はピンの上に落ちてゐる母の視線と、下目に伏せられてゐるまつ毛のかさなりを横から眺めた。

「——あの話、どうなすつた？」

前ぶれなくふつと一枚の木の葉が落ちかかつて来たように、伸子がきいた。

「わたし、やつぱり氣になるわ」

多計代は、拭き終つたピンを右手にとり、左ひじを高くあげて鬚をおさえながら、束髪我真中に飾りピンをさした。鏡に向つて

坐っている胸をはって、しっかり、ゆっくりそのピンをさし終ると、伸子の方は見ず、あらためて鏡の中に髪の手を結いぶりをしらべるような目をやりながら、

「――男なんて……」

毛すじをとりあげて、前髪の毛なみを直しながら上目で鏡を見据えつつ、

「どうしてああ卑劣なんだろう！」

伸子は黙って、息をひそめるころもちでじっとそういう母の手ぶりを見つめた。

「あんなことをいっておきながら、いざとなると、逃げだして……」

あんなことということが、どういう越智の話だったのか、伸子はきいていなかった。しかし、推測された。そのとき越智がいったことは、少くとも多計代にとって、越智と結婚するしかないと思わせた、そのような内容だったのだ。

「前崎から、かえっていらしたことがあったの？」

越智との間に、いつそういう決裂がもたらされたのだろう。

「いいえ、帰っちや来ないよ」

「……………」

では、多計代は伸子が想像したよりも遙かに激しく行動した。

越智をさけて前崎の家へ行き、そこで考えもまとめて来るのかと思っていた伸子の推察よりも、多計代の燃えかたはずっと強烈だ

った。伸子に、越智との結婚について話した、おそらく次の日かその次の日に多計代はまた越智に会ったにちがいない。多分、人のいなくなった午後のおそいがらんとした研究室で。——そういう建物の中のほこりっぽい無味乾燥な室で、華やかに装った多計代が、にいと熱とを放散させながら、縁なし眼鏡を顔の上に光らせて今は臆病にしりごみしている越智に迫ってゆく光景を思いやると、伸子は涙がにじんだ。越智のおじけづきかたが、伸子にまざまざと感じられた。意外の重量が自分の体面の上にくずれかかって来たことにおびえながら、越智は多計代の素朴さ、むきさを侮蔑して考えたにきまつている。その表情が伸子に見えるようだった。越智が理想だといったシユタイン夫人は、十八世紀の小

つぽけなワイマールで、調馬師の細君で、宰相であり文豪だったゲーテに恋着されていることを、夫妻ともどもの名誉と思う卑屈な宮廷婦女にすぎなかった。伝説は時になんと愚劣だろう。

多計代が、その途方もない真率さで、越智にいわせれば、おそらく粗野で、機略も年甲斐もない若さでひた迫りに越智に迫ったことを、伸子はよかつたと思つた。そこに、多計代の女としての威厳が感じられた。自分の生存の全重量をかけてみて、越智がそれをもちこたえられる男でなかつたことが確かめられたことはよかつた。けれども、母が、情熱が凝つて焰となつたようなつめよりにかたで、ああおせば越智にこうはずされ、ここをおせばああとにげられ、ついに全く幻滅していったころの過程を思いやると、

伸子はからだがふるえた。自分のこの手のひらの下に容赦なく鳴る越智の顔がほしかった。そういう切迫した場合でも、瀑布のように自分の上におちかかる多計代の情熱を、支え切れず圧倒される人物の悲鳴でこたえる越智ではない。いつもの、あのよせ木細工の銜学と論議で、負けたと示さずに多計代を退かせたにちがいない。おそらく多計代の自尊心がそれ以上耐えられないように、身をかわしながら、……。だからいうのに。――胸いっぱいにく湧く涙をとおして、この七つの言葉が伸子の心じゆうに鳴った。多計代はもうそれきり何もいわず、鏡台にレースの鏡かけをおろしている。ふつさりと大きい庇の前髪の下に、多計代の顔は堂々と沈静されていて、そのかげに無限の軽蔑がふんまえられている。

るのが感じられた。

その午後、多計代は珍しく戸棚の前に坐つて、息子たちの下着類をよりわけたり、雑巾に縫う布を見つけたりした。伸子はそのわきにくつついて見物していた。そういう家政のことをしている多計代の表情には、何カ月かの間、彼女にとって目に入つて来なかつた家の内の些細なことが、いま、はつきり見えて来ている、という風があつた。丁寧に、真面目に、いつもより言葉すくなくシャツを畳んだり、布地をわきへどけたりしている。その母の様子には、伸子の心をうつものがあつた。越智にたいして、苦しく燃えあがっていた多計代の憧れの焰は、おそらくは多計代として女の若さが自覺される最後の情熱のはためきであつた。その

不安な激しい生命のゆらぎは、越智の人間の小ささと、感情の冷やかさで哀れにうちくだかれた。けれども、こうして、堂々と軽蔑の上に落ちついた母を見ていると、伸子はやっぱり悲しかった。多計代のあんなに激しい、本気だった女としての動揺も、土台のところでは、決して全生活がそこにかけられているものではなかった。辛辣にいえば、物質の上でみち足り、妻として良人からその肉体もみたされている年配の有閑な夫人が、自分の生活に欠けているものに憧れてそれに敗れたことではないだろうか。もしそうでないなら、伸子には、母が、越智にたいする軽蔑ばかりをよく示しているのがわからなかった。多計代の眼のなかに苦しさや歎きのないのが、伸子にせつなかった。年や境遇に矛盾するよ

うな女としての若さが、計らずもそれを最後と燃えたった。その自分の情に深い哀れを感じてもいないらしいのが、伸子をいたませた。越智が軽蔑される心情をもっていることは事実であるけれども、第三者の目は以前からそれをみていた。多計代は、自分の真情が侮蔑されて、はじめて越智の本質を見出したのだった。軽蔑すべきものに自分の女の心がそんなにも傾いたというその事実を、多計代はどんな風に自分の心の奥にうけとっているのだろうか。つきつめれば奥のふかい自分への失望と歎きを、越智への軽蔑によつて支えているように思えて伸子はこわかった。まして、多計代が越智一人への軽蔑を多計代らしく敷衍して「男なんて」といふとき、伸子は漠然と恐怖を感じた。伸子は何とこそ生活出

来なかったし、結婚ということをまたくりかえしたいことと思えなかったが、それは多計代のいうように「男なんて」と結論されるわけのことではなかった。よしんば男そのものが伸子にとって自然な牽引をもっていたとしても、女がその妻となったときに生じて来た家庭と、その中での男女の関係が、伸子にとって自然になじめないものなのだった。男なんて、といいながら、妻であり母であることに新しく落ちついたような多計代の姿は、そこから飛び立とう、飛び立とうとしているようだった時とはまた別な居心地わるさを伸子に感じさせるのであった。

多計代は、うこん木綿の大風呂敷に、もう使えなくなったシャツ類をまとめて、しばっている。そうして整理された古着、古布

類は、佐々の田舎の昔なじみの農家であるおかめばあさまのところに送られた。おかめばあさまは、それをつくろつて子や孫にきせ、その役に立たない分はこまかく裂いて機にかけた。風呂場の足ふきや、畳廊下のしきものになる厚いくず織が、二年に一度ぐらい佐々の家へ送られて来た。

伸子は、いまにもなんとかいいたそうに、ちらり、ちらりと指環のきらめく手でぼろをわけている母を見た。が、とうとういいそびれた。多計代は、多計代らしく越智とのころもちを決算した。心をかたくし、軽蔑によつて自分のうける傷をかるくすませている。そこに、女の年齢と、夫人として生きて来るうち、いつか身についた不思議な厚かましきがある。伸子にはそう思えた。

だけれども、保はどういうことになるのだろう。伸子はそのことをしりたかった。いままでどおり、保は越智とつき合つてゆくのだろうか。本当に人間として越智から影響されるのは若く受けみな保だと伸子は思った。その保の身に即して、多計代は自分の心がへたばかりの苦い思いを、どう結びつけて見ているのだろう。

多計代のほとんど毅然としたという風な美しい横顔には、伸子がそこに求めているこまやかなニュアンスが微塵もなかった。多計代は越智を軽蔑しきること、自分の高まりを感じ、そこに誇りをたもっている。伸子は、いつだったか父の友人が、保さんという御子息は奥さんの情パッショネート・チャイルド熱の子子ですね、といったことを思い出した。多計代は、そういわれたとき非常に満足の表情を

した。保が生きてゆく具体的な内容よりも、多計代にとっては、彼がいつも変らない母の情パッショネート・チャイルド熱の子であるという意識の方がさきに映っているのではないだろうか。保は、どういうことになるのだろうか。伸子はどうしてもそれが気になった。堂々と、自分の問題はわりきれたことに誇りをとりもどしている多計代の様子は、忘れられ二の次にされている保への残酷に似たものとして伸子に感じられた。

十七

そのころになって、素子の翻訳の仕事がほとんど完成した。前

の年の初夏に着手されたものであったから、一年ぶりで出来あがった。素子としてはじめての大きい仕事であつたし、文学史の上でも、ロシアの近代古典作家の生活の鏡として、特にモスクワ芸術座のはじまりごろの文献として、価値も興味もふかい書簡集であつた。

出版書肆^{しよし}はきまっていなかった。けれども、一仕事終つた素子にははればれとした顔つきで、赤くすきとおつたパイプをくわえながら、厚く綴じこまれた原稿がいくつも重ねてのせられている机のまわりをまわつて歩いた。そして、ふつと何か思いつき、頁をめくり、それなり腰をおろして一つ二つ字句を直したり、縁側の方に立つて逆に机の上の辞書をひらいたりした。それは、いかに

もたのしそうな様子であつた。

伸子はわざと自分の机のところから動かず、

「胃弱はいかが？」

と、そういうたのしそうな素子にきいた。

「いかにも悪そうな顔色だことよ」

「意地わるいうもんじゃないよ、ぶごちゃん」

そして、ちよいと齒の間から舌のさきを出して、

「ほんとに。——直っちゃつてる！」

首をすくめながら小声で眉根をあげていった。

「だから本当でしょう？ いるのは薬じゃなかったのよ」

「いちごんもないね」

伸子がはじめて会ったところ、素子は不眠だといって、アダリンをのんだり、胃弱だといって散薬をのんだり、昼間でもなまあくびばかりしていた。小麦色の肌もさえなかつた。伸子は睡眠薬の必要を知らなかつたし、一人暮しをしている女がそういう薬を常用したりすることが氣にそまなかつた。伸子は、いくら素子が眠れなくても、おしやべりや読書につきあう代り睡眠薬はやめにした。胃弱用の薬というのも、きれたときを機会にやめた。それからしばらくして、素子はこんど出来上った翻訳にとりかかつて、昼間のなまあくびを消滅したのであつた。

伸子のところから、関西風に袖の短い銘仙縋をきて、頸根っこに重くまるめた髪をこちらに見せ、机に向っている素子の横姿が

眺められる。その素子が、昨今は忘れて暮しているなまあくびも、素子の一生にとっては因縁をもっていた。素子が、私立大学の露文科に勉強していた頃、その担任教授が、夏休みの間、積極的な学生数人をグループにして伊豆の海岸にある辺鄙な温泉へ行った。質素な宿屋暮しをして、休暇中の勉強がてら、その教授の翻訳を手つだうという仕組であつた。休暇も終りに近づいたとき、教授の発企で、みんなが大島の三原山へピクニックに出かけた。素子も当然その一行に加わつて。――

海は荒かつた。島へついた一行はいよいよ三原山のぼりにかかったが、一行の中でただ一人の若い女性だった素子は海でもまれたためくたびれて、間もなくついて行けなくなり、登山道のはた

にある岩に腰かけて休むことにした。一行は先へゆき、一人の青年が素子とともにのこった。その青年は同じ大学の卒業生ではあったが科がちがった。政治科を出て高文の準備をしていた。偶然、同じ宿にとまりあわせ、夏の休みの勤勉であるがくつろいだ集団生活の中で接触し、三原山のぼりにも参加した。その青年が、岩に腰かけた素子の足もとにのこった。海水浴のときかぶる経木真田のつばびろ帽子で烈しい晩夏の光線を顔のところだけさえぎり、白い麻の着物をきて、ふっくりした手にえくぼのある素子の足もとに、スポーツ・シャツ姿のその青年が横になり、ぽつり、ぽつりものをいっている。素子は次第に胸苦しさがしずまってきた。そして何心なく、あくびを一つした。つづいてすぐまた一つした。

間をおかず三つめのあくびが出たとき、素子はぼんやりした狼狽を感じた。どうして、こんなにあくびが出るんだろう、そう思った。そして、もうあくびをしまいと思った。あくびは普通退屈のとき出るものとされている。足許の青年は、自分がそんなに退屈なものと思われていると考えたら不愉快だろうし、素子はその青年に対して好い感情をもっていた。素子が、もうしまいと心で力めば力むほど、あくびはとまらなくなつた。その青年はひよつと顔をあげて素子の顔を見、何かの話をきり出そうとした途端、素子の心もちとは全くちぐはぐなあくびがとめどもなくまた出た。青年はおどろいた様子で、素子がものも云わず涙をこぼしあくびしている顔から視線をそらした。素子は、そのときはつきりと感

じた。何かの機会が、二人の間から去ったということ。素子は、素子らしく、

「畜生！ どうしたんだろう、このあくび！」
とわが身をつねるように罵るそばから、あくびはとまらず、青年は、おだやかに慰めた。

「疲れたんですよ。——よっぽど疲れたんだ」
しかし、何かの機会は過ぎてしまった。

余りあくびが出つづけて妙にからだがかたくたに力抜けしてしまった素子は、その岩のところまで戻って来た一行と合流し、みんなにたすけられて宿へ戻った。

「しやつくりというものは、二十四時間つづくと死ぬっていうが、

あくびはどうですかね、そういうことはないんだろうね」

奄美大島生れの、髭の濃い教授は、それが若い女性であるということで一層こころもとなさそうに、まだときどきはふと口をあけては苦しそうにあくびをしている素子をかえりみた。

「若いご婦人は笑いがとまらない、ということばはきいているが、——どうも……こういうこともあるものかな」

医者のおびようもなく、おいおい素子のあくびはおさまった。それから数年をへだてて素子はまたその青年とあった。そのときは仙台であつた。青年はもう地方官としてそこにつとめていた。素子は、自分からそのひとを訪ねて行つたのであつた。そして、勤めさきから、歸りにまわつて来るそのひとを、土地の料亭で待

った。芸者がよばれた。それは素子が云い出したことであつた。

素子が、そうやって仙台までさりげなく出かけた心のうちには、昔、伊豆で過した夏の思い出があり、三原山の思い出があつた。

あのととき、計らずもあくびでそらされた機会への関心があつた。それにひかされて仙台へ行つたのであつたのに、素子は、さし向いの晚餐をてれて、我からばあとした雰囲気にしてしまった。その晩、仙台の町を素子の宿まで送つて来る途中、そのひとは笑いながら、三原山の昔話をした。

「実は、あのととき僕は、あなたに求婚しようと思つて大決心していたんですよ。ところが、あのあくびだもんだから……全くおどろいたなあ」

そのひとは、そういいながら快活な高声で笑った。二人の間ではもう笑って話す昔のひとつばなしとして笑った。素子は二度めに、そして永久に、機会が去ったのを感じた。そのひとは、仙台でも、まだ独身であつた。けれども、料理屋で待っていて、お給仕に芸者をよぼうという女の友達に、自分の妻を連想さえ出来なかつたのは、無理もなかつた。それが無理のないことであるということを、素子は万事がすんでから、そのひとが、帽子に手をかけて、

「じゃあ、またいずれ。また北海道へゆくときでも通りがかつたら、しらして下さい。おかげで愉快だった」といってわかれて行つてから、はつきりと理解したのであつた。

伸子は、素子からそういう話をきいた。

「北海道って——どうして？　そのとき行つたの？」

「まさか仙台へだけ来たなんていえやしないじゃないか」

素子は、真面目にいった。

「それからどうしたの、いま、そのひとどこにいるのかしら……」

「九州の方に赴任したらしい、ハガキが来たつけ」

「——九州へは行ってみない？」

赤いパイプをかんでいたが、素子は、

「もう結婚しちまっているさ」

全然、自分に関係のなくなった状態として、そういった。

その伊豆の夏休みの集団生活のとき、上級生と一緒にいた小川

豊助が、こんど素子の仕事が一段落ついた慰労に招いてくれた。

「ぶこちゃん、いつがいい？」

「さあ、わたし、あんまりよくしらないし……」

小川豊助が「オブローモフ」を訳していて、それは伸子もよんでいた。素子は、小川豊助が湯島天神の境内の小料理やの女といきさつをおこしたとき、豊助にかわって、話をつけに行つてやつたりした間柄であつた。

「一人でいったら？」

伸子は、何となしおつくうだった。伸子が小説をかいいたりするせいもあつて、友達となるのは大抵の場合その家の主人であり、そこの細君のころもちに向つてくばられる神経が伸子として、

多くの場合二重の負担だった。主人であるひとと話がはずめばはずむほど、伸子は細君にたいして愛想よくなくてはならない自分を感じた。そして、細君との話題は、主人であるひととの話題とはまるでちがった内容で、素子のように「男のような方」と思われていない伸子はそれが重荷なのであった。現実には、素子の方が、食物のことだの、着物のことだのを遙かにくわしく知っているのに――。

「ぶこちゃんも行くつていつてやるよ、いいね、十日に――」
ハガキをかきながら素子は、

「ぶこちゃんのひっこみ思案は、謙遜からじゃなくて、傲慢から
や」

といった。

「だからどしどし、ひっぱりだしてやるんだ」

約束した日の午後、素子と伸子とは一旦新宿でおりて、小川豊助のところへもってゆく手みやげを買った。

「タバコにしよう」

素子が新宿駅のプラットフォームを歩きながらきめた。

「自分じやなかなか気ばれないもんだから」

タバコずきの素子は駅の売店で、ウェストミンスターのプレインを五箱買い、自分のために一箱買った。

素子が自分の買うのはきまっていても、あれやこれやと外国タバコの箱を出させてたのしみらしくひねくっている間、伸子は同

じ店頭で新刊書を眺めた。その朝の新聞が少しのこっている。そのわきに無産者新聞というのが重ねてあった。名はきいていたが、伸子はほんものをはじめて見た。ほかの大新聞はどれも一面いっぱいが広告で「わかもと」という四つの字をぶっこぬき縦にしておいたり、予約募集の出版広告でうずめているのに、その無産者新聞は、田中義一の軍閥内閣の満蒙侵略の画策に反対せよと東方会議の記事を一面にのせていた。「蒋介石も奉軍攻撃」と張作霖の没落の記事がある。広告だらけでないその新聞のしまった表情が伸子の心にふれた。伸子は手にとって見ていた無産者新聞をそれなり四つにたたんでふくさの中にしまい売子の男に五銭白銅を一つわたした。

伸子たちは、新宿駅の横手からガードをくぐってゆく電車にのつた。小川豊助は、鍋屋横町でおりて、少し奥へ入ったところにいるのであつた。

郊外の住宅地らしい生垣の間をゆくと、つい通りこしてしまい、そんな垣根の隅に、横向きのように簡単な門があつた。二階が見えていて、その門を入るといきなり右手に井戸があつた。いきなり井戸のある門口は何だか風変わりで、そういう家に住む小川豊助という人がオブローモフを訳しているということも、伸子を氣やすい思いにさせた。

「こんにちはア」

格子の前で素子が声をかけた。返事がなかった。

「——いないんですか？」

そういいながら格子に手をかけたら、すらりとあいた。

「不用心だなあ——小川さん！　わたしですよ。いないんですか？」

そのとき二階から大柄な二十四五の女がいそいで降りて来た。

そして、

「ようこそ、どうぞ」

と玄関に膝をついた。そのあとから、小川豊助も降りて来て、階下口の鴨居へ片手をつっぱるようにして顔をまずのぞけながら、

「やあ、よく来て下さいました、どうぞ、どうぞ」

初対面の伸子に向って、改めて頭を下げた。小川豊助はこまか

い縞ちぢみの単衣をいくらか胸のはだけたように着て、ゆるく兵児帯をまきつけている。年より早く頭がはげていた。にきびのあとのでこぼこがあるあぶらぎった顔の上に、小ぶりの銀ぶち眼鏡がかかっている。それは好人物の印象であつた。

二階の書斎兼客間に通された伸子はそこにある一つ一つのものに興味を動かされた。その部屋の一隅に大きい茶色の書きものの机が置いてあつた。その机は、伸子が本の插画の古い銅版画で見ているプーシュキンの書斎にあつた机のような型で、グリグリのついた足と、いくつもの小引出しとをもつて、いかにもロシアの古机であつた。壁に、海洋を描いた画家として有名であつたアイバゾフスキーの嵐の夜の海の写真版がかかっている。反対のもつと

光線のすくない方の壁に、この間うち開かれていた現代ロシア美術展のとき売っていた赤いサラファンを着た太った若い女の絵の色刷りがはってある。それがロシアの復活祭のとき飾る色つけ玉子を真似したおもちゃだという、こまかい朱うるしで絵をかいた玉子形の飾りが本箱の上にあるのを見て、伸子は、

「持つて拝見してもいいかしら」

そつととりあげて眺めた。日本のうるしの細工とまるでちがう手法で、赤い玉子のおなかにまた楕円形の灰色の地があつて、そこに櫛遊びをしている冬の湖上の風景がミニエチュア風に描かれている。

「だから来てよかったじゃないか、ぶこちゃん」

素子が本棚のところに立っている伸子をからかつて、小川豊助にいった。

「なかなかひっこみじあんで、きょうもはじめは、わたし一人で上れっていつていたんですよ」

「本当によく来て下さいました。屑のようなものだけけど、こうして日本でみるとなつかしいもんですな。——ハルビンにいたときの記念品みたいなわけで……」

さっきの若い女のひとが、お茶を運んで来た。細君の妹ということだった。やがて、

「どうも、失礼いたしました。つい、手まわしが下手だもんで……」

そういいながら、あつさりと木綿の白地の単衣を着た細君が買物から戻つて来た。その細君をみて、伸子は、妹という若い女との対照をつよく感じた。細君は小柄なひとであつた。しまつた浅黒いからだで、小じんまりした顔の造作のなかに、二つの眼がからだの小ささに似あわしくないつよい光をもっていた。愛嬌がよくて、声を立てて笑うのに、その二つのつよく光つてゐる眼の中は笑わなかつた。伸子は、その笑わない眼が無視できなかつた。自分だけは、姉とちがつて薄紫の銘仙の単衣を着て、人絹であるけれど華やかなアマリリスの花のついた帯をしめ、大柄なからだのぼつてりとしたしなやかな重さを一つ一つの動作につれて自分でもたのしんでいるような妹というひとのどこかゆるんだとりなし

は、つましくまめな主婦の気分で統一され、それを意識している姉とひどくちがった。一つ家の中で、小川豊助を中心に、姉と妹とが、女としてそういう対照的な存在となつて生活しているように感じられ、それは、素子が関西の生家を出て暮している理由にも似ていた。素子を生んだ母は、色の浅黒い、地味で実直な町家の主婦であつた。あとの弟妹たちを生んだひとは、姉と反対の色白で、ぽっちやりしていて、おんぎよく音曲の上手なひとである。素子は、早速買つて来たタバコの箱をあけてすいながら、古い友達の調子で、小川豊助とあれこれと仕事上の話をしていた。

「あなたにしちや珍しいもの訳したんですね」

「ああ。あのレーニンですか」

小川豊助は、すこし顔をあからめて、はげている頭をなでた。

「是非つてたのまれましてね。柄にないもんだがやってみたんです。やってみると、面白いですね、文学の下らないものよりよっぽどためになったし、面白かった」

「でも、あの題、何だか文学くさいじゃありませんか」

伸子も同感で、ほほえんだ。二三日前の新聞に彼が訳したレーニンの本の広告があつて、その題が「一步は前へ、二歩は後へ」とあつた。伸子はおかしがつて、

「どっちへゆくんだかわからないみたいだわ」

と笑つた。素子も、

「オブローモフだ、これじゃ」

と笑った。そのことをいつているのであった。

夕飯の食卓に、それもハルビン時代のものだというウオツカ用の切子きりこの瓶が出た。それには葡萄酒が入れられていた。白い卓布をかけた卓に、小さいコップが並べられて、台所と茶の間の往復は、水色のエプロンをかけた細君がした。妹のひとが、小川と素子の間に坐つて、とりもち役にまわった。

葡萄酒ですこし赤らんだ素子が、

「あんなに姉さんにばかり働かしといて、いいんですか」

とじょうだんのようにいった。するとしめた障子のむこう側から、
「いえ、いえ。こつちは一人で十分なのでございますから……どうぞ御心配なく——」

下を向いた手もとでは細かく何かしているらしい声で細君が答えた。

「わたしは、なににも出来ないもんですから……」

妹のひとは、そういつて声を立てずに笑った。そして、ちらりと小川豊助を見あげた。小川豊助は、素子からもらったタバコに火をつけて、それを右手の指の間にはさみながら、その場に錯綜した神経にも格別煩わされもしていない風で葡萄酒をすすった。

二階へ戻って、小川と素子は縁側の籐椅子へ出た。

「ここがヴェランダになっているといいんですがどうも……」

小川豊助は、

「ハルビンあたりでさえ夏の別荘ダーチャ気分はいいですなア、夜、ヴ

エランダで涼みながらサモワールをかこんでいると、ギターがきこえて来たりして……」

追懷につれて俄かに思いおこしたらしく、

「そういえば、いよいよ日本からの国賓もきまったようですね」といった。

「へえ」

素子は、

「そうですか？　いつ？——ちつとも知らなかった！」

刺戟をうけた表情になってききかえした。

「そろそろ旅券も下りるらしいようですよ」

ソヴェト・ロシアが革命十年の記念祭に、世界各国から文化代

表を招待して、一カ月間国賓として見学させるという計画が、春ごろから噂にのぼっていたところであつた。

「誰です？——国賓は……」

国賓というとき、素子は、皮肉なゆくりした口調になつた。

「大体、噂にのぼっていた人々らしいですよ」

「あ、佐内満、秋山宇一、瀬川誠夫、そんなところですか」

「それに尾田君も加わっているらしいです」

「尾田君が？——国賓？」

素子は、タバコをもっている手で自分の顎を下からしごきあげるようにしながら、あおむいて笑つた。

「すごいことになったもんだ——誰がきめたんです？」

「それは、こっちに來ている文化連絡の代表と相談してきめたいでしょう」

「その相談をした人が問題なのさ」

小川豊助は、鋭い素子の勢におされて、しばらく沈黙していたが、

「やっぱいろいろのいきさつもあるんでしょうし……」

苦勞になれ、また同時にそういう派手やかな場合、問題の圏外におかれつけて來ている人のおとなしきで小川豊助は答えた。

「交渉した人をとりのけてきめることも出来なかつたんでしょう」

「しかしそれや情実ですよ。いやしくも国賓となれば、日本の文化人の代表だもの……変だなあ」

素子は、非常に根づよく追究した。

「どうして、登坂先生をのけものにしたんだろう。ロシア文学関係では、芝居の佐内さんと同じに功績のある人なのに——独創的ではないけれど……不公平ですよ」

素子が、伊豆へ一緒に行つて一夏暮したのはその登坂教授であつた。

「そんな不公平を、どうして後輩がだまつているんだろう。薄情だ」

伸子は、かたわらからきいていて、どこにでもおこることがまたここでくりかえされていると思つた。外国人同士の間で、まっさきに自分を紹介し、自分を推薦し、代表らしく扱わせる人々と

いうものが、いつも必ずしも本国の人全体からそれだけの価値をもって見られているというのではない場合が多い。伸子が、少女としてニューヨークの大学の寄宿舎に暮していたときも、外国の人々の前に、茶だの生花だの振袖だので自分をあらわしてゆくあの種の人の方法に対して、いつも調和しにくかった。ほんとの人間としての日本人の精神にある教養、世界の輪の一つとしての日本人のこころは、もつと奥にある。伸子には、そう思えて、領事館などで催される社交的な集会などへ、伸子も若い日本の娘の一人だということ、日本服などを着せられ、接待役によばれることを、きらった。国際的な感情といっても、それはあらゆる外国の通俗の慣習にただなじむことではない。外国の人間の新しい感

覚でそれを感じあつて、より高い偏見や先入観のない関係へす
めてゆく。好奇心をより人間らしい、互にわかつたものにしてゆ
く。おぼろげに伸子の感じている国際的という内容は、そういう
方向をもっていた。

夏の宵闇に涼みながら、ソヴェトへの国賓のとりぎたをきいて
いると、伸子は、ロシアという国に錯綜している古さ新しさにつ
いて、またそれを取りかこむ国々の人の好意のなかにさえある古
さと新しさ、利害のまじりあいについて、複雑な心持がした。ロ
シアが、ソヴェト・ロシアと呼ばれるようになり、ペテルブルグ
がレーニングラードと名づけられてからのロシアについて、伸子
は、一般の人々が知っている以上のなにも知っているとはいえな

った。ただ、トルストイによつてあのように描かれたロシアの生活、チェホフの語つたあのロシアの感情、そしてチャイコフスキの悲愴交響曲や胡桃割の舞踊曲がその諧調で世界のここに刻みつけたあの胸せまるロシアが、新しいロシアになつたということについては、深い深いおどろきと魅力とがあつた。そのロシアへの国賓ということには、それに向つて人々を注目させ、嫉妬させる刺戟がこもっている。せり合つて、幾人かの国賓の中に加わろうとする心に、まじりけない憧れ、好學心しかないといへば、その無垢さはかえつておとぎ話めいた。日本における新しい国の代表とされている古い人——事実その東洋学者は若くなかつたし、歴史的に新しい人でもないらしかつた——おくれた日本という国

の新しさを代表して国寶になろうとする人々のうちにある陳腐さ。あらゆる場合どこにでもあつた陳腐さや浅薄をとおして、しかもなおそこに実現されようとしていることは、世界の歴史にこれまでなかった一つの光景なのだ。観光は、言葉そのものの意義を変化させようとしている。

素子と伸子とが、そろそろ帰らなければ、といい出す時分になつて、俄雨がふり出した。

「この分ならじき上るでしょう」

そういつて、素子はちよいちよい雨の音に耳を傾けていたが、だんだん風が加わつて来て、しめた二階のガラス戸に、折々ザーとふきつけられて雨脚が流れるようになった。

「おとまりになつていらつしやいましょ」

細君がしきりにすすめた。

「お二人ぐらい、夏ですもの——ああ蚊帳もございますことよ」
どうしようかと躊躇しているうちに、いきなり、天の一方で皮のゆるんだ大太鼓をたたいたような雷鳴がした。伸子は、口の尖つたような表情になつて、いそいで電燈の下から壁ぎわの方にいざつた。

「おきらい？」

白粉のある顔をむけて、ちつともこわくなさそうに笑いながら妹のひとがきいた。

「駄目なの、わたし……」

「——どうも、それやあすみませんな」

小川豊助が、当惑したように、雷が主人である自分の責任であるように額に手をやったので、こわがっている伸子まで笑い出した。その晩、伸子と素子とは、ハルビン製だという、卵色の毛の長い毛布をかけて、小川豊助の家に泊った。

十八

素子は、出来あがった翻訳の出版社をきめる用事で数日つづけて外出した。夏の西日を馱で買った夕刊のたたんだのでよけながら帰って来ると、すぐ浴衣にきかえて素子は、

「ばかにしてる！」

と、おこった。

「現代小説なら、いくらでも出したいんですが、だとき。——これだから、ろくな翻訳家が出ないんだ、きわものばかり追いまわして……」

出版戦国時代という言葉が文芸批評のなかにさえ出て来たほど、予約の大規模な出版競争が行われていた。

「現代のものだって、つまらないのがあるのに——『太陽の根^{こんた}帯^い』みたいな——」

「そうさ！」

ポリニャークというロシアの新しい作家が前の年日本へ来た。

そして、秋山宇一そのほか無産派と云われる芸術家やロシア文学紹介者たちと日本見学をして、見聞記をかいた。それが訳され、「太陽の根蒂」として出版された。その本は、作者がどんな観察者であるかということを知るには役だったが、日本の現実を報告するという点では、日本の読者にも、従ってロシアの読者にはなお更役に立たないものに思えた。ちがった意味でのフジヤマ・サクラにすぎなかった。

素子は、行ったさきざきで、例のロシアへの国賓出発の噂話をきくらしくて、内輪のとり沙汰までつぎつぎと伸子にもつたえられた。それらの話はどれも、小川豊助の家の二階で感じたと同じ悲哀を伸子に感じさせるばかりであつた。

「——やめましょう！」

伸子は自分の顔の横で手をふって、いった。

「いくらいやなことくりかえしたって、別の人になるわけじゃない——行けばいいのよ！ 行けば、うそが通用しないことが本人にもわかっていいのよ——」

椅子の上でむき直って伸子は素子にいった。

「あなたがロシア語だから、なお、もうやめにしましょうよ、ね」
素子としては正義派めいた感情の面に立って批評しているだけなのだろうが、少くとも伸子には必要以上の執拗さがそこに感じられた。

二人が住んでいるその郊外の家の界限は竹やぶが多くて、七月

に入ってから昼間でも蚊が出た。ほそい蚊やり線香の煙が、机の足の間から夏草の繁茂した女住居らしい庭へ流れている。電燈をつけるにはまだ早い伸子の机の上に、このあいだ新宿の駅で買った無産者新聞がひろがっていた。素子が出かけていたその午後、伸子は一人でたんのうするまであちらこちらうちかえして、その新聞を見た。大正一四年九月二〇日創刊（毎土曜日発行）というところから無産者新聞といくらかくずした字でかかっている題字の裏にある装飾の、毛の長い麦の穂や齒車・鎌・鎚・寸断されている鉄鎖などまでを、こまかに見た。記事もすっかり読んだ。伸子は興味をうごかされて、七月二日という同じ日づけの、ほかの大新聞をもって来てみた。両方をみくらべると、無産者新聞が週

刊だから記事の扱いかたがちがうというばかりでなく、たとえばみると、観客席からばかり観ている舞台と、舞台うらから見ている舞台とのちがいのようなものが、記事の扱いにあった。ほかの大新聞では、出兵のことも、川崎造船のこともただどうなったかということだけしか語っていない。なぜ、それはそういうことになったかということは、もう一つの無産者新聞でだけ話されている。毎日毎日の事件が、このふたとおりの新聞で、裏からと表からと照し出されて、はじめてほんとの現実になるという発見は、伸子にぴったりとしてわかる実感だった。小説はそうなのだから。なぜ？　そして、どうして？　この二つなしで小説というものは出発しないから。

四頁しかないその新聞の紙面には、伸子が自分の日々がちつとも感じたことのない権力の圧迫というものを、日夜直接に痛烈にこうむって、それと抗争している人々の息づかいがみなぎっていた。いつか玄関に来た三人の、ぼうぼう頭で膏と垢であぶらひかる顔をした青年たちが思い出された。つい先日、灯をつけない動坂の家の客間で保と話した話の内容や、その背景となっている学生たちのこころもちも思い浮んだ。これらはみんな伸子の生活のなかにおこっている筈のことであつた。それなのに、伸子のきょうは全く平穩で、このとおり籐椅子にかけ、庭には盛夏に向つて繁茂した夏草の午後のいきれがこめている。晚には、すだれの下った茶の間で、おとといそうであつたように、今夜も冷たい京都風な煮

うめんをたべるだろう。――

その平穩は、しかし伸子自身にとつても何となし澄明でなかった。新聞に、二高や松山高校の盟休について、水野文相が断然処分する、と断言したために、それらの高校の校長がつよ腰になっているばかりでなく、学内の暴力団があらはれているということが云われている。これは、ほかのどの新聞にも出た。こういうことのうちには伸子に自分の平穩を懷疑させる事実があつた。

文相である政友会の政治家の細君は、萬亀子といつて、多計代とは、明治の初めに建てられた貴族的な女学校の同級生であつた。どちらかというと親友の部類であつた。萬亀子夫人が熱心な天理教信者であるため、ときどき互の意見が合わなかったが、それが

すぎると、芝居の切符のことだの、同窓会のことだのと、電話でながくしゃべり合った。伸子たちは小さかったころ、その夫妻をおじさま、おばさまとよばせられた。

保は、この間、佐々は、ばかだ、生れつきの調停派だ、といわれたと伸子に話した。それは、保の通学している七年制の坊つちやん風の高校にさえも、調停派でない学生たちの気分があるということではないだろうか。もし、保がちがった生れつきで、生れつきの調停派でなかったなら、多計代がかつておじさまとよばした、その大臣に、やはり保も処分されただろう、断然と。彼はとも直さず、その文相であり、保はその学生なのだから。

この春、前崎にある佐々のうちへ、大磯の別荘から、萬亀子夫

人が遊びに来たとき、多計代はいあわせた泰造はもとより和一郎まで加勢させて、箱根へドライブしたり、力をつくしてもてなした。僕、へこたれちやった、袋もちさせられて。一分刈の頭でカラーなしの制服姿の和一郎は、その日じゅうおばさまの手提袋をもつてあげる役にあてられたのであった。一方的な、多計代のそういう熱中や奉仕ぶりを思うと、伸子には、それがさもしくけちけちしたことに思えた。あきるほどちやほやされつけている大臣夫人を、多計代のような古い幼な友達までが、世間並の方法でさわぐのはばかばかしかった。

瘦型で、折襟のカラーをつけて、こがたい官僚風な大臣であるその政治家の顔を思い出すと、伸子は、おばさまである夫人の敏

捷で伶俐な凹み眼と、うすく水白粉のはかれている顔や沈んだ色の紅をさした唇で、軽く、やや口早にげびない蓮葉さでものを云うときの表情を思いおこした。夫婦は、その夫婦らしい会話の間で、どんな風に、新聞に出た学生処分のことなどについて話しあうだろう。伸子は突然、あすこに息子はいなかったかしら、と思った。そして、憎悪を感じた。「断然処分する！」あすこに男の子がいるとしてもきつとまだ小さいんだろう。末っ子かもしれない。伸子は、新聞をたたみながらそう思った。

素子の翻訳した書簡集は、やがてある文芸書を専門にしている出版社から出ることにきまつた。

「よかったわ——おめでとう」

素子は、うれしそうに上気しながら、つみのないまけおしめで、
「出すの、あたりまえさ」

といった。

「本当にいいものなんだもの。——もし出さなけりや、むこうが
ばかなのさ」

「それやそうだけれど……」

伸子とすれば、間もなく、自分がこの二三年かかって書いた長い小説がまとまりかかっている。そのとき、素子の仕事も、はじめての業績として出版されることになったのを、うれしく思うのであった。

「——ひとつ献辞をかななくちや、わるいかな」

「結構よ」

「外国の作家はよくやってるじゃないか」

「だって……」

伸子は、首をすくめた。

「わたしも、じゃ書くの？　献ぐって？」

二人は笑った。素子は、赤いパイプを口の中でころがすようにして目を細め、ポプラの枝の間に白く光つているとなりの洗濯ものを見ていたが、ふと椅子ごと伸子の方へ向きかわるようにし、

「ぶこちゃん！」

改まってよんだ。

「なあに」

「——実はこの間うちから考えていたんだが、ここでひとつ、思いきってロシアへ行つて来ようと思うんだがどう思う？」

「——……」

とつさに伸子はへんじが出なかった。ロシアへ行こうと思う——。素子がしきりに拘泥していたロシアへの国賓のこと。素子はロシア語専門であること。今のところ行つて歸つて来た人は少し、行こうとしている人もごく少い。民間の婦人としては一人もいなかった。素子が行きたいと思う動機はひととおりわかりはするのであつたが……。

「——急なのねえ」

そのことがら全体がよく会得出来ない、ぼんやりした表情で伸子はつぶやいた。

「それやあなたは専門だから、行くのがいいのはわかるけれど……」

前年の初秋、コンラードという東洋語学者が美しい細君同伴で日本へ来たことがあった。その歓迎会に伸子も素子と一緒に出席した。源氏物語を、ロシア語に抄訳しているというその教授の話の様子では、交換教授の可能性もあるような工合であったが、素子はそのときは格別の興味も示さなかった。

——でも、何故、素子はこの話にかぎって結論からいい出したのだろう。いつもは、伸子が煩しいと感じるぐらい、思いついた

計画の第一歩から話す素子だのに。——急にわいて来る様々な疑問を、とりあえず一番簡単な問いにまとめたように、伸子はきいた。

「——お金、あるの？」

素子は、そうきく伸子の腑におちかねながら緊張している顔を見やり、

「なんとかなるだろう」

その点も、十分考えてある、という風に答えた。

「帰ってみた上でなくちゃたしかなこととはわからないけれど、だいたいなんとかなるだろう——私の分を、この際いちどきに貰っちゃうのさ」

関西にいる父親から、素子の分として予定されている財産を、まとめて貰って、それでロシアへ行つて来ようというのであつた。伸子は、財産のことについてそういう計画的な方法をとっているのが素子親子であることに、珍しい感じを動かされながら、当惑したように、

「わたしは駄目だわ、とても動坂なんかから、お金出してもらえない」

といった。

七八年前、伸子は父につれられてニューヨークへゆき、そこで一年あまり暮した。そして、佃と結婚して、帰つて来た。その間の費用は、佐々の親から出してもらつた。そうして費用を出して

もらったということ、伸子はあとまでどんなにせつない思いをしたことだったろう。佃も、うけないでいい侮辱をこうむった。自分がしたいとおりに生活するのなら経済上のことも自分でやるがいい。そういつて、多計代は、佃と伸子とを動坂の家から出した。それ以来、伸子は現在のようにして暮して来た。

「話せば、出してくれるかもしれないけれど、わたしはいやだわ」
「それや、そうだね」

素子は肯定した。が、じゃあ、ぶこちゃんの方はどうしよう、といわない。伸子は、ロシアへ行くというようなことについて、ちつとも考えを組立てていなかった。だから、いま急に素子が行くといつても、実感はそこになくて、どうせ行くならフランスも

見たい、と漠然とした計画を感じるだけであつた。けれども、二人のこの数年来の生活で、素子が、この話を、自分が行く計画としてだけ話したことは、伸子を別の角度から複雑な心もちにするのであつた。

「行けばどの位行くの？」

「さあ……」

素子は、しばらく躊躇していたが、

「どうしたって二年だろう？——その位いなくちゃものになるまい？」

そういうながら、素子はちよつと苦しそうな眼をし、うすく顔をあからめた。伸子は諒解した。素子は、こんどは、本当にひと

りでも行く決心になつてゐるのだ、と。そして、素子がひとりで外国へ行くようなことが実際におければ、伸子とこうして暮して来た生活の形は、根本からちがつたものになつてゆくしかない。

素子にはそれもわかつてゐるのだ。伸子は、一層複雑なところもちになつた。伸子が、二人の生活ぶりに対して日頃心にわだかまらせてゐる様々の疑いを、素子は察してゐて、こういう形で自分の方から全生活を変化させようと考えてゐるのだろうか。伸子は、いよいよわたしはどうするの？　といいにくい心持になつた。それは素子がきめることではなくて、伸子自身がきめていいことだと、思われているのかもしれない。

「とにかく、わたしにかまわず仕度した方がいいわ」

伸子は、おとなしく、すこししよげていった。

「わたしの方には、お金のあてもないんだもの……」

「じゃ、この原稿を渡しちまったら、ともかく京都へ行つて来る」
いまにも椅子から立ち上りそうに素子はいった。

「万事はそれからのことさ」

——しかし、まるで唐突に生活が大展開した。……その夜、金魚の絵のついた団扇で蚊を追いながら縁側の柱によりかかっていた、伸子はおどろきのやまない気分だった。素子の性格のなかには、伸子とまるでちがったあらわれかたをする実行性があった。それがこれまでの二人の生活の急所でバネを押す力となつて、移つて来ている。そもそも二人が、一つの家に暮すようなきつかけ

となつたのも、どちらかといえば素子のそういう実行性の刺戟であつたし、こんどのことにしろ、日頃はこまごまと煩瑣な素子に、予想されないような決断が働いている。

「——あなたは、なかなかえらいところがあるひとなのね」

伸子は、わきで白い団扇をつかつている素子にいった。

「どうしてさ」

「だって……生活の舞台を大きくまわすことを知っているんだもの」

こういうときには、かえつて受動的な自分を伸子は感じた。そして、きいてみたかった。ほんとに素子は、向上心だけで、外国へ行こうと決心しているのかと。素子だけが外国へ行く、という

ことが伸子には、切迫した実感としてうけとりきれなかった。ひとり日本にのこる自分の生活の変化ということの実体もよくわからなかった。伸子は冷静なような、また、非常に動揺しているような気持で、夜の庭の夏草が室内から溢れる咬々こうこうとした電燈に照し出されて、不自然にくつきりと粉っぽいように見えているのを眺めた。

十九

東京の夏は、いつも七月二十日前後からひとしお暑気を加えて来る。その夏は近年にない酷暑ということで、新聞の写真版もあ

らそつて涼味をもとめていた。

外国行の話をしてから、素子はその暑気の中を精力的に動いた。そして、二三日うちに京都へ出発するところまで用事を運んだ。

「やれ、やれ、これであした日本橋へ行けばもうすつかりすんだ
！」

日中は乾くまでが暑くるしいと、夜あらつたどつさりの髪を肩にひろげて、素子はうまそうに煙草をすった。日傘をささない素子の顔は日にやけて、湯上りの鼻のみねが、うす光りした。

あくる朝、伸子はいつものとおおり、素子よりひとあしおくれて起床した。そして、蚊帳をたたみ、床をあげてから、茶の間のそとの縁側を通つて風呂場へゆこうとした。すると、

「ぶこちゃん」

妙にしんとした声で、素子がちやぶ台の前からよんだ。

「いま、すぐ」

そのまま髪を結いに行こうとする伸子に向って、素子はなお息をひそめたような声で、

「ちよいと来てごらん」

手にもっている新聞で招くようにした。

「——なにかあるの？」

櫛をつかいながら及び腰に、素子がひろげたまま、見せるその朝の新聞に目をおとし、伸子は、表情を変えて、そこへ膝をついた。

「やっぱりこういうことになっちまった」

素子が呟いた。伸子は沈黙して、上下の唇のまわりに白い輪の
でたような顔つきになって、紙面に大きく複写されている作家相
川良之介の写真を見つめた。痩せて、髪を特徴のある形でよく発
達した前額の上にたらし、一種の精気と妖気とをとりまぜて、写
真の上にも生々しくうつし出されている。当代においても最も芸
術的であると云われていたこの作家が自宅で昨夜劇薬自殺を遂げ
た。その報道である。

肩に髪を散らしたまま、伸子は紙面全体に目をはしらせた。故
人の親友の一人であつた久留雅雄が、記者団と会見をしている写
真を見、遺書として公表されている「ある旧友への手紙」という

長い文章を読んだ。伸子は、全身にうけた衝撃を内容づけて、それで自分を落ちつかせるに足りるなにかをさがすように、新聞をよんだ。けれども、そこにかかれてあるすべての詳細な記事や久留雅雄の談話はもとより、「ある旧友への手紙」そのものでさえも、伸子のうけた衝撃の裏づけとなるだけの質量をかいていた。

伸子は、涙をおさえた悲しい顔をかしげて、しずかに櫛をうごかし自分の髪を梳いた。ほんとに、なんといいかわからない気がした。思いがけない、とか、本当にされない、とか云えるならばそれはいくらかうけた衝撃をまとまりやすい感動の言葉で表現できただろう。相川良之介の場合には、この作家の精神と肉体との危期が書くものにもにじみ出しはじめていることは、彼の

芸術を理解するほとんどすべてのものが最近になって直感していた。鋭い稜角を常に示しつづける彼の知性の頂点と人間的な危期とは、最近この作家の作品とその風格の上に云うに云えない鬼気となって漂った。そして、それこそはこの作家の純芸術家としての光彩であるように目をみはられ、讃えられた。そのぎりぎりのところまでいって、とうとうこの作家は生きられなかった。生きられなかったのは、常識にたつて、彼の死に驚愕し悲しみ、記者対談をやっている旧友の誰彼でもなければ、こうやって新聞をみて声をのんでいる伸子のようなものでもなく、人々から賞讃され、どっさりの追隨者と模倣者とを身近にもっていた、作家そのひとである。

伸子は、刃のごく鈍い大きい桑切の庖丁のようなもので、からだを、刻まれるような痛苦を感じた。

「——くるしい」

そういつて、伸子はもっと空気を求めるように白いやわらかいのどをのばして顔をあおむけた。

「だめだよ、ぶこちゃん！　しつかりしなくちゃ」

「しつかりしている……でも——苦しい」

「……………」

「かわいそうに……」

心からそういつて伸子は、眼にいつぱい涙を浮べた。

「ある旧友への手紙」は、びっくりするほど素朴に気取らない文

章でかかれていた。日頃のこの作家につきものであり、それが伸子に親愛感を失わせていた文章のいいまわしの知的なポーズがなく、
「僕の場合はただボンヤリした不安である、何か僕の将来に對するただボンヤリした不安である」と、自殺を思いはじめた心理的な動機がかかれていた。「僕はこの二年ばかりは死ぬことばかりを考えつづけた」「氣づかれないうちに自殺するために数カ月準備したのち、自信に到達した」「僕は冷やかにこの準備を終り、今はただ死と遊んでいる」「僕は昨夜ある売笑婦と一緒に彼女の賃銀！ の話をしみじみし、『生きるために生きている』吾々人間のあわれを感じた」「自然はこういう自分にはいつもより美しい。僕は誰よりも見、愛し、且つ理解した。それだけ苦し

みを感じたうちにも僕には満足である」伸子はくりかえして、それらの文章の断片をひろいあげた。自殺の準備について、「僕は冷やかにこの準備を終り」とかかれている。何と思いがけないおさなおさなした天真さだろう。これまで自殺したどっさりの青年たちが、この冷やかにといい自分の状態を遺書のうちにかいて来たのではなかったろうか。理智的な技巧と措辞の新奇さを一つの特色として来た彼がそれを、陳腐ともしないで誠心こめて自分の最後の文章のうちに書いている相川良之介のてらいのなくなった心。そしてまた、「僕は誰よりも見、愛し、且つ理解した。それだけ苦しみを感じたうちにも僕には満足である」と、ほんとに誰にでもその感じのわかるいいかたで一生をしめくくる最後の思い

を語っている。「ある旧友への手紙」は伸子に、桃や柿の種のある真白な芽を思わせた。作品にあらわれる相川良之介、或は作家相川良之介の趣味は低くなかったけれども、そこにはいつも人為的なものが感じられた。殻がくだけた最後に、はじめて白い、いじらしい、淳朴な人間性のふた葉がむき出された。

ひやひやになった伸子の手のさきをとって、

「さ、ぶこ、御飯にしよう」

素子が、励ますように、こわい声を出した。

「だらしないうじゃないか——そんなに動顛するなんて……」

単純に動顛ということというなら、伸子は六七年前に武島裕吉が軽井沢の別荘で女の人と縊死した事件を知ったときの方が動顛

した。動顛して、いく度か感歎詞をもらしたし、その葬儀のとき、焼香をしながら涙をこぼし、格式だかい遺族の人々の注目の前に自分を恥かしく感じたりした。動顛というよりもつと複雑なもの、もつと自分の精神にきりこんで来て、何か解答を迫る強烈な衝撃が、この相川良之介の死にある。伸子がしびれたような唇になっているのもそのためであつた。

味覚のなくなった舌で食事を終つた。素子が、また新聞をとりあげた。そして、「さぞ、榎崎さん夫婦もびっくりしていることだろう」といった。榎崎佐保子のところで、伸子は偶然素子に会つたのだつた。「青鞥」のころから作品をかいているこの婦人作家は、良人の専攻であるイギリス文学の系統に立っていて、無産

派の文学という問題がおこったころ、謡曲の「邯鄲かんたん」から取材した小説をかいたりしていた。あんまり人につきあう習慣のない伸子は、佐保子にだけはおりおり会いに行った。

いつだったか、現代作家の話が出たとき、佐保子は、きわめつけの語調で、

「相川良之介だけは本ものですよ」
と云った。

「あのひとはまがいものではありませんよ。この間うちへ見えたとき、作品が古典としてのこるかのこらないかは、その作品のスタイルによるっていいましたよ。それは本当だと思うわ」
そして、笑いながら、

「古典になると思ったら、伸子さんもきちんとしたスタイルをもつことですよ」

冗談のように云った。伸子は、いかにも相川良之介のいいそうなことだと思い、

「そうお」

と笑ったが、すぐ、ふっと、それは彼が本気でいったことだったのかしら、と疑われた。文学作品がスタイルだけで古典としてのこるなどということ、伸子としては信じかねた。相川良之介には、彼が彼の背負っている文学的後光そのものをさえ皮肉に感じている口調でいうために、非常に辛辣な諷刺だったり逆説だったりするのに、きくものは文学上の箴言しんげんのように考える場合があ

った。周囲にそういう習慣が出来ているばかりでなく、相川良之介自身、孤独な知的焦躁とでもいう風な意地わるさにとらわれることがあるらしかった。

彼の書齋へはあれやこれや、訪問客が殺到するらしかった。あ
る場合には、そういう訪問者のある人に、相川良之介は春画を集
めたものを出してあてがった。訪問者は、それを、さも古今にめ
ずらしい芸術的名画でも鑑賞するようにしかつめらしくいつまで
も黙って見ているから、大変扱いよい。そういう意味の文章をよ
んだことがあった。伸子は顔の赤らむ思いがあった。彼の作品や
人柄にひとかたならず興味をひかれるところはありながら、どこ
かにこわいものを、感じつつけて来た隠密の原因がおのずからわ

かる気がした。その短い文章をよんだとき、伸子は、それとは時のちがういつだったかに、ある文壇的な社交の圈内にいる若い女性の書いたもののなかに、ちらりと、相川良之介の書斎におけるそういう絵の話があつたように思った。

相川良之介の、作品の技巧的なそつのなさ、機智、警句的な文体、それらは、彼の小説の主題が、すべての人間の心情に直接迫るようなものであつてさえも、伸子には、つくられているうまさ気がなった。

伸子の記憶のなかに、きのうのここのように一つの情景が浮んだ。夏の終りのある宵のことであつた。そこは、相川良之介の住居からも遠くない檜崎佐保子の家の二階の客間であつた。古風な

ゆつたりした床の間に大雅堂の絵がかかつて、支那の壺が飾られていた。電燈の下で紫檀の長い大きい卓の、床の間を背にしたところに榎崎夫妻の謡曲の師匠が坐っていた。その右手に榎崎、向いあう側に伸子と佐保子とがいて、謡曲の師匠に相對す座に相川良之介が坐った。永年夫妻で謡曲を習練して来て、鼓も打つ佐保子は、師匠の謡を、精彩のこもっている絶頂と思われたその頃、近い友人に聴かして置こうというところもちで、伸子もよばれた。佐保子たちの流儀は金こんばる春であつた。花間金次郎の「道成寺」などを観て、伸子は運動というものをほりつめて精髓だけ凝結させたような古典の芸術を面白く思った。佐保子が切符をくれて、そういう見物もしたのであつた。母の多計代が少女時代に観世かんぜの

謡曲を習って娘の伸子は、子供のときからゴマ点のついた謡本になじみがあつた。多計代の、いかにも自分の声量にこころよく身をまかせた謡いぶりは、素人のなぐさみとしての安らかさであることもいつか会得していた。佐保子の師匠であるその中老人が、着ていた夏羽織をぬいで、端然と坐り直し、腹からの声で謡った一曲は、小規模であるが精煉されていることとその気迫で震撼的な感銘を与えた。日本の封建文化の磨き上げから生じた艶、量感が感じられた。

伸子は、だまって櫛崎夫妻やその師匠、相川などの間に交わされる話をきいていた。それは全く大人の話しぶりであつた。伸子

は自分をまるで羽根の生え揃わない不器用なひよつ子のように感じながら、坐っていた。しばらくしてから、佐保子が、画帖と硯をもつて来た。師匠が、肉太な書体で自分の名だけを書いた。新しい頁をひらいて、画帖は伸子の前にまわされた。伸子は、当惑した。画帖に書いたことがなかった。そういうものに書くということが、なんだか年にも柄にもふさわしくなく思えた。伸子は、困った様子で、かたわらの佐保子に、

「わたしはかんべんして——字なんか下手なんですもの」といった。すると、佐保子は、

「そんなことわかっていますよ、誰もあなたの字が上手だとは思ってはいないのだから、さっさとおかきなさいよ」

といった。

「なんて書くの？」

伸子は、こういうものに、なにをなんとかいていいのか見当がつかなかった。

「わからないわ」

いくらかもしかしように、佐保子はその卓の上に出ていた謡本を手にとった。そして、偶然一つの頁がひらいたとき、その一くだりをよんだ。

「じゃ、これでも書いておきなさい」

それは、いとどしく虫の音しげきあさぢふや、という文句であった。伸子は、その文句が、自分の今そこに坐っているころも

ちの静けさとは反対であり、むしろ、伸子のとりなしのぶまさにもどかしさを感じる感情のリズムにあつた文章のように思えた。しかし、筆をとつて、卓の上にひろげられた画帖の上に、風趣のとぼしい不確かな字で、いとどしく虫の音しげきあさちふや、と書いた。画箋紙は墨をはやく吸つて、たどたどしい伸子の筆あとには、一層ぎごちなく見えた。伸子は汗ばむような思いだつた。

画帖は、相川良之介にまわつた。彼は、その夜、白地に蚊がすりの麻の上に、夏羽織を着ていたが、もち前の慇懃な身ぶりでは、画帖をすこしさかのぼつてめくつた。それから、新しい頁をひらいて眺めていたが、一寸座蒲団の上で体をずらせ、みんなが視線をあつめている卓の上から硯と画帖とを自分の左手の畳の上にお

ろした。そして、じかには誰の視線も届かない方を向き、身を折りかがめて、なにかをかきはじめた。伸子のところからは、畳の上にかがみかかった相川良之介の折目だった単衣羽織の背中から胴にかけてのもり上りしか見えなかった。

しばらくそちらを眺めていた主客が、おのずと卓の上へ顔をもどして、物をいいはじめるぐらいたつぷり手間がかかった。相川良之介は、本気でなにかかいているのだ。伸子は、画帖という風なもの、さらりと、そのときの興によつてかかれるものと思つていたので、相川良之介の仕事に向つたよううちこみ工合を心のうちにおどろいた。

出来たのは、その頃、相川良之介の絵として有名になっていた

河童の図であつた。背の高くやせた、しかし丈夫そうな脚をした河童が笹枝をかつぎ、左手に獲った魚を頬ざしにしてつるしてゆく姿が描かれた。我鬼と署名されている。

相川良之介は、だまってその画帖が人々の前をまわされるのを見ながら、煙草をくゆらしていた。一座の人々は、それが洗煉された態度であると見えて、格別、ほめもせず批評もしないで、しずかにまわして見た。相川良之介が、どうぞK a P P aと発音して下さい、という前書をつけて発表した「河童」という作品は、河童の国の出来ごとになぞらえて、警官の弁士中止！ という叫びまで描かれた諷刺小説であつた。心情の噴出による諷刺であるというよりも、相川良之介らしい、知的な諷刺であつた。それは、

伸子にちゃんと理解されない部分があつたし、理解される部分にたいしては、そのビイドロの破片のように鋭くひらめく知性を、例によつて懷疑した。

そのようにして、佐保子の画帖に河童図の描かれたのは二た夏ばかり昔のことであつた。伸子は、自分がさしずにまかせて、いとどしく、という文章を書きうつさなければならなかつたその宵の切ない心持を思い出すよりもしばしば、そして、その度に考えこむ氣分に誘われながら、相川良之介が、あんなにむきに、人目から画帖をかくして、描いていた姿を思いおこした。人々の視線の下に一筆一筆をさらして描くようなことをしなかつたのは、いかに相川良之介らしく思われた。それから、自分の描くものは、

どれ一つにしろ最上の出来栄えであろうと欲する心持も。伸子は、何かの文章で相川良之介が、僕はあらゆる天才にならわんとするものなり、といっていたのを思った。画帖を人目からかくし、あんなに本気で一つの河童図をかいていた相川良之介の様子は、伸子にかえってそのひとのうちにある一途な、わき目をふらない氣持を感じさせた。それは、伸子に好感をもたせるものであつた。

だのに、もし、伸子が何かの機会にその感想を彼につたえたとすると、相川良之介は、少くともそれにたいする返事としては、また伸子にとって真偽のわからないような逆説をはくであろう。普通のことばで物がいえないひと。そのために、輕蔑する自分のエピソードからつきまとわれずにいらなかった人。偶像と教師

になる愚劣さをしんから軽蔑して、いくつかの小説にそのこころもちをかいていながらも。――

伸子は自分の机のところへ、その朝の新聞をもつて行つて、ひとりで見っていた。新聞の写真の上に目をおとし、自分とほとんど同じ頃文学者として出発し、声名を博し、僅かの年長で生涯を断つて逝つたひとのことを思いつめると、伸子は、また、刃の鈍い桑切庖丁のようなもので隈なくからだを刻まれるような苦しみを感じた。機智をつくし、知的な精緻をこらして自分の生活と文学とをもつて来た相川良之介が、「ある旧友への手紙」で、こんなに淳朴に、若々しく、流露する心情を語っていることに、伸子は涙を抑えようとしても抑えかねた。「ある旧友への手紙」でだけ

はこう書くしかなかった相川良之介の人間としての一生にたいして恐怖と感動があつた。どの写真も、相川良之介といえはその知的な風豊を標榜して、額におちかかっている髪や、敏感な口もとや、じつところされた眼に焦点をむけているのであるが、相川良之介の、やや上眼にこらされている瞳のうちには、知的で硬い自足したような辛辣さはちつともなかった。それは温和とはちがつた柔軟さ、聰明というものの本質的なしなやかさでかがやいていた。憎らしく押しづよいものはどこにもなかった。写真のその眼を見て、中学生でも最後の思いには書くであろうような「僕は誰よりも見、愛し、且つ理解した。それだけ苦しみを感じたうちにも僕には満足である」という文章をくりかえして読んだとき、伸

子は、相川良之介に代表された人の心というもののいじらしさにふるえるようになった。そして、丸めて口に当てたハンカチーフから声をもらして泣いた。

二十

大きな音をきいたあと、耳のなかが変にカーンとして、自分の声もひとの声もよく聴えないようになる。相川良之介の自殺を新聞で知ったあと、伸子は心理的にそういう状態に陥った。朝おきてからねるまでにする自分のあれこれの動作さえ妙に身に添わず、周囲の出来ごとは遠のいて感じられた。同時に、大きすぎた衝撃

にひきつづいたその反応の鈍いような状態は相川良之介の死という事件をめぐる外界にも感じられた。

数日来ことのほか暑くて、庭の夏草のいきれさえ息苦しいような家のなかで、伸子は、いまは鈍刀の庖丁で刻まれる思いから、ほそい絹糸でからだじゅうをきつく縛られているような痛さで、相川良之介の行きくれてきわまった人生の過程を辿っているのであったが、新聞は、七月二十五日の朝相川良之介の自殺を大きく扱っただけで、翌日はもうそれについてどんな特別な記事ものせなかった。ただ早川閑次郎が、相川良之介氏の自殺について、という題で、それが特に社会的または文学的な意味をもつ死でないという結論の感想を発表しているだけだった。朝日の文芸欄など

は、櫛崎佐保子の「時と世間」^{モンド}という別荘生活者の夏季隨筆だけをつづけてのせている。伸子は、不思議な気がした。

相川良之介というひとは、作家のなかでも広汎な読者をもつていた筈であつた。外国の小説はよむし、漢詩もよむが、日本のいまの小説は、という人たちでも相川良之介の短篇をよむことは恥かしいと思つていなかった。そういう意味で相川良之介は漱石の系統での最後の文人であつた。伸子はそう理解して來ていた。作家の間では、芸術的な良心の点で一目おかれていた相川良之介であつた。その相川良之介がこういう風に彼の一生を閉じなければならなかつたということは、彼を肯定して來たすべての人々にとつて、また彼を肯定しきれなかつたすべての人々にとつて、ひと

ごとでなく迫ってゆくことではないのだろうか。

前月号の「文芸春秋」に相川良之介の「侏儒の言葉」という作品がのせられていた。いま再び頁をひらいてその作品を読めば伸子は身の毛のよだつ思いがした。「彼はペンをとる手さえふるえだしたのみならず、^{よだれ}涎さえ流れ出した。○・八のベロナールをつかいさめたのちは、はつきりしているのは僅か半時間か一時間だった。彼はただ薄暗い中にその日暮しの生活をしていた。言わば刃のこぼれてしまった細い^{つるぎ}劔を杖にしながら」

そのようにふるえる手にペンをとって、その文章の中で現に相川良之介は涎をたらすようになってゆく自分というものの姿を凝視しそれを書いているのだが、その雑誌の特色として四段に区切

られた頁の上にその文章をよんだとき、そこに相川良之介らしい文学的悽慘ばかりをつよく感じたのは、伸子の理解が浅薄なためばかりだったろうか。

いまになってみれば、それは「ある旧友への手紙」の中にいわれているとおり三年がかりの死への準備行動の一記録であつた。よだれをながしながらも、正気を失わず、一步一步と死に入つて行っている人間の文章が、どうしてもつとまのまの恐怖でよむものをうたなかつたろう。すべてが、こんなにあるままにかかれていて、それなのに、相川良之介は、どうしても文学的姿態からぬけられなかった。

率直に、漠然とした本質をそのまま「ただボンヤリした不安」

と告白されているとりとめない不安を相川良之介が自分の将来にたいして感じはじめたとすれば、それは、彼の聰明さが、才能的な聰明の限界というものを直感しはじめたからではなかったのだろうか。そう考えつめれば伸子にもわかるどころがあった。

けれども、やはりわかりきらなかった。彼のような博識と聰明とが、なぜ自覚されはじめた限界感の内側にとどまっていなければならなかったか。そこところがわからなかった。相川良之介が、生活と文学との上に追隨を許さない独自のものとして画して来たスタイルを、こわすまいとして、死を選んだというより、死にまで自分を追い立ててゆく過程で、もしや自分が自分をぬけ出ることがありはしまいかという期待がもたれたのではなかったか。

それも、伸子にそうも思えるというだけで、彼の作品から直截にわかることはできなかった。

そのようにこみ入ったそのわからなさを、伸子は、自分の生活にもどこかでつながったものと感じた。その意味で自分にもボンヤリした不安はあるということが出来ると思った。自分だって、よりよく生きたいとねがい、痛切に生きることを感じながら生きたい、と思っていることはわかってはいるが、それならばどういう風にしてそれを実現してゆくかときかれて、答えられるようなへんじは伸子になかった。伸子は、現在の生活に感じている不満についての側から話すことは出来た。けれども、そこから育つ新しい方法については、わかっていなかった。素子はロシアへ行くと

きめた。伸子自身はどうなるだろう。のこるだろうか。ゆくだろうか。それもわかっていない。金銭の問題を別にして、自分の心の必然としてわかっていないのであった。

伸子は、自分の生活にあらわれるそんな様々のわからなさ、自分流のボンヤリした不安が、ほかのひとのところにはないのだ、と思うことは不可能だった。文壇の沈滞ということが、この二三年いわれつづけて来ている。「秋刀魚」の詩で有名な詩人は作家の経済事情が文学を沈滞させると、原稿料問題を新聞にかいた。それに反対して、原稿料の問題だけが文壇と文士を沈滞させているのではない。文士が余り常識的で平穏な日常生活に腰をおろしすぎてしまったからだ。人生への冒険の気魄を失ったからだ。そ

ことを考え直さなければならぬと、小坂村夫が書いた。それはつい先頃のことであつた。しかし、そういう小坂村夫自身は、彼自身の人生と文学とを冒険させる機会を発見することに熱心であるとも見えなかつた。無産階級文学の理論にたいしても昔ながらの芸術性をいって、相川良之介のように条理にたつて、玉は砕けるが、砕けない瓦、文学の母胎としての民衆を信じるとはいわなかつた。相川良之介が、東京の炎暑の夜を徹して涎をたらしつつ、手をふるわせつつ、透明になつた神経の力を奮いあつめて最後の幾行かをかいているとき、小坂村夫は、日光かどこかの涼しい湖でマス釣りをしていた。「マス釣り」という随筆が、相川良之介の葬儀と前後した日の新聞に出た。盛夏になればマス釣りもなど

と、それは小さな安定におさまった人間の最も常識的遊樂の一つではないか。どこに人生の冒険の気魄があろう。伸子はそのひとの書くりきみと、現実の生きかたのなまぬるさとの間に激しい輕蔑を感じた。その矛盾は、相川良之介の死によつて見直される氣配もなかった。文学が沈滞している。それは、人間らしさの沈滞と別なことであり得るだろうか。そう思うと、伸子には、この沈滞を貫いて、命がけの抵抗をつづけた相川良之介という一条の光道に、深い深い意味を感じるのであった。だのに——相川良之介！ 相川良之介！ 伸子は無限の哀感としりぞけることの出来ない否定の絹糸にしぼりあげられて、汗にとけこむ涙を流した。彼の悲劇は、命がけであることさえ文学的至芸と崇拜されなければ

ならないところにあつた。

相川良之介の葬儀は、七月二十七日谷中の斎場で行われるという通知が伸子のところへも来た。情のこもった悲しみが式場のぐるりにみなぎっていて、いつもはいろいろの会場で一つにかたまっている姿を美しいとは見られない文学関係の婦人たちが、きょうはいちように喪服で、しとやかに群れ立っているのも情景にふさわしかった。伸子は、式場では決して泣くまいとかたく心にきめて家を出た。柩は、生きていたときの相川良之介のある美しい気分や趣味をしのばせるようにすき間なく純白の花々につつまれ、あまたの蠟燭のきらめきに飾られていた。紋服白足袋姿の「湯島詣」の作者が先輩総代として、硯友社調の弔詞を朗読した。短軀

の久地浩が友人総代の弔詞をよみはじめたが、彼は、せき上げる涙に耐えず、友よ！ 安らかに眠れ！ というくだりは辛うじて会衆にききとれるばかりであつた。さざなみのひろがるようにむせびなきがおこつた。

「君去りて、我らが身邊とみに蕭々^{しょうしょう}たるをいかんせん」

泣くまいとする伸子の唇が、はげしくふるえた。久地浩の哀傷は丸く短いその全身からほとばしり、ひとり去つた旧友相川良之介に向つて、彼によつてあらわされていた彼等同時代人の芸術性とともに終焉したことをかなしみ訴えるようだった。そのようなまじりけない悲傷を語っている久地浩は、最近の数年来大衆作家となり、出版社をおこし、企業家として成功しつつあつた。腕に

喪章をまき、日ごろのあからがおも蒼ざめて見える久留雅雄は、やはり通俗作家となつて、昨今文壇に流行をきわめている麻雀のもとじめとゴシツプされていた。

生きつづける友人たちの生の営みは様々であるが、相川良之介をかなしむ思いではひとつにながれていて、伸子は、白い花ときらめく蠟燭の灯にちりばめられた式場に声ない哀悼の合唱を感じた。生きるために生きること拒絶しない人々は、それを拒絶して翔び去った友人の最後のかどでを、真情の手に^か昇いで送っている。伸子は、黒と白と金色の悲しく美しい「オルドス伯の埋葬」というグレコの絵を思いおこした。

こらえていて涙が汗にかわって全身からにじみでたあとのよう

にぐったりして、伸子は谷中の式場から動坂のうちへまわった。

「大層な疲れようだこと」

かり着の浴衣にくつろいでも、口がきけないようにして冷たいものばかりのんでいる伸子をよこから眺めながら、多計代がいった。そして、つつみきれない好奇心で、遠慮がちに、

「——お葬式、どうだったい？」

ときいた。伸子は、すぐ答えられなかった。そういう風にきいたり、話したりするにふさわしい感情が伸子のなかになかった。忘れたころになって伸子は、ひとりごとのようにいった。

「相川良之介というひとが、芸術家だったことだけはたしかだわ……ああいう風に友達からおくられることができるんですもの：

…」

伸子の記憶のなかに、軽井沢で死んだ武島裕吉の葬儀の日の光景がよみがえった。式は、麴町辺にあつたそのひとの大きい邸宅で行われた。鯨幕をはりめぐらした玄関から、故人の柩の前まで、更にそこから出口まで、白布がしきつめられ、柩の横に、礼装の親族が立ち並んでいた。そこには、幼い二人の遺児もつらなつていた。静かに動いている弔問者の列に加わつて歩きながら、伸子は、作家武島裕吉をじかに感じられなかった。重大な儀式がとり行われるような場合にことに際だつてあらわれるその家の格式のきびしさが、万端にみなぎっていた。それは、古風であるとともに世俗的であり、そういう雰囲気のうちで、葬送される武島裕吉

の感傷的に柔かい相貌が映されている棺前の写真を眺め、焼香するとき、伸子はいきなり涙をこぼした。武島裕吉が生きつづけられなくなった生活環境の矛盾そのものが、上流人らしい老若の顔々となり、威儀を正した喪装のそよぎとなってそこに立ち並んでいた。

多計代は、また自分を抑えられないように、その作品で知っている作家たちの名をあげた。その人々も来ていたか、ときいた。

「ねえ、お母様、全体がまるでちがうのよ。普通立派なお葬式とか何とかいう、そういうのとは、ちがうのよ。ね、だから、もうきかないでさ」

「それや、もちろんそうなはずですよ」

そして、

「本当に、相川良之介というひとは、独特だった……覚えていたろう、伸ちゃん。あのひとがうちへ来たとき……」

世間並の礼儀は一応まもらなければならないが、しんからの話相手とは出来ず、いくらか手もちぶさたなような、退屈なようなとき、相川良之介は、両方の手を、蠅があしをすり合わせるような工合にして、もて扱う癖があるらしかった。彼や久留雅雄が同人雑誌に作品を発表したばかりの頃、本をかりるために相川良之介が動坂の家へよったことがあった。そのときのことを多計代というのであった。伸子は、そのとき、どんなに相川良之介が、その手もちぶさたらしい手つきをしたか、はつきり覚えている。

伸子は、きよう、ここへよつたことは間違っていた、と思った。

伸子は悲しそうに黙っていたが、やがて、

「わたし、すこしねて来ていい？」

ときいた。

「あんまりくたびれたから……」

多計代は、すこしびつくりして、

「さあ、さあ、おねなさいとも。——でも大丈夫なのかい、ただねるだけで」

「いいの、いいの」

青桐の葉ごしの光線でその座敷にしかれた蒲団のシーツの白さが緑に光るようなところで、伸子は、団扇を顔の上において、本

当にすこし眠った。

となりの室で多計代が何かいつている声で伸子は、目をさました。

「なるたけもって行くまいよ、ね、きりがありやしないもの」
つや子の学校も夏休みになり、近日中に、東北の田舎の家へ出かける、その仕度であつた。

伸子は、真夏のひるねからさめた新鮮な顔つきでそこへ出て行つた。

「いつお立ち？」

「四五日うちには立たなくちやなるまい」

「ことしは誰が行くの」

「さあ……ともかくわたしは出かけるよ、またあせもがこわいから」

多計代は糖尿病をもっていた。あせもがよって、悪化して、大変苦しんだことがあった。それから、夏の間は東京にいないことになっているのだった。

「お父様はだめ？」

「それや、一寸はおいでになるだろうけれどね、例のとおり忙しいから——保さんは来るよ」

そういえば、伸子が来たときから保が見えなかった。

「保さん、うち？」

「ああ」

満足そうに多計代は、

「あのひとは相変らずさ、よく勉強している……この節は毎朝六時すぎに出かけて、ドイツ語に通っているよ」

フランス語の文丙にいる保がドイツ語をはじめた、ということは一応高等学校の上級生らしいことであつた。けれども伸子は、ドイツ語ときくと、そこに越智を連想され、ひいて、保の日頃から思弁ぐせにつらなつて考え、単純にきけなかつた。保は、このごろも越智のところに入出入しているのだろうか。

伸子は、うちにいるという保に会うつもりで、いつもの二階の北側の小部屋へ行つてみた。鴨居にはられているメデイテーショ

ンという貼紙のはしが暑氣に乾き上って少しめくれかかっている。机のよこの障子は、はずされていて、内庭の八つ手の梢の上に高くそびえているタンクでモーターが鳴り、風呂水をくみ上げている。保はそこにいなかった。保がいないで開放されている書齋を見まわして、伸子は、そこにあるどの本棚も、例によつて教科書ばっかりなのに、いまさら不思議な氣がした。この前、ここで保としやべったりしたときから、もう数カ月たっている。それなのに、伸子の目には教科書以外の一冊の新しい本も見当らなかった。園芸の本だけは一かたまり、もとからのところに立ってはいるが。

乱読して来た伸子には、保の若々しい精神がこの本棚のような

有様でもちこされているということには合点がゆかなかった。

「保さん、いなかったわよ」

伸子は、実家へ遊びに来ている大きい娘というようないくらか甘えた声で母にいった。

「出かけちやったのかしら」

「ああそうそう、保さんはね、土蔵だよ」

「土蔵？」

かたづけものでもたのまれたのだろう。伸子はすぐそう思った。

「じきすむかしら」

「すむって——勉強してるんですよ」

「土蔵で？」

伸子は、頸がのびたような眼つきをした。

「何しに土蔵なんかでやるの？」

おかしいの！ 伸子はそのひとことを口のうちでつぶやいた。

土蔵のどこが、勉強場所として心持よいというのだろう。

「あすこの地下室は涼しくつていい気持なんだってさ、それにし
ずかでいいって——それやしずかなことはしずかだろうさ」

多計代はユーモラスにうけとつているらしく、本当にあのひと
は、という風に笑った。

大きな音をたてて戸車のころがる重いくぐりの網戸をあけて、
伸子は土蔵へ入って行ってみた。入ったところの板じきには、古
椅子だの屏風箱だのが積まれ、東西についた窓が大きいから内部

は明るいけれども、永年の間につもった塵のにおいがしている。西側の隅に鍵のてに手すりがあつて、そのあげぶたがたたまれ、半地下室への階子口はしごぐちがあいていた。伸子は、その辺にはなおどつさりつもっている塵をそつと草履でふみつけるようにして歩いて、その階子口へ行き、少しのぞきこむようにして声をかけた。

「保さん、いる？」

へんじがなかった。

「いないの？」

しばらく耳をすましてもシンとしているので、伸子は足もとに氣をつけて、いくぶん前下り気味の工合のわるい階子を二三段下りて、下をのぞいた。半地下室には、湿気どめのために真黒くう

ツク塗料をぬられた太い角柱が幾本も立っている。その柱と柱の間の東よりの窓下に保の勉強場が出来ていた。製図板をのせる脚高台に、大形の製図板をのせ、その前に木づくりの大きいひじかけ椅子があつた。本やノートがすこしその製図板の上にちらばっている。半地下室の東と西にも半分だけ地面に出た窓がしきつてあつて、そこから光線がさしこんでいる。けれども、四方の壁が柱と同じようにやつぱり真黒い塗料でぬりこめられているから、その明るさなどは吸収されて、机のところに、単調で鈍い底合ひあわいの明るみが落ちているばかりであつた。たしかに、その半地下室の空気は、ひやりとした。でも——なぜさ。伸子は、黒く光る柱の下にたたずんで、ほんとに声に出してそうひとりごとした。な

ぜさ！ 涼しい、といったって、夏のさかんな季節のおもしろさ、その自然の美しさや光線の横溢を、こういう半地下室のひやりとした朦朧もうろうさととりかえている保のころもちを、伸子は解せなかった。つよく、わからない、と思おうとしている伸子の感情はいわば強いてもそのわからなさに踏み止まっている、というところがあつた。相川良之介の死。「ある旧友への手紙」。その感銘ぶかい葬儀からかえつたばかりの伸子の神経には、保の土蔵への引こしを、ただ偶然のことと思えないような過敏さがあつた。土蔵好きになつた、という保の心持そのものに不吉感を感じるのであつた。

伸子は、言葉にいけないその不吉感を、自分に認めることさえ

恐れた。そういう風に感じたりすることは、わるい文学趣味だと思おうとした。

伸子は、またガラガラとひどい音をたてて網戸をあけ、それをしめて、土蔵から出て来た。出た途端に、ボオツと炎暑でやけた外気が体につつまかかって来るのがわかった。半地下室の方が涼しいことは全く事実なのだった。

「見えなかったわ」

伸子は、食堂にいる多計代のわきの出まどに腰かけた。

「保さん、いつから、あんなしやれたこと工夫したの？」

「さあいつごろだったろう……なにしろ、ことしの暑気は実際ひどいものね、無理はないよ。わたしも二階はほてりで寝苦しくて

閉口だ」

扇風機が多計代のよこてから風を送っていた。

「お母様、保さん、ぜひ一緒につれていらつしやいよ」

「ああ、わたしもそう思っていたらね、ドイツ語の講習会がすんだら、珍しく今年は東大路さんなんと、しばらく野尻湖の夏季寮へ行くんだとき。あつちは、これからだそうだよ」

多計代は、その叔父の著書で知っている東大路という名に、自分の安心をもたせかけているような調子でいった。和一郎の方は、十日ばかり前から湘南にある飯倉の伯父の別荘に行っているらしかった。漆細工で柿の実を飾った小ひきだしの上に、和一郎がペンで描いた西瓜泥棒の漫画エハガキがのっていた。いろいろ愉快

にやってます、と文句は簡単であるけれども、小枝やその兄弟、従弟たち若いものばかりの無邪気で野放図な昼夜の情景——そのエピソードには西瓜どろぼうもはいっているらしい賑やかさが偲ばれた。彼らのところには正真正銘の夏があるらしかった。

多計代が、

「吉見さんはこのごろどうだい？」

と、きいた。

「きょうは、一緒じゃなかったのかい？」

「あのひとは京都へ行ったわ」

「——へえ」

それは、皮肉の用意された調子であつた。

「なにか京都にあるのかい」

伸子は、

「親があるわ」

と、ぶつきら棒にいった。

「用もあるでしょう」

多計代は、しばらくだまっていたが、わきの手提袋から小鈴のついた鋏を出して爪をきりながら、

「伸ちゃん、相川さんの、あの女人ていうのはいったい誰のことなんだい」

ときいた。

新聞に発表された「ある旧友への手紙」の中に、相川良之介が

死にとび入るために一つのスプリング・ボードとして女人を必要と感じたことが書かれていた。一人の婦人が一緒に死のうとしたが、それは出来ない相談となった。やがて、そういうスプリング・ボードもいらなくなった、とかかれていた。相川良之介の死が公表された朝の記事に、記者会見で故人の旧友の一人である久留雅雄が、その点についての記者の質問に答えていた。妻をいたわりたいたった、と相川良之介が書いているのだから、それはおそらく夫人のことであつたらう、と。伸子は、そう理解しなかった。たとい死別するにしろ、ということばを前提として妻をいたわりたい、とのべられていることは、女人と夫人とは別のひとであつた事実を語っている。いずれにしろ、こういう心理

は、記録されている全体の経過のうち的一部分であるにすぎないと思われた。こういう心持のときもあつた、そういう比重で書いてあることとしてよまれた。伸子には、女人のことよりも、相川良之介が、僕の遺産は百坪の土地と僕の家と僕の著作権と僕の貯金の二千円あるだけである。僕は、僕の自殺したことで僕の家が売れないことを苦にした。別荘の一つもあるブルジョア達にうらやましさを感じた、と書いている、そのことに妻子をのこし芸術家として死のうとする彼の良人とし父親としての思いの厚さを感じていたのであつた。

常にふかいつきあいもなかったことがわかつている自分に、多計代が、どうしてそんなに機微に属することをきいたりするのか

と伸子は怪しんだ。

「どうして、わたしが知っているの？」

「だってき——いずれ文学に関係をもっている女のひとだろうか
らさ」

「知らない」

伸子は、いとわしそうに眉根をくもらして首をふった。

「相川良之介のようなひとが一緒に死のうとまで思ったくらいなら、おそらく、よっぽど魅力のある女のひとだったんだらうねえ」
それらの言葉から母の関心の焦点がのみこめた。

「相川さんの細君というひとは、いずれ平凡なひとなんだろう？」

——またはじまった！ 心のうちで叫ぶように感じ、伸子は出

窓にかけていたからだを思わずおこした。あんまりいやな気持ちがした。

「そういう比較はするもんじやないわよ。誰が知っているの？ そんなこと！」

漠然と語られている女人の方に魅力があつて、細君の方は平凡なひとだと勝手にきめてかかる、そのいやしさは伸子の胸をしぼった。越智の若い妻についてもいつか多計代はなんといっただろう。自分と、どう比較しただろう。相川夫人についていまいつている、そっくりそのままをいった。その後、越智とのいきさつがああいう風に結末しても、多計代がそこから学んだのはただ越智を軽蔑するという一つのことだけしかなかったのだろうか。

「……ほんとに、誰なんだろう——」

いやな顔をしてかたく黙っている伸子の横前で、紺ちぢみの品のいい蛇の目しぼりの浴衣の袂をうごかして、多計代はきった爪をとりあつめた紙を丸めて屑籠にすてた。

「相川良之介でさえ、やっぱりかげではこんな女のひとのかかりあいがあつたんだものねえ——どうして男って、みんなこんなだろう」

多計代は、

「つくづく厭になつて来る！」

嫌悪をこめていった。

「男なんてものは、誰だつて信用出来やしない。かげではなにを

しているのかしれたもんじやありやしない。——相川さんの細君だつて、きいてごらん。きつと、その女のひとのことなんか、最後まで知っちゃいなかったに違いないんだから」

強情にだまりつづけている伸子に、ほとんど挑戦するように、
「もう私は、決して男の勝手をゆるしやしないから！」

と力をこめて多計代がいいきつたとき、伸子はからだのどこかを指環のはまった女の拳でこづかれるように感じた。

「日本の女はなにをされたつて泣きねいりばかりしているから男はほうずがありやしない——どっちをみても幻滅さ」

多計代のそういう云いかたをきいていると、伸子は、ますます母のところが、越智とのいきさつ以来、このごろになってからま

た一つの転機をへたのを感じた。多計代は素朴に撞着した熱情のまま、その熱情の限りで、ひよわい越智をおして行つた。その結果は、丁度ひとが、自分のからだの全重量をかけて廻転扉をつよくおしすぎて、外へ出るよりもはやすぎるスピードでドアがまわつてしまい、また逆にもとのところへ戻つたような工合だった。

多計代は自分の心の力にまけて、自分の心のこまかい組立てをしんみりと吟味するゆとりもなく、男のひよわさの裏ばかりをひとまわりしてしまった。そして、女の自己肯定にこりかたまつたように見える。

伸子是一種の恐慌の感でこの新しい事実をうけとつた。多計代のうちに燃えゆれていた最後のみずみずしさ、柔軟さは徒勞の

うちに燃えつきた。そこには灰色にかたまつたおきがのこされた。もう二度とそれに火はつかないだろう。そして多計代が人生のいろいろな面、とくに男女のいきさつについてもっている偏見は、矛盾したまま冷えかたまつて、多計代の生活にあるあらゆる自己撞着はこれからさきはひとしお威厳の加わつたものとなつて、佐々の家庭に君臨するであろう。伸子はそこに恐慌を感じるのであつた。

二十一

二三日の予定で京都へ行つた素子は、五六日ノビル、という電

報をよこした。九月号の文芸雑誌は、急に相川良之介についての特集を行うことになって、伸子も感想を求められた。新聞にいちはやく、「改造八月号相川良之介氏の絶筆『西方の人』」という大きい広告が出ていた。「沙羅の花」「支那游記」などが同じ社から広告されていた。

相川良之介について感想を語るとすれば、伸子は、自分の心にあるとおり、彼への疑問、肯定のつよさをおしのけるほどつよくもちあがって来る非肯定の心持から書くしかなかった。けれども、伸子には、自分が相川良之介の全貌を底の底からつかんでいるのではないという漠然とした自覚があつた。「ある旧友への手紙」の中にこういうところがあつた。「ただ僕にたいする社会的条件

——僕の上に影をなげた封建時代のことだけは故意にそのなかに書かなかつた。なぜまた故意にかなかつたかと云えば、吾々人間は今日でも多少封建時代の中にいるからである。のみならず、社会的条件などはその社会的条件のなかにいる僕自身に判然と判るかどうかも疑わないわけにはゆかないだろう。」こういうところでは、伸子に字づらでしかわからなかつた。伸子は、封建時代という意味をぼんやり「昔」としか理解していなかつた。従つて、相川良之介のいつている意味はよくのみこめず、その十分のみこめない文章の中で伸子によくわかるひとつのことは、自分によくわからないことについては書かないものだ、と語っている相川良之介の態度であつた。この暗示に従えば、伸子として相川良之介

についての感想などを書くのは礼儀でもないし、自分に忠実でもない、ということになった。しかし、伸子とすれば、自分にまでそういう暗示をなげる相川良之介の聰明そのものに非肯定を感じるのであった。

伸子が机の前で考えにせずんでいるところへ、とよが、

「お客さまですが……」

と来て立った。

「どなた？」

「遠藤絢子さんという方です……老松町のころにもよく上ったとおっしゃっていますけれど……」

遠藤さん——伸子は思い出した。老松町の家に住んでいた頃、

近所の筑前琵琶師の二階がりをして、賃仕事などをしながら、文
学をやりたいといつていた絢子という二十四五のひとがあつた。

「ぜひお話ししたいことがあるっておっしゃいます」

伸子は、玄関へ出てみた。二三年会わなかつたうちに、生活の
やつれが濃くなり肩も骨だつて見えはしているが、やはりそのひ
とであつた。

「ああよかった、わたし、きょうはどうしてもきいて頂かなくち
やならないことがあるんですのよ」

犬齒の目だつ口もとで、伸子の上に目をすえていった。

「ともかくお上りなさいな」

玄関に立っている様子も、そこから座敷に入つて来る絢子のも

のごしも、どことなく伸子を警戒させた。伸子は、客を北側の落ちつく小部屋の籐椅子へ案内した。遠藤絢子は、暑いさなかを歩いて来たのに、汗をふくよりのどの乾きの方がきついという様子に見えた。冷たい水をたてつづけにのんだ。そこに出ている団扇をとりあげようとしてもしないでコップで二杯の水をのみ終ると、

「ああ、お会い出来てよかった！」

思いつめて遠方から来た気がゆるんだというように、椅子の背へもたれこんだ。酷暑なのに、白地銘仙の着物に友禅の昼夜帯をしめ、そのどっちにもたたみめがなかった。伸子は、

「なにか急に用があつたの？」
ときいた。

「ええ是非きいて頂きたいと思う重大な問題があるもんですから……」

絢子は、伸子が老松町を引こしてから自分の生活を話した。久地浩のところへ出入りし、書いたものを見て貰い、大変囑望された。またこの一年ばかりは相川良之介のところへしげしげ訪ねていた。そういう話だった。絢子は、

「あのかたは、家庭でも、ほんとに孤独でいらしたわ、わたしにはよくわかっていましたの」

そういつて、わかる訳があつたのだ、という眼つきで伸子を見た。伸子は、ばつのわるい表情をした。黙っていると、

「あの新聞に出ました『ある旧友への手紙』もちろんおよみにな

りましたわねえ」

といった。

「ええ」

絢子は、犬齒のめにたつ口もとを引しめてうつむいていたが、その頭をもたげるなり、

「あすこに、女人とありましたでしょう。あれは、実は、私のことなんですの」

「……………」

おこった視線で、絢子はその言葉を信じかねて黙っている伸子を見つめた。

「あなたも、私のいうことをお疑いになるんですのね」

伸子は、

「ごめんなさい」

といった。

「でも——わたしは、あなたに二年も三年も会わなかったでしょう。そして、相川さんという人だつてなにも直接の交友はなかったんですもの——信じる根拠も、信じない根拠も、わたしとしてはないのよ」

やせて、皮膚のあれている顎をすくうようにして、絢子はうなずいた。

「それはそうですわね」

絢子はなおひとりうなずいた。

「佐々さんは、やっぱり佐々さんらしくていらつしやるわ……あがつてよかった！」

すぐつづけて、

「でも、それは事実なんです」

と、もとの主題に戻った。伸子は困惑し、同時にいとわしかった。「事実だとして、わたしが伺って、どうかなることなの？」

「ええ、なりますとも。あなたが私のいうことは事実だって証明して下されば、それで私は満足なんです」

相川良之介というひとは、何といろいろの角度から、いろいろの女に興味をもたれていたのだろう。多計代が示した好奇心も思いいあわされた。伸子は、相川良之介が絢子にたいしていまいうよ

うな関心をもったということは、普通では信じられなかった。すべての点から。——たとえば、相川良之介がもっている清潔さへの好みにたいして、絢子の皮膚には汗のよごれが見えているというような点からだけでさえも。——

伸子は、本気になって、

「ね、絢子さん」

とよびかけた。

「ああいう有名な、ある魅力をもつ人が、内容のわからないああいうことをかくと、大変誤解がおこるのよ。外国の文学史をみて、そうだわ。愛人の詮議がよくおこるでしょう。——失礼だけれど、第三者からいえば、あなたのように、自分をその立場に

当てはめて考えている女のひとが、ほかに幾人もあるかもしれないのよ」

「それや、事情を知らない方は、そうも思いになりますでしょう、でも——私の場合はちがうんです」

「日本の女のひとは、外国の男が何でもない習慣ですることを、特別の関心と思いちがいで、かわいそうなことになるでしょう。——相川良之介というひとは、最も辛辣なことをいっても女のひとは愛の告白かと思いちがえるかもしれないぐらいのところがあったのよ」

「ええ、それもわかっています。でも私の場合はちがいます」
そして絢子は、その言葉で伸子の顔をぶちでもするように、

「相川良之介さんは、私に接吻したんです」

といった。

「あのおうちの二階からおりようとしていたとき、階子段のところで……」

伸子は、ぞつとした。そして、黙った。ペンをもつ手がふるえ、涎がたれるようになったと自分について書いて書いている相川良之介を思った。二階へ急にかけ上つて来た夫人が、となりの部屋の畳につつぷして、お父さんが死んでおしまいになったのじゃないかと思つて、と弾む息をころしていた情景を思いおこした。その家の二階を下りるとき——……

「そういうことがあつても、あの女人というのは、私でないとお

つしやいますの？」

二人が腰かけている小部屋の出窓の前の檜の梢でミンミンミン、ミンミンミンと単調にやかましく蟬が鳴きたて、生垣ごしの隣家の草むらに大輪の向日葵ひまわりが黄色く咲いている。草木の上には夏の日光が燃えきらめいている。そのやきつく風景を目に見ながら伸子は、寒いような心持だった。もし万一、絢子のようなうなことがあつたとすれば、それは、酸鼻だと思つた。相川良之介は、刃のこぼれた細身の劔を杖にして、その日その日をよろばい生きている自分の哀れさを、恋愛に飢え、金銭にかつえ、名声にかわいて汗くさくなっている絢子の上にも感じたのかもしれない。人生を彷徨ほうこうする餓鬼が、また一人そこに女の姿をしていた。

ることを病的な神経に感じとつたのかもしれない。鼻の頭にされようと、唇の上にされようと、そのところに立つてされた接吻でなくてほかのなんであつたろう。それは幽鬼の接吻でなくてなんであろう。ともに頰くすれゆくものとしての挨拶でなくてなんであらう。

しかし、それは、絢子のいう意味の接吻とは全くちがう。本質がちがう。絢子にそれは理解されないだろう。

沈痛に沈黙している伸子を、じりじりした眼で見まもっていた絢子は、どうしても信じるらしくない伸子を屈伏させようとするように、そのことで、自分が男心を惹きつける女性であることを力説するよういった。

「佐々さん、まだ信じて下さらないんですのね。でも、男のかたのこころというものは、微妙なものですわ」

そういう事情に通じない伸子を憫笑するようなほほえみを浮かべた。

「久地浩さんも、私に接吻なさいました。でも、あのかたなんかはね……」

世評にもいわれているとおりなのだから、という声の表情だった。

絢子のいうことが事実であるにしろ、ないにしろ、そういう話しぶりをする絢子のこころは普通でなくなっている。

伸子は、

「ひととひとのいきさつには、きつと、はたではわからないよ
うなこともあるものなんでしょう」

自制して、おだやかにいった。

「私にはわからない事実というものもあるんだろうと思います。
でもね、遠藤さん、あなたは相川良之介という人を愛していたの
？」

「それは愛していましたわ。家庭で、どんなにあの方が孤独だっ
たか知っていたのは、私一人ですもの」

「それなら、そういう話を、あっちこっちもって歩いて、わけも
わからないひとに、それを信じろなんていう必要はないと思うわ」
こんどは、絢子がだまった。

「わたし、あなたが、そういうことをいって歩くのを考えると苦しいわ」

伸子は、しばらくだまっていて、やがて、

「やめた方がいいわ、おやめなさいよ、ね」といった。

「少くともわたしは、もうききたくないわ。いい？」

また、間をおいて、

「世間は冷酷ですからね、あなたの気がどうかしている、というのがおちよ」

遂に伸子は、とことんのことをいった。絢子は、じつと伸子のいうことをきいていた。そしてそろそろとかえり仕度をはじめた。

「ほんとに、そうですわ」

顎を掬い出すようにしてまたうなずいた。

「あなたのおっしゃるとおりですわ。いくら記者のひとに話したつて、気違い扱いなんですもの」

「そんな人にまでも話したの？」

「ええ」

どうしてそれがまちがっているのか、という風に平静に、伸子の世間のせまさをあわれむように、絢子は答えた。

あらゆる草木や地面からしめりけというしめりけを蒸発させて暑くかわき上っていた空の模様が変つて、八月に入ったある夜、雷鳴につれて豪雨があつた。

素子は、まだ京都から帰っていないかった。奥の座敷に広々とつた白い蚊帳のなかで、ひとり床に入っている伸子は、じつと目をあいて淒しいその雨の音をきいていた。茂った竹藪の竹の葉や手入れのされていない松の枝、自然な萩のしげみなどをうっておちる雨の音は柔かく幅ひろくとどろいて、そのとどろきは、しずかにねている伸子の背なかに、つたわって来るようだった。雨戸の上についた欄間のガラスから時々稲妻の青白いひらめきが白い蚊帳の上に光った。一瞬の燐光に射出された天地がたちまちまたもとの暗黒にもどるとき、豪雨はしばらくの間一層きつくなつたように感じられる。雨量の大きさには、忍びこみはじめた秋が思われた。伸子は自分のからだばかり不思議にぬれずに、季節の橋

の上に横たわっているような心持がした。庭の夏草の根を洗って流れる水は、床の下に涼々そうそうと流れている。

夜なかのこの豪雨を、やっぱり蚊帳の中によこたわりながらおそらく目をあいて聴いているひとがある。伸子は、そのひとのおとなしく七三にわけて結った髪の形を思った。そのひとは、つましく化粧して白の喪服をきていた。亡くなつた相川良之介が灰となつて葬られているのはいいことだつた。さもなければ、あの夫人は、この雨の音を、自分の悲しみの上に聴きしめていることは出来なかつたろう。いとしいもののからだに流れる水を思えば、いるにいられない思ひだつたろう。

その豪雨は、宵の口からふり出した。昼間はポプラの梢の上に

白雲の浮き出た空がギラついていた。その空が見上げられる縁側に椅子を出して、伸子がかけている。小卓をはさんだ向い側に、大柄の瀧じま明石に縋の帯をしめた大島のり子がいた。二人は初対面であつた。のり子は、その頃女子学生のために開放された大で哲学の勉強をしていた。そして、ピアノに堪能であるらしかった。

「下宿ぐらしといったって、ピアノまでもって行つていらつしやるなら、いいわ。——よすぎるくらいだわ」

伸子は、半分ふざけて、それがまさか、と否定されることを予想しながら、

「ピアノはなんなの？ ベツシユタイン？」

ときいた。のり子は、

「あつちのはひどいのですけれど……」

自然な調子で、

「うちのはそうでございます」

と答えた。昔亡夫は大学教授であつたというのり子の家庭のあらましが、そのピアノのことからだけでもおしはかられた。

「――母もすきで、下手でございますけれど弾きますの、若いころには音楽学校に入りたかつたんですって」

のり子は、来年の春、その大学を卒業しようとしているのであった。大島のり子というひとは、いい紙に大きい仮名でかかれた手紙のような感じだった。ペンでつめた字ばかり書いている伸子

にとつては、のり子と向い合つて話している気分の行間が、いかにもゆつくりのびていた。そして、そのゆつたりとられた行間はただの余白というのではなくて、かかれた文字の余韻の響いているところという風だった。伸子に、こういう若い友達は珍しかった。のり子としては、哲学も、つまりは人間の趣味の一つと考えているというのが、そのままうなずけた。

のびやかに話している大島のり子の、どこやら漱石の女性が進化したような雰囲気を感じながら、伸子は、このひとがもっている話したいことというのは、どういう事なのだろうと思つた。もしかしたら、肝腎のそのことには結局ふれずに帰るひとなのかもしれない。

大島のり子は、テーブルの上に出ていた白い団扇をなんということなくうちかえして眺めていたが、ふとその手をとめて、ふっさりした前髪を傾けるようにしながら、

「佐々さん、豊田淳さんのおかきになるものなんか、お読みになることがございますか？」

ときいた。漱石門下の先輩で有名な一人であることを知っているだけで、伸子はその人のように日本の古典芸術に深い興味をもっていなかったし、演劇に通じているわけでもなかった。

「あのかたのものは、櫛崎さんなんかの方がよくよんでいらつしやるのじゃないかしら……わたしは、多趣味というんじゃないんですもの」

のり子は、しずかに笑った。

「それはそうね」

また団扇をいじっていたが、そのまま、

「あの方、あっちにいらつしやいますのよ」

と、大学のある地名をいった。

「——講座をもつていらつしやいますの」

「——あなた、おききになるの？」

「ええ、昨年一年うかがいました」

葉から葉へつたわるしずくのように、少しずつしたたつて来るこれらの話、というより、むしろそれを話すのり子の話しぶりから、伸子はぼんやりなにかを感じはじめた。

「豊田さんの話は、豊富でしょう？」

「豊富ですわ——。それに、いい感覚があつて、……」

一音ずつ鳴らすピアノのようにのり子は話す。その一つ一つは、一つ一つとしての音色をもつて鳴っている。そこから伸子にはつきりわかつて来た、のり子の豊田淳への傾倒は、どういう内容で展開しているのだろう。

「わたくし……どうしようと思つていますの、もう、あつちからは引き上げて来てしまおうかとも思つて——」

のり子の調子は、住居をうつすばかりでなく自分の感情も、あつちから引上げて来た方がよからうかと意味しているようにきこえた。

「わたしにはわからないわ……勉強の方はどうなの？　もう論文だけでいいの？」

「ええ、そちらは、まあどうにでもなるようなものですけれど——」

夏の若い女のほんのり美しい顔色に、重いかげがさしよって来た。のり子のふっくりしたまぶたや顎のところが、上じょうぞく簇くまえの蚕の肌のような鈍い透明な色になった。伸子にのり子のせつなさが感染した。伸子は、力を入れて棹をつっぱって、二人がのっている話にくさの小舟を、流れのなかへつき出した。

「ほんとに——論文なんかどうにだってなるもんでしよう……」
いきなり問題の中心に飛躍して、伸子は、

「具体的に複雑なことになっているの？」

ときいた。そして、すぐつづけて念をおした。

「わたし、自分が伺いたいのではないのよ、だから……返事なさないだっていいのよ——ただわたしが無作法な方が、あなたにいくらか便利かと思って……」

「ええ、ありがとう。わかりますわ」

のり子は、膝においた両手の指で小さいハンカチーフを、かたくかたく細い棒に巻きしめた。

「——具体的ですし——この頃ではもうすっかり発展の見とおしもなくなくなってしまつて……だもんだから」

苦しくて、というところをのり子は黙って椅子の上で身をよじ

った。伸子は、豊田淳の書くものを思い出した。そのこった、ふくみの多い主観的な表現と、のり子の言葉のすくない風情との間には近似性がある。その趣が趣をひきつけたところから、のり子として真剣な問題がおこって、初対面の伸子にもむき合わせるこ
とになった。のり子の、ひとり苦しんでいる、という様子が伸子に、さまざまの現実を推察させた。伸子は歎息するように、

「いつも女の負担が多いのねえ」
といった。

「なんて、そうなんでしよう！」

水の中でこらえていた顔をもちあげて、一気に苦しい息をはき出すようにのり子が応じた。

「愛することは、まるで苦しさに耐える、というみたい……」

「だって、それは変えなければやうそよ」

伸子らしい一途さでいった。

「そういうのは決して、正常じゃないわ。決して正常であり得ないわ」

佃と暮して、もがき苦しんでいた間、伸子はどんなにしばしば、いまのり子が歎いたような歎きに呻いただろう。歎いても歎いても、そのことで歎きの原因はとりのぞかれなかった。

「佐々さんの場合はわかりますわ。——ですけれど、もし、正常にする可能性がどこにもなかったとしたら？ どうすればいいのかしら……」

「……………」

「正常にするためには、もとからある生活を根柢こんていからこわさなければならぬとしたら——」

「だって——それは、はじめっからわかっていることじゃないの？」

「……実際にそれが不可能だとしたら？　男のひとに、その意志がないとしたら？」

そういうのり子のまぶたの色は鉛のように沈んだ。その名をきけば一部の人々には教養の守護者のように思われている人の生活の現実も、こういういきさつとなると、凡庸さも、不決断を理由づける卑屈さも、世間の多くの男の場合とその本質では大差ない

ように見える。伸子は自分もその気分に染んでいないこともない教養ごのみそのものに、なまなましい嫌悪を感じた。教養の選良のように見られている人に、こんなありふれた男女関係の混乱がある。しかも、これらの人々にはありふれた事件をありふれた事件として判断するものを、かえって嘲笑する傲慢さがある。情景のひとこまひとこまが、よしんば教養のニュアンスで複雑にされ、情趣で色どられているにしろ、社会で生きる男と女としてはこれまでの男くさい勝手をつらぬいて、むしろその弁護にだけ役立てられる教養というものに、伸子は唾棄を感じた。

とり乱すことが出来ないだけになお苦しそうなり子は、そこに出ていたコップをとり上げて、氷のかけらの浮いた水をひとく

ちのんだ。そして、しばらくいいようを考えている風だったが、いきなり、

「父親をもたない子供が生れるということは罪悪でしょうか」といった。いい終ったのり子の鉛色のまぶたがだんだんにあからんだ。その変化は、のり子の若い肉体と精神の全血行の逆流を語った。のり子のその顔つきは、こうしてそれをみているより自分の胸の上に抱き伏せてしまった方が、まだ楽だと伸子に思わせた。伸子は、自分を凝視しているのり子の眼に、ひとこと、ひとことをうちこめるようにいった。

「世間の習慣では、そういう子供はかわいそうね。でも、罪悪かしら——一人の女のひとがその子の母親となるようになった動機

が罪惡といえるかしら——」

伸子にそうは思われなかった。

「でもね、当然母親になるはずの女の人と子供とを、そういう条件においておく男があれば、それは罪惡的だわ。子供が生れる生れないにかかわらず、よ。世間が、どうみる、みないに、かわらず——そうでしょう？」

よくいいあらわせなくて、伸子はもどかしげに目ばたきした。

「そういう条件なのに、それなりするずに進行した全体の関係そのものが変よ——まして一方に、もうちゃんと出来上った家庭生活があつたりすれば……」

いつていううちに自分にも少しずつ細部が明瞭になって来て、

伸子は、

「その意味では女のひとにだって、同じだけ責任があるわけだわ、知らなかったのではないんだもの」

といった。

「愛なんて、ほんとに愛なはずなのに——紛糾や怨ではないはずなのに——妙ねえ。なぜ、こんなに、どこでもかしこでも愛はごたごただの苦しみだなの？　ほんとに、なぜ？　愛が苦しみだなんて——」

ほんとうに、伸子のまわりのどこに、愛の発露とはこうもあるのか、と、目を奪われる眺めがあるだろう。佃と自分とがからみあいもつれあつて生きたあの姿。母と越智との空虚な、しかも力

いっぱいの葛藤。そして、母と娘との感情においてさえも――。

伸子はその中から自分をもぎはなすように、頭をふっていった。

「ね、勇気をふるってね。いやな苦しいいきさつの中から、一番ましな部分をつかまえるのよ。生れるものを堂々と生れさせるのよ。生むことを堂々と認めるのよ。父親は逃げた。それだって、その女のひとは子供を愛しているのだわ、そうでしょう？ 愛はそのひとのものだわ、そうして、子供も……。子供には子供の人生を生かしてやるのよ」

のり子の、また鉛色にかえったまぶたの下から、とめどなく涙が溢れた。のり子は、涙を抑えていたハンカチーフを口にあてて、声を忍んで嗚咽しはじめた。伸子は座をはずした。

ほどたってから、伸子が新しくこしらえた飲みものをもって座敷へ戻って行こうとすると、のり子が、どうしたのか隣室の襖ぎわへ来て立っていた。

「——気持ちが変わるくなったの？」

おどろいて、伸子がたずねた。

「いいえ」

のり子は半分ぼうつとなったように、涙で濡れたハンカチーフを握ったまま、なおそこにたたずんでいる。じっとしていられなくなつて、我知らずそこまで動いて来たという風だった。

「あつちへ行きましょうか。立っているとくたびれることよ」

「ええ」

のり子は、ななめ下の畳を見つめながら機械的に返事したが、動こうとしなかった。伸子がひとあし進もうとしたとき、その胸にのり子がぶつかるように身を投げかけてきた。

「ねえ、あのかたのことをわるくお思いにならないで！」

低いけれども、絶叫のようにのり子はそういった。

「どうか、あのかたのことをわるくお思いにならないで頂戴！」
そして、伸子の胸から、伸子よりもすらりと高い自分の上半身をすべらせて、傍らのベッドの上へ泣き伏した。

夏の夜なかの豪雨を蚊帳のなかで聴きながら、伸子は昼間のその情景をこまごまと思いかえした。女ひとりの寝ている家の屋根瓦をうち、その庭に生い茂った夏草の根を洗って流れる雨の音と

稲妻の間を縫って、あのかたをわるくお思いにならないで！　と
いったのり子の、訴えにみちた叫びが、またきこえるようだった。
あのかたをわるく思わないで。――しかし、ベッドの上に泣き伏
したのり子の綺麗な友禅の紹のおたいこは、なんとせつなく波う
ちもだえていただろう。

伸子の心は、いうにえない哀憐と、人間生活へのわけのわか
らなさで、しめあげられた。瘠せた顎に汗とともにかわいたほこ
りのしみをつけたきたない遠藤絢子は、ギラギラした眼でもって、
幽鬼じみた接吻のことを告げた。相川良之介さんは私に接吻した
んです、と。そこにも人間性のぴくぴくする断片とその痙攣とが
ある。けれども、なんとあれこれは互に齟齬しており、くだらな

さと痛切さがまじりあっていて、窮極の意味はわからないのだろう。豪雨の夜の天地の暗さと、人間の生きかたの奇妙なくらさとは、ひろい座敷に虫籠のようにつられている白い蚊帳を、パツと瞬間ひらめき照らす稲妻が消えるごとに、いよいよ濃くなりま
さつて、伸子の心とからだをおしくるむようだった。

二十二

素子が京都から帰って来た。

東京をはなれたのは僅かの十日たらずであるけれども、その間
ひどくちがった生活の中にいてきた人の眼つきで、素子はその

なかを見まわした。

「——どうした？　相川良之介の葬式には出かけた？」

「ええ。行つた」

伸子は、不自然でないように話題をうつし、

「あなたの方、どうだった？」

ときいた。

「工合よく行つて？」

「——ひとり角力として来たみたいなところがあつてね」

予定していたほど、素子が分配される財産がなかったらしかつた。

「まるで駄目？」

「そんなことはないさ！——それや、わたし一人ぐらいはなんとかなりますがね」

わたし一人ぐらい、という言葉に伸子はおどろいた。

「一人ぐらいつて……」

では、素子は、伸子の外国旅行の費用も、自分の分から賄おうと思っていたのだろうか。

伸子はあわてて、

「そんなこと出来ないことだわ」

といった。

「とても、わたし、出来ないわ。わるいわ。それに——」

よしんば素子に十分の金があろうとも、伸子はその金で自分が

外国を旅行するということは考えられないのであった。

「ぶこちゃんは、そう思うような人さ。だけれどね、金は、金さ！　そうだろう？　使える金を一番よく使うのが功德というものさ。——うちの親父も、どうせろくな金をためちやいないにきまつているが、まさか、さわって穢れるほどの悪銭でもないだろう」

「そういう意味じゃなくさ」

伸子は、すこし顔をあからめ、素子の心くばりをうれしく思いながら、ゆずらない小声で、

「そのお金、出来ないでよかった」

といった。

「もし出来たら、わたし困るわ。やっぱり、そんなこと出来ない

し……」

赤いパイプを口の中どころがしながら、素子はまぶしい庭から移した視線を伸子の上においた。

「——ぶこちゃんの気持は、じゃあ、どうなのさ」

外国旅行の話が出て初めて、素子がそうきいた。

「行く気がないのか？」

まるで行く気がないといえ、それは一面に傾きすぎた答えだった。

それかといって、伸子のいまの心は、どうしても行きたい、というところまで歩み出していなかった。

「もちろん、行ってもいいと思うわ。でもわたしロシア語専門と

いうのじゃないから、行くならフランスなんかもみたいし……」

だが、それも伸子の心もち全部をいいあらわしている返答でなかった。伸子は、もしこんど外国にゆくのなら、本当に自分ではつきりした動機をもつて、はつきりした心持で行きたいと思った。二十のとき、父につれられてニューヨークへ行つた。それは伸子とすれば全くうけみな偶然であつた。その偶然をそのときの伸子として一番痛切だつた方向に活かそうとしたのが精いっぱいであつた。外国へゆくということは、その経験があるだけに、かえつて伸子を考えぶかくするのであつた。

「あなたは、自分の専門だから、行く理由も目的もはつきりしているわ。でも、わたしの方は……ねえ、わかるでしょう？……そ

れにね、いま、わたしの心に、こうなっているものがあるの」

伸子は、両手の指を胸のところで、もしやくしやと動かしてみせた。

「それがまとまると、きっとはつきりすると思うの、だから、もうすこし待って……」

「それや、待つも待たないもないけれど……」

相川良之介の死は、それを知った当座のおどろきや疑い、悲しさの激発が一応はしずまったあと、伸子のなかに深い余韻をのこした。その余韻は、細々としながらも消しがたく、丁度相川良之介が「蜘蛛の糸」という小説でかいた一本の細く光る蜘蛛の糸のように、伸子の日々を縫い貫いて、その日々には何かの作用を

与えはじめていた。その蜘蛛の糸は、いまにも絶えそうに細いの
に決して切れない強靱さをもっていて、南京玉を一粒一粒とと
おしてゆく絹の糸のように、いつの間にか、伸子の心の中で、一つ
一つばらばらにおこつて伸子をつき動かした出来ごとと出来ごと
との間をとおして、それはなんだか、そしてどうなるのだけは分
らないながら、一つの輪になりかかっている気持であつた。

この二三カ月のうちにおこつたいろいろのこと、越智と母との
いきさつ、保の生活ぶりとそれにたいする自分のいつも心配な心
持、どれも切実なようできてそのはしばしは、みんな本質的には
未解決のまま、伸子にとって手に負えない、現実のくらがりのう
ちに消えこんでいる。そのわからなさの上に大島のり子の優美に

泣きくずれた姿があり、またあのよごれで光った三人の若い青年たちの顔々もある。

いつか動坂の客間の夕やみの中で保の心もちを飛躍させる力のない自分を不本意に苦しく発見したとおり、これまでの伸子の心ひとつでは、自分のわからなさといくらぐらかつてしまうだけだったものを、一条の蜘蛛の糸が、細く、しかし決して切れないその光る粘りで、貫きまとめかけているように思えた。それはいろいろが、もつとわかつて来た、というのではなかった。反対にいくつも、いくつものわからなさの間を、相川良之介がその時代に向って正直に示した、ボンヤリした不安という蜘蛛の糸が絡みまとめて、そろそろ、そろそろそのしほりを締めつつあるような心持

だった。わかったという方向から湧く力ではなく、ほんとにわからない！ としぼりがちぢまり凝集することで、そこからなにかひとつふみ出す力が湧きそうな、痛みと歓喜との入り交った予感が伸子の心をうずかせていたのであった。

伸子は、わかりにくいことをわかつて貰おうとして、困り困り素子に自分のその心持を説明した。

「だからね、わたしは、これをすっかりみのらしてみたいの。わかる？　中絶したくないの。音楽のように、しまいまできいてみたいの」

「——まあ、それもいいだろうさ、わたしの方だって、なにもきようあすにきまるわけじゃなし……」

素子は、そういう伸子の心にはあまりさわらないようにし、さわらないことではやく、伸子がいわゆるみのった状態におかれることを期待している風で、自分の旅行のための用事で外出しつづけた。巢についた牝鶏のように、伸子は家にこもりつづけた。

そういうある日の午後、縁側で竹の葉の色が青く映っている金魚の鉢を眺めていた伸子は、うしろで、

「こんにちは」

と、よびかけた男の声におどろいた。ふりかえるなり、伸子は、愛嬌のない眼をそちらにむけた。少女むきの文芸雑誌の記者で沼辺耕三という記者が、原稿をたのみに、といって先頃ちよいちよい訪ねて来た。沼辺耕三は、玄関をあけて入らず、柘榴の下枝を

くぐつて、いつもいきなり座敷の縁側のところへ姿をあらわした。はじめて来たときから、彼はそうした。

伸子は、そのとき座敷にいたこともあり、いかなかったこともある。不機嫌になつて座敷の真中の卓の、床の間よりの側に坐る伸子に、白服をきた沼辺耕三ははなれた縁側から、話しかけた。

「きようは吉見さんは——お留守ですか？」

そして、奥をのぞくようにした。伸子のところに、留守ならばどうだというのだろう、と思わせるいいかたできいた。いくら伸子がことわつても、何か書けと求めた。そのおしのつよさは、伸子に自然なものとしてうけとれず、俗に男はおし、という、そういう意味でのおしの感じに通じていて、沼辺耕三を嫌悪した。

その男が、きようは浴衣がけで来た、と思つて、伸子はいそいで縁側から立つて奥へ入ろうとした。すると、庭へ入りかけていた白い浴衣の人は、伸子のおどろいたのがわかったと見え、

「や、失敬しました」

といった。

「——玄関へまわつた方がいいですか」

眼を定めてみれば、それは、沼辺耕三とはまるで別の人であつた。ただ、三十をすこし出た年恰好が似ているのと、背だけが似ていたのだった。眼鏡をかけた顔は、すこし蒼く、静かに見えた。伸子は、あわてた自分に苦笑した。

「失礼いたしました……ちよつと人ちがいして」

縁側へ出て行つた。

「どなたかしら……」

「いや、別に名前をいうほどの用で上つたもんでもないんですがね」

白い浴衣の人は、高くしげつた夏草の穂を野原にでも立っているようにぬいて、それを指の先でまわしながら、

「あなたの書かれるものを読んでいるもんだから……」
といった。

「……………」

伸子はきくような眼でそのひとを眺めた。

「偶然通りがかって、表札を見たもんだから——」

浴衣のひとの言葉づかいやものごしが、伸子に珍しい印象を与えた。伸子の書くものを読んで、と訪ねて来た人にしては、そのひとは大人すぎて見えた。さっぱりした感じとまじってほんのすこし横柄のようでもあった。年の多さという以上に、そのひとは伸子にたいして、出来上っている自分の世界の感じを示した。伸子は静かで、おとなしく、だが、どこかふみこんだところのある人物を、警戒よりもつよい好奇心で見まもった。

庭へ立ったまま、そのひとは、縁側にいる伸子にきいた。

「あなたは、北條一雄というひとの書いた本をよんだことがありますか」

「それは——文学の本じゃないでしょう？」

伸子は、どこかの広告でその名を見た記憶があつた。

「文学じゃない」

浴衣のひとは、苦笑のような笑い顔をした。

「経済と政治ですがね」

「よんだことはありません」

あるとおりに伸子は答えた。

「——そんな本の話きいたことはないですか」

伸子たちの生活の輪には、政治や経済の話をする人はなかつた。

「一つよんでみる気はありませんか」

「さあ……」

自分の名もいわずに、いきなりそんな話をしはじめた人を、伸

子はまた不思議に感じた。その心持を顔にあらわして立っている伸子に、その浴衣のひとは、また苦笑に似た笑顔を見せた。

「マルクス主義なんていう雑誌は、よまないんですか」

「よんだことないわ」

「文芸理論も出ますよ、篠原蔵人の立派な論文もありますよ」

「そうお」

篠原蔵人という名前で書かれた文学についての論文を、伸子はいつか雑誌でみたことがあった。読んだがわからなかった。引用から引用に続いた文章の組み立てで、伸子にはどこに、そのひとの文章があるのかよくわからなかった。そういう面ばかりつよく感じられて一層伸子の理解が戸惑わされた。

伸子は、そのとおりを浴衣のひとに話した。

「なるほどねえ——そういう風なものかな——しかしわかりますよ」

力を入れて、くりかえした。

「あれが、わからないなんてことはないはずだ」

そして、いくらかむつとしたように、

「それは君がわざとわかろうとしないんだ」

といった。

「どうして？」

伸子は縁側にしゃがんでいて、思いもかけない表情になった。

「どうして、わたしがわざとわかろうとしないなんて、あなたに、

わかっていらつしやるの？」

「……………」

「いま、はじめてお会いしたばかりなのに——」

「いや、いや、そういう意味でいったわけじゃない」

伸子は、本当にそれがどういう人なのか知りたそうにまた、

「——あなたは、どなたなんでしょう」

とつぶやいた。しかし浴衣のひとは黙ったまま、手にもっている雑草の穂を指の間でクルリ、クルリとまわしていたが、やがて、吸いきったタバコでもすてるようにそれを足下にすてて、

「——どうも突然、失敬しました。いつか北條一雄の本はよんで見られるといいと思うな」

そういつて、伸子があいさつをする間もなく、柘榴の枝かげに身をかわして、門の外へ出て行ってしまった。その白い浴衣の後姿に黒い兵児帯が伸子の目にのこった。

二十三

不意に柘榴の樹かげからあらわれて、伸子が一人で金魚鉢を見ていた縁側によって来た男は、何者だったのだろう。どういう意味で、北條一雄の本のことや篠原蔵人の書いたものについてばかり話して行つたのだろう。それらの本や論文について、伸子が、わざとわかれうとしないんだ、というようなことを、どうしてそ

の白い浴衣のひとは云うことができたのだろう。

素子が夕方帰って来たとき、伸子は、その不意な来客について話した。

「まるで知らない男かい？」

「知らないわ……」

「近所に住んでいるらしかった？」

「そうとも思えなかったけれど」

素子は、煙草の煙が夕風に流れる方角を追うように庭に目をやっていたが、

「ここが流通なのも考えもんだな？」

と云った。門から玄関までの通路と庭との境に、垣根のないこと

をいうのであつた。

「どうもこの節は、えたいのしれないものが頻ひんぴん々とやつて来るね」

きょうの不思議な客ばかりでなく、いつか来た三人の、よこれで光った青年たちのような若者が、皺くちやになった紙に鉛筆で姓だけを書いたものを示して、あれから三組ほど来た。いつも三四人ずつが一組となつて。その人たちは、しかし、必ず玄関から来た。堂々と玄関から来る、というところに、その人々が自身に認めている權威が示されているらしかった。

白い浴衣の男が、わざとわかろうとしないんだ、とひとくちに云つた言葉は、伸子の耳から入って小さいとげのように心にのこ

った。その言葉は不愉快な鋭さで伸子の心をつついた。伸子にすれば、わざとわかろうとしないなどという態度は、そこになにか防衛しなければならぬ特別の利害とか、権威とかを考えずには思えもしなかった。篠原蔵人の階級芸術についてかいた論文は引用ばかりのようでよくわからなかった、と云った伸子に、どんな打算があつたというのだろう。わざとわかろうとしない必要がどこにあるのだろうか。

久しぶりで、昔の同窓生であり、小説家である河野ウメ子が遊びに来たとき、伸子は、その奇妙な訪問者のことを話した。

「その人は、そういうのよ。——わざとわかろうとしないんだ、
って……そんなことありうる？」

下町に育つて、小柄なからだに、特徴のある美しい上まぶたの表情と長いまつ毛をもったウメ子は、糊のきいた素子の伝法な柄の浴衣の中で、

「どういふんでしょうか」

ほっそりした首をすくめるようにして、素子の方を見かえした。素子は、黙っている。三人の前に、ウメ子のお土産だったアイスクリームをたべたガラス皿があった。

「河野さん、あなたは、ああいうもののおわかりになる？」

ウメ子は目立たない勉強家で、いつとなく専攻の英文学のほか、チェホフの作品などを原語でよむようになっていた。小説のことでは伸子も間接に影響をうけている須田猶吉に親^{しんしや}炙して、

婦人の作家に珍しく装ったところのない作風を認められていた。

「わたし、いつもなまけてばかりいてわるいんですけれど、あんまりああいうものは読まないんです」

ウメ子は、ちらりと奥にある小さい金歯をのぞかせながら笑って、美しい上まぶたをつり上げるようにした。

伸子には、篠原蔵人の論文にあるように、リアリズムという文学の上の傾向にも階級の区別があつて、ブルジョア・リアリズム、プロレタリア・リアリズムとわけられなければならないというところが、よくのみこめなかった。「アンナ・カレーニナ」のなかで、アンナがモスクワへ来てはじめて夜会に出かけた晩の美しさ。そしてまた、ウロンスキーと恋愛におちいったのち、良人カレーニ

ンの書齋で、女としての解放を求めて冷血なカレーニンに迫ってゆくあの生命に溢れ、必死な真実に燃えたった情景。ああいう風に、まざまざと人間とその生活とがたぎっている小説がかけたら、と思いこんでいるのぞみのなかで伸子には、ブルジョア・リアリズム、プロレタリア・リアリズムという区分の意味がわからないのであつた。

「どっちみち、ほんとにちゃんとした小説がかけるようになりたいわ、ねえ。それは同感でしょう？」

伸子は、つよい憧れを顔にあらわして云つた。

「プロレタリアの生活もブルジョアの生活も、ひつくるめたようなりアルな小説がかきたい。社会はそうして動いているんだもの

——リアリズムって云うのも、そういうもんじゃあないのかしら……」

「……………」

ウメ子はちよつと伏目になったような真面目な表情で、自分の意見は云わず伸子のいうことをきいた。しばらくみんな沈黙していると、素子が、男のように腕をくんでいた片手でパイプを口からとりながら、

「われわれには、階級ってものがよくわかっていないから、どうもすべてはつきりしないのさ」
と云った。

伸子は、ほんとうに眼を大きく見ひらいてそういうことを突然

云い出した素子を見た。素子が、そんなことを云う。——全く思いがけないことだった。

「……あなたはわかつているの？」

「そうはつきりわからう道理がないじゃないか。けれどさ——どうも、そういうものらしいというのさ」

「……………」

いつの間に、素子には、そういうことがわかったのだろう。この間京都へかえっていた間も、素子は祇園のおつまはんのところまで夜明ししたりした。帰ってから日常のこまごましたことに関心を示して、すべては相変らずに見えるのに、その素子から自分たちの生活の中では云われたことのなかった階級というような言

葉が云われた。これは伸子をおどろかした。軽薄というところがないウメ子が、黙って素子を眺めた目の中にもそのおどろきが映っている。伸子は、からだをよせてゆくような調子で素子にきいた。

「どこで、そんな勉強してきたの？」

素子は、顔をあかくし、例の、顎を下からなで上げる手つきをした。

「うちじゃあ、いつもぶこちゃんだけが物知りでなくちゃならないってわけもないだろう」

「意地わる云わないで……ね、ほんとに」

「虎の巻があるのさ」

伸子とウメ子とは、思わず目を見合わせた。

「どこに？」

素子は、面白そうににやにや笑って返事しなかった。伸子が、瞳のなかに焦立たしさをひらめかせはじめたとき、素子は、

「そこさ！」

顎で、その座敷の隅にある自分のテーブルの方をしゃくった。

「ほんと？」

「うそをついたって、はじまりやしない」

伸子は、すぐ立って机のところへ行ってみた。素子の訳したロシアの作家の書簡集の校正刷りがその机の上にのっついていて、わきに赤インクのびんが栓をするのを忘れたままある。見まわした

ところ、素子のいう虎の巻らしいものは見当らなかった。

「ないことよ、なんにも——」

「字引の下にあるだろう、カヴァーのかかったの」

重いロシア語字典の下に、四角つぼい形の厚い本がハトロン紙のカヴァーをかけてあった。

「これ？」

伸子は、手にとりあげた本を、むこうに坐っている素子の方へさしあげてみせた。

「そうさ」

立ったまま伸子は、その本をあけて見た。ブハーリン著、史的唯物論と印刷されている。これはしばしば新聞や雑誌の広告でみ

かけた題であつた。同時に、伸子には意味のわからない題でもあつた。伸子は、頁のところどころをあけてみながら、のろのろと、二人の坐つているところへ戻つた。そして、ウメ子にその本をわたした。ウメ子は、落ちついて順序よく目次をよみ、いくらかの頁をめくつた。ウメ子は、だまつてそのハトロン紙でカヴァーをつけられた本を畳においた。その本の目次や、書かれている文章のところどころには、伸子がよみなれて来た本にない何か新鮮な、鋭いつつこんだ調子を感じられた。そこにある美しさが感じられた。伸子は手をのばしてウメ子のわきからまたその本をとりあげた。

「面白い？」

「おもしろい」

素子のはつきりうなずいた。

「ずるいなあ」

伸子はほんとにそう思つて云つた。

「いつ買ったのよ」

「二三日前さ」

二三日前と云えば、白い浴衣の男が不意に柘榴の樹かげから縁先にあらわれた日の、すぐあとのことである。素子は、また顎をなで上げるようにしながら、

「北條一雄の本ていうのも見ましたがね、どうもこっちの方がいいらしいから、こっちにした」

「ずるいなあ」

伸子はまたそう云った。

「わたしが、とじこもって、あれこれ考えてるまに……」

「いくらわたしだって、まさか、何一つしらないで行くわけにも行かないじゃないか、ぶこちやんだって買えばいいのさ、どつきり積んであるよ、東京堂に」

ウメ子が、その言葉に注意をひかれていくらかためらいながら、
「——どつかへいらっしやるんですか？」

ときいた。素子は、

「ああ、」

と、自分で自分の言葉に不意うちをくったように少しまごついた。

「まだはつきりきまったことじゃないんですがね——わたしもどうせ一生ロシア文学の翻訳で暮すんなら、思いきってひとつソヴェトへ行つてきたいと思つて……」

「まあ！」

ウメ子は、まぶたの上にさつと艶を浮べて、

「いいこと！ 是非いつていらつしやい」

独特の謙遜な態度で賛成した。

「いらつしやれたら、本当に結構ですわ、わたしまでなんだかうれしくなつちやつた」

なつちやつた、というところを、いかにも東京ツ子らしい歯切れのいい調子で早口に云つて、ウメ子は、身幅のひろすぎる借着

の浴衣の中で首をすくめた。

「――伸子さんもいらっしやるんでしょう？」

「わたしは、お金がないの」

すると素子が、幾分からんだ口ぶりで、

「金だけの問題じゃないんですよ」

と云った。

「相かわらず手がこんでるんですよ……動機がまだ熟さないんだ
そうだ」

「だって――それはウメ子さんは、わかって下さると思うわ。あ
いまいで、行くようになってしまったりするの、惜しいんですも
の。度々行けるところでもないんだもの」

動機ということを云えば、名も告げない白い浴衣のひとが来て云ったことで、伸子は、自分のわからなさの凝集作用ばかり見つめていたような状態から、つきとばされて、そとへころげ出たようなどころがあった。わからなさのそとに、わかるべきことが存在していて、むしろ、そつちに意味がありそうに思えるようになって来ているのであった。

ウメ子は、その晩伸子たちの住んでいる郊外の家へ泊った。翌日のひる前、帰ろうとするウメ子に、素子が実際家らしい調子で念をおした。

「旅行の話ね、あれはまあいまのところ全く確定していないんですから、そのつもりで、たのみますね。いい恥つかきだからね、

じたばたしてあげくの果に行けなかつたなんてのは――」

「ええ。大丈夫です。誰にも云いませんから……」

玄関へ出ながら、ウメ子は濃い長い眉をあげるようにして、

「しかし、本当に実現なさるといいですね」

伸子をかえりみて、云った。

うすい灰色のような紙表紙に、赤い字でブハーリン著史的唯物論と書かれた定価一円の厚い本が、伸子の身のまわりにも現れはじめた。この一冊の本によつて社会のなり立ちというものが、いくらか客観的に伸子の前に示された。伸子が、久しい間ぼんやり人間性の発展として文学的に感じて来ていた社会の進歩というこ

とが、生産条件の発展とその推移を中軸として実現するという事実は伸子にとって全く新しい真実であつた。社会に階級があるということも、いきなり文学とくつつけてはのみこめなかつたけれども、この本のように、階級のなかつた原始の社会から、どう人間の社会は変化して来て階級が発生したかと説かれてあれば、伸子にもわかつた。一つの発展のうちにふくまれている矛盾そのものに、また次の発展の可能が用意され、進展には固定があり得ないということ、絶対がないということ、解決しきるということは現実にあり得ないこと、それらは、伸子を同感させ、そして実感に迫つた。これまで伸子は、保がいつもくりかえす「絶対に云々」という観念をどんなに、うさんくさく思つて来ただろう。いつも

それに抵抗を感じて来た。その抵抗によりどころがあつたし、それが自然だったのだ。

伸子は毎日どっさりの時間をその本のためにさいた。部分部分ばかりにふれ、そこからだけ覗いて来たこの人間の社会というものを、その千変万化の複雑さのなかに、矛盾の根柢から解明して、歴史の発展してゆく必然の方向を導き出してゆく社会科学というもの。その方法は、全く新しい力で伸子の知識慾をみたした。

伸子は時々その感動を抑えきれなくなった。そして素子に、

「わたし、ほんとにうれしい」

と云った。

「まるで霧がはれてゆくみたい。一つ一つ山や森や河の景色が霧

の中から見えて来るみたい。そうじゃない？」

「――」

「ねえ。あなたはそう感じない？」

「うるさいじゃないか、いまこれをしてるのに……」

素子は、おこったようにはねつけた。

「きのうも、同じこと言っただじゃないか」

「そうだったかしら――ごめんなさい」

そして、伸子はまたその本に戻ってゆくのであった。

階級というものの存在は客観的であつて、自分自分の主観に立つたところもちにかかわりない社会的事実である。このことは、

伸子を深く考えこませた。人はそれぞれ一定の階級に属し、階級

はそのものとしての歴史的な利害をもっている。この客観の事実
は、その人が階級というものについて全く無智で暮している場合
でも、動かせない現実として存在する。そういうところを読むと、
伸子にも、ぼんやりと、リヤクに來た青年たちと自分との第三者
からみた立場のちがいが、どういうことになるかわかるようにも
思えた。伸子は、自分というものが、社会の階級では中産階級と
いう不安定な階級に属す一人の女だということを理解した。自分
の仕事をもって、独立の経済で生活しているにしろ、中産階級・
小市民という階級に属していることにかわりはなかった。そして、
その中産階級というものは、ますます寡頭化してゆくブルジョア
ジーと勤労階級との矛盾の間にはさまって動揺しており、歴史の

発展の中で新しい任務をもちはじめている勤労階級と利害をともにする立場にうつるか、さもなければ、本質的な発展を阻まれたままふるい支配階級とともに歴史のなかに消耗されてゆくしかない階級として、示されているのであった。

「そうなのねえ。だから、動坂でいくら自動車を買って、どうかなった気でいたって、結局のところやつぱり、けちくさいんだわ。大戦で郵船会社が大儲けしたから、建築家だってあのビルディングを建てたんだもの——」

そう云っているうちに、伸子は建築家である父が、しばしば娘の伸子に向って、依頼者の注文づけが不愉快だと話していたことを思い出した。方眼紙でできている父の手帖には、実際に建てる

家やビルディングの設計図のほかに、それを考えているうちに浮んで来たいくつもの架空の設計図が描かれてあつた。椅子にかけた泰造が、その膝のところにくっついて低い腰かけにいる伸子の手をとつてなでながら、よく、想像（イマジネーション）を発揮しなさい。と、それを日本語でいうより英語でいうと一層そこにゆたかさが思われるようにいうのを思い出した。そういうとき伸子は、

「お父様のイマジネーションずき！」

と笑つた。社会のしくみがいくらかわかつて、建築家としておかれている父の立場が察しられてみれば、父のイマジネーションずきには、決して実現しない建築家としてのあこがれがひそめられ

ているのを知った。それを思いやらず、無頓著にただ陽気そうに笑っていた若い女である自分の笑顔の上に、伸子は無智からくる厚かましさをみとめた。それは伸子に自分への反感をつよく感じさせた。

食うための苦勞をしたことがないということで、伸子は作品に關してまで悪口を云われて來た。それにたいして食うための苦勞をしなくなつて、と人間の高まる可能を思いつづけて來たのであつたが、今、伸子にはそういう卑俗な、そして、現象からだけ云われている言葉にも、もうすこし違つた意味がありそうに思えた。ちがつた意味というのは、伸子が勤勞階級の生活の中から育つたものでないということ。保の上には、ある程度それを見て、心痛

しているその同じ小市民風の考え癖、そんな考え癖の生れる保と、同じ本質の階級の地盤に自分も生活の根をもっている、ということが理解されるのであった。だからいつかのように、どうしても保にシュツ！ としたことが云ってやれなかったわけもわかるようだった。

これらの発見の一つ一つは伸子にとって、自分の無智と無力を知らされることであった。しかし、この自己暴露には身をひきはがすような痛さと同時に爽快さが伴った。

階級的に発展することだけが、小市民の歴史における正しい生きかただとして、それはどういう風にしておこるだろう。

「あなたにわかる？」

伸子は、校正をしている素子のわきにくつついて云った。

「相川良之介の聰明に限界があつたわけがわかるようでもあるんだけれど——階級的移行って、一人一人にとって、たとえば、あなたやわたしにどういう風におこるんだと思う？」

「ぶこちゃんは、それが生れつきなんだろうけれど、いやんなっちゃうな」

赤インクのついたペンをもったまま素子はほんとにいやになるようにわきに立っている伸子を椅子の上から見上げた。

「いつだって、こうだ、知ってるかい自分で——こんどだって、あの本見つけて来たのは、わたしだよ。ぶこちゃんは、うちにただ坐ってたんじゃないか。わたしは用で外へ出なくちやならない。

すると君は坐つてそれをよんでいる。そしてどんどん吸収して生長してゆくんだ。いつだつてそうだ。わたしがきつかけをつくる、それをわきからとつてもものにしてしまうのは、ぶこさ」

素子は、暗い眼でじつと伸子を見すえた。

「そこがおおかた力のちがいというもんなんでしょうがね……」

奥歯をかみあわせたような辛辣さで云った。

「……わたしは、ぶこに食われるのはごめんだよ」

なにかいおうとして伸子は唇をすこしあけた。けれども、なんといつてよいかわからなかった。暗い素子の視線のなかには、そんなに複雑にそして本気に伸子をつきのけるかげがあつた。でも——伸子は素子とのいまの生活に決してすっかり安心しているの

でなかった。佃との生活におさまりきれなかったように。佃との生活に落ちつけずにいた伸子にたいして、素子はあるに積極的
に離れてゆく伸子の心を支持した。いまだって伸子は動こうとして
いる。自分たちの生活として、そして、自分たちの生活の新し
い意味を発見しかかっている。素子は、なぜ同感してくれないの
だろう。伸子と素子との間のことのようにうけとるのだろう。素
子の机のよこからはなれてゆきながら伸子は涙ぐんだ。

二十四

ソヴェト同盟の革命十周年記念祭は十月初旬から一カ月の間つ

づく予定だった。それがすんでから、あっちへ着く方がいい。素子はそういう風に計画を立てた。全く個人の資格で、もしかしたら招かれざる客としてゆく女なんかは、そういう騒ぎがしずまつてからの方がいい。そういう考えであつた。

九月に入つて、素子は本式に旅券の申請手續をとることになつた。旅券申請には、下附される旅券にはる写真が入用ということだつた。

「厄介だな。うちでとつたのだつていいんだらう。何かありそうなものだね」

素子は、台紙にはらないスナップ写真を入れてあるカステーラの古箱を床の間の地袋からもち出して、なかみを机の上にひつく

りかえしはじめた。伸子は縁側の椅子のところからその様子を眺めていた。素子は、

「丁度つていうのはないもんだな、これは小さすぎるし」

書類につけて出す写真は寸法もきまっているのであった。伸子は、妙に力のこもった眼つきをして素子が素人写真をいじっている様子を見まもっていたが、やがて、少しつばのたまったような声になって、

「——あたらしくとつたら？」

そういいながら椅子を立て、机のわきへ来た。

「新しくとりましようよ、かわりばんこに……」

ばつがわるそうにそう言つて伸子はちらりと亢奮した笑顔をし

た。

「わたしもいるから……」

素子は、それをきくとさつと顔をあからめた。

「なんだ！　ぶこちゃん！」

そして、たしかめるように、じろじろと伸子を見まわした。

「ほんとかい？」

伸子は、こつくりとした。

「どうしたのさ——動機つてやつは——」

灰色表紙の一冊の厚い本は、伸子がこれまで知らずにいたどつさりのことを教えた。自分の様々の疑問がこの日本の社会の中にもっている環境と関係したものであるという性質が、おぼろげに

輪郭づけられた。けれども、それはどこまでもおぼろげにわかっただけだった。たとえば、自分が階級的に成長するということについて、具体的に何がどうなればよいのか、伸子にわからなかった。本には明瞭に示されている。小市民やインテリゲンツィアはプロレタリアの革命的陣営に参加して、はじめて自身を歴史の上に発展させることが出来るのだ、と。

ロシアの歴史のなかでのこととしてみれば伸子にもそれはよくわかった。すでに沢山の人々がそういう風に生きた。けれども、日本で、自分のこととすると、伸子には見当がつかなかった。誰でもが革命家にならなければならぬとしたら、そしてそれしか自分の生きる道がないとしたら……。伸子はこわかった。アナ-

キストだった大杉栄と伊藤野枝が甘粕という憲兵に、どんなにして虐殺されたかを思いおこして、こわかった。伸子は生きたいのだった。篠原蔵人が、リアリズムにある階級の区別についていつていることも、その本をよんで伸子にいくらかわかった。プロレタリアとしての立場で、その感情で現実をみるのだということはうなずけたが、でも、それは、伸子の毎日の暮しや書くものに、どうかかわって来るのだろう。無産派といわれる人々の間では、その理論を語っている篠原蔵人のような人々は特別で、大体労働者出身の作家か、貧乏の生活をしている作家でなければ、発言権をみとめられていないように、伸子の目にうつった。そして実際、伸子のかくものなどは、それらの人々から全く無視されていた。

それらの人々に認められようと認められまいと、伸子は人間として、女としての自分がこの人生に発言したいものをもっているのを感じた。自分の生きかたを帳消しにする気がなかった。どこかで、何かの理窟にひっかかって止ってしまうつもりなら——それならどうしてあんな思いをして、追いつがる佃の顔をこの手でつきのけるようにして、あぶら汗でつめたくぬるついた佃の顔の感覚が、それをつきのけた自分の手のひらから今だに消えきっていないほどの思いをして、佃との生活をふりもぎって来たろう。「わたしね、だからソヴェトへも行ってみようと思うの。そこで生きてみたいの。いいことも、わるいことも、みんなこの目でみて、このからだであじわいたいのに」

一方からは楽土のように語られ、一方からは悪魔の巢のように語られているソヴェト同盟のほんとの生活の日々のなかへ、自分の眼と心とで入って暮してみれば、その生活の實際がわかるだろうし、それにつれて自分というものやその生きかたもわかって来るだろうと期待するのであった。

「うまく説明出来ないけれど……わかる？　自分を砥石といしにかけてみたいの。だから、わたしロシア語なんか知らなくなつていいわ。そこで生きてみるんだもの……」

「それや、ぶこちゃんらしい」

素子は、しばらく黙つて考えていたが、

「どだい、君とわたしとは同じ行くにしろ目標はちがうんだから

ね」

その点を、改めて自分たちにも明瞭にするというように素子はゆつくり云った。

「しかし、そうきまったらきまppard、早速動き出さなくちや」
「そうだわ、旅費もないんだもの……」

実際のなテムポで云い出す素子にそう答えながら、伸子は、

「ああ、あ」

長い溜息をついて、卓の上にさしかわした自分の腕へ頬をのせた。

「なんて、ひと仕事だったんでしよう」

「何が?——きまるまで?」

「だって、わたしたち、情性だけで動くの本当にいやだったんだもの……あなたの方だけ、どんどんはかどつて、わたしがそれでもまだわからなかったら、どうしようと思つていたんだもの」

「……………」

素子は、再びその棗形の小麦色の顔を薄く染めた。そして、黙つたままつやのこもつた視線で伸子を見た。そのつややかな眼は、伸子に同じ素子がこのあいだ自分を見た別の目を思いおこさせた。わたしは君にくわれるのはごめんだよ。そう云つて伸子を見つめたときの素子の目つきを。それは暗く、一定のところからよせつけまいとするような色であつた。伸子は、いま素子の眼をみたりしている明るさと、あの暗さとの間にたたみこまれている微妙なこ

ころのひだを感じた。伸子は笑いのかげにある口もとですこし意地わるくきいた。

「あなたは、どうきまりそうだと思っていた？　どうきまったら一番いいと思っていた？」

素子は黙ったまま新しいタバコに火をつけ、それをすった。

「結局、こうなるのが一番自然なきまりかたなんだろう……よかつたさ」

「……………」

伸子は、太平洋航路の大きな客船が、横浜の埠頭から次第次第に沖へむかつてはなれて行つたときの光景を思いおこした。銅鑼^{どら}が鳴り、渡りはしごがひき上げられ、音楽やテープの色どりのう

ちに、そろそろと巨大な客船は岸壁をはなれる。最初に、気もつかないほど細い藁や果物の皮などのういたきたない水の幅が岸壁と舷側との間にあらわれる。その細いきたない水の幅は刻々にひろがり、やがて岸壁に立ってこちらをみている見送人の群集は、顔がみわけられないほど小さく遠くなつて、船客は本当にひろい海上に出た自分たちというものを感じるのだつた。

伸子は自分が、きょうまでの生活の岸壁をとうとうはなれたことを感じた。岸壁の上にはくつきりとまだ実物大で動坂の家の生活が見えていた。友人たちの生活も。そして、自分たち自身の生活さえ。しかし、そこにはもう決定的な水幅があらわれている。——動坂の生活が伸子自身の生活でなくなつてから幾年もたつて

いて、伸子が外国へ行つて暮してしようと、この郊外の家で生活してしようと、動坂の日々は動坂の家なりに転廻してゆくのだ。

友達たちの生活も。けれどもそうして生活の輪がまわるすき間から見えがくれて伸子の心をそこにひきつける一つの顔があつた。もみ上げや鼻の下に和毛のかげをもった保のぽつてりした少年ぽい顔である。その顔は、心の内にあんまりどつきり云わないことをもちすぎている、そのためにまぶたが重いような表情で、時々クンと鼻をならし、二十歳になつたからだにあわせてはちいさくなっている高校の制服のズボンが古びて光る太い膝をゆすつてゐる。家族のみんなから愛され、真面目なことで一目おかれながら、実はあんなに孤立している保。佐々はバカだ、生れつきの調停派

だと、同級生にいわれている保。――

伸子は、ふつくりした手の甲を頬つぺたにおしあてて、うらがえしの頬杖をついたまま思い沈んだ。

「どうしたのさ」

「……………」

「何がまだあるのさ」

「――保のことが気にかかって来たの」

「…………だって――それなら、ゆくのをやめられるかい？」

「もうやめられない」

伸子は答えた。

「――だから気になる」

素子は現実的な判断のよりどころを与えるように、

「あのひとは、君をたよつちやいないよ」

早口にはつきり言つた。

「そうなの。あのひとはたよるものなんかもつのは間違つていて決心しているのよ。そして、わたしは自分があのひとのたよりにならないことも知っているわ。だから気になる」

姉が外国へゆくときめたことを知れば、保は、おそらく自分のころもちは何にもあらわさず、それに賛成し、必要なことを手伝つてくれるにきまつていた。でも、保のころのうちは、果してそれだけだろうか。うれわしげに頬杖をついている伸子の顔を眺めながら、素子はそのまましばらくタバコをふかしていたが、

やがてきめた以上はそのようにという風に、

「さて、いよいよ旅費が問題だね」

ときりだした。

「名案はないものかな」

伸子のきもちは保から実際問題にうつされた。

行こうという決心がかたまりかかるにつれて、伸子も当然旅費のことは考えた。この旅行は、はじめっからしまいまですっかり自分のものとして経験し、どういう結果についても掣せいちゆう肘うでをうけたくない気持がした。伸子は、どうしても自分の力で、旅費をつくらなければならなかった。そのためには、新聞社や雑誌社と契約して海外特派員となる方法があつた。けれども、伸子にどん

な特派員らしい記事がかけるといふのだろう。言葉さえろくに出来ないので、経済だの政治について、なんにも知っていないのに。

「汽車賃ぐらい、あの月がけで何とかなるけれどね」

それは素子が主張してつづけていた、小さな銀行の集金貯金のことであつた。

旅費の工面はあてがないまま、伸子たちは、ともかく旅券の申請をした。夏草のもうすがれはじめた庭の軒さきで、かわりばんこに撮った下手な素人写真を添えて書類を出した。下附までには凡そ一カ月以上かかるという話であつた。それまでに旅費の見当がつくかもしれないというわけだつた。

二人がゆくとすれば、この郊外の家は当然たまたまなければなら

ない。本や荷物をどこへ預けよう。素子は、日本橋の従弟の店の倉庫と、老松町の、伸子のもと二階がりをしていたお裁縫やへあずかって貰うことにした。伸子の分は動坂へやる。そんな相談が始められるようになったある日、伸子が、長い小説を連載していた雑誌社の社長の木下徹が、伸子たちの家を訪ねて来た。

鼠っぽい夏服をつけた背の低い木下徹は、自動車から降りて来たままの帽子なしの姿で、

「やあ、おられますか」

南国の訛を声にひびかせながら、玄関に立った。

「ちよつと用事があつて玉川まで来たもんですからね……なかなか閑静なところじゃないですか」

珍しそうに、女住居に塵のしずまっている家の中や、荒れた庭を眺めた。伸子は、市中のビルディングの一室で、どっちなかというと事務的な会いかたばかりして来ている木下を、自分たちのうちの椅子にかけさせつけなかった。とりとめない話の末、木下は、「やあ、どうもこれでなかなか問題が多くてね」

頭のうしろへ組み合わせた腕をはって、椅子の上で背中をのばすようにした。

「実は、いまもちよつと、迷っていることがあるんです」

雑誌社を経営しながら、その人は代議士に立候補する気があつたり、伸子などのしらない政治的な活躍の場面ももっていた。

「木下さんは、気が多いんだもの。問題は多いでしょう。なれて

いるくせに」

「——それがね、こんどのはちよつと大きいんでね」

木下は、柔軟さがんこさとのいれまじった蒼い角顔をすこしうつむけるようにして、黒い、憂鬱なところのある眼を上眼にした。

どっちみち、本気な話にはならないその問題というのにたいして、伸子はふつと面白いことを思いついた。伸子は改つてきき直した。

「木下さん、本当に、それは重大な問題なの？」

「——私としては重大ですね。少しおおげさにいえば一生の浮沈にもかかわりますね」

「じゃあ、いい智慧をかしてあげましょう」

伸子は立って行つて、地袋の写真帖の上から一冊の薄い冊子をもつて来た。その表紙には、黄色い地に一平の漫画が色ずりになっていた。

「何です？」

木下は、それを手にとつた。

「運命判断……へえ。こんなものが、ここにあるとは思わなかった」

「それは特別な、実にあらたかなの。わたしの運勢は、実によく当りました。あなたもびつくりなさることよ」

机の引出しから半紙をもち出して、伸子はそれを、ほそい紙片

にさいた。幅一寸ばかりの紙きれを、つばでしめして、鼻の先へはりつけ、その運命判断の、数字ばかり四角いコマに印刷してある見開きの頁の上に顔をさし出してフーオン・コロ・コロのフン、といって、その紙きれをふきとばす。紙片の落ちた数字にしたがつて、その項をあければ、そこにその運命判じの漫画の答は出ているというしくみであつた。

「へえ……奇妙な占いがあるもんだな」

そう言いながら、木下は鼠色の背広の袖を動かして、自分の鼻さきへ紙きれをはりつけた。

「フーオン・コロ・コロのフー？」

「ええ、そういうの」

そして、紙片が落ちた86という項を開いてみた。そこには、島田に結った若い女が、裾をかかげて、急流のまんなかに行きくれている絵がかかれていた。そして、美人流水の中に立って云々と、おみくじにあるような文句のほかに、くだけた言葉で、いまのあなたには何よりも決断が大切です。躊躇していれば、事態は悪くなるばかり、という風な文句が、その漫画家得意の、禅ぽいいいまわしでかかれていた。伸子は、おかしがって、

「どうです？」

ときいた。

「あらたかでしょう？　よその占いなんか、とても足もとへもよれないでしょう」

「いや、全くこれはいいところを当てたですよ！」

木下の言葉の真剣さに伸子はびつくりした。占いなんかをして
みる人の心もちにたいして、最大公約数のような、こんな常識が
何か真面目な作用もするというのだろうか。伸子は、思いもかけ
ないという顔になった。そして、

「なにが当たったの？」

ときいた。

「なにがって——ちよつと云いにくいが、ともかくね。いや、あ
りがとう。大いに得るところがある」

ほんとうに、そうであるらしかった。この鼠色背広のひとには、
ちよいとしたなにかのきっかけが入用だったのにちがいない。伸

子はそう判断した。

「わたしの運勢はこれですけれど……元日にやったんだから、たしかよ。素晴らしいでしょう」

それは、43という番号だった。勲章をつけて、からのおはちをかきまわす図。そう題があつて、その題のと通りの絵がかかれていた。髭をつけ、鳥の飾毛のついた礼帽をかぶった大礼服の男が、板の間に膝をついておはちをかきまわしている。そのおはちの、こちらに見えている内部はからっぽで、一粒の米もなかった。

「ハハハハハハ」

木下はひどく愉快そうに、大笑いをした。

「これはいい。いいじゃないですか」

「そうよ。わたしも気に入っているんだけど」

伸子は、自然に飛躍した。

「こまることもあるわ。この絵を見せて、わたしはこういう運勢のものですから、よろしくって云ったって、外国旅行はさせてくれないから」

「——そんな話が出ているんですか」

二人にソヴェト旅行の計画がきまったこと。素子は自分で支弁するが、伸子には旅費がなくて、からの旅券下附願を出してあることを話した。

「なんとかならないかな」

「わたしに、小説でない、いろんなものをかけるなら、もちろん、

木下さんのところへ相談に行つたんです。無理にだつておたのみしただらうけれども、わたしは、それが駄目だから……言葉も通じないところへ行くんだし……」

どこへ行つても小説以外のものはかけないだろうということを、伸子は、自分の生活上の無力さとして感じているのであつた。しかも旅行している何年かの間は、その小説さえたいしてかけまい。そう予感してもいるのであつた。

「お父さんに出して貰つたらいいじゃないですか——そのくらい」
「そうするしかなければむしろ行かないわ」

双方とも言葉がとぎれた。やがて木下が、自分の仕事として思ひ出したらしく、

「あなたが、この間うち連載していた小説、あれはもうじきうちから単行本になるんでしよう？」

と伸子にきいた。

「再校が終ったから、じきでしょう」

またしばらく沈黙がつづいた。よつぽどたつて、

「じゃあ一つ、こういうことにしましょうか」

木下が、椅子の上で膝をくみかえた。

「いまうちでやっている全集ね。あれへ一冊、あなたと、榎崎佐保子さん、村田壽子さんと、三人で一冊こしらえようじゃないですか」

「ほんと？」

伸子は、われ知らずよろこびで上気した。

「そういう風に出たら、ほんとにいいけれど……」

その社で、大規模な明治以来の日本文学全集刊行の事業をはじめていた。尾崎紅葉から現代の新進作家の作品まで網羅されて、一人で一冊の割当てをもつ作家もあり三四人で一冊という割当てのもあつた。新聞に大広告が出され、流行の一円本出版の先頭をきつてゐる仕事であつた。伸子は、全然自分にかかわりないこととしてそれをながめて来た。婦人の作家では樋口一葉しか加えられていなかった。

木下は自分の発案が、伸子にとって経済上の必要をみたすばかりでなく、刊行の仕事そのものとしても、好い思いつきだと考え

るらしく、

「そうしましょう！」

自分に向つて確信するように云つた。

「全集としても、その三人で一冊ぐらいは、あつた方がいいものなんだ。そうすれば佐々さんもいいでしょう、借金じゃないんだから——印税をあげることになるんだから」

「いいわ」

伸子は、思いがけなさで、まじまじと木下の蒼い、まるいよう
で四角ばつた顔を眺めた。

「借金じゃ、わたしに返すのぞみはないもの」

「それやそうです。——ただどのくらいになるかな、どっちみち

本が出るのはよっぽどあとだから……」

木下は、何かの算用をした。

「予約ものつてもものは、いつもはじめのうちよりは、あとになつてぐっと減るもんなんだが。……まあ、一万は出せるでしょう」

「それは三人で？」

「いや一人」

「じやいいじやないの。行ける」

「一万はひきうけることにします。あと、何か書いたら送つて下さい。それは別に原稿料として払いますから……」

予想もなかった方法で、伸子の旅費のことは、解決しそうになつた。

そこへ素子が外出さきから戻つて来た。

「おや、これは珍らしいお客さんだ」

素子が椅子にかけるとすぐ、伸子は、

「もつと珍らしいことがおこつたわ」

全集に一冊加えて、伸子の旅費が出そうなことを話した。

「それやよかつた。企画としたつて、あれだけ揃えるなら、そういうものも一冊はあるべきですよ」

素子は、ちらりと皮肉な笑顔をして、木下にウエストミンスターをさし出しながら、

「でも木下さん、大丈夫ですか、あなたの一人合点で。——殿様はそうおっしゃいましたそうですが、と、あとから御用人が出る

んじゃないんですか」

「相かわらず辛辣だなあ。——そんなことはない。大丈夫です。必ずひきうけました」

数年前、アメリカへ行ってしまったっている村田壽子と素子は、昔、親しいつきあいがあった。素子が村田壽子の作品を選んで決定することになり、伸子は自分で、一番はじめに発表した小説と、最近単行本になりかかっている長篇とを入れることにきめた。

「それぐらい具体的になっていれば結構だ。じゃ、ひとつ檜崎さんの方へは、直接社から話させますから」

木下が去ったあとしばらく、伸子は、焦点のちったような視線を、テーブルの上に出ている灰皿の上におとしていた。

「ぶこちゃん！　しつかりしてくれよ」

「だって、あんまり思いがけなくて……」

「ものがまとまるときつてもものは、こういうもんさ。だが、よかったね」

旅費のことで伸子はあるなに途方にくれ、思案にあまつていた。たかが金のことだのにと思う、その金に目あてがつかなかった。木下が、偶然彼自身の屈託からふらりと伸子の家の前で自動車を降りた。小さなきっかけがかさなつて、にわかには伸子の旅費の問題も展開した。伸子としては、仕事に立って手に入る金で筋が通つたものだつた。

けれども、木下がなにかの気分のこじれで、伸子がそのときの

調子でなに心なく云い出した話にとりあわなければ、少くとも、こういう工合で金が出来るようにはならなかっただろう。気分や偶然が作用していると思え、伸子として一生懸命な問題であつただけ、そのことで滅入った。

「なにを、そう拘泥する必要があるのさ」

素子が云った。

「ひきうける以上、さきだつてちゃんとそれだけの目算をもつてやつてることじゃないか。そんなことを考えるなんて——逆のうぬぼれ、だよ。誰が気分だの偶然だので、動くもんか」

外出のなりのまま素子は、タバコをふかしていたが、

「ぶこちゃん、散歩に行こう！」

さきに立つて玄関へおりた。

伸子は紫メリンスの前かけをかけたままついて出た。門から右手へつづいているだらだら坂をのぼりきつて、この郊外の分譲地の中央通りにあたる桜の並木道を、左へとつた。高い外壁に蔦のからんだ洋館だの、しやれた鉄のすかし格子の見える上り口の様子だのを眺めながら、秋めいた午後三時の透明な光線に梳かれている桜並木をぬけた。並木を出はざれると、もう畑で、からりとした秋日にてらされて、ゆるやかな起伏をもった耕地や、遠く近くとところどころに点在する雑木林がひろびろとあらわれた。伸子と素子とは畑の間の草道を、浅い雑木林のある方へと向った。大根畑があり、唐辛子が色づきかけており、大気の中には草木のみ

のる香りと午後の日光にあたためられた強壯な下肥えのにおいが漂っている。草道へ出ると、伸子は歩きながら秋の野草の花をつんだ。太い赤まんまの花や紫苑しおんのような紫の野菊を。そうやってつまれるこまかい野の花々は伸子のこころを鎮め、広い地平線の眺めは伸子の目路めじをはるかにした。伸子は、だんだん、気分が落ちつき、そして、うれしくなつて来た。うれしさが、はつきりして来た。花をつむために、数歩おくらっていた伸子は、かけるように素子に追いついた。そして、

「なんだかうれしくなつてきた」

と告げた。小声でそう云つたら、一時に、どつとそのうれしさが呼び出され、こみ上げて来たようで、伸子は活潑な勢のいい足ど

りになった。うたが歌いたくなつた。本当に、行ける！ 行く。

——その思ひは、遠くに森の見える地平線や、高い空で白く光っている雲にまで響くようで、伸子は、

「ね、ね」

と素子の手をひっぱつた。素子と伸子とは、うれしさが明瞭になるにつれ、元気が出て、大股にどんどんと畑の間の道を歩きまわつた。一つの丘の裾をめぐつて下り、小さい川に、かけられた丸木橋をわたつた。そのまましばらく行くと灌木のしげったかげに木の柵のある農家の横へ出た。そこはいつか、竹村の温室をみにゆくとき通つた鷺鳥のいる農家だつた。

「あら、こんなところへ出てよ！」

面白そうに伸子が立ちどまつた。きょうは、どうしたのか鶯鳥はいず、柵の上にまたがって二三人の男の子が遊んでいた。草道を足音もしないで来て急に灌木のかげから現れた二人の女たちを見つめて、子供たちはじっとしていたが、その柵を通りすぎてしばらくすると、うしろから、

「ヤーイ狐の嫁入り！」

と、はやしたてた。

ぎらつく日のきらいな伸子が、白い大きなハンカチーフの端を髪の上にかけて、つみ集めた花をもっていない方の手でかつぎのようにもう一つのはしをもつて、西日をよけながら歩いているのであった。

二十五

旅券が下附されて、ソヴェト大使館の裏書がとれるまで、伸子は旅行のことについて動坂に知らすまいと思っていた。

「ぜひ、そうしましょう。さもないと、あんまり騒々しくなっちゃうから、ね」

多計代がこういうことを知れば、たちまち賑やかすぎることになるのは必定であつた。

この予定は、或る日素子が、

「ぶこちゃん、厄介なことになりそうだよ」

と、当惑げな顔つきでよそから帰って来たことで、番くるわせになった。素子がきょうソヴェト関係の記者である友人にあつたら、伸子と素子との裏書は、そう簡単にかかれな^いかもしれないと注意されたのだそうだった。

「——どうして？」

「どうもはつきりしたことを云わないからよくわからないんだけどね、われわれの素^{すじょう}姓を、むこうじや信用しないという意味らしい」

「素姓って……」

「なにものか、と思うらしいのさ」

伸子は、ありえないという表情で、

「おかしいじゃないの、ちゃんとわかっているじゃないの」
と云った。

「あなたは翻訳家だし、わたしは作家だし……どっちもきのう開業したわけでもないのに……」

素子は、赤いすきとおるパイプを口の中でころがしながら、考え深い眼つきでしばらく黙っていたが、少し声を低くして、

「政治的な意味があるんだね」
と云った。

「案外、諒解が必要だ、というようなことなのかもしれない」

ソヴェト革命記念祭のお客に、日本から国賓が招待されたとき、その人選や連絡のために斡旋した文化連絡員がいる。素子はその

外国人の名をいった。

「それや民間の女でゆくのは、私たちがはじめてなんだから、一応面倒なのもわかるけどね」

きいている伸子は、次第におこった顔つきになって行つた。

「わたしたちが、もしいわゆる無産派でないからっていうなら、それこそ馬鹿らしいことだと思つうわ。そういう立場でさえあれば、すべて素姓がたしかだともいうの？」

「しかしね、ぶこちゃん」

いつもに似合わず、素子の方が沈着に、亢奮している伸子に向つていった。

「無理のないところがあるのかもしれないんだ。むこうとすれば、

そもそも日本というものにたいしては用心ぶかくなるわけもあるだろうしさ」

そういわれれば、伸子にもわかる場所があつた。日本の政府は一九一七年からシベリアへ出兵して、ウランゲルやコルチャツクとともに、ふるいロシアがソヴェトに変わつてゆく道を妨害しつづけた。国交が回復したのは、伸子たちが老松町からその郊外の家へ引越して来た時分のことであつた。そういう角度からみれば、伸子たちが通り一ぺんの手続で裏がきを求めて提出してある旅券が、何とはなし積極的になれない手にとりあげられ、うちかえして眺められているという状態も推察された。

「わたしたちの立場というものを、ありのまま出して、しかしや

っぱり無いよりはましという風な紹介者があると一番具合がいいんだがねえ」

「そうだわ、もし紹介者がいるんなら、そういうのでなければいけないわ」

伸子は、もとより自分の身边にそういう外交上の響をもつような知人をもっていなかった。自然父の知友の間に物色するわけであつたが、役所がきらいで民間の建築家になつた佐々泰造が官僚の間にそういうときに便利な友人をもっているようにも思えない。考えまどつていて、伸子は、ふつと一つのことを思いあたつた。

「ね、カラハンが来たときね、日本側の代表でいろいろやったの、藤堂駿平だつた？」

「そうさ」

「——それだつたら、もしかしたら何とかなるかもしれない」

十年も昔、伸子の小説がはじめて雑誌にのせられたとき、それを読んでいって、少女だつた伸子に一匹の反物をおくつてくれた老婦人があつた。同じ錦紗でも手にとつてみるとしつとり重い上質で、大まかに麻の葉の紋柄が浮き出ていた。その布地は、ひどく伸子の氣に入り、さっぱりした薄紫にそめて着た。あとで、それを黒にして、いまもその羽織は愛用している。その反物をくれたのは、藤堂駿平の母で、七十になつていても、本をよむのを日課にしているという老夫人だつた。伸子は、その御礼のことで多計代といいあらそつたのを覚えている。多計代は折角もらつた

ものだから、着物にして着てよく似合うところを見せに行くべきだといい、伸子は、そんなことはいやだ、とあらそつた。

「お母様、もしこの反物を、ほかのどつかのおばあさんがくれたとしても、やっぱりそうおつしやる？　藤堂駿平が男爵でなくても、そんなにおつしやる？」

伸子は、

「そんなにむずかしいものなら、着ない」

そう云つて、本当にそれが仕立てあがつた冬は着なかつた。

藤堂駿平と佐々泰造とは、公式なつき合いばかりでない交際があるらしいことも、伸子は思い出したのであつた。

「わたし、ちよつときいて来てみる」

伸子は、郊外電車の停留場のわきにある酒屋から、佐々の事務所に電話した。

勢いこんでかえつて来て、伸子はすぐに縁側にまわった。

「よかった！ 何とか考えましようって——今来るようにって……」

多計代は東北の田舎からまだ帰っていず、父ひとりの動坂の家を思うと、伸子は、素子を誘つてゆくにいい折だと思った。

「一緒に行かない？」

旅券のことについて父にたのむのは、伸子の分ばかりでなかった。素子も行つて会えば、たのまれる父の気持もよからう。伸子は、そう思ったのであった。

「さあ……」

素子としても、同じように考えるらしく、行ってもわるくなさそうにしていたが、

「まあ、やめとこう」

皮肉な苦笑を浮べた。

「お母さんの留守には来るんだね、なんていわれちゃ、ちよいと癪だからね」

伸子たちが老松町の家に住んでいたとき一二度、それからこちらへ越して来てからも二度ばかり、多計代が訪ねて来たことがあった。和一郎をつれたり、つや子をつれたりして。そのときは、素子も仕事をやめて一行をもてなした。けれども、多計代は、一

度も改まって娘と一緒に素子を動坂の家へよぶことはしていないのであった。

「わたしは、いずれお父さんの事務所へでも伺うから、よろしくいっておいとくれ」

秋の夕暮れらしい渋谷の雑沓のなかを、伸子は気をせいて、二つの電車をのりかえ、家のある高台に向う坂道をのぼって行つた。その横通りには、昔から屋敷の間にはさまって、日本橋の方に店をもっている有名な書籍文具店のインク製造工場があつた。丁度そこがひけどきで、小さい銀杏がえしや束髪にした少女の女工たち、伸子のゆく細い道を群れて来てすれちがった。昼ごろには、その細い道に向って開いた工場の門のよこてに、年よりのおでん

やが屋台車をひいて来て止っているのをよく見かけた。すると工場の中から、かたあげのある紺木綿の筒袖をきて、同じような紺木綿の前かけをかけた少女の女工が、てんでに皿や小鉢をもって、椎の大きい枝の下に店を出しているおでんやのおじさんを囲んだ。しかし、少女たちはそこに立ったまますぐたべたりしないで、行儀よく、おでんを買った皿や小鉢をもつて、また建物の中へ戻って行った。伸子が、子供だったころは、その工場のビンを一杯並べた仕事場の入口に佇んでながいこと見物していても格別おこられもしなかった。インクが紺色だから、そこで働く小さい女工たちも肩上げのきものに紺の前かけをさせられているにちがいない。外国へ行こうとしている伸子の心には、見なれたその通りの夕

暮の光景や、ゆきちがう小さな女工たちの姿が永年見なれている
界隈の生活だけに印象ぶかく迫った。

その通りをもっと広い大通りへ出た角に交番と赤いポストがあり、佐々の家は、じきそのはす向いの奥だった。伸子がもうすこしで大通りへ出きろうとしたとき、まだ見えていない佐々の家の門のところで、きき覚えのある自動車のクラクションが鳴った。それをききつけて、伸子はちよつとうれしそうに眼をうごかした。よかった、丁度父も帰って来たところだ。そう思つて、もう車が入ってしまった門の道を行つた。

つきあたりの玄関のところに、三四人の人の姿が見え、混雑している。伸子は、遠目にそれを見て、はつとする気がした。ごた

ついた玄関の様子で、父が加減でもわるくして帰ったかと思った。いそぎ足で車まわしのところへ来たとき、踏石から玄関の間へあがつてゆく白い足袋が見え、鶯色の単衣羽織の裾がちらりと目を掠めた。その車で帰って来たのは、多計代であつた。伸子はとつさに、一人で来てよかつた、と思つた。

玄関のところに、車から出した手提袋やトランクがのこつていて、踏石に父の靴もぬぎすてられてある。伸子は、膝かけをたたんでゐる江田に、

「一緒におかえりになったの？」
ときいた。

「はい。旦那様も上野駅へまわつてお迎えしてかえりました」

多計代は着いたなりの服装で食堂のいつもの場所に中腰で、早速大きいコップにレモンの切れの浮いた水をもって来させているところだった。多計代の帰京は急なことだったらしく、うちじゅうに特別なざわめきを感じられた。

「おかえりなさいまし……クラクソンが角のところできこえたわ」
伸子は、そういうながら、母のわきに自分も中腰になった。

「じゃあ知らなかったの？」

「しらなかったわ」

「——あした隅田さんの御婚礼にどうしても出なければならぬもんだからね。急に帰って来たってわけさ」

多計代は、しばらく会わなかった伸子を、しらべるように上下

に見た。

「どうしているの？」

「——きようは、ちよつとお願いがあつて来たところだったの」

「へえ……」

父ひとりのつもりのところへ伸子が来て、何をたのもうとしたのだろう。多計代は、あらわに、そういう表情をした。

「何の御用かしらないけれど、わたしは、ちよいと着物を着かえさせてもらいますよ」

いれちがいに、響く足音をたてて、兵児帯をまきつけた泰造が入って来た。

「どうです！」

伸子に向つて、泰造は握手するように手をさしのべた。

「たいしたことになつたじゃないか」

黙つてさし出された父の手を執つて、伸子は甘えるような、ばつものわるいような笑顔をした。電話口で父とその話をしたとき、それからあの角でクラクソンの音をきいたときまで、伸子は自然な亢奮でよろこび、素晴らしいでしょ？ お父様。だから行けるようにしてね、という心もちで急いで来た。多計代が偶然かえり合わせたことは、伸子の単純だったところもちを複雑にした。

「それで、どういうことになってるんだい？」

「旅券はおりたの。裏書だけのことなんだけれど……」

「それや早速、あした藤堂君のところへ行つてみよう。お前も一

緒においでなさい、その方がいい」

そこへ、多計代が戻つて来た。

「どこへいらつしやろうつていうんです？」

坐りながら、

「お父様、あしたは隅田さんがあるのを忘れになつちや駄目ですよ」

「あれや午後五時からだ。こっちは午前中にすむよ——伸子がロシアへ行こうつていうんだ」

「——ロシア？」

多計代は、その三つの音を、ながくなかくひっぱって発音した。そして、ほとんどうさんくさい、という眼付で伸子をかえりみた。

なめらかで色つやの美しい多計代の顔に浮んだその表情をみると、伸子はせきこむような苦しい思いになった。早口に、

「文明社から出る全集のお金で行くことになったんだから、その方は心配して頂かなくていいの」

と云った。

「旅券の裏書のことです、お願いに来たのよ」

「へえ……」

まだ半信半疑という目の色で、伸子を見ながら多計代はダイアモンドの指環のはまった手で自分の鼻のわきを撫でるようなしぐさをした。

「——それで……いつ立とうというの」

「それや、裏書ができしだいだわ」

「もちろん吉見さんも一緒なんだろう？」

伸子が口を開かないうちに、泰造がわきから、

「それやそうでなくちや、伸子が困りますよ」

と云った。

「あのひとはロシア語が専門なんだろう」

「ええ。吉見さんは事務所の方へ伺いますつて。よろしくつて：

…」

多計代は、黙つて考えていたが、

「まあ、伸ちゃんも、そうやって自分の力で行けるといふなら、

どこへ行くのも御自由だし、いろいろのところへ行つてみるのも

ためになることなんだろう。それや結構だけれどもね……」

一転して、多計代は事務的な調子で、裏書について、伸子が父に求めている援助の内容をきいた。

「なるほどね、それで大分話がわかってきた……なんだろう？

その裏書のことでは、吉見さんの分もいるんだろう？ どうせ伸ちゃんのことから……」

「両方出来なくちや意味がないわけよね」

「お前、吉見ってひとの責任まで負えるのかい？ あとで困ることになりやしないのかい？」

「困るって？——」

「吉見なんていったって東京じゆうに知っているものなんざ一人

もありやしませんよ」

吉見素子が、伸子の旅費も出来たら自分で工夫しようとしていたと知ったら、多計代はそれにたいしてなんというつもりだろう。伸子は、腹のたつ気持ちを抑えたぎごちない低い声で、

「お母様の世間だけが、世間のすべてでもなさそうよ」と云った。

「お金のことというんなら、吉見さんのうちの方がよっぽど金持かもしれないわ、吉見さんは自分のお金で行けるんだから」

「なにもお金のことばかりいつてやしませんよ」

多計代は、自分の息子や娘の友人にたいしていつも警戒的で、下目に見る習慣があつた。さもなければ、保の友人の東大路の場

合のように、何かの偶然で有名なその家族の名前に盲信した。だから、和一郎の友人にしろ、保の友達にしろ、その年頃の若い者らしく澆刺と自由で、まともなつき合は佐々の家庭のなかまでひろがらず、例外のように出入りしつづける若者は、多計代のそういう態度に反撥しないような人柄だった。そういうことに潜んでいる和一郎や保にとっての人生的な危険を、多計代は全く気づこうとしないのであった。佃がどういう性格であったにしろ、多計代からこうむった侮辱は度をこした。そのことのために、伸子は佃を気の毒に思わずにいられなくて、自分が妻として佃にたいして抱く苦しさの解決さえもかえつてのばしのばしした。

「お母様、ほんとにいつになったら、自分の娘を一人前と思える

のかしら……友達を信じないってことは、娘を信じないことなの
に——」

多計代が、いいつのろうとする機先を制して泰造が、

「いいじゃないか、多計代。よろこんでやって、いいじゃないか」
といった。

「あんな小さい赤ん坊だった伸子が、こうやって一人で外国へま
で行くようになったんだ」

多計代は、その言葉で感傷を動かされ、しばらく黙った。

「それや、わたしだって、よろこんでいるんですよ。それにして
もね」

「吉見、だろう。そう拘泥するもんじゃありません。お前だって

伸子一人遠くへやるより、ああやって一緒のひとがいる方が、どんなに安心だかしないじゃないか」

「……………」

多計代の釈然としない理由は、伸子によくわかった。多計代の心には、この旅行についても素子が伸子をどこかで利用しているにちがいない、と思いこんでいるのだ。

伸子のために、便宜があればそれにこしたことはないが、吉見素子がそれにあやかすることは不本意だが、大目にみておくという表情を、ありありと顔にうかべている多計代に玄関まで送られて、翌日伸子は父と藤堂駿平の邸へ出かけた。

麻布の天文台のそばで門の石塀のそこまで葉を落した桜の枝がさし出ている。三人の取りつぎがどれも男ばかりの案内で、応接間におおされた。近代風の洋式客間で、明快な色調の広い部屋なのに、一方の壁に床の間めいた高いところがこしらえてあつて、そこに日本画のかけものと、紫檀の板の上に香炉がおかれている。伸子は、政治家というものの客間を珍しく見まわした。じき、

「やあ」

といって、和服姿にスリッパをはいた藤堂駿平が現れた。

「ようこそ」

はじめて会う伸子に会釈した。有名な鼻眼鏡の黒リボンと、くさび形のあご髯の間から見えている藤堂駿平の皮膚は白くて、潤

達な身ごなしだった。

泰造が、全く友人同士のようでありながら、どこか微妙なニュアンスで自分との間に差別をおいている話しかたで用件を説明した。

「ほう。なるほど。——それぐらいは、むずかしいことでもなさそうだ。ようござんす」

藤堂駿平はわきにあるベルをおした。伸子たちをとりついた少年が来た。

「今井君にちよつと」

秘書の一人らしい黒い背広の男が入って来て、丁寧に礼をしなから、そこにかけている泰造と伸子の方をひとわたり見、いそ

がず藤堂駿平のそばへよつて行つた。

「このお嬢さんが、お友達と二人でソヴェトへ行かれるんだそう
だ。それについて一寸……」

あとは、はなれた椅子にかけている伸子にきこえない打ちあわせになった。深いひじかけ椅子に背をもたせかけて、鼻眼鏡の顔を
をあおむかせ気味に何かいう藤堂駿平の方にこごみかかつて、

「はア」

とか、

「それは出来ますでしょう」

とか簡単に答えながら、秘書はそれとなく眼を動かして、ちよい
ちよい伸子の方を見た。

「じゃ」

「……………」

秘書が一礼して出て行くと、藤堂駿平は、

「お嬢さん、明後日あたりでも、大使館へいらつしやい、わかるようにしておくから」

といった。そして、膝の前におかれている小卓の箱から葉巻を出して、その先をきり、火をつけ、くゆらしながら、一層深く椅子の背にもたれこんで、

「日本の婦人たちも、どしどし外国へでもどこへでも行くようになってくれなくちゃ仕様がありませんな」
と云った。

「三浦環なんかにたいして、どういふものか日本人は冷淡だ、悪口をいう奴さえある。あなたも広いところをみて、しつかり面白い小説をかいて下さい」

いつか伸子に反物をおくってくれた老母は、じき喜の字の祝いで別荘に暮している。そんな話もあつて、泰造と伸子とは四十分で藤堂駿平の邸を出た。

「どうもありがとうございました」

自動車が麻布の通りをいい加減進んだとき、伸子は父に改めて礼をいった。

「ほんとに一安心したわ。——でもなんて、簡単なんでしょう」
「なにが？」

「いろんなことが——ああいう人たちって、あんなになんでも簡単にいくのかしら……」

「まあ、簡単にゆくところがあるだけ、一方でたいしたところもあるだろうさ」

「——お嬢さん、お嬢さんていうんだもの」

伸子は苦笑した。しかし泰造は案外真面目で、

「だってお前はミス佐々じやありませんか」
と云った。

「それやそうだけれど……」

お嬢さんとよばれることに、伸子はミスという意味よりもつちがった内容を感じるのであった。面白い小説をかいてくれ、と

いわれることにも、返答にこまる心持がした。藤堂駿平が、在来
の政治家と非常にちがった自由な寛濶な雰囲気をもっていること
は伸子にもわかった。けれども、ああやって堂々として椅子にか
けて話しているときの、近いようで遠い、わかったようで全く互
にわかっていない感じは、何と変だろう。

伸子は、はたちのとき父につれられてニューヨークへ行った。
その仕度の時のことを思いおこした。子供の時しか洋服を着てい
ない伸子の服装のことで、多計代はその相談を同窓生であり、つ
い先頃までペテルブルグに暮っていた大使夫人のところへもちこ
んだ。そこには、最近フランス人を母にもった若夫人が嫁入って
来ていた。その若夫人が相談相手になってやる、ということでは、

伸子は、一時間半も俤にゆられて、その家へ行かされた。そして、長椅子の上に華やかなクッションがどっさりおいてある客間で、お召の袖口に、重そうな金のくさり細工の腕環を見せている夫人に応待され、若夫人につれられて、レースの被いのかかったダブルベッドと衣裳箆笥でいっぱいになっているその夫人の寝室で、洋服の下縫いの検分をされた。半ばフランス人であり、半ば日本人であり、その半ばフランス人であるという面を優越として意識している美貌な若夫人のじつと見つめる視線の下で、遠慮ぶかく着物をぬぎ、むき出しになる伸子は自分の肩がやけどをするようにせつなかつた。

自分の好みとはちつともあわない大きい縞リボンの結び飾りが

三枚の翼のようにつつ立つている帽子をかぶって、伸子はヴィクトリアの港についた。その街を歩いている一人の女も、伸子のかぶっているような帽子をかぶっている女はなかった。伸子はその帽子をぬいで、市中見物のために乗っていた馬車の足もとへつつこんだ。伸子はニューヨークにいる間、自分がその手から手へとわたされそうだった親たちの環境とその関係から急速に自分をひきはがそうと必死だった。佃と結婚したことは、伸子を完全に別の世界のものとし、品位のある人々の環境から離脱したものとした。一年前にひなびた伸子に衣裳の世話をしてくれた大使夫人は、伸子がニューヨークから帰って挨拶に行ったときは病氣中だからといって会わなかった。この夫人の良人であった大使は、

ペテルブルグから日本へ帰ったとき、新聞記者の問いに答えて、当時ケレンスキー内閣のあつたロシアに別の革命はおこらない、と予想を語った。ところが十月革命は、それからほんの半年ばかりあとに成就した。伸子はそのとき、大使というような事情通が、こんな大事件について実際にはわかつていないのに実にびっくりした。それらのことがまざまざと思いおこされた。それは、伸子のニューヨーク行きさわぎの一年ばかり前のことであつたが。――

こんどは計らず藤堂駿平の一つの力をかりることになった。藤堂駿平が面白い小説をかくようにという、それにたいして返答に困った伸子のところはソヴェトの未知の生活のなかで、どんなに

震盪しんとうされ、動いてゆくのだろう。伸子自身にもそれはわかつていないことだった。

藤堂駿平にいわれたとおり、なか一日をおいて、伸子と素子とはつれだつてソヴェト大使館へ行つた。門を入るとすぐ植ごみがあつて、その左手の高みに小公園のような内庭があつた。そのベンチに、秋の午前の日光に白く見えるほどブロンドの髪をした若い女がかけて、よちよち歩きの幼児を遊ばせていた。ソヴェト大使館には警視庁の私服の刑事がはりこんで、出入りする日本人を見はつてゐるという話があり、伸子と素子とは、漠然と緊張した気もちで、人影のない植ごみの横の事務所のベルを押した。戸が内側へあいて、若い、つやつやと光つたまるで真新しい麦わら

のように新鮮な感じの館員が出て来た。用むきをきくと、一旦ひっこんで、伸子たちは構内にある文化聯絡協会の事務所へ行つてパルヴィン博士に会うように、ということだった。

二人は、植ごみをまわつて、そのかげに一区画別棟になつてゐる木造洋館の玄関へ行つた。日本の女中らしい女がとりつぎに出て来て、伸子たちは、応接間にとおされた。やや古風でくすんだ壁紙のはられたその広間の中央に大形の円テーブルがあつて、その上に、家庭的な展覧会というように、ソヴェトから刊行されている種々の雑誌、新聞、書籍が並べられている。その奥の、もつとうす暗い、どっさり額のかかった室から、背の高さも、腹の太さも見上げるばかり大男のパルヴィン博士が出て来た。腰をかか

め、小人にあいさつするように伸子たちに握手した。灰色の上にすこし黄がかってドロリとした大きな二つの眼が愛嬌の笑いを下まぶたのしわにまでたたえながら二人の女の上にすえられた。伸子はその眼をみると、頭のどこかがジーンとするような途方にくれた気がした。霜降りの背広をきて、話のあい間には、両方のひじをふりひろげるようにもみ手をまじえるパルヴィン博士に、主として素子が日本語で旅行についての計画を話した。パルヴィン博士は、ロシア語と日本語とちゃんぽんに話し、素子に向って、

「あなたのロシア語は正しいロシア語です」

と日本語でいった。

「あちらに行けば、発音はじき立派になりますです」

そして伸子をかえりみ、

「あなたは？ ロシア語わかりますか？」

ちよつと、名刺の面を見て、

「サツサさん？」

といった。

「わたくし、ロシア語はできません」

「しかし、サツサさんは英語話しますから不便ないでしょう」

素子が、いそいで、とりなすようにいった。

「そう、ソヴェトでもこの頃は英語がはやっていますからね」

パルヴィン博士は素子に、ロシア語をどこで勉強したかということや、誰が教授だったかときいた。そこへ、物かげになつてい

るドアのところから、洋装した一人の日本婦人が出て来た。非常に小柄で、やせて、小骨の多い小鳥のようなからだつきだった。

パルヴィン博士が、

「わたしの奥さんです」

と紹介した。

「どうぞよろしく」

夫人は、スカートの前に両手をそろえて、ごく日本風のお辞儀をした。毎日あらゆる種類の人々を応待し、観察し、それを仕事として暮している婦人らしい笑顔と身ぶりで、夫人は博士のわきにかけた。この夫婦がならんでかけた光景は現実ばなれがしていた。灰色の大きい眼玉が黄色っぽく溶けかけている巨人のような

外国人の主人。やせて、小さくて、軽くて、油断のない鶺鴒ひわのような日本人の細君。背景をなす部屋のつくりが、がっしりとして宏大なために、夫婦の対照はひとしお目にたった。

パルヴェイン博士は、

「ヴィザ、じきおりるでしょう」

そういいながらなぜかちよつと、傍の小さい夫人の方をみた。

夫人は、にこやかな表情のまま、大きい良人の方は見ないでうなずいた。

「一週間もたったら出来るでしょう。そう思います。そのときおいで下さい」

博士の住んでいる茶色の別館を出た伸子と素子とは、互にひと

ことも口をきかず、ゆつくり大使館の門外へ出た。ろくな街路樹もない歩道をしばらく歩いて一軒の文房具屋の前へ来たとき、

「ぶこちゃん、ちよつとまってくれ」

素子が立ちどまって、たてしほの単衣羽織をきた袂からタバコ入れを出した。

「ともかく一服しなくちや！」

あんまりそれは実感に迫ったいいかただった。

「まったくね！　あなたは、こういうとき、そういうものがあるから本当にいいわ」

そういいながら、伸子は商店の並んだその街上を見まわした。

「でも、歩きながらじゃ変だから……」

正午近い電車どおりのむこう側で、坂の下りかかりに色のあせた藍縞の日よけを出した一軒の喫茶店があつた。

「あすこへ行きましょう、どんなところでもいいわ。かけられさえしたら——」

素子は、まちきれないように、白ペンキをぬったその喫茶店のドアの内へ入るなり、マツチをすつて、タバコへ火をつけた。

旅券の裏書ができれば、だいたい一カ月ぐらいのうちに出発しなければならぬ規定だつた。伸子たちの旅行準備は、トランクを買うことから旅行のための服装の仕度まで俄に現実のこととしてせわしくなりはじめた。毎土曜日の午後やっていたロシア語勉強

強も、二人が大使館へ行つた翌日で、おしまいになることになった。素子は、課業をはじめめる前いつもどおり帳面と本とを並べている浅原蒔子に、

「浅原さんいよいよきようでおしまいですよ。ヴィザが一週間位のうちに出来るらしいから」

といった。

「ほんとですか」

蒔子は、いつものおとなしい声はそのまま、眼を大きくするよきな表情をした。そしてもう一度、

「ほんとですか」

と、念をおすように、同じ長椅子に並んでかけている伸子をかえ

りみた。

「こんどは、たしかそうよ」

伸子は、きのう自分たち二人がパルヴィン博士のところでのんなにのどのかわくような思いをしたか、ということを珍しい夫婦のくみあわせと一緒に話した。

「そうですか、では、たしかでしょうね」

露子は分別らしくきいていた表情を次第にゆるめて、もちまえるのゆったりした善良な顔になり、

「いいこと！」

十分の羨望をあらわして、伸子の肩へ自分の肩をうちあてるようにした。

「でも——どういふことになるのかしら」

伸子は、うれしさとあてどなさのまじった顔つきでいった。

「なにしろ、これじゃあね」

草色の表紙を開かれているベルリッツの「外国人のためのロシア語」は、そこに「停車場で」という見出しの頁をあけ、われわれは、赤帽をよばなければなりません、というような単純なことを教えていたのであった。

「ともかく、いつていらつしやいませ」

首をかしげた落子の、ぽってりとして若い顔の上を、ほほ笑みと涙とが瞬間に交錯して走りすぎた。

「二三年でしょう?——そのうちには、わたしもしっかり勉強し

て、役に立つようになっていきますからね」

露子は、素子が勉強した大学の露文科へ入学することにきまっていた。

「あなたは心配ないさ。それだけ真面目にやっていたら、大丈夫ものになりますよ、ワリーヤさんも熱心だってほめているもの」

「……………」

露子は、伸子たちがいなくなつてからの自分の生活の思いにとらえられたように、細い青桐の葉が茶色になっている隣家の生垣の方へ目をやっていたが、小声のひとりごつのように、

「ロシア語ばかりじゃあなくね」

とつぶやいた。うっとりした唇からもれたようなその言葉の調子

に伸子の心がひかされた。

「なにをしようというの？　ロシア語のほかに——」

露子は急に目をさまされたような様子でしばらく伸子をみつめた。そして、また人なつこい小声で、

「いろいろあるでしょう？」

小首をかしげてそういった。しかしそれぎり、気をかえたらしく露子のはつきり坐り直した口調になって、

「わたしにどんなお手伝いができるでしょうか」

素子にきいた。

「おつしやつて下さい。出来ることでしたらなんでもよろこんでいたしますから」

伸子たちはすぐにも、家の始末にとりかからなければならなかった。それには、まず本のかたづけが一仕事であつた。

「こんどは、ごく信用の出来る人だけにたのみますよ。この前こへこして来るときみたいにな、あんな大切な本とられたりしちゃたまりやしない」

老松町からこの郊外の家へ越して来るとき、一二度遊びに来た学生が手伝つた。その青年がかたづけながらひろげて見ていたモスクワ芸術座の立派な写真帖が、あとからどうさがしても見えなくなつていた。そして、その学生は、もうそれきり素子のところへ出入りしなくなつた。

課業が終つてから、素子は、

「いそがないんなら、夕飯をたべていらつしやい」

と露子をさそつた。

「あなたが使うようにのこしておく本なんか、そろそろ選んでおかなければ。こんなときは、あとへゆくほどごたつきますからね」

夕飯のできるまでと、伸子は、いつも電話をかけている停留場わきの酒屋へ出かけた。そして、本をつめて、動坂のうちの土蔵にあずかつて貰うためのビールのあき箱を、十個ぐらい注文して来た。帰ってみると、ロシア語関係の辞典類をすっかりひとまとめにして積み上げた卓の前に、素子と露子が一服していた。入つてゆく伸子を見上げて、

「こまっちゃったよ、ぶこちやん」

素子が、辞典のつみ重ねを目でさした。

「——これだけで一荷物だ」

「ダーリのようなものは、かえつてむこうではいらないんじゃないでしょうか」

そういう落子の注意で、素子は大判の幾冊もある百科辞典風の大辞書をとりのけた。

「ぶこちゃんの本は、どの位になるかい」

「さあ」

伸子は、まだ揃えてなかった。歴史の年表。日本の辞典。簡単な日本と世界の文学史。そんなものの必要はすぐわかった。けれども、

「小説、なにもって行こうかしら……」

一冊の小説もなしで、外国へ行つて何年も暮す。それは、伸子にとつてたよりなくまた寂しく思えた。この間まで長い小説をかいていたとき、伸子がずっと机の上にのせていたのは「暗夜行路」であつた。仕事をすまして休んでいるとき、また、書こうとすることがらが、はつきり心にまとまつて来ないようなとき、伸子は、その小説を開いて一頁二頁とよんだ。断続して、いわば手あたりばつたりに開かれる頁は、そのときどき、なにかの意味で伸子の伴侶となつた。そうして、伸子は、自分の小説をかき終つたのであつた。しかし、これからさき、幾年かの間のために是非もつてゆきたい小説——それは何だろう。伸子は、躊躇なく自分の手が

そこへのびる小説集を思い浮べることが困難だった。「暗夜行路」を思ってみても、その作品の世界は、伸子のいまの生活感情にとつて、前方にはなくて、後方にあつた。伸子が、ぼんやり息苦しい生活のせまさを感じ、そこを突破したいいうずきを感じている、その限界が、「暗夜行路」にも感じられるのであつた。もつてゆきたい小説がわからない。伸子とすれば、このことで、一層切実に外国へもゆく気になつている自分のこころの状態を思いしらされるようだった。

「じゃ、ぶこちゃんのは、あとのこととして——浅原さん、あなたは、ロシア語関係の連絡係になつて下さい。たのみますよ」

素子が、露子にたのんだ。

「日本語の方のことは、河野さんにたのむから……ねえ、ぶこちやん、その方がいいだろう。まだあなたの校正だつて見て貰わなくちやならないんだから……」

二三日おいて河野ウメ子に会い、三人で相談した結果、家の始末をつけたら、素子だけ先へ京都へゆき、あとから伸子が出かけてウメ子も京都で落ち会うことにきまつた。京都には三人にとって共通な幾人かの友達がいた。それにウメ子の文学上の指導者である須田猶吉はそのころ奈良に住んでいた。

「丁度よござんすわ、奈良へもよれますし……」
とウメ子がいうのも本当だった。

京都で落ちあつたら、ある女歌人のやっている地味な宿にとま
ることにした。

「いいところですよ。鴨川のすぐそばで——座敷から流れが見え
る」

そこは、先へゆく素子が手はずしておくことになった。伸子は
ウメ子に最後の校正がのこっている小説のことをたのんだ。

「わたし下手でわるいんですけれど、本当に一生懸命にやります
から」

ウメ子は、美しい上まぶたをつり上げるようにして真実こめて
いった。

「本が出たら、すぐお送りします。わたしのロシア語なんてあや

しいんですけれど、宛名ぐらいかけるでしょうから、思いがけない役に立つわけです」

かいぎやく
諧 謔

的にそういつて、ウメ子は小さい金齒をみせながら、ちよつと舌を出すように笑った。

引越しのトラックが来る日がきまつたとき、伸子は重い気もちで動坂へ行つた。駒沢の家かたづけの第一日は動坂へ荷物を送り、第二日は日本橋の素子の従弟の倉庫へ。そう順序だてられた。多計代は、きつといつもの調子で、そのビール箱の中のいくつが、素子の本かときいたりするのだろう。そう思つて伸子は氣のはずみの失われた顔でその話をきりだした。

「そのビール箱っていうのはいくつぐらいあるの？」

何となく、多計代のうけ答えは軽快であつた。

「全部で、十ばかりなの」

土蔵の空きまを一寸考えてみる風だったが、

「そのくらいなら大丈夫だよ、もつといで」

多計代は淡白に承知した。

「災難はいつおこるかわからないから、第一土蔵が落ちるような火事でもあつたらそのときのことだけれど——そしたらまあ、お互にあきらめて貰うことさね」

あらためて多計代は、

「伸ちゃん、いつからこつちへ来るのかい」
ときいた。

「駒沢をひきあげるならひきあげるでいい加減にこっちへ来てくれなくちや。電話のとりつきだけでも、困っちゃうのさ。いつ伸子さんはお立ちですかってきかれたって、おりません、わかりませんだもの。それに、お父様もいらつしやるとき、せめて一枚家じゅうの写真ぐらいとっておきたいし……」

素子と伸子との旅行の噂がひろまって、問い合わせが電話のある動坂のうちの方へ来るらしかった。そういう外の空気の動きは、多計代の気持に影響した。多計代流に派手にうけとっている外国ゆきということのなかで、素子だけ差別をつけきれなくなっている。しかし、伸子は動坂の家には最少限しか逗留しないですむように日程を立てていた。

うち合せをすまして伸子が帰りかけているところへ、六尺近い体と、つき出た腹と、ブランドーやけのした顔色とで、日本人というよりいくらかジョン・ブルめいた砂場嘉訓が訪ねて来た。

「こんにちは、奥さん」

砂場は、さきごろまで二十年近くイギリスに暮して、イギリス人を妻にしている洋画家であつた。しなれない日本流の立礼を、特にこの夫人には丁寧にするという風で、膝を少しかがめて辞儀をした。

「佐々先生、まだかえられないですか？」

「まだですよ、あなた、事務所へ電話をかけていらつしやいましたか」

「ええかけました。じきかえられるということでした。伸子さん、しばらく」

ひらいた長い二つの脚の間に腹をおとすような姿勢で煖炉まへのベンチにかけた砂場嘉訓は、伸子に向って大きい右手をさし出した。

伸子が小さかったとき、砂場嘉訓は山陰の奥から上京した日本の画の画学生であつた。袂のある緋のきものを着て小倉の袴をつけた砂場嘉訓は、伸子のうちの客間の真中に文ぶんちよう晁の懸物をひろげ、わきに唐紙をのべて、それをうやうやしく模写をしていた。小さかつた伸子は時々廊下づたいに客間へ行つて、どこか子供をおとなしくさせるような雰囲気のあるその場の光景をのぞいた。

それからほどなく、どういいうきさつをへたのであつたか嘉訓はロンドンへ行つた。パン、ミルク。たったそれだけの言葉しか知らなかつた嘉訓は、不自由なところは得意の絵物語でおぎないながら、ロンドンの美術学校を卒業し、やがて日本の文展に純英国流の婦人像を送つて特選となり、つづいてイギリスでローヤル・アカデミーの会員になつた。そして、一流の洋画家として永年暮っていたイギリスをひき上げて、先頃帰朝したのであつた。嘉訓は帰つて来ると昔なじみの佐々のうちへしばしば出入りした。

「奥さん、あなたのどの線は、美しいです。日本の女には滅多にない。ヴィクトリア女王ね、あのひとは、そういう美しいのどの線をもっていました。是非、描かして下さい。佐々先生の肖

像も。きつと描きましよう。お二人はわたしの恩人だからね」

砂場嘉訓は、永年画架に向つて仕事をしているうちにそういう姿勢になつたのか。どこにかけても、開いた脚の間に腹をおとして尻をうしろに引いた姿勢となり、ものをいいながらいつもほろ酔いのように、変に柔らかく手頸をふつた。そして、上まぶたをほそめた真直な視線で、それも大画家の風貌という風に、ふた息、三息する時間だけ余計にじつとあい手を見た。伸子の幼い記憶のなかにぼんやり浮ぶ若かつたときの砂場嘉訓はもつとからだも小さく、無骨で、かたい若者のようだった。今日老大家として現れている嘉訓は伸子に妙に落ちつかない印象を与えた。

嘉訓が帰つて間もない頃佐々泰造が、おどろいたように、

「砂場嘉訓という男は、一風変っているね、金勘定をしらないらしいよ」

といったことがあつた。

「まさか」

多計代が、否定した。

「あれだけ苦学までした人間じゃありませんか」

「若いときは、それや苦労したろうが、とにかく、日本の金の勘定はよくわからないらしい」

泰造と一緒に出かけ、食事の支払いにけたちがい金の金を出し、それを注意したら、金の勘定は不得手だからたのむと、札入れを泰造にまかした、というのであつた。誰と歩いても、砂場と歩い

たひとは、みんなそういうことを云った。

日本金の勘定を覚えない砂場嘉訓は、佐々夫婦の肖像を描くこともなかなか実現しなかった。

「砂場嘉訓で、ああいう人間だったと見える」

そういつて、多計代は、砂場が、佐々に紹介される知名の実業家や富豪などの肖像を、どんな高い画料で描いているかというようなことばかり話す、と伸子に告げた。

「あてにする方がばかなんだろう。なにがなんだかわかりやしない」

砂場嘉訓は日本へ帰ってからはいわゆる画壇というものには余り接近せず、じかに、上流の依頼者へ結びついて行った。フラン

ス絵画の影響のつよい日本の洋画の若い世代は、アカデミックな嘉訓が日本に帰ろうと帰るまいと無頓著らしかった。彼は渋谷の方の、二階に浴室の設備まである洋館に住んでいた。

多計代はこの前会ったときからだの工合がわかった嘉訓の細君の安否をきき、

「お宅のジョージさん、やっぱりドアのハンドルをみがいていますか」

ときいた。

「みがいています」

砂場嘉訓は重々しく首をうなずけると一緒に、右手を自分の前でふらりとふった。

「いまは、子供部屋のハンドルですハハハ」

「お母さんのお手伝いにもなつて、いい道樂をおしこみになったこと！」

砂場嘉訓は、多計代のその言葉に答えず、ちよつとだまつていたが、上まぶたをひき上げるように伸子の方を見て、

「伸子さん、外国へはいつ立ちますか？」

といきなりきいた。今度の計画を砂場が知つていようとは思いがけなかった。伸子は、

「どうして御存じ？」

素朴に意外さをあらわしてきいた。

「わたしのところへは毎日、新聞記者が来ます。いろいろな人が

どっさり来ますからね」

「立つのは十一月です」

「きょう何日？ 十月二十日ですね、もうじきだ」

泰造が帰るまで、と多計代は砂場嘉訓が来るときまって出しかけられるリキュールのコップを暖炉前のテーブルの上においた。

「どうぞ御自由に——ちよつと失礼いたします」

つづいて伸子もその室を出ようとすると、砂場嘉訓が、

「伸子さん、ちよつと」

とよびとめた。立ちどまって、ふりかえった伸子を手まねきして、自分のいる暖炉前のところへ来させた。

「あなた外国へゆくのは大変いいです。——非常にいいです」

実感のこもった真面目な低い声で、首をふりながら砂場はそういった。

「大きいところで大きく育つこと。これが大切だからね。——これお祝です」

砂場嘉訓は、いつの間に出したのか百円の札をむき出しのまま伸子にさしつけた。

「ありがとう、お祝は頂くけれど——お金はいらないわ」

「そうじゃない。伸子さん、金というものはいるものです」

やっぱり低いしらふの声で砂場は手をひっこめている伸子を説得する調子でいった。

「それでも何かの役に立つ。もっていくものです、もっていくも

のです」

その上拒絶しかねてその金をうけとったまま立っている伸子の顔を腰かけたままの高さからのぞきこむようにして、砂場嘉訓は一段声をひそめて、ささやいた。

「えらくなるには、ばかのまねしなければだめです。ひとがばかだと思ふようにすることが大切です、金のことなんかわからないふりしてね」

なにがいい出されるのかとブランデーやけた砂場の顔に注いでいた視線をおとして伸子はぞつとしたような気もちでその室から出た。

えらくなるには、ばかのまねしなければだめです。金のことな

んかわからないふりして。——どういう気持で砂場嘉訓は、伸子に、彼のこの秘密をもらしたのだろう。この言葉の中に、伸子は砂場嘉訓のかくされた辛酸と悲劇とを感じた。日本とまるで社会の発達の程度も経済の事情もちがうロンドンで、パン、ミルクとということしかしらなかった貧しい東洋の画学生だった砂場嘉訓が、イギリスでも一流のアカデミシアンとして暮すようになるまでにへた苦心が、この奇怪な人生哲学のうちにまざまざと語られている。イギリスの格式ばった中流人たちや上流の絵画愛好者の間に存在の道をきりひらき、才能をみとめられてゆくために、砂場嘉訓は洋画の技法に、日本画の筆法を活用して新機軸をあみ出したばかりでなく、むこうの人々にとっては珍らしい東洋の画家とい

う面を強調し、伝統のふかい欧州上流人の生活様式に不案内の弱点を、かえって、おもしろさに転化させて生きて来たのだと思われた。

金のことなんかわからないふりして——。そういう言葉は金のために砂場嘉訓がどんな苦しい経験をしたかということを、逆に伸子に考えさせた。画商からまるではたかれた金をあてがわれたとき、肖像画の依頼者から画料について、みみっちいほのめかしをされる都度、日本の画家砂場嘉訓は、イギリスのむずかしい金のことはわからないというふりを逆用して画料もじりじりとあげて来たにちがいない。

郊外の家へ帰って来て、素子に、砂場嘉訓に貰った不思議な銭

別の話をしているうちに、伸子は鼻の髄が酸っぱいようになって来た。

「よくて、わたしたちはね、あっちへ行つて決して活躍しないのよ。いい？ あっちで有名人になろうとするなんて、こわいことだわ」

伸子は、何かから自分たちの生活を防衛するような眼つきをした。

「ただどっさり観て来るの、感じてくるの、ね？ それでいいでしょう？」

同時に素子としてはどうしてもロシア語をすっかりものにしてかえつて来なければならぬ。伸子は、素子の沈黙のなかに、そ

の主張を感じた。

いよいよ荷物を運び出す日になった。日本橋の素子の従弟のところから、若いものを四人よこしてくれた。働きなれた人々の手で家じゅうは思ったよりずっと簡単に空っぽになった。そして、最後のトラックが駒沢の家の門から出て行つた。手伝いの男たちもそれに同乗してゆき、ふとん類もつみ出した伸子たちは、すっかり建具のとりはらわれてがらんとした縁側で番茶をのんだ。とよはそのまま駒沢の奥の実家へ帰り、伸子たちは、今晚、老松町の裁縫屋の増田のところへ泊ることになっていた。素子が京都へ立つまでの数日の宿として、そこがきめてあつた。いまは空屋となった家のなかから丁寧な雨戸をしめて戸締りし、風呂場のくぐ

りから外へ出た。そこへも、えび錠をかけるとよの手もとを見まもりながら、伸子はいよいよこうして日本を離れようとしている自分を痛感した。伸子を、日本にひきとどめるようなものはなの一つない。この家の生活にしろ、どこでの生活にしろ。——しかし、そこを離れるための準備ばかりがされているいま、そのあわただしさと全く事務的ないそがしさをとおして、これまでの生活のすべてがそこにあった倦怠や憎悪さえひっくるめて一つの忘れがたいものとして迫った。それを思い出とよぶにはまだあんまり近すぎ、しかも、もうはつきり自分たちの生活する場所ではなくなったものとして、今朝まで住んでいた家に最後の戸じまりをして去るころもち、深く伸子をうごかした。

伸子たちが戸じまりをしている間に素子が近所別れのあいさつにまわっていた。それをすまして帰って来るのを葉の黄色い秋のポプラの樹の下で待ち合わし、やがて、三人はそれぞれにかさばった風呂敷をもって、郊外電車の停留場へ出た。とよが乗る電車と伸子たちの渋谷行方面とは反対で、とよの乗る方がさきへ来た。とよは、あいている座席に風呂敷包をおくと、線路ごしに伸子たちの立っている方へ向いて立ち、しまった窓ガラスごしに幾度も腰をかがめた。電車が動き出し、丁度また腰をこごめかけていたとよの七三の前髪がよろけて窓ガラスにぶつかった。

伸子と素子とは渋谷からタクシーをひろった。数日来うちつついたいそがしさに疲れて、伸子はいくらか胃がこわばり痛みそう

だった。タクシーの座席のクッションに頭をもたせかけるようにして、はしりすぎる街の風景を見ていた。素子もひどくくたびれて、同じようにうしろへ頭をもたせかけ、目をつぶってタバコをすっている。

青山の大通りをはしっていたタクシーは前をゆく電車と、板を積んだ荷馬車とに行手をさえぎられて、不機嫌そうにスピードをおとし、徐行しはじめた。伸子のかけている側の窓からは、すぐそばに歩道が見え、そこに、ちらりと、うなぎ屋の紺ののれんが目に入った。そののれんに橋本と白く染めだされている。クツシヨンにもたせかけた頭の位置はそのまま、伸子はじっと刺すようにそののれんに視線をすえた。このうなぎ屋を伸子は知っている。

よく知っている。佃の妻であつたころ、急にお客へ食事を出さなければならぬとき、伸子は台所口から前かけ姿のまま出て行つてはこのうなぎ屋へ中串やどんぶりを注文に來た。佃の家のある裏の通りから、ここへ出る角は時計屋で——昔のとおり順序で、伸子の乗っているタクシーの窓に、二人の天使が舞いながら、時計盤を吊りあげている青銅の飾時計かざりがおいである時計屋のショウ・ウィンドウがあらわれて來た。この時計屋から佃の家までは、裏をまわつて二町ばかりしかない。この時計屋の角へ出る道の方のはしは石屋の角で、そこから入つた裏通りのなかごろの右側に佃の家がある。伸子が、恐怖や、憎惡にうらづけられた鮮明さで覚えてゐるその大きい石屋の、石柱を幾本も立てかけた石置場

が、店のよこの天水桶とともに、ゆつくりタクシーの窓外をすべ
って行つた。交叉点の手前まで来ると、伸子ののつたタクシーは
にわかにスピードを出して前方の障害物を迂回し、赤坂見附に向
って走りつづけた。

伸子は、はじめから終りまでクッションにもたせかけている頭
の位置を動かさず、タクシーの窓外にジリジリと移つてゆく、昔
の生活の場所を瞳の中にうつしとつた。橋本と染めだしたのれん
の下つたうなぎやの横から、不意に佃がそこの歩道へ出て来たと
しても、そして、タクシーの窓ガラス越しに佃の蒼めな顎の大き
い顔が伸子の顔と向いあつたとしても伸子はクッションにもたせ
た自分の頭は動かさなかつたろう。その界隈の風景はその時代の

生活の苦しさとともに伸子の過去のなかくつきりと凝固して、きょうの感情に語りかけてくる生命をもっていない。佃とわかれてからあしかけ四年たっていたが、伸子は、どこでも、一ぺんも、佃に出会ったことはなかった。

街々をつきぬけいくつも角を曲って自動車が走ってゆくにつれて、青山一丁目の街の光景は次第に遠くにおきやられたが、うなぎやの手前に、青塗りの妙にとび出した露台をもった氷問屋がいまだにあつたのを思い出し、伸子はふと、あれは本当はどういうことだったのだろうと思った。佃との生活がだんだん破局を重ねて来て、伸子は佃の家から逃げ出すことが多くなった。東北の田舎にいた祖母のところや、湘南にいた従妹の冬子のところへ。

そういう一つの逃げ出しから動坂のうちへ歸つて来たとき、多計代が一種の目つきをして、

「佃さんてひとも、あれで案外不自由なんかしていないんだろう」
そう云つて、その頃佃のうちに女中としていたみつが、佃が病気で鎌倉へ行つた先までついて行つて世話していたことを話した。そのときの伸子には、せめて、みつがそうしてくれてよかったという感情しかなかった。それから、伸子がまた決心をぐらつかせてしばらく佃と暮すようになったとき、みつは、どうもからだがわるいからといって、青塗りのバルコニーのあるあの氷屋の二階がりをして、そこへ移つた。いくらうちで養生するようにといつても、みつはそれをことわつて、氷問屋の二階へ行つた。

二三日たつてある午後、伸子はそこへみつを見舞に行つた。みつは、友達と二人でかりている、意外にひろい、和洋折衷の室の真中に床をとつてねていた。伸子が、ドアをあけて、三尺ばかりの下駄ぬぎに立つたとき、みつは、

「だあれ」

と割合元気な声でいきながら、枕の上から頭をもたげた。そして自分のかけぶとんのふくらがりごしに、立っている伸子を認めると、

「アラ……」

伸子が、自分のほかになにかいるのかとおどろいてうしろを見かえつたほど、びっくりした声をあげて頭を枕の上におとした。

「入ってもいい？」

返事がないのでそのままそつと入って床のわきへゆくと、みつは、すっぽり頭からかけぶとんをかぶってしまった。伸子は、自分が佻のうちの細君であるということからみつが遠慮するのかと思つた。かけぶとんをかぶってしまったみつに、伸子は気軽な冗談をいったり、慰めたりしたけれども、みつはかけぶとんから顔を出さず、しまいに、ふとんの中で泣いているのがわかつた。伸子には、みつの激しい感情の動きの理由がわからなかつた。妻である伸子のいない間、みつにばかり苦勞をかけて、いまさら慰めてくれても仕方がない。みつにそう思われているのかと思い、伸子は途方にくれた心持のまま、蒲団の下に見舞の包みをさし入れ

て、かえった。あれは、本当はどういうことだったのだろうか？

みつを見舞いに行つたことや、みつの不思議な亢奮について佃に話したとき、佃は例のとおり一言、病気で亢奮しているのでしようといったきりだった。間もなく、伸子はまたその生活に耐えなくて、もがきはじめ、そして最後の逃げ出しをした。そんなことがあつたのは、すべて四年もまえのことだった。氷問屋の青塗りの露台は秋日にてらされて今もあすこに在り、佃はあすこのうなぎ屋の裏に別の妻と住んでおり、そこには子供がい、自分は、外国へ行こうとしている。

自動車は、江戸川の通りから豊川町の高台へのぼる大きい坂にさしかかった。クッションに頭をもたせかけたまま、いつかうつ

らうつらしたらしい素子が、

「どのへんだい？」

上体をおこして、窓の外をみた。そして、

「もうじきだ」

またクッションにもたれこんだ。

伸子は、目的のところが近づくにつれてまた段々遠方へ出発する前のあわただしい心持になって来た。そして、和一郎にたのまれたことは、忘れずあしたでも行つたとき多計代に話しておかなければならない、と思った。おととい動坂へ行つたとき、和一郎は出会いがしらに伸子を廊下でつかまえて、人気のない客間につれこんだ。そして灯もつけず、椅子と椅子との間に立ったまま、

自分はどうしても従妹の小枝と結婚する。多計代たちはきつと反対だろう。どんなに反対したって、譲らないから、そのことを、伸子が行ってしまう前多計代に予告しておいてくれというのだった。

「その決心——かわりようがない？」

伸子はしばらくだまっていた後、しずかにききかえした。伸子は血族の結婚には不安を感じるのであった。

「かわらない！」

伸子の不賛成をぼんやり感じた和一郎は、にらむように姉に目をすえながら、低い熱い声でくりかえした。

「僕の命がある間は、このころもち、変えようないんだ」

伸子とすれば、それをそのまま多計代に告げておくしかなかった。問題を根本からこねかえすためには、もう時間のゆとりがなかった。伸子は、あと四五日で東京を立たなければならず、大型のハンドバッグの中には、トウリスト・ビュローで買った東京モスクワ間の切符が入っているのだった。つづけて伸子の心に、保のいったことが思い出された。やっぱりおととい、伸子は手まわりの荷物をつめた大小のスーツ・ケースと一緒に、本をつめた行李を二つタクシーで動坂へ運んだ。その行李にはもしかいることがあるかと思つて、ビール箱につめてしまわなかった文学書が入っていた。伸子が、その行李を、中玄関横の板じきにおいているところへ、保が出て来た。伸子は、

「あら、丁度よかった」

いつもの単純な調子でいくらか一人のみこみに、

「この行李、保さんあずかってよ」

といった。

「もしかしたらあとから送ってほしい本を入れてあるの。たのむわね」

どうしたのか保は、そのときすぐ返事をしなかった。伸子はか
さねて、

「ね、おねがい」

といった。すると保は、なんとなくその行李の縄に手をかけ、重
みでもはかるように背を曲げて下を向いたまま、

「——ともかく、わかるようにしておく」

といった。

「僕がいなくても、ちゃんとわかるようにしておくから、姉さん、安心していい」

伸子はその言葉を思い出したのだった。僕がいなくてもわかるようにしておくから……。それは、保だって旅行に出ることもあり、そこへ、行李の中のどの本を送ってくれとたのんだ伸子の手紙がつくことだつてあるだろう。けれども、なぜ、わざわざあんな風に念をおしたんだろう。保の几帳面さからではあるのだろうけれども——。そのとき、タクシーがめじるしの椎の樹の下を思わず行きすぎた。素子が、

「そこ！　そこ！」

あわてて大声で注意した。伸子も自分たちの降りる角を見まわすがうまいとして、バックしはじめたタクシーの座席から腰をうかした。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第六卷」新日本出版社

1979（昭和54）年1月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十卷」河出書房

1952（昭和27）年6月発行

初出：「中央公論」

1947（昭和22）年1、3～9月号

※底本266ページに現れる「銜学《げんがく》」と、274ページに現れる「柘榴《ざいろう》」のルビは、ページ初出の当該文字に移

しました。

入力：柴田卓治

校正：松永正敏

2002年6月25日作成

2003年6月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二つの庭

宮本百合子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>